眞匏祇’

涅織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
眞匏祇’

【Ｎコード】
Ｎ５２４７Ｙ

【作者名】
涅織

【あらすじ】
以前まで投稿していた眞匏祇の続編。
今回の舞台は地球！小さな星で大きな力の衝突！
護りたいものがあるからその両足で立つ。護りたいものがあるから強くなれる。
地球での仕事を終えて眞匏祇の世界へ戻るまでの話。

第一章　○●痲臨捜索編●○　第一話　地球に逃れた逃亡者達

地球についてからのこの数日、良い事と言えばホテルのカウンターの女性と仲良くなったことくらいではないだろうか。そんな事を考えながらいつものように帰ってくるのを待っていた。そしてドアのノック音が聞こえて勢いよく開ける、筈だが。今日は少しいつもと違うことが起こる。

いつものようにドアのノック音がして嬉しさで飛び上がった穂琥はドアを勢いよく開け放ち目の前に立つものを確認して一度ドアを閉める。

「・・・知らんぞ、こんなヤツ」

怪訝な表情をして穂琥は再びドアを開ける。今度はゆっくりと。やはりどう見ても知らない顔の男だった。首をかしげている穂琥にその男は少し困った笑みで尋ねたいことがあると申し出てきたので穂琥がそれを聞くことにする。

「眞匏祇、ですよね？」

男がそう言った瞬間、穂琥ははっとしてドアをバタンと閉めて部屋の奥へと走った。男は何食わぬ顔で部屋の中に入ってくる。

「逃げても構わないよ。だってここは最上階だ。逃げられない」

「あら？最上階だもの」

男の言葉に穂琥は返す。すると男は理解しかねた表情をしたが気にせずに穂琥に近寄ってくる。

男のことなどまるで無視するように慌てる様子もなく穂琥は窓を開けた。そしてその上の淵に手をかけて外へ身を放り出した。その行為に男は舌打ちをして走り出した。穂琥を捕まえるために。

放り出した身体は勢いと腕力で上に向かい屋上に着地する。それから辺りを見回してから追ってきた男のほうへと目を送る。

「そんなひ弱な力で俺に勝てると思っているのか？」

「え？私？無理よ！戦う力なんてもの！相手をするのは私じゃない。こいつ」

穂琥はさっと身体を翻した。するとそこには少年が着地していた。男としては辺りには一切気配がなかったためにそれの登場には至極驚いているようだった。

「はい、お願いします！薪♪」

「はいよ」

穂琥の言葉に薪が反応する。男は驚いた表情で薪を観察していた。一体何者かと尋ねてきたが薪はそれをかわした。己の正体を見ず知らずのものに簡単に明かすことなど出来ない。それだけではない。薪の身分をそう簡単には言うことが出来るわけがない。

薪は素早く移動する。一瞬にして男の足元に身を置き男のあごを捕らえて蹴り上げる。男はその痛みで声を漏らす。相手がただの人間であればこんな横暴な真似を薪はしない。でも相手は人間ではない。眞匏祇なのだから。屈んでいるその男に薪はさっと近寄ると男の額に手を当てる。

「じゃ、向こうで頑張れ」

薪の掌から眞稀が発せられる。その大きさときたら相変わらず目を釘付けにさせられる。しかし周囲には一切漏れていないのだから本当に大したものだ。

薪の眞稀によって男はその場からぱっと消えた。転送、といえば簡単だろう。地球から眞匏祇の世界へと返す行為。こうして地球にてこちらに敵意を向けて襲ってくるものは皆、眞匏祇の世界を追われた者たち。とはいっても決して薪が行った行為ではない。

薪は慤夸だ。眞匏祇の全土を支配する力を有した絶大なる存在。でもそれを薪はあまりいいようには思っていない。しかしこういう時にはそういう力を大いに使わせてもらっているわけだ。

というのも、この地球に存在する眞匏祇たちは先にも述べたが眞匏祇の地を追われた者、つまりは慤夸によって迫害を受けたことになる。慤夸によって追い出されたものは慤夸によって受け入れを受理される。薪が慤夸でなければ眞匏祇の世界へこのものたちを返すことが出来ないのだ。前代の慤夸、つまりは薪の父親が行ったことを今、返そうとしているということ。

男を転送してから薪は一息つくと穂琥に向き直って移動のことを伝えた。

「痲臨の情報が入った」

手短に薪は言うと部屋のほうにさっさと戻っていった。穂琥もその後に続いた。移動先を聞いて穂琥は嬉しくてはしゃいだ。

「また皆と会えるんだね！？」
薪はため息混じりに笑った。
今度移動する先は前に穂琥や薪が通っていた学校の付近。また中間達と会えるんだとはしゃいでいる穂琥を鎮圧して薪はホテルを出る準備を整えるのだった。
ホテルを出て移動先に到着してから薪は泊まれそうなところを探していたが、穂琥の目はまったく別のものを映し出してキラキラと輝いていた。
「薪！こっち！アレが見たい！」
「は！？ちょ、待っ・・」
「こっち！」
「うわっ」
穂琥に強制的に腕を引かれ声が漏れる薪だった。別にここに遊びに来たわけではないと訴える薪ではあったが穂琥の上がったテンションを抑えるには少し弱すぎたらしく、そのまま流される薪であった。
穂琥のゴリ押しで店に入った薪はため息をついて穂琥に付き合っていた。大抵女子という生き物が好むような場所に薪が飽きずにいられるわけもなく、半ば魂が抜けたように諦めてふらふらと穂琥の後を着いて行っていた。
「これ、どう！？」
突然穂琥が振り向いて自分の首にかかっているものを見せてきた。

「あーにあってます」
「なに、その棒読み！」

薪の反応に穂琥は少しむくれながら首にかけていたものを元の位置に戻す。さもどうでも良いと言いたげな薪に文句を言うべく振り返りその薪の肩越しに見覚えのある顔を見つけて固まった。

「・・・ん？どうした？」

その様子を悟った薪が穂琥に尋ねたので穂琥は後ろを示す。薪はそれに習って振り返る。

「し、薪！？」

後ろにいたそれは驚いた声を上げて駆け寄ってきた。

「あれ？籐下？」

久しぶりだと嬉しそうな表情を浮かべながら籐下が薪の前に歩み寄る。後ろに穂琥がいることに気がつくとにやりと笑う籐下だった。

「何だ？薪、穂琥ちゃんとデートですかい？」

「あるわけねぇだろ」

嫌そうな軽蔑したような、そんな顔をしながら籐下に言い放ったその言葉に籐下は苦笑いを浮かべた。

「おーい、籐下！先に行くなんてひど・・・あれ！？」

籐下を追いかけてきたもう一人が籐下と同じ様に薪と穂琥を見て驚く。

「獅場！薪と穂琥ちゃんだよ！久しぶりにこっちに帰ってきたみたいだ！」

「ぅおっほぉ！？そうだったのか！久しぶりだなぁ～！」

薪と穂琥が学校に通っていた時、同じクラスだった籐下と獅場。薪と籐下、獅場は久しぶりの再会を噛み締めていると、ふと気づいたように薪が穂琥の所在を確認した。

「あれ？」

すぐそこにいたはずの穂琥がいないので辺りを見回して籐下が出口付近に既に移動済みだということを伝えると薪の表情が凍った。それに籐下も獅場もぞっとして笑みのまま固まってしまった。

「勝手に出歩くなって言ってあるはずだけどぉ？」

「す、すみません！！」

薪の叱責をみて籐下はふっと眉を寄せた。

旧友と出会って穂琥のテンションも最高潮に近づき楽しそうに歩いているのを薪は呆れてみていた、が。突然表情を険しくして足を止めたので籐下も獅場も足を止めて薪の様子を窺った。

「どうした？」

「大丈夫か？なんかあったのか？」

二人の質問に薪は答えなかった。その代わりその険しい表情のまま穂琥の腕を鷲掴みして駆け出してしまった。置いていかれた二人は呆然としながら顔を見合わせた。

腕を引っ張る薪に文句を言う穂琥を無視し続ける薪に流石の穂琥も抵抗を見せる。引く薪の手を振りほどいて額に力を篭める。

「なにするの！二人がいちゃダメだっていうの！？」

「お前は一回、頭を改良しなさい！」

警戒の色を載せたまま薪が言う。穂琥はそれを言われて初めて薪が走り出した意味を考えた。そしてふっと自分に対する殺気に似た眞稀を感じ取ってぞっとした。人がいてはそれらに危害を及ぼす可能性があるから薪は走り出したのだ。

「人気がないところまで移動するぞ」

「う、うん！」

薪に言われて穂琥も全力を以って走り出した。

誰もいない寂れた公園で薪は足を止めた。穂琥は軽く息を上げて辺りを警戒した。

「出て来いよ」

挑発するような薪の言い方にどこからともなく笑い声が聞こえた。周囲に反響して響くその声はどこからしているのかわからなかった。

「姿を晒す気は無いですね」

丁寧な言葉とは裏腹にそれに篭められた感情はまるで嘲り。薪の表情が警戒の色をなくした。

「そうか。余分に眞稀を使ってオレに勝てると思うなよ」

薪の言葉に未だ姿を見せない眞匏祇は嘲笑う。しかし穂琥は内心で思うのだ。どんなに全力を出しても勝てる気がしないと。

そうこう考えている間に薪が穂琥の視界から消えた。別に驚くことじゃない。薪なら普通のことだ。しかし相手のほうはそうでもないらしく驚いた雰囲気を醸し出していた。姿が見えないと高を括っていたのが間違いだ。薪なら眞稀を感知してどこに隠れているかなどすぐにわかる。そんなわけで簡単に引きずり出して薪は男を蹴り上げる。

「オレをやるつもりで来るのなら別にそこまでするつもりは無いけれど、穂琥を狙っているって言うなら話は別だ。少し、本気を出させてもらうよ」

地面に叩きつけられた男はうめき声を上げる。しかし別に薪に蹴り上げられたことであげたわけではない。むしろ蹴られたというのに痛みなどどこにも無かったための疑問の呻き声だ。

「まぁ、傷付けやしないよ」

薪のその言葉にどうやら甘く見られていると怒りを覚えたらしくその男は薪を鋭くにらみつけた。

「わかった、いいでしょう。貴様の言ったとおり本気でくとしましょう」

「来い」

男の言葉に対して薪は身体を半身にして右手を前に出して構えを取った。その態度に男は怪訝そうな表情をした。

「先程までとは違うのがわからないのですか？」

姿を隠すために使っていた眞稀を解除して攻撃のほうに注ぐ事でその力を増大させる、のだろう。そういうことだとは思うが、穂琥には全くそれがわからなかった。きっとそれを露見したら殺されるかもしれない、薪に。そんな事を思っていると薪は男の言葉に答えて姿を変えると言い、話を進めていた。姿を変える、といっても別に鬼のように形相が変わるというわけではない。服装の転換といったほうがきっとわかりやすい。普段は地球に住んでいる人間と同じ、つまりは洋服を身につけているがこういう戦闘においては眞匏祇としての服装でなければ戦うにも戦いづらい。

そもそも服装の転換はただ単に動きやすいとか慣れているとかそんな小もないことではない。普段、地球にいるときは地球の服装に合わせるのはまぁ、当然のことだろう。しかし、その地球での衣服の場合は制御が大幅に成されている状態になる。つまり、服装の転換をすることでその制限している力を解放するということだ。ちなみにこの服装の転換、つまりは力の解放を替装（ていしょう）と呼んでいる。そうやって替装によって眞匏祇の世界にいるときと同じ格好をすることで相手を熨す力を有するのだ。

そうして薪が替装を終えてふっと落ち着いたのを見て穂琥は自分の目を疑う。普段、眞匏祇の世界にいるときに着ている服装ではない。そのことを疑問に声を漏らすと薪が凄まじい勢いで睨んできて穂琥は苦笑いをして身を引くのだった。

男が勢いよく薪に刀を振り下ろした。薪はそれを後ろに飛び跳ねて避けると舌打ちをした。

「いきなり突っ込んでくるなよな」

「そんなに甘くは無い世界でしょう?それに貴様、替装したにも関わらず力に変化が無いではないか?もとより弱ったのですか?それなのにあんなに豪語するとは愚かですね」

男の言葉に薪は僅かに嘲るように笑った。その笑みに男は酷く怒りを覚えたようだったが薪の次の行動にその怒りも一気に冷めるのだった。

第二話　信頼を得た人間

替装して変わった格好には手首にリングが着いていた。それを薪は引き千切る様に取る。それをしてからの薪が放った眞稀に男は圧倒された。しかし穂琥にはその眞稀の強さがよくわからない。きっと普段から薪の眞稀に慣れているということと薪が男にしかその眞稀を放っていないことが原因しているのだろうけれど。きっとこれも薪にばれたらただではすまないので黙っていることにする穂琥だった。

男が軽く震えているのを見ながら薪がため息混じりに理解できていない男に説明をくれてやる。

「オレはね、諸事情によって替装しても直ぐに力が増大しないようにセットされているんだよ。このリングによってね。だからコイツを外さないとほとんど意味が無いのさ」

引き千切ったリングを掌に載せて男に見せる。男は口惜しそうな顔をして黙っていた。そして薪が体制を変えて男へ突進する。その速さときたら穂琥には目で追うのがやっとだった。

「主の下へ帰らねば！」

男はそう叫ぶと地面を抉って薪の視界の邪魔をした。ブレーキをかけて薪は止まる。土埃が収まったとき、男の姿はなかった。

「あ～あ、逃がしちゃった。珍しいね？そんなミスするの」

穂琥が薪の元によって嫌味を篭めて言ってみたが思いの他自体は軽

くないことを穂琥は薪の表情から悟った。

「こうやって姿を消すときっていうのは眞稀を使う。だからそれなりの感知能力があれば追う事が不可能なわけではないんだよ」

「だったら追えば良いじゃない？」

「出来たら既にしている」

薪の放った言葉。眞稀を完全に消されてしまっているせいでその後を追う事が出来ない事実。

「主、か・・・。気になるな」

薪がぼそりと言った。そんな薪に穂琥はふと疑問を覚える。薪は慤夸だ。今更ながら慤夸だ。現実世界に慤夸より強い眞匏祇は存在しないはず。なのにその慤夸である薪を凌いで眞稀を操るものがいるのだろうか。

「薪は・・・どのくらい力をセーブしたの？」

「あの男に対してか？追跡に対してか？ま、どちらにしろどちらも全力に近い感じでやったんだけどな」

穂琥はその薪の返答に少し不貞腐れた。そういうことが聞きたいんじゃない。

眞匏祇は人間とは比べ物にならないくらい強い。そんな事言われなくたってわかる。つまりそんな眞匏祇がこの世界で大暴れするわけにもいかず薪たちは力を強制的に抑えてここにある。その地球での根本的なセーブがどのくらいかと聞きたかったのだ。とはいえ、襲ってくる側がセーブしているかは知らないことだが。

「眞匏祇のところにいる時と今との違いを聞いたのか。なるほど。そうだなぁ～。考えたこと無いから知らないな。適当だからな、いつも。感覚でこのくらいってね。ま、あえて言うなら１０分の１も無いんじゃないか？」

ケロッと言った薪のその言葉に穂琥は頬を吊り上げた。そんな嬉しそうな顔をした穂琥に薪は首を傾げるのだった。

兎に角、一度落ち着いたのでもしかしたらまだいるかもしれない籘下と獅場の元へ帰ることにした。

戻ればそこにちゃんと待っている籘下がいた。どうやら獅場のほうは学校での宿題が山積みらしく仕方なく萎れて帰って行ったらしい。そんな事をまるで聞かずに穂琥は自分の世界でにやりと笑っていた。

確かに今回、敵を逃がしてしまったがそれは相手が薪に対して恐怖し怯え、逃げ去ったのだ。普段の欠片も力を出すことの出来ない薪に。よかった、薪はやっぱり強いんだ。そんな事を思って笑っていた穂琥の耳に思いがけない言葉が飛び込んできて思わず現実世界に帰ってくるのだった。

「さて。話もしないとな。籘下、来い」

「あぁ」

穂琥は耳を疑う。いや、待て待て。今後の話しとかもあるのだから人間である籘下を連れていては話に支障をきたすだろう。積もる話とかもあるだろうけれど今はそれ所では無いことを薪が一番よく知っている筈なのに。

疑問の表情を浮かべて薪にその疑問を言葉を使わずになんとか投げかけると薪はそれをキャッチしてあっさりとその回答を述べる。

「だって籐下は知っているから」

「・・・・・・へ？」

思いも寄らない薪の言葉に穂琥は硬直なんてものではなかった。

「あれ？薪、そのこと穂琥ちゃんに言っていなかったの？可哀想でしょ。オレね、穂琥ちゃんたちが『向こう』に行く前に薪から聞いたんだ」

少し困ったような表情を浮かべながら籐下が語った。薪が、あの薪が！ここまで人に対して信頼をしていることが意外に思えた。

薪の掛け声でともかく移動をすることにする。宿を探していて穂琥に阻害されていたことを思い出して薪はため息をついていた。しかし、ここは以前、薪と穂琥が住んでいた場所であって住まう場所が無いわけではなかった。無論、穂琥の家は残ってない。アパートのような所を借りていたわけだから既にそこは開いているはずもない。しかし、薪のほうは一軒家を持っていたし、何かあった時用にと売却はしないでそのままで取っておいてあるはずだった。よってその薪の家まで向うことになった。

当然のように薪の家はそこにあった。これでひとまず落ち着くことが出来るということで中に入ってひとまず休息、寛いで。一息つくと籐下が少し怪訝な表情で薪に尋ねる。

「何をしに戻ってきたんだ?よほどの事がない限り戻らないって言

っていた気がしたんだけど?再会は嬉しいけどそれが気がかりでさ」

「眞匏祇の世界の・・・宝、かな。宝探しをしに来た」

薪の誤魔化すような言い方に籐下はむっとしたような顔になったがどこか納得したようだった。それにしても籐下相手に、普通に『眞匏祇』という単語を使ったので穂琥は目が遠くなった。

籐下の質問で何故眞匏祇たちが襲い掛かってくるかということを今更ながらに知った穂琥だった。

地球という小さな鳥篭の中で育った白鳥。その飛び方も駆け方も何も知らない。そんな白鳥が突然籠を飛び出して大空へと舞い上がる。手を引いてくれるものと一緒に。精一杯その翼を羽ばたかせて飛び続ける哀れな白鳥。美しく飛ぶ方法を知らない危うい白鳥は外敵に狙われてその命を危険に晒す羽目になる。一生懸命羽ばたくその翼の音は自らの位置を外敵へと知らせる。飛び方が危ういものに強いものはいない。しとめるのは簡単なこと。その美しき白い翼を紅く染めることは容易いことなのだ。

眞稀のコントロールがうまく出来ない穂琥はそうやって他の眞匏祇たちに自らの位置を知らせてしまう。この地球にもとより住まう者たちにとって新たな眞匏祇の来訪はただ単に己らの命を脅かす存在にしかなりえない。故に、やられる前にやる。

「ま、そういうわけで穂琥はほっとけば簡単にくたばるから護ってやらねーといけないわけだ」

「なるほど・・・」

「でも私、白鳥か～・・・きれいだぁ～」

「いや、あくまで大きさの例えだからな。お前は頑張って飛べてもアヒル止まりだ」

「酷い！それ！」

文句を言いながら薪の頭をぽかぽか叩く穂琥を他所に薪は何事も無いかのように話を進める。

「そんなわけでこっちに来てから随分と忙しい思いをさせられてきたんだよね」

「そっか。穂琥ちゃんってそんなに大変な状態だったんだ。人間を危険に晒すわけにはいかないからさっき走ってどっか行っちゃったわけか？」

「おう、そうだよ。よくわかってんじゃん」

穂琥も薪も人間ある籐下が眞匏祇である穂琥よりも物事の理解能力に長けているような気がしてならないと思うのであった。

そんな事を互いに思考していればそれを読みあって穂琥が薪を殴りにかかる。そんな状態を見て籐下は過去の薪と穂琥を思い出す。過去、といっても半年も経っていないようなそんな位だが、薪の雰囲気の変化に少々驚いた。薪は実際もっと棘のある性格だったような気がするが今はその棘があまり感じられないような気がしていた籐下だった。

「何？」

籐下の視線に気づいて薪が尋ねる。籐下は少し悩んでから発言する。

「いや、まぁ。その、なんとなく丸くなった気がして」

「そうか？ん～。いや、元からこんなだけどなぁ。表に出さなかっただけだと思うけど」

薪は神妙な表情で笑って答えた。薪の内心ではこうして感情を表に出すようになって来たのは眞匏祇の方でいろいろあったことを含め、儒楠の影響があるような気がしていた。

穂琥が突然空腹を訴えて冷蔵庫を漁る為に部屋を出て行った。その図太さに籘下は苦笑いをした。離れる前はもっと慎ましやかな女性であったような気がするのだけれど。籘下はそんな穂琥の背を見て薪との関係性に疑問を覚えた。

「穂琥ちゃんとさ、薪って。学校にいたときはなんか突然妙に仲良さげにしていたし、薪も他の女の子に対する態度とはまったく別の態度を取っていたからてっきり付き合い始めたのかとか思っていたけど、違うな」

「なんだよ、突然。まぁ、そうだろう。付き合っちゃいないしもとより誰とも付き合うつもりもねぇし。ちゃんと考えてみればわかるって」

薪はさもどうでもよさそうに答えた。確かに薪はそういうことに疎いから当分そう言った感情を有することは無いんだろうなと呑気なことを思う籘下だったが、では何だ。この二人の関係は。

「一体何？同じ眞匏祇だからそんなに仲いいのか？」

「たかが同じ種族だからってここまで必死になって護ろうとはしねぇよ。そんなにオレは暇じゃない」

薪の言った言葉の意味を籘下はまだわからない。薪の性格上、護ることができるものなら全てを全力を以って護るはず。それでも暇が無いからそんな事をしている場合ではないと言う薪の言葉の真意は簡単なこと。薪は慤夸だ。慤夸が誰構わず手を差し伸べるという行為は簡単な話ではない。数が多すぎてそれこそどの手に差し伸べれ

ばいいのかわからなくなってしまう。しかし、薪とてそれを無視しているわけではない。殻夸になってもまだ未熟さが多くあるからなんともいえないが、薪の殻夸としての最終目標は恨むことのない世界。そんな世界が本当にあるとしたらそこは神の世界か何かか。そんな風に思うけれど極力それに近い世界を作ること。それが薪の目標、せめてもの償い。

話が反れたが、ともかく籘下は薪が殻夸であることまでは知らない。故に疑問を覚える場面は多々出てくることだろう。

「で？どういう関係なんだ？」
「双子の妹だよ、あのバカは」

それを聞いて驚愕した籘下。

驚くのも無理は無い。そもそも学校に転入してきた穂琥は最初薪のことなど欠片も知らなかった。もし、兄妹であるというのならそのときに感動の再会をしてもおかしくない。

「オレらは眞匏祇だ。記憶の改ざんくらいできる。それにそうやって記憶を失ったどこにいるかもわからない妹を探すのが前回、地球に行ったオレの本当の目的」

そう語る薪の言葉を聞いて確かに納得できる節が多くある。妙に仲良くなりだしたのもきっとその記憶とやらが戻ったことが理由だと考えれば納得できるし、他の女の子に対する態度と異なった態度を取る薪にも合点がいく。なるほどなるほどと納得している籘下の頭を薪が突然鷲掴みにして地面に叩きつけたので籘下は酷く驚いたが視界の隅に鋭く光る槍のようなものが見えたのでぞっとした。

薪が籐下の頭から手を離したので頭を上げて振り返ると槍のようなものが壁に当たったらしく人一人包めるくらいの大穴を明けているのを目にした。

「悪いな、口で言うより早いと思った」

「い、いや・・・護ってくれてありがとう・・・」

よくわからないけれどそれだけは理解できたので謝礼の言葉を述べる。

薪は籐下の周りにドームのようなものを作るとその中に居れば多少はもつからと言って穂琥のほうへ走っていった。残された籐下はあまりの状況に驚きすぎて呼吸すら忘れてしまいそうだった。そしてそれと同時に眞匏祇という危険性を認識した。聞いただけでは全くわからなかったことだが、薪が全力をかけて穂琥を護ろうとする意味がなんとなくわかった気がした。一瞬でも気づくのが遅れれば籐下の頭はあの槍のようなものに粉砕されていた。そんな命のやり取り。少しも気を抜けない恐怖の世界。それを同じ年の少年と少女が身を置いている。目の前にいる。それがなんとも言えず・・・・。

台所であたふたしている穂琥に駆け寄ってひとまず穂琥が無事であることを確認する。

「よかった。来い、退治しに行くぞ。籐下も居るから早いとこ片付けないとな」

「うん！」

穂琥は薪の背を追って駆け出した。

目の前に立つ男女。その風貌からしてどう考えても人間ではない。

「こんな愚図を潰すのにあいつは戸惑ったわけ?」

女が甲高い声を上げる。男は黙って目の前のものを見据える。

「こんなしょぼい結界しか作れないようなヤツにアイツはすごすご負けて帰ってきたって言うの?」

「触らないほうがいい」

目の前の男女が何であるせよ、会話していることを聞く限り、薪たちにとって敵であることを意識させられた籐下。そして男の忠告を他所に女は籐下の周りに張られているシールドに触れる。すると女は数メートル後ろに吹っ飛んだ。

「だから言っただろう。雫杜(だと)がそこまで弱い奴ではない事位知っているだろう」

「っさいわね!私より弱ければ皆同じよ!それに比べて・・・。今回の彼は敵ながら惚れちゃいそうね~」

女は頬に手を当ててうっとりとした表情を浮かべた。先程、吹っ飛んだときに出来た傷ももう癒えている。眞匏祇ならばこれが普通なのだろうか。その辺のことは全くわからない籐下はただ、今あるこの状況下で生きていられるかの方が重大であった。

男女は籐下から目を離すとあらぬ方向に目を向けた。そうしている二人の会話で眞稀を隠していないとか、その方が抹殺しやすいとか言っているとなるとおそらく薪と穂琥のことを言っているのだと理解できた。

女はやたらと嬉しそうな顔をしながら男に行ってもいいのか訪ね

ていた。男のほうはそれを肯定していた。すると女はさらに嬉しそうになり、にたっと気味の悪い笑みを浮かべるとその場からぱっと消えた。男は籐下のほうを見下ろして言った。

「運が良かったのだよ、君は。いや、悪かったのかな」

そういうと男はその場から消えた。籐下はただ黙して薪たちが帰ってくるのを待つことしか出来なかった。

第三話　影に隠れた存在

「追って来るな・・・」

走り続けてやっと止まったところで薪が言った。先程、家を襲撃してきた眞匏祇から人間を放すべく走り戦える場所まで移動して自分たちの存在はここにあると眞稀を放つ。それで向こうが此方に来てくれるなら文句は無い。文句が無いはずなのに。

「ダメなの？」

穂琥の疑問の声が上がる。薪は小さく唸る。わかってはいる。来てくれることに関してそれが狙いで誘っているのだから。ただ、相手が素直にその誘いの乗りすぎているような不安もない事もない。穂琥はいいほうに考えよう？と囁く。それに薪は頷く。

女がすっと舞い降りる。その後に男が降りる。感覚からしてこの二祇であっている。

「急ぎすぎだ、眞稀を無駄に使うな」
「だってぇ。早く会いたいんだもの」

女はきゃいきゃいとはしゃいでいる。男のほうはため息をつく。

「雫杜が世話になったな」
「だと？・・・あぁ、この間の男か？」
「名乗らなかったの、あのバカ！」

女が急に話に参加する。

「私は誓茄（せいな）、よろしくね！天才の眞匏祇さん♪」
「我が名は鼓斗（こと）」
「へぇ」

薪は警戒したように相槌を打つ。特に誓茄の言った言葉のときの薪の表情には萎縮した穂琥だった。なんだか一瞬、怒ったような気がした。

「相手に名乗らせ己は名乗らぬか」
「・・・そっちが勝手に名乗ったんだろう？認めてもいないどこぞの眞匏祇に名を言う筋合いは無いな」
「きゃっ！いいわね！ますます気にいちゃった！」

薪が名前を伏せたのはきっとそういうことではない。いや、もちろんそう言ったことも含まれるのだろうけれど。眞匏祇の慇夸である以上、その名を明かしてはいけないのだろう。だからそれは同時に穂琥も同じことだった。

「さて。戦わないとならないのか？」

腰に手を当てて薪が呆れたように言った。鼓斗はそれを当然だと肯定する。理由を薪が問うと鼓斗の言葉を阻害して誓茄が割り込んだ。

「ちょっと！気に入った子とは話がしたいの！私に喋らせて！」

薪が力を抜くように肩を落として誓茄の話に耳を傾ける。しかし、誓茄は薪が求めた回答をくれるような話をしてはくれなかった。話すのはただ、眞稀をコントロールできるという薪の性能について語るだけ。

「理由が聞きたいんだ」

薪が誓茄の話を区切って言うと誓茄はそれをむっとする様子も見せずむしろ嬉しそうにせっかちね、と笑う。そんな誓茄は視界の中から消える。

何が起きたかは一瞬ではわからなかった。目の前で怒りを見せる薪の表情とさらに嬉しそうになった誓茄の表情が見えるだけ。

誓茄は穂琥に牙をむいた。穂琥を斬り殺そうとした。しかし、それを薪が許すわけも無く、見事に誓茄の刀を振り払う。

「凄い！替装しないで刀を出せるのね！私たちの中でも数少ないわ～！」

突然穂琥に攻撃を仕掛けた理由はおそらく、薪に刀を抜かせるためと、叩かなければならない理由を穂琥が知る必要も無く、そもそも存在自体が必要ないと判断したからだろう。

誓茄はただひたすら薪のその強さに惚れ込んだらしく浮かれた声を出す。その声が穂琥の耳には耳障りで仕方なかった。

「さぁて。そこの娘を私たちに預けてくれないかな?安心して、傷付けやしないわ。あなたに来てもらいたいだけなの、我らの主の下に」

「誓茄。それは早すぎだ。もっと情報を・・」

「構わないわ！それくらいであの方の『シナリオ』は崩れたりしないわ」

誓茄と鼓斗が軽い言い争いを始めた。段階がまだ早いと訴える鼓斗に対して支障はないと豪語する誓茄。誓茄の場合は感情論で筋がない。よって鼓斗の言葉で誓茄は唇を噛むことになる。

「主の『シナリオ』を崩すなど我らには出来はしないが、奴には出来るぞ。その位の力を有している。お前がそれは一番わかっているのではないか？故に惚れたのだろう？」

押し黙る誓茄。鼓斗は警戒したような顔をいている。その様子をただ見ているだけの薪と穂琥。しかし、いい加減に薪の痺れも切れてきた。

「さて」

突然発せられた薪の言葉と眞稀。それに驚いた誓茄と鼓斗は息を呑むようにして薪のほうに目を動かした。

「話はその辺でいいか？そろそろ終いにしたいんだけど」

薪の言葉にかなりの警戒を抱いたらしい鼓斗は不服そうな表情をしつつも引くことを決めたようだった。しかし、それに喰らい付いたのは誓茄だった。

「面倒だな。お前らの言う主とやらがどんな奴かは知らんが。お前らが着くほどの眞匏祇だ、相当できるんだろう？そしてそんな主が作った『シナリオ』とやらがそう簡単に崩れるとはオレには思えにくい。お前ら二祇を今ここで倒したところできっと何の支障も出ないだろうとオレは思うわけだ」

薪の言葉に鼓斗も誓茄も硬直した。一度も会っていない主と呼ぶ者

の強さと力量を直感で理解し、それを口にする。

「今、引くというのなら追うつもりは無いから行け。ただし、一戦交える、はたまたこの女を連れて行こうというのならオレは申し訳ないが本気を出す」

薪の言い切った言葉に誓茄が、喰らい付こうとしたがそれを鼓斗が遮り引くことを要求する。しかし、鼓斗としてはすんなり引かせることが腑に落ちないようだった。

「家に友を閉じ込めているしな。それにお前たちみたいな奴との戦闘は極力避けたい。この地球が壊れてしまう」

鼓斗は納得いったように頷くと小さく笑ってから誓茄を宥めてその場から消えた。誓茄は薪を恨めしい目で見てから姿を消した。

やっとまともに会話が出来る。穂琥は薪に傍に駆け寄ってそっと薪の背に手を置く。

「昔、まだあの方の支配下にあったとき、罪を犯したものは絶対殺された。それから逃れようとして地球に足を運んだ」

穂琥が尋ねる前に薪は語りだした。それが嬉しいような複雑なような穂琥だった。

さすがの慇夸といえど、さすがの巧伎といえど地球まで逃れた眞匏祇を追ってまで殺すつもりは無かったらしい。何より面倒だった。地球に逃れたければ逃れればいいと巧伎は割り振っていた。

そもそも眞匏祇にとって人間に対しする負の感情は深い。人間を

毛嫌いし抹殺したいと願う程に。しかし流石の眞匏祇といえどこの地球に住まう人間全てを消し去る力を有しているわけではない。もっとも、慤夸なら別の話しだが。

よって地球に逃れた眞匏祇は結局嫌う人間の元生活しなければ習いために苦痛であることに変わりは無かった。さらに眞匏祇の世界から人間の世界に行くことは容易くできても戻ってくることは容易ではない。故に、わざわざその反乱分子を殺しに地球に赴く理由などなかった。

そして厄介なのがここから。殺されることを恐怖に思って逃げてきた眞匏祇たちは大抵心弱く、この地球に足を踏み入れた眞匏祇を片っ端から消していこうとする。慤夸の追撃ではないかという不安から。だから不安定に発している穂琥の眞稀を感知すると襲ってくるのだ。さらに面倒なのは先程の連中だ。

決してそんな弱い存在には思えないのにも理由がある。ただ逃げることを選んだ先程の眞匏祇の話とは異なり、こちらの眞匏祇は慤夸に対する憎しみが強い。必ず噛み付くに戻るという意気込み。それがあるからこそ、普通の眞匏祇よりもはるかに強い力を有していることになる。慤夸に復習するために存在している集団。それの一員が先程の誓茄と鼓斗、さらには雫杜ということだ。

そして問題なのは薪が慤夸であるかどうかを知っているか否か。鼓斗と誓茄は気づいていないことは事実。もし、慤夸と知っているならあんな口調、態度ではないはず。しかし、彼らが『主』と呼んでいたものがどうかは流石の薪とて理解は出来ない。

そんな話を家に帰りがてら穂琥にしていた薪だった。そんな家には途方にくれた籘下が待っていた。そんな籘下を包んでいたシールドを開放する。やっと身体を動かせるようになった籘下はうんと身

体を伸ばした。

「悪いな、籐下。無理させた」
「いや、そんな事ないよ。助かったよ」
「さて、籐下。とりあえず今日はもう帰れ」
「・・・わかった。無理するなよ、色々さ
「おう」

籐下は少し薪の顔をのぞき見てから諦めたようにその瞳を伏せて帰って行った。

籐下を送った後に薪は気合を入れるようによしと声を掛けた。それに驚いた穂琥は薪を凝視する。

「少し移動するぞ。遠いから覚悟しろ」

薪にそういわれてぎょっとしたが移動術を使うといったので特に穂琥にすることは無いと悟る。なんたって穂琥にはその技は使えないのだから。それにしてもどこに行くのかは見当も付かない。穂琥はそれでも薪の後を着いてく。不安なんて全く無いから。

第四話　慫慂と人間の繋がり

ふわっと浮いた気持ちの悪い感覚。これが移動術の特徴。全く別の場所へ移動できる技。気持ちの悪い浮遊感が終わってやっと地面に足が着く。そうして目の前に広がる広大な土地と屋敷。一体ここはどこだ？

「ここって・・・何!?」

「入ればわかるんじゃないか？」

薪はしれっとした顔をしてさっさと歩き始める。穂琥はそれに習うしか出来なくて薪の後を着いていく。

薪はその広大な土地にずかずかと入り込んでいく。中に入ると警察のような格好をしたものが鋭く睨んできた。しかし薪はそれすら気にする様子も無くどんどん進んでいくが、その警察のようなものが近寄ってきて問い詰める。

「君達!ここは君たちが入って良い様な場所ではないぞ!帰りなさい!」

荒れの滲むその声には怒りというより警戒だった。確かにこの場は他の場所に無いどこか神聖な気配を匂わせてはいるが、穂琥には一体ここがどこなのかは知らない。その警察のような男性は薪の腕を掴む。

「君!」

その声に流石に薪は反応を示してため息をついた。男性の目の前に

手帳のようなものを押し付ける。それを一瞬だけ如何わしい表情をした後、はっとした顔をしてから薪の顔とその手帳とを見比べた。それからいまだに不信感の残る顔のまま通ることを受諾した。

穂琥はその手帳に疑問はあまり持たなかった。薪は眞匏祇で、ここは地球。人間の住まう場所。人間の世界に『まほう』なんて存在しない。故にそんな『何処にでも入ることが出来る券』などというものを簡単に入手できなくて当然ではあるが、眞匏祇である以上それらの『偽装』は簡単に出来る。が、薪の行動には疑問を覚えた。薪はあまりこういった無理強いするような行為はしない。よって、偽装するなんて如何わしい行為をするとはとても思えないからだ。

「ねぇ、薪。さっきの手帳って何・・・？なんだか怪しい・・・」
「大したものじゃねぇよ、オレら眞匏祇にしてみれば」

そう言って薪は手帳を穂琥に渡してくれた。手帳といっても中身は紙があるわけではなく、何かの紋章のようなものが描かれているだけだった。どちらかというと警察手帳のようにも思えた。紋章が違うけれど。

進んでいくとそれはまぁ、大きな屋敷が見える。薪は何のためらいも無くその中に入っていく。流石に穂琥も焦って身を萎縮させた。中に入ると脇に小さな扉がある。その扉に入るとそこは人が2、3人入ることが出来るか出来ないか位の小さな空間だった。

「ここ、何？何をする場所なの？」
「空間移動をする場所だ」
「・・・へ？」

人間の造った施設にそんなものが存在するわけも無い。しかし薪は

そこで移動術を行使して全く同じ場所へ移動する。

そこの扉を開けるとそこには美しい女性がいた。穂琥はその女性に一瞬見とれてその後に目を大きく見開いた。その女性を穂琥は知っている。そしてどんな女性かを知っている。故に驚いたのだ。そして彼女のほうもとても驚いているようだった。驚き具合では両者とも引け劣ることは無かった。そんな中に響いた張りのある声。

「急な訪問をお許しください」

薪の声を聞いて女性は驚いた表情から通常の表情へと戻した。それから一体何をしに来たのかを尋ねる。その声は少しだけ震えていた。

「まずはこれ、証明書を」

薪は先程の警察のようなものに見せた手帳をその女性に見せる。女性は顔の奥で震えを見せた。しかし表には決してその様子を出さない。気丈な女性だと穂琥は感じた。それでも彼女の顔は蒼白になっていた。

「そ、それで今回は何用で・・・？」

彼女は礼儀正しく起立して薪に向う。薪も同じ様に起立して向う。硬くなっている女性に薪はそっと笑いかける。

「そんなに硬くならなくても。父上は少し異常でしただけです。今回危害を加えるようなことはいたしません」

そっと話した薪の言葉に彼女は少しだけ安どの表情を見せた。

安堵した彼女とは裏腹に穂琥は衝撃を受けて仕方なかった。
彼女は間違うことなく人間だ。その彼女に薪は『父は』と語った。
つまりは薪の父を知っていることになる。そして今の薪とは異なり、父、つまり巧伎が眞匏祇であることを隠して彼女と接したとはとても思えない。

「巧伎様は・・・？」
「・・・他界した。随分と前に。それの報告を兼ねてここへ来させてもらいました。遅くなってしまったことをお詫びします」
「い、いいえ・・・」

彼女の瞳は揺れていた。

まさか人間とこんな関わりを持っていたというのか。驚きでしょうがない。巧伎がこの女性を殺さなかったことが少し意外にも思えるほど、彼女の権力は相当強い、はずだ。慇夸を前にすればかすんでしまうけれど、この地球にとっては相当な権力。

「あの、陛下。失礼致し・・・客人ですか・・・？」

部屋に入ってきた一人の男性。

名前を確か、貴船小夜（きふねさよ）と言った。この女性は何を隠そう、この地球のトップ所有者、天皇陛下というわけになる。

入ってきた男性を小夜は何とか宥めて部屋から追い出した。薪は申し訳ないと謝罪の言葉を述べるが小夜は必死でそれを否定する。

「いえ、貴方様が悪いわけではありませんので」

小夜の敬語に一瞬だけ薪は不機嫌そうな顔をしたが直ぐに戻した。もとより彼女は敬語を使用する立場の人間なのだから当然だ。相手が惑夸であろうが何であろうが関係ないということを思い出す。

「それで。何用でしょう？」

最初よりは大分落ち着いたその声に薪は安心したような顔をしていた。

「痲臨という危険な宝玉が此方に来てしまって。それを回収するのが今回この地球にお邪魔させていただ理由です」

小夜は痲臨と言う言葉を聞いて目を丸くした。別にその言葉を知らないわけでは無さそうだった。とすると、おそらく巧伎からの情報を与えられているのだろう。

「それの回収作業をするので多少なりともこの地球の軸が揺らぐかもしれませんが、揺らいだぶんはしっかりと元に戻しますので」

小夜は納得したように美しく頷く。

それに反して穂琥はそろそろ我慢の限界に達していた。

「薪！一体何?!天皇陛下だよ!?この世界のトップだよ!?っていうか人間だよ?!何考えているの!?」

「何も考えていないお前には言われたくない台詞だな」

「酷い！」

突然話に乱入してきた穂琥に小夜は酷く驚いていた。まるで今までその存在に気づかなかったみたいに。震える声で穂琥が何であるの

かを尋ねてきた。

「私は穂琥です！ホク＝スィンス＝トゥウェルブ！薪の妹です！」

陽気に答える穂琥に少し面食らったように頷いていた。

「さて、お忙しいところ時間を頂いてしまって申し訳なかった。ではまた来ます。その時は良い報告を持って」

小夜はその言葉にはっとしたように深々と頭を下げた。そうして薪と穂琥はきたところから帰るのだった。

「薪様・・・、ですか。慥夸もお変わりになられるのですね・・・。巧伎様と異なり素晴らしい方です・・・」

小夜は一人になった部屋でそう呟いた。

穂琥はひたすら薪に投げかける。人間ともそんなかかわりがあるなんて知らなかった。しかも相手は天皇陛下ときたら驚きだ。しかし、薪はさらりと凄いことを言ってのける。

「ま、所詮天皇だしなぁ。慥夸なんかを前にしたらまだまだ小さい存在だよ」

本当に我が兄ながら一体何処までコイツは・・・。穂琥は小さくため息をつく。ここに来てより薪を遠く感じた穂琥だった。

そんな薪はこの皇居に危害が及ばないように普通には見えない特殊なシールドを張った。これでおそらく、相当の手誰が登場しない限りここに手を出すことは出来ないだろう。

皇居を出ると穂琥は鋭く肌を刺す殺気に似た眞稀を感じた。それを薪に伝えると少しやわらかい笑みを向けてきた。

「そういうの、分かるようになったんだなぁ～」
「なんか腹立つ！それ所じゃないでしょ？！」
「はいはい」

妹のちょっとした成長を噛み締めながら薪は足に眞稀をためる。穂琥がその行為に疑問を感じている間に、薪はさっと穂琥を抱えて空へと飛び上がるのだった。無論、穂琥の大絶叫をおまけして。

第五話　新たな幕開け

今感知した眞稀は全部で４つ。つまり４祇いるということになる。

穂琥を連れて薪は敵の待つ場所へたどり着く。誓茄と他にも女が一祇と男が二祇いる。見覚えの無い顔ぶれだった。

「何用だ？」

薪の言葉に誓茄は嬉しそうに微笑んだ。

「何、こいつら。強いの？」

誓茄の隣に立った女が嫌そうな声を上げた。誓茄はそれを聞くと自慢層にお気に入りだと鼻を鳴らした。そのやり取りを見て薪は肩を落とす。

「へぇ！鼓斗と戦うのを拒否したっていうやつか？！」

その後ろにいた男が感嘆の声を上げる。さらにその後ろにいる男は此方を睨むようにして押し黙っている。

女の名前は圭（けい）、男の方は流貴（るき）。ずっと黙って言葉を発していない男が瞑（べい）。誓茄は相変わらず腕を組んでにやりと笑っているが、圭は戦闘態勢に移ったので薪は目をすっと細める。

「やるのか？」

「おい！？この数を前にしてやる気なのか？大したものだな！？」

薪の言葉に流貴が反応を示した。薪のその強気は圭に買われたが結局、やらるのは薪であると圭は豪語した。

「っつても戦闘するつもりは無い。『シナリオ』とは異なるからな」

圭が額に力を入れて言う。相変わらず誓茄は信徒の一戦を交えたくてうずうずしているようでさすがの圭もその様子を不思議に思ったらしく、そんなに気に入ったのかと尋ねた。

「えぇ！強いわよ～！」

「・・・・。一戦、やりたいな」

圭の言葉。それに流貴は驚いたようにやるのかと聞いた。そうやって騒いでいる中に穂琥が少し怯えているのを薪は感じた。

穂琥の瞳に映る４祇の眞匏祇たち。そのうち、一つだけ特殊な存在を感じる。本来、眞匏祇は眞稀を完全に消して気配を消すことは出来ない。薪とて眞稀を最小限に抑えていて普通の眞匏祇にとってはまるで消えているように感じるだけのこと。桃眼で視れば眞稀を視る事は案外容易くできる。

しかし。たった一祇。根本的に眞稀を見ることができないものがいる。そのものに対して酷く怯える穂琥。そして様子から察するに薪もそれに気づいているようにも思えた。

「あんた、名は？」

低く、重たい声。まるでそれは鉛のように。その声が響いたとき、さっきまで騒いでいた誓茄や圭、流貴は押し黙った。

声を発したのは瞑。眞稀を見ることの出来ないもの。その瞑に名乗ることは出来ないと答える薪。すると瞑は薪を一度鋭く視てから視線を外した。

「名は？」

再び問う。薪はその瞑の言葉に何故か焦りを感じた。一体何故自分が焦ったのか理解することすら出来ないほど、妙に焦ってしまっていた。

「断ると、言ったはずだが？」
「何故語らぬ？」
「・・・語れぬ理由があるからだ」

薪の言葉全てで瞑はまるで何もかもを見据えていそうな気がしてならなかった。

一方の、誓茄たちは正直驚きで言葉を失っていた。滅多に声を発しない瞑だが、今、目の前にいる少年に興味を持って話しかけていることが意外で仕方なかったのだ。普段から全く喋らず実際、声を聞いたのだってこの長いときの中で2、3度といっても過言ではない。そうだというのにここまで語っているとは驚く以外に無かった。

瞑は軽蔑するように薪を睨んだ。しかしその後に目を伏せて呟くように言う。

「エンドと同じ『気』を感じたが。気のせいか」

薪はその言葉に全身に鳥肌が立った。自分の奥からこみ上げくるものは何だ。驚きか。いや、きっと違う。これは悲しみと憎しみ。そ

してそう感じた自分に怒りが沸く。

瞑はそのまま喋らなくなった。薪はそんな瞑を凝視する。しかし、瞑はもう言葉を発する気は無いようだった。

「あの、瞑、さん？」

穂琥が急に会話に参加した。薪は驚いて穂琥に振り返る。穂琥の瞳に残る眞稀を感知して僅かにでも開眼したことを知る。

「貴方、一体なんですか？『何』ですか？」

穂琥の質問に瞑は不機嫌そうに顔を歪めた。しかしやはり何も言わない。瞑の中で既にもう何も言う必要がないと判断したのだろう。

その異様な空気に気圧されていたのは何も薪だけではない。当然、瞑と共にここにいた他の3祇もダメージを受けているようで若干の狼狽した様子を見せていた。

「引いてもらえないか？」

薪の声に賛同するように流貴が声を張る。

「おし、ここは引こう！一度戻って体制を立て直そうじゃないか？！」

それに同意する誓茄と圭。無論、瞑も引くつもりのようだった。少しだけ安堵する薪。しかし、瞑がふっと薪を睨む。薪はその目に一瞬だけ心臓を貫かれる感覚を覚えた。前にどこかでそれに似た何かを感じたことがあるような。

「あんたと遣り合う時を待っているよ」

先程までの話の中で一番重たいその声にぞっとする薪。本能が告げる。この男は交えてはいけない、何があっても、と。

そうして彼らは姿を消した。全身から力を抜いた薪は腰を下ろす。そしてどっと疲れた息を吐ききってから穂琥に投げかける。

「なんであんなこと聞いた?」

「ご、ゴメン・・・。でも気になって・・・。だって・・・だって眞匏祇じゃないよ!アイツ、何!?だって!!」

「落ち着けって」

薪の宥めるような声に穂琥は黙る。穂琥のいっていることはおそらく事実だ。眞匏祇であるのに桃眼ですら眞稀を視る事ができない。それにあの異様な空気。普通の眞匏祇とはとても思えない。

「ねぇ」

神妙な面持ちで穂琥が薪に呼びかける。薪は目だけを穂琥に向けて反応を示した。穂琥は少しだけ黙ってからそっと口を開いた。

「綺邑・・・さんって、眞匏祇とは全く違う生き物だよね?」

「?　当たり前だろう」

穂琥の質問に疑問の表情を浮かべる薪。薪の返答を聞いてさらに押し黙る穂琥の様子を見て、薪ははっとした。

「お、おい・・・?まさ、か・・・」

「い、いや、わからないけど！」

僅かな可能性。しかしその可能性を否定することも出来ないことも事実。綺邑にそのことを尋ねてみても構わないかもしれないが、取り合ってくれるとはとても思えないのが現状。

瞑は死神かもしれない・・・―

第六話　属する世界の違い

帰宅途中の出来事。薪がはたと足を止めた。そしてあらぬ方を見て怪訝な表情を浮かべている。それから穂琥の腕を掴んで着いて来いと走り出す。何が何だかわからないけれど諦めて着いていくことを選ぶ穂琥だった。

とある家の前で薪の足は一度止まった。そしてその家を凝視している。その様子を見ていることしか出来ない穂琥は怪訝な表情を浮かべる。そして薪はその家のインターフォンを押す。しかし、返答は無い。留守なのかと思った穂琥だったが、薪は何も気にしないかのように勝手に家の敷居をまたぎ、玄関の戸を開けてずかずかとその中に入っていったので驚いたなんてものではなかった。

中には頬を濡らした女性がいた。その膝元には白い顔をした男性が横たわっている。見るからに既にその顔に生気は無い。息を引き取った後だろう。

そんな女性にも気にしないように薪はきょろきょろと辺りを見回している。勝手に入ってきた男女にその女性は酷く驚いている様子だった。穂琥はそんな女性に平謝りして何とか薪から意図を聞きだそうとする。

「旦那、か。いつ逝ったんだ？」

薪の言葉に流石の穂琥も怒りが沸いた。大切な人を失った人間にそんな言葉をかけるなんて酷すぎる。しかし、よく見ると薪の目は女性を見ていない。むしろまったく別のところを見ている。それから怪訝な表情になる薪。

「居るんだろう?そこに。出てきても良いだろう。この男に何かあるのか?」

薪が突然喋りだす。穂琥もその女性もチンプンカンプンで硬直する。一体薪は何を言い始めたのだろう。穂琥でもわからないのだ、この女性にそれがわかるわけも無い。穂琥は半ば、薪の頭が壊れてしまったのではないかという不安に駆られた。

「出ないか・・・。この女性の記憶はオレが持つ。いいだろう?」

「ふん」

薪の言葉に呼応するように響いたその声に、女性は酷く驚いて反応する。誰も居ないはずなのに、声が何処からとも無くしたのだから。その声を聞いた穂琥のほうは久しぶりに腹の底からぞっとしたものを感じた。怒りというか、なんというか。前回会った時と同じ様な感覚。儒楠が『嫉妬』と呼んだ感情だ。つまり。今声を発したのはあの『ヒト』だ。

「よう。久しぶり、でもねぇか」

笑いながら薪は言った。

真っ黒いローブのような服。フードを深くかぶり容姿がはっきりと輪郭取ることが難しいそれは横たわる男性の脇に現れた。

「貴様の助力をする為に居るのでは無いぞ」

男か女か、わかりづらいその声音と口調だが列記とした女性。死神、綺邑。

「わかっているよ。さて、あなた、名前はなんていうの？ちなみにオレは薪。これは穂琥。ちょっと用事があってここまで来させてもらった」

薪の唐突の質問に、むしろ此方のほうが聞きたいことがたくさんあると言いたげにその女性は言いよどんだ。

「幸奈（ゆきな）、です。このヒトは翔蒔（しょうじ）です」

幸奈と名乗った女性は震えた声でそういう。目の前の少年たちは一体ここに何をしに来たのだろうか、わかるわけも無く、また教えてくれる様子もなく。

薪は幸奈の名を聞いた後に綺邑に向き直る。

「で？綺邑よ。何故お前がここに？」

「これは私が扱う」

ぶっきら棒に冷たく言い放った綺邑だが薪は折れることなくそんな綺邑に尋ねる。だから、何故？と。綺邑は面倒くさそうな表情をしたが諦めたように語る。

「罪。しかし別に悪くは無かろう。救ってやろうとは思う」

綺邑の言葉に幸奈は震えた。言っていることはきっと理解し切れていないだろうけれど、何故、この翔蒔が死んでしまったのか経緯を考えると、最初に言った『罪』という言葉に引っかかりを覚えたのだろう。幸奈は綺邑の言葉に聞き入るようにして耳を傾けた。

「が」

綺邑は言葉に否定的な接続詞をつける。薪もその接続詞を気にして首を傾げる。綺邑が助けると判断したのであれば、難なく救うことが出来るはず。否定する要素など無いはずだが。

「この男自体に生きる意志が無い」

薪はその言葉に差し当たって疑問に思うことは無かったらしく黙する。しかし、穂琥と幸奈はその言葉に驚く。幸奈にいたっては薪や穂琥が何で、綺邑が何かを知らないから、余計に混乱しているのだろう。

「オレらは『眞匏祇』という種族だ。そしてその黒いのが『死神』といったところだろうかね」

幸奈はひたすら口をパクパクさせていた。現状を理解することが出来ていない。

「死神自体はなんとなく耳に覚えはあるだろう。ま、その覚えのもののイメージとは随分と異なったものだけどね。ともかくだ。オレも詳しいことまではよくわからないし、知るつもりもない。けど、この死神はあんたの旦那を生き返しても構わないと言っているんだよ」

薪の羅列する言葉に幸奈はさらに混乱する。しかし、生き返らせることが出来るということを知って幸奈ははっとした表情を見せた。

綺邑が誘うのは死者の魂。事と場合によってはその魂をもとある場所へ返すことが出来る。現に、薪もそれで命を救われているのだ

から。しかし、今戻そうとしている男、翔蒔の魂は元の器に戻ることを拒否した。過ちを犯したことによる罪悪感で元に戻るのもおこがましいと。

「オレも過去に過ちを犯した。そして死ぬはずだったところをこの死神に救われた。気持ちはわかる。でも、死ぬことが罪をかぶることではない。罪を償うことではない」

薪の声に諭されるように幸奈は瞳を揺らした。

「生きて、やらねばならぬこともある」

「あなたは・・・・一体、何?」

「此処には有らぬ存在、というかね」

薪はそっと言い募る。今までの薪とはどこか雰囲気が違う気がする。その言葉回しがどこかかっこよく思う穂琥だった。

「あなた達は・・・一体・・・。私にとって何ですか?幸ですか?不幸ですか?」

震える幸奈の声。それが求めるものは光か闇か。幸奈に期待に沿う事を言うつもりは無い。いや、いうことはできない。だから薪はありのままを伝える。

「オレ達がそれを決めることは出来ない。あんたが決めればいい。ただ、オレはあんたに幸福をもたらしたいとは思っているということは伝えておく」

信じる信じないは別の話。薪たちは幸奈に味方するつもりでいる。しかしその『想い』が幸奈にとって幸福になるかは分からない。感

じ方など様々だから。

薪の言葉に幸奈はふっと肩の力を抜いた。そして潤んだ瞳で小さく呼応する。

「貴方たちを信じます」

第七話　明らかになった存在

綺邑が嫌そうな目で薪を睨む。幸奈の返答を聞いて話しが一時、完結したためにその場から消えようとした綺邑を薪が呼び止めたのが原因だ。

「貴様、この期に及んでまだ何か？」

冷たく重いその言葉に慣れていない幸奈はぞっとする。無論、穂琥もしたけれど。それでもめげない薪の神経はどれほど図太いのだろう。

「まぁ、いいじゃないか！一つ！聞きたいんだ。それ答えてくれたら行っていいから！」

薪の回答に綺邑は冷たく睨む。しかし、この沈黙は綺邑の肯定の仕方だ。薪は軽く謝礼を述べてから質問をぶつける。

「お前って一人か？」
「は？貴様、何を言っている？」
「いやな、死神はこの世に一つしかないだろう？二つも在る事が出来るのかな、ってさ」

薪の質問に綺邑は怪訝そうに眉を寄せた。

「瞑、って言うんだけどさ。知っているか？」
「いや。知らんな」

瞑の質問であるなら穂琥も参戦したい。

あの違和感はまるで違う。眞匏祇のような雰囲気を漂わせているというのに眞稀が全く見えることが出来ないあのへんな『生物』を。

そんな疑問と不安を綺邑にぶつける。ぶつけられている綺邑はひたすら黙っていた。此処まで黙する綺邑も相当珍しい。肯定というわけではなく、思考しているのだ。そんな思考する時間に綺邑はあまり時間をかけない。その思考している時間すら惜しい。故に思考することを止めて知らんと答えるのがいつもだ。

「知らんな」

長い沈黙の後に綺邑は答えた。

「聞いた限りでは記憶に無い。会って観ないとわからんが、会うつもりは無い」

言い切った綺邑の言葉に穂琥は怒鳴るように言い返したが薪がそれを制止する。

「なら会わなくてもいい。オレの記憶を少し見てくれないか?」

綺邑は一度面倒くさそうな顔をしたが仕方ないといった風で薪の傍により薪の額に綺邑の額を当てる。そして目を閉じる。そうして薪が綺邑へ眞稀を流し込めば、その眞稀の流れに乗って過去の記憶映像が相手へ届く。

映像を見終わった綺邑は薪から離れてさらに黙した。見覚えがあるのかないのか。知っているのか否か。綺邑は答えない。

「あの・・・」

弱々しい声が沈黙の中に響いた。それで気づいたがすっかり幸奈が居ることを忘れていた。

「瞑、というのですか？私も・・・その方を知っています」

幸奈のその台詞に全員が驚く。

翔蒔が息を引き取ったのは昨日の事。その日に起きた出来事。

幸奈は今にも消え朽ちてしまいそうな翔蒔の面倒をしきりに見ていた。

「迷惑かけてすまないな・・・」

「いいえ、いいのよ。ずっと二人でって、決めたじゃない」

うつろな目の翔蒔に必死に言葉を掛ける幸奈。翔蒔はただ過去を悔いていた。悪いことをしたものは地獄に落ちるのが定めなのだと。

「そんな事言わないで・・・。貴方は悪くないわ。いつかきっと救われる。いつか・・・」

「あぁ・・・そうだといいなぁ」

翔蒔のその声には諦めが混ざっている。きっと自分は救われない。幸せになってはいけないのだと。自分はどんなに不幸でもいい。だから目の前のこの女性にだけは幸せでいてほしいと願うしか出来なかった。

「失礼」

玄関のほうで声がする。幸奈は客だといって立ち上がった。

突然現れた男は瞑と名乗り、翔蒔の病を治せるかもしれないといってきた。それに歓喜した幸奈は瞑を中に入れた。

しかしどうにも胡散臭い。瞑はふふ、と笑って翔蒔の額に手を置いた。やったことといったらそれだけだ。立ったそれだけの行為で瞑はこれで帰ると言う。

何が何だかわからないまま幸奈はその瞑を見送ってしまった。そして戻ってきた時、翔蒔は息を引き取っていた。

穂琥はその話しを聞いて震えた。普通の人間ならわからないかもしれないけれど、眞匏祇である穂琥にならわかる。額に手を当てたとき、確実に瞑は翔蒔の生気を吸い取った。ヒトの命を一体、何だと思っているのか！腹立たしくてたまらない！

「落ち着け、穂琥」

薪に言われてむっと黙る。そして薪はそのままひたすら黙っている綺邑へ目を送る。

「おそらく・・・奴の名は邑頴（ゆうえい）だろうな」

「知っているのか？」

綺邑はなんとも口惜しそうな顔をしていた。こんな風に表情を歪ませたところを始めてみた。

「死神だ。元な。今は違う。既にこの世には存在していないはずの

ものだ」

綺邑の語り方と雰囲気。そして元死神であるという綺邑の言った事実を踏まえて導き出るたった一つの答え。

「お前の・・・父親か？」

綺邑は小さく頷いた。肯定の仕方にそれを用いたことが無かったので薪も穂琥も少し面を食らった。まさか、一度朽ちたはずの死神が再びこの世に舞い戻るなどありえない。あっていいはずが無い。しかし、邑頴は綺邑の父。もとより凄まじい力を有していたことは事実。もしかしたらそうして今この世に存在することは造作も無いことだったのかもしれない。

「さて。記憶はオレが持つ約束だったな」

薪がパンと手を叩いて空気を割った。話に段落が着いたからだ。必要なことは全て聞いて今の薪にとって欲しい情報は大抵入った。よって此処に長居する必要は無い。

「此処であったこと、全てをオレがもらう。つまりはあんたの記憶を消すって事だよ、幸奈」

幸奈は息を呑む。せっかく知り合えた彼らのことをすっかり忘れてしまうのは悲しくてたまらない。切なくて仕方ない。

「すまないね、約束があるんだよ。綺邑に出てきてもらうとき『記憶はオレが持つ』といってしまったからね」

「私は見世物じゃない。たかが人間風情が私を記憶しておくなど痴がましいと知れ」

綺邑の発言に幸奈が震えた。その殺意にも似た感覚に幸奈は恐怖したのだ。そして、俯いて苦しそうに顔を歪めて、記憶を消し去ることを承諾した。消えてしまえば何も残らない。今ある不安も記憶さえなくなれば消えてしまうのだから。

「おい」

薪が記憶を消す作業に入ろうとしたとき綺邑が幸奈に声を掛けた。幸奈はきょとんとした表情をした。

「最後に聞きたい事がある。答え次第では其の侭にしても構わん」

「ほう？」

綺邑の言葉に反応したのは薪だった。そのことに綺邑はいささか不機嫌そうな顔をしたが気にせず話を進めた。

「まだ、話が残っている。瞑と名乗った男、何を手渡した？」

幸奈はその言葉で酷く驚いた顔をしていた。そしてそれの回答を幸奈は渋った。そのことに綺邑はふんと鼻を鳴らして面倒臭そうに薪を睨む。薪はそれを受けて肩を落としてから幸奈の肩に触れる。

「こういうことは言ってしまった方がいいよ。別に悪いようにはしないし。特にオレ達にはね。それに事と場合によっては記憶が飛ばずにすむのかもしれないし」

幸奈は悲痛な表情でしばらく考えてからわかったと承諾すると部屋の奥へ入っていった。それを見詰めて薪は少し警戒の色を強めた。

第八話　魂石と共鳴する意味

瞑は語る。誰にも言ってはならないと。そうして渡してきた小さな箱。ここに有らぬ者たちが来たときにそれを渡すようにと言った。そうして瞑は立ち去る。その立ち去る間際に振り向いてふいに笑って言った。

「礼だ、と伝えておいて欲しい」

幸奈はその箱を薪に手渡す。薪はそれを手にした直後、その中身を悟った。そっとあけるとやはり思ったとおりのものが入っている。しかし、形は想像とは全く異なるものだった。

「魂石、だな」
「そのようだな」

薪の言葉に綺邑が反応する。しかし、穂琥にしてみれば薪の持っている箱の中身が魂石であることがわからない。魂石とは本来、掌に乗るくらいの硝子玉のようなものだ。その美しさときたらそれに匹敵するものなど有りはしないほどに、命の輝きだ。

箱の中に入っていたものは色は完全にくすみ、不透明であったし形も球体ではなく歪な、星型のように凹凸のあるものではっきり言えば見るも無残な形であった。

「仲間の？」

穂琥がそっと尋ねる。しかし薪はそれを否定する。眞稀は今までに

会ったことのないものだと。そして魂石だと知ってからの綺邑の挙動の変化に薪は疑問を覚える。そして一体綺邑が何を考えているのかを出来うる限り考える。そうして見つけた一つの可能性。

「幸奈が眞匏祇だとでも言いたいのか？」
「可能性が無い訳では無いな。共鳴している」
「なんだよ、共鳴って。確定じゃねぇか」

綺邑の言葉に薪は鼻で笑うように返した。しかし綺邑はそれでも回答をはぐらかす様な言葉しか言わない。

「何だよ、それ。何なら試すか？」
「好きにしろ」

薪は幸奈に向き直る。そして幸奈が眞匏祇か否かを調べると言う。幸奈は混乱する。

「大人しく黙っていればそれで良いんだよ」

綺邑の言葉に幸奈は身を縮める。しかし、理解も出来ないこの状況でそんな事を言われる幸奈が可哀想過ぎて穂琥は綺邑に噛み付く。

「何それ！そんな言い方しなくてもいいじゃない！」
「煩い。少しは黙っていられないのか」
「んな！？」

綺邑の返しにイラッとする穂琥。今すぐにでも殴りにかかりたい衝動に駆られたが、そこはなんとか抑えた。

「それに眞匏祇な訳あるの！？」

「それに関してはお前が一番わかるだろう」

返答した薪の言葉に穂琥は返すことが出来ない。確かに事実だ。自分はこの年近くなるまで自分が眞匏祇であることを知らなかった。正確には覚えていなかった。故に幸奈も、同じ事。さらに幸奈の場合、体内に魂石を宿しては居ない。だからこそ、体外に眞稀がもれ出ることが無かった。薪でも気づくことが出来ないほどに。

綺邑に急かされて薪は調査にかかる。

幸奈の前に立った薪はその幸奈の足元に陣を描き始めた。その光景はきっと幸奈にとっては信じられないことかもしれないけれど、今更それに驚くことも無いと幸奈は意外に冷静にそれを見ていた。

薪が描く陣。ペンなどの書き記すものを一切持っていない薪の指から発光色の橙が生み出されている。眞稀より発せられたもので描いているので、それなりに眞稀を有している者でなければ陣を書き上げる前に眞稀が尽きて失神してしまう。

「さて。これで準備はオッケイ」

書き上げた薪は陣から出て陣の手前に諸手をつく。そしてその陣へ眞稀を流し込む。

陣は橙の色をより深めて輝いた。それを見て薪はにやりと笑って立ち上がった。その際に陣も消え去った。

「決まりだな」

薪は腰に手を当てて綺邑のほうへ目をやる。綺邑は不機嫌そうに鼻

を鳴らすだけだった。

「えと・・・？」

「あの・・・」

穂琥と幸奈の声が重なる。薪はそれを聞いてそちらに目をやる。一瞬、穂琥を軽く睨んでから幸奈のほうに目を移す。

「陣が無色に変化すればそれは眞稀を有していないということで人間。橙がより強まればオレとその陣の中央に立っているものの眞稀が共鳴したということでより一層橙に輝く、つまり眞匏祇だということ。つまり、あんたもオレらと同じ、眞匏祇ということ」

幸奈は呼吸を少し荒げて不安そうな顔をしている。それも当然だろう。

薪に睨まれて萎縮したが、知らないものは知らないのだから仕方がないだろうと内心で文句を言った穂琥だったが、それを悟った薪がまた睨んできたので今度は本当に萎縮することにした。眞匏祇の事を知らなさ過ぎると自覚する穂琥だった。

「帰る」

綺邑が無造作にそう言って姿を消した。幸奈はそれに一瞬びくっとしたけれど、薪が姿を現すことが出来るのだから消す事だってできるさと、乾いた笑いを立てたので幸奈はひとまず納得することにした。

「さて、幸奈さんさ」

「・・・は、はい・・・？」

薪は幸奈に向き直る。

第九話　自覚の無い眞匏祇との出会い

先程であった二人の子ども。摩訶不思議でいまだに信じられないその存在にどこか頼ろうと思ってしまうのは何の心理か。兎に角。そんな二人についていけばきっと何か道が開けるかもしれないと思ってここまでついてきたが、一体この二人の口論はいつまで続くのだろう。幸奈はただ、そこにたって二人を見ているだけだった。

「だぁかぁらぁ！」
「仕方ないだろう！仮にも女だろう！」
「仮って何よ！仮って！立派な女です！」
「仮だろう！お前の何処が女だ！」
「立派な女性じゃない！！」

最初の論議から大分外れた話になっている。感情論で言い争いをしているのが原因だろうと、幸奈はそれを見ている。

そもそもこんな口論になったのも今から３０分前の事。口論の優勢に立っている男の子とそれに必死に喰らいつく女の子。男の子が薪、女の子が穂琥。そして幸奈の三人は寝床について話を始めたはずだったが気づいたら口論になっていた。穂琥と幸奈はホテルを借りてそこに行けと薪が言う。しかし、穂琥の言い分は薪の家に行くという。

「寝るところだってねぇだろう！」
「あるもん！二個！」
「二個じゃ足りないだろう！？」
「足りるもん！私達は布団！薪は屋根！」
「オレは外か！」

この二人は口論をしているのか漫才をしているのかわからなくなってきた幸奈だった。そしてそんな二人を見て少しおかしくなってしまった。

「ぷふ・・・」

うっかり声に出てしまってそれが理由で二人の口論という名の漫才はを終焉を迎えた。

「あ・・・ゴホン・・・。済ません。コイツと一緒にホテルに泊まってください。ホテル代などは気になさらないで結構ですので」

薪はそう言って穂琥を差し出す。そんな彼の態度に幸奈は疑問を覚えていた。幸奈が年上ならば敬語を使うことになんら疑問を感じることは無いのだが、この少年は先ほどまではそう言った態度は一切無く、突然こんな態度を示した。そんな不思議な少年に混乱を抱いたままだ。

「では、オレは情報を集めに行きますので、失礼します」

薪はそう言って姿を消す。幸奈は呆然と彼の背中を目で追ってから足元で不貞腐れている少女に手を差し伸べる。

「あ、どうも。ありがとうございます、幸奈さん！」

かわいらしい笑顔で幸奈の手を取る。この少女は会ったときから態度が変わっていない。なら、特別なのはあの少年か。

「仲、いいですね」

「え？そう見えます？あんなので？」
「えぇ。とても。素敵なご兄妹だと思うわ」

穂琥は一瞬、驚いた。薪と穂琥の関係で兄妹だと言ってきたのは幸奈が初めてだ。そのことを幸奈に伝えるとやわらかい笑みを見せた。

「大人が見れば恋人には見えないわ。とても仲良しには見えるけどね。貴女がとても彼の事を慕っているということも」
「え・・・そ、そんな事までわかっちゃうんですかぁ～？照れちゃうなぁ・・・」

穂琥は頭をかく。大切な兄。大好きな兄。だからずっと一緒に居られる。不安なんて何も無くて。

穂琥と幸奈は薪に言われたとおりホテルに入る。部屋に入ってゆっくりとくつろぐ。そうしてゆったりとしていまだに信じられない中に身を投じているのだと考えると実感がわかない幸奈だった。そもそも、一緒に来るようにと薪に言われたからここにいるが、一体何故一緒に行くべきだったのか、説明を受けていない幸奈は少し不安ではあったけれど、この穂琥という少女然り、何故か幸奈も薪という少年を信じてしまう、信じさせる力を持っているように思えた。とにかく。今は何もわからない。きっと彼はそれを説明してくれるはず。それを信じて幸奈は休むことに決めるのだった。

翌朝、いつ帰ってきたかわからない薪に起こされて不機嫌に答える穂琥。
「なぁにぃ？」
「幸奈さんは？」
「奥」
「そうか」

穂琥の指差した扉を見て薪は肩を落とした。

支度が出来たらしい幸奈が部屋から出てきた。そしてそんな幸奈に薪は少し考えてから尋ねる。

「ねぇ、幸奈さんさぁ。ま、あの時は記憶を消すつもりだったし、そのまんまでいったけど。敬語ってオレ、嫌いなんですねぇ～。でもやっぱ人間だし、目上には敬語かな？って思ったけど。やっぱり嫌いなもんは嫌いだ。だから、いいですかね？普通に」

本当に年上というものをかなぐり捨てたその発言に幸奈もだが穂琥も驚く。ここまでぶっちゃけて言い切ることの出来る薪が凄いとすら思う。

「構いませんよ・・・」

幸奈としてはきっと理解できたこと。薪の態度の変調に。

「それで、幸奈さんさ」
「幸奈、で結構です」
「そう。じゃぁ幸奈さ」

幸奈に言われたとはいえ、簡単に敬称を剥奪させたよ、コイツ・・・と思う穂琥だった。

「はっきり言ってあんたは危険な状態にあるんだよ」

瞑、邑頴が一体何を思って幸奈に魂石を与えたのかわからない。主と称してそれに付き従っているあのもの達がそのことで動き出さな

ければいいのだが。ともかく色々と危険が生じるということ。

「だから日常生活ではオレが絶対に護る。それは約束する」

強く放たれたその言葉にどれだけの深い意味が篭められているのかは、会ったばかりの幸奈にはきっとわからないだろう。それでもいいのだ。ただ、今のこの薪の言葉さえ、信じてくれるのなら。

幸奈にはとりあえず宝探し、という題目でここへきたということにした。まぁ、あながち間違いではない。痲臨は眞匏祇たちにとって宝玉に等しいのだから。

そうして薪と穂琥は移動をすると幸奈に伝う。幸奈は不安そうな顔をしながらも連れて行って欲しいと願い出る。薪はそれをまるで言ってくると予想していたかのように即断で許可を出す。薪が術を行使する。妙な浮遊感に襲われるのだった。

第十話　出会いと別れとその向こうにあるもの

気がついたらそこは地面。全く見知らぬ土地へ一瞬で移動してきた。眞匏祇とは本当に摩訶不思議なものだと幸奈は実感する。

薪は警戒心を強めた表情をする。それが一体何を示すのか。簡単なことだ。奴らがこの場に現れる。それだけの事。

「あらぁ？もうきたの～？」

誓茄が声を発する。

「そちらから呼んでおいてそちらが遅れるとはいい度胸だな」

薪の言葉に誓茄はもだえる。これじゃ話にならないと薪は肩を落とす。すると後から圭と、新顔の男が現れた。

「始めてみるな」
「名乗るほどのものでは」
「伏せるか？」
「滅相も無い。必要が無いということです」
「名を与える価値が無いと？」
「考えすぎであります」

礼儀正しく見えるその男に薪は不吉な予感を感じた。

彼らは主からの伝達があるといってきた。薪は仕方なくそれを大人しく聞く。その伝達はこうだった。

―貴方を我が元まで案内申し立てる。気が向いたのなら足を運んで頂きたい。宜しく申し上げます、スウェラ様

薪はそれを聞いて険しい表情になった。誓茄は嬉しそうに『スウェラ』という名前なのかと尋ねてきたので薪はそれを否定した。すると少し残念そうな顔をしていた。

「以上で御座います。よろしければ我が主の下まで」

男はそう言って姿を消した。それに習って誓茄と圭も姿を消した。

一体何がしたいのか理解できないけれど、穂琥としては何故幸奈に突っ込んでこなかったのかが疑問に思えた。それを薪に尋ねようと思ったが穂琥はその寸前で思いとどまった。薪の様子が明らかにおかしい。

「どうしたの？」

「奴は知っている・・・」

薪の言葉に首を傾げる穂琥。

スウェラ、というのは昔、まだ巧伎が存命だった頃、巧伎がとある集落を訪れたときに仮名として使った名前だ。わざわざ偽名まで使ってその集落に入った目的など、最早言うまでもない。あえて言うなら、巧伎がその集落を出た時その集落は壊滅していた、とだけ言っておこう。

ともかく。そうしてスウェラという名前を知っているということは、あの集落の生き残りで此方が憎夸、乃至はそれの息子だということが既にわかっているということになる。その上で、我が元まで

来いと言ったと言う事は、あの、『主』という眞匏祇は此方を叩き潰す算段が出来たということになるだろう。長きに渡った復習の炎を叩きつけるために。

そうして考えている間に奇妙な気配を感じて薪は剣を構える。

現れたのは瞑。ただひたすら此方を睨む。その目はおそらく幸奈を見ている。

「何しに来た?」

薪の質問に瞑は答えない。本当に無口で何を考えているのかさっぱりわからない。その後に圭がついてきた。瞑の目は一度圭を遅いといわんばかりに鋭く睨むと圭は軽く萎縮した。

「ゴメン・・・。そこの女は始末しろって」

圭がそういう。幸奈はひっと小さな声を漏らす。

「護りながら戦えるか、スウェラよ」

瞑のその言葉を聞いて薪は一瞬ぞっとした。前にも似たような感覚を得たことがある。死の淵に立ったあの感覚。確実に瞑は死の気配を纏っている。直感的にそう思った薪だった。そしてその危険性から薪は一瞬で替装する。

「始末など、させるか!!」

いきなり薪が巨大な刀を取り出して振り回したので穂琥は驚いたが、よく見たら振ったその先に瞑がいた。一瞬で瞑は薪の前まで来てい

た。それに反応したから薪は刀を振るったのだろう。その勢いで瞑が吹っ飛んだ。

「大した餓鬼だ」

言葉を発する。それだけでどこかダメージを受けてしまいそうな程だった。これが歴代の中で特有といわれ最強と謳われていた死神の重みなのだろうか。これがあの綺邑の親なのかと考えると正直ぞっとする。

圭が幸奈めがけて刀を振るう。それに穂琥は気づき、何とかして圭の刀を弾き返す。薪と瞑が視界の隅で戦っている。ならば、穂琥だって幸奈を護る何かをしたい。あまりなれない刀を手に持ち圭に向う。

「お前、慣れていないな。実戦したことあるのか？」

「い、一度だけ・・・」

「ふぅん」

圭は興味もなさそうに声を出して再び襲い掛かる。

あちこちで激しい攻防が続く。一体何を考えているのだろうか。わからない。つい昨日、出会っただけの自分のために命を張って戦う少年と少女の行動の意味がわからない。どうして？

「どうして私なんかのために・・・」

震えた手を握って幸奈は小さな声を漏らす。こんな風に自分のために誰かが傷つくのは見たくない。見ていられない。でもどうしたらいいのかさっぱりわからない。

声。懐かしい声が聞こえる。

―生き抜けばいい・・・

はっとした。ずっと傍に居た大切な人の声。一体どうしてその声が聞こえたのかわからないけれど、幸奈はその声に耳を傾けた。かすれて消えてしまいそうな声だから周囲の音で簡単に聞き逃してしまいそうだった。

―生きて生きて・・・幸せになればいい

愛しい人。この世で最も愛した人。

「翔蒔・・・？」

聞こえた声の主。紛れもなく翔蒔のものだ。幸奈は震える。

―いつかきっと救われる、そう言ったのはキミだよ・・・？大丈夫。俺はずっと一緒に居るから・・・

幸奈は地面に膝を着いて涙した。暖かい声。それが何故するのかなんて幸奈にはわからない。それでも、その声の暖かさに嬉しくて涙が止まらない。そして今、必死で戦ってくれている彼らのためにも、しっかりと意思を持たなければいけないのだと感じる。もう聞こえなくなった翔蒔の声を耳に残しながら幸奈はそっと立ち上がった。

薪は先程から違和感があって仕方なかった。滅多に喋らないと聞いているが、目の前のこの男、瞑は先程からずっと口元がにやけている。まるで何かを楽しんでいるかのように。嘲笑っているかのよ

うに。

「何がおかしい？」

薪の問いにやはり瞑は答えない。しかし、瞑は薪の質問とは全く関係のないことを口にした。その口元は酷く歪んだ笑みだった。

「礼、とだけ言っておこうかね」

「は・・・？何を・・・」

瞑の攻撃を受けつつ攻撃しながらの会話のため、まともな会話はしていない。一方的な投げかけになっているその言葉のやり取りの中で薪はその瞑の言葉の意味を理解できなかった。そうして、この時の言葉の意味を知るのは今からずっと先の事。

膨大な眞稀が膨れ上がって破裂したのはそれから間もなくだった。それはあまりに突然で流石に薪もその眞稀の破裂に対応できなかった。軽くその場から飛ばされて数メートル先に着地した。しかし、瞑や圭を見るともっと吹っ飛んでいるところからこの眞稀の原点が何であるか悟った。

「幸奈・・・！？」

薪は眞稀の風圧を抑えながら急いで幸奈の元に駆け寄る。幸奈の近くには穂琥が居るはずだ。近くで眞稀の圧力を感じてしまってはいくら敵意がなくても危ないかもしれない。それに幸奈はコントロールが出来るとはとても思えない。

風圧の中心には震える幸奈が居た。その傍に穂琥が居る。まるで台風の目のように中心部だけ何もない、静寂とした空間だった。そ

こに穂琥は呆然と立っていた。

「し、薪・・・！幸奈さんが・・！！」

「あぁ、正直驚いた。幸奈！もう大丈夫だから！落ち着いて・・・」

「し、しん・・・くん・・・」

幸奈は震えた声で呼応する。

「もう、平気だから。落ち着いて。ゆっくりと・・・そう、力を緩めて」

薪の呼吸に合わせて幸奈はゆっくりと眞稀を下げいく。今まで一度たりとも眞稀を使用した事がない者がいきなりこんなに大きな眞稀を爆発させてしまっては死に至る事だってありうる。薪は自分の眞稀と同調させながらゆっくりと幸奈の眞稀を下げていく。

やっとの事で収まった眞稀は先ほどの大きさなどまるで無かった様に静寂と化し消え去った。そして当の幸奈は気を失ってしまっていた。

「やってくれるね！」

圭が叫び声を上げる。薪が鋭くそちらを睨む。後ろでゆっくりと立ち上がった瞑を見て薪は眉を寄せる。全くだ。戦っているときからわかっていた。あの瞑は全く本気で戦っていない。それで居て薪と拮抗して剣を交えた。元が死神であるのならそれは理解できるが、何が理解できないかって、『主』と呼ばれるものに付き従っているということ。

「いつまで時間をかけているんだ？」

突然空気を割るようにして声を張ったのは鼓斗だった。圭が口惜しそうに状況を説明して少し不機嫌そうに顔をしかめた。

「瞑。お前が居ながら何でこんな事態になった？」

「・・・・・・」

「応える気など無いか」

呆れたように鼓斗は瞑から薪へと目を移す。それから強烈な眞稀が迸る。穂琥はそれに軽く気圧されたが薪は微動だにしなかった。あの程度の眞稀では気圧されるわけがないのだ。なんたってあの巧伎の眞稀を幼少期に何度も受け続けているのだから。それよりも慣れない死神の力のほうが今の薪にとっては堪える。

「ひとまず、そこの女を始末させてもらう」

鼓斗は素早く刀を用意すると薪に飛び掛る。

「へぇ。幸奈をやるって言っているのにオレに突っ込んでくるのか？」

鼓斗の刀を簡単に受け流しながら薪が飄々と言う。鼓斗は面倒くさそうな表情を浮かべながらもふんと鼻を鳴らして言う。

「よく言うな。結局、お前を鎮圧しなければあの女に手など届かないだろう」

「へぇ。わかっているねぇ」

薪のその余裕の態度が気に入らないのか、鼓斗はさらに刀を振り回す。しかし、それを意図も簡単に受け流すので鼓斗はさらに手に力

を篭めていた。

ドン。鼓斗が勢いよく前のめりに倒れたのは薪が切りかかろうとしたところだった。薪は驚いて刀を止めた。鼓斗が素早く起き上がって怒号を上げた。

「瞑！何をしやがる！！事と場合によってはお前でもただでは済まんぞ！」

「黙れ、餓鬼風情が」

放ったその言葉に鼓斗だけでなく薪も竦む。

「そんな荒れた力で『スウェラ』が斬れるか」

低く重たいその声は耳を解して心臓を貫く。無駄に意気が上がってしまうほどの重圧に薪は歯噛みする。

「さて。二対一か。キツイなぁ・・・・」

「居るだろう？そこに、眞匏祇が」

薪の言葉に鼓斗が笑いながら言う。穂琥を指差して。

「残念だがあいつは戦闘要員じゃないんでね。相当なことが無い限り先頭にはださねぇよ」

薪の言葉に鼓斗はにやりと笑う。それから躊躇無く穂琥へ斬りかかる。薪は穂琥と鼓斗の合間に入って刀を受け止める。その直後、薪の右脇腹に激痛が走った。鼓斗を勢いで投げ飛ばしその激痛の原因を弾き飛ばす。

目の前で一体何が起きたのか、一瞬過ぎてわからない。鼓斗が来たかと思ったら薪が来て、薪が来たかと思ったら瞑が来て。それから目の前には誰も居なくなった。

「薪!?平気!?」

「大丈夫だ、とりあえずここは引くぞ!」

「あ、う、うん!」

「させるわけ無いだろう!?」

鼓斗が鋭く刀を振り上げる。薪はそれを上手いこと避けて穂琥のほうへ走る。穂琥と自分との間に瞑が滑り込む。あまりに突然の乱入に勢いが止まらず瞑の懐に突っ込んでしまった。

本当に短い時間だったはずが酷く長い時間に感じられた。そっと頭の後ろに手が回されて瞑が薪の耳元に口を近づけて小さく囁く。その言葉を聞いて薪は仰天する。そうして瞑は薪を地面に叩きつける。

その時間は現実にしてみればきっと一秒も無かったかもしれない。それでも薪にとっては何十秒にも、何分にも感じていた。そして瞑の言ったその言葉の意味を理解できずに地面に叩きつけられても混乱が解けず、直ぐに動くことを忘れた。

「幸奈さん!!」

穂琥の叫び声で薪ははっとして飛び上がって幸奈の倒れていたほうを見る。そこで目に映ったものに薪は全身の力が抜けた。

幸奈の身体を見事に貫通する瞑の刀。幸奈は全く以って微動だにしない。瞑はそのまま幸奈を投げるように地面に叩きつけると踵を

返して数歩歩いて姿を消した。幸奈を仕留めたことで圭も鼓斗も満足したらしく、同じ様に姿を消した。

すぐさま傍に駆け寄った穂琥は幸奈を抱きしめて何度も名前を呼んだ。何度も。それでも幸奈はぐったりとして動く気配を見せない。

「幸奈さん！幸奈さん！！お願いです！目を開けてください！！幸奈さんってば！」

叫ぶ穂琥の手から薪は幸奈を奪い取る。そして様子を確認していた。穂琥はただ、幸奈が真っ青な顔をしてぐったりしているのでそれが怖くて涙が止まらなかった。確実に匂う死の気配。それだけで穂琥は目の前が真っ暗になってしまっていた。それに反して薪は意外に冷静に幸奈の状態を見ている。

「何しているのよ！！何とか早く治療しないと！死んじゃうよ！薪！」

「・・・いや、するだけ無駄だ」

「何言っているの！？諦めないでよ！？まだ息はあるんでしょう？！」

「・・・」

穂琥の言葉に薪は答えない。ただ、刺された部分に手を当てているだけ。眞稀も何も練らずに。

「薪！あんたがそんな簡単に命を諦めるような奴だって思わなかったよ！私がやるから！」

「いや、いいんだ。本当に」

「何が！」

「幸奈は死なない」

「だからっ・・・え？」

薪の言葉に穂琥は思考が急停止した。横たえてある幸奈の腹部、つまり瞑に刺されたところに左手を添えてただ黙ってみている。穂琥はそんな薪に不安な目を送った。そうして薪の状態を少し確認してはたと気づく。左手で幸奈の腹部を抑えているのはわかる。では、右手は？膝を立てているために右手がどうなっているのか見えない。それでも穂琥は何故かそれに嫌な予感しなくて薪に尋ねる。

「薪・・・？右手、どうしたの？」
「え？別に。怪我はしていないぞ」
「そう・・・なの？」

薪の言葉にきっと偽りは無い。それでも穂琥の不安は消えない。何か嫌な予感がする。それがどんどん膨らんでいくのはきっと直感と呼べるものなのだろう。

「薪、右手・・・見せて」
「何だよ。別に怪我なんてしていないって言っているじゃないか」
「見せて」

穂琥は無理やり薪の腕を引っ張った。思いの他、薪の腕は簡単に前に出てきた。そして出てきた薪の手を見て驚いて思わずその手を離してしまった。

「ま、真っ赤ジャン・・・？！掌が・・・血まみれだよ？！」
「別に怪我じゃないって・・・」

掌を見せて薪が言う。確かにその掌に怪我の類は見えない。しかし、穂琥は一瞬でそれが何であるか理解した。

「薪！わき腹！！」

幸奈を跨いで薪の右に腰を下ろす。明らかに薪は嫌そうな顔をしていたが抵抗することは無かった。

「あぁっ・・・！？何これ？！」

薪の右脇腹は酷いまでに抉られていた。先ほど。穂琥の目のまで一瞬にて行われた刀の交差の中で瞑によって引き裂かれた部分だった。

「酷いよ、これ！？何とかして治さないと！」
「いや、今はいい。それより幸奈を運ぼう」
「え？！そんな事言っている場合じゃ・・・」
「それこそ、そんな事言っている場合じゃない。オレはまだ平気だが、このままだと確実に幸奈は死ぬ。いいのか、それでも」

薪の脅すような強い目に穂琥は無言で首を振った。それしか出来なかった。よしと言って薪は幸奈をおぶって立ち上がった。

第十一話　認められた者

幸奈を抱えたまま薪は家の中に入る。そんな薪を見て穂琥は不安を隠せずにいた。あの薪が、酷い汗を掻いている。それはでも、当然のことだ。わき腹が酷く抉られ、その状況で自分と大差ない女性を抱えてここまで運んできたのだから。途中、穂琥が代わると言ったが、編に刺激を与えてしまえば死んでしまうからと交代を許さなかった。

幸奈を下ろしてから薪はため息をついて穂琥に向う。

「さて。ここにくればひとまず眞稀が保護をしてくれるから直ぐに死ぬようなことは無い。そこで、穂琥。悪いけど脇腹の治療を頼めるかな」

「あ、当たり前じゃない！」

穂琥は急いで袖をまくって薪の服を捲り上げる。その現状に絶句する。今までに見たことのない刀傷。まるで何かに食いちぎられたような酷い荒れ方。それだけじゃない。酷いところでは軽い壊死が始まっている。本来だったら死んでいてもおかしくない。

「大丈夫か？」

傷の状態を見て絶句した穂琥に心配そうに声を掛けた薪に穂琥は逆に怒号を上げる。

「それはこっちの台詞！何考えているの!?こんなので・・・！！普通、死ぬって!?」

「ま。オレ普通じゃないし。向こうもね」

「え？」

薪の言った言葉が理解できなったけれど、それがどういうことか聞いている暇があったらさっさと治療をするべきだ。

穂琥はすっと深呼吸する。まず、薪の状態の確認。

血は薪自身が自分の眞稀で止めているから支障は無い。しかし、そのぶん体力を消耗していくことになるので早く何とかしなくてはいけない。そんな眞稀で無理に止血をしていることもあり、眞稀の流れの状態もあまりよくない。こういった怪我に効く治療は確か、城の書庫で見た記憶がある。それが今、有効かはわからない。未だかつて例を見ないものだから。それでもそれを試さなければ薪の腹部はどんどん壊死していてしまう。眞匏祇にとって壊死とはイコール、消失ではない。上手いこと治癒することが出来れば再生だって容易なことだ。

「薪・・・。その、結構辛いかもしれないけど・・・その・・」

「いいよ。全てお前に任せる。穂琥が最善だと思うことをすればいい」

言い淀んだ穂琥に薪はそっと言う。その言葉の優しさが嬉しくて。そして何より、任せるといった薪からの信頼がたまらなく嬉しかった。それに何より、心配などする必要すらなかった。だって・・・。

―相手は薪だもの

穂琥は意識を集中させてから眞稀を手に篭める。そしてそっとそれを薪の患部に当てる。本来ならばここで耐え難い激痛が走り、呻き声の一つでも上げるものだが部屋の中はいたって静かだった。

今回、穂琥が行った治療には傷の具合によって変わるが、比較的時間のかかるものだった。まして、今の薪のように重症の傷に当たっては普通よりも時間がかかった。故に数分間の治療となる。本来ならば、数十秒で終わるものだが。

「は、はい・・・お、終わった・・・」

過度な集中と大きな眞稀を一気に消費するということで穂琥はどっと疲れて後ろに倒れた。

「大丈夫か?それにしてもまあ、任せるとは言ったが的確な治療だったなぁ。やっぱ見る目はあるな」

「えへへ・・・。一応ね・・・少しは勉強したんだよ」

―薪の役に少しでも立てるなら・・・

穂琥はへらへらと照れ笑いしながら起き上がった。

「平気?辛くなかった?」

「何で?」

「だって・・・この術、相当辛いって・・・。でも薪は呻き声一つ上げないでむしろ涼しい顔していたから」

「あぁ、本来だったら苦渋の表情をしたかったけど頑張っている穂琥の意識の妨げになるからな、抑えた」

薪はそれを簡単そうに言って退けるので穂琥は驚く。そしてやっぱりこういうところでも薪には適わないと実感する。

「でも、次からはいいよ。痛いときは痛いって言って」

「おう、わかった」

さてと、そう言って薪は立ち上がって幸奈の元に腰を下ろす。

「ゆ、幸奈さん・・・平気なの・・・？こんな重症をそのまま長いこと放置するなんて・・・」

「支障は無いさ。これは時間の問題じゃないから」

「え？」

「まま、気にするな。とにかく幸奈は平気だ。そんなわけでお前はとりあえずその返り血やら泥やらシャワーで落として来い。その間にオレが何とかしておくから」

「え・・・あ・・・はい・・・」

薪に言われるままシャワーに入る。一体、幸奈はどうなってしまうのか、穂琥にはさっぱりわからない。それでも薪が大丈夫だといったのだからきっと大丈夫なのだろう。

しつこい土埃や泥に悪戦苦闘してやっと落としきり、風呂場から出て着替えを済ませる。髪を乾かしている間にふと気配を感じて振り向いて驚いた。

「き、綺邑さん！？」

「聞きたい事が有る」

短く端的に綺邑は言い放つ。何かと穂琥が聞くと綺邑は瞑について尋ねてきた。何故、瞑を眞匏祇ではないと判断したのか。

「まだ、完全なわけじゃないけど・・・桃眼で視た時眞稀が全く無かったから・・・」

それを言ってからふと思った。薪の眞稀もきっと視る事ができないと。

「ほう。それだけか？」

綺邑の続いての質問。穂琥はそれに少し戸惑った。応えるべきか否か。

「それだけなら良い」

綺邑はそう言って立ち去ろうとした。穂琥は違うと否定の言葉を述べて綺邑の足を止めた。

「もう一つ・・・雰囲気が・・・似ていたの・・・貴女に・・・」

穂琥の言った言葉は脱衣所の部屋に木霊した。綺邑は冷たく見下ろしてくる。その目が薪より冷たいったらありゃしない。

綺邑はその鋭い目をふっと伏せてからそうかとだけ言って姿を消した。穂琥は呆然としながらその様子を見ていた。それから思い立ったように髪を乾かし始めた。

部屋のほうで何かの破壊音が聞こえたのは髪が乾いた頃だった。まだ全快していない薪に敵襲なんて来たら溜まったものではない。穂琥は慌てて脱衣所を飛び出してその足を止めた。

「ごめんって！悪かったって！本当に！！うわっ！？」

薪の叫び声が聞こえる。穂琥はただ固まっていた。

見れば。敵でもなんでもない。でも味方とも言いにくい。それが薪にありとあらゆる足技を繰り出している。

「うわっほうい?!ちょっ?!マジ止めて?!ごめんって!何度も謝っているじゃん?!うわぁぁ!!」

薪が押されているその映像を見て穂琥は長い目でその様子を見ていた。綺邑が回し蹴りやら踵落しやらひねり蹴りやらとにかく攻撃しまくっている。それを避ける薪の表情は最早必死。見ていて哀れと思うほどに。その薪の見事な圧され具合を見て綺邑が強いということを改めて実感したような穂琥だった。

呑気に見ていたのはそれまでで家のあちこちが破壊されていくのを見て、さらに薪の必死さ具合を見て気づく。いや、敵じゃないにしても感知していない薪にあれほどの動きをさせては傷口が開いてまた大変なことになってしまう。

「止めて!」

綺邑と薪の間に入って諸手を広げる。寸でのところで綺邑の蹴りは止まる。あと数ミリ遅かったら穂琥に当たっていただろう。そしてその圧力を感じて穂琥は一瞬だけめまいを覚えたほどだった。

「薪は今、完全じゃないの!!」

そう言って綺邑を睨んだ、睨んだ穂琥の目は一瞬にして迷いに変わる。綺邑のあまりに鋭い目が穂琥の心を折りにかかる。しかし穂琥はここでは折れていけないと必死になって綺邑に抗議する。

「ふん」

興味がうせたように綺邑は踵を返したので穂琥はほっとして座り込んだ。

「悪いな、穂琥。でもまぁ、大丈夫だよ。避けなきゃそりゃ当たるけど、綺邑だって本気じゃないんだし。それに傷の方だってそこまで無理にはさせてないよ」

笑いながら言う薪に軽くイラつき覚えながらも仕方なくため息をつく。

「じゃぁ、幸奈を頼んだよ」

「・・・」

綺邑の返事は無い。いつの間にか綺邑は幸奈を抱えていた。抱える、といっても別に担ぐとか抱きかかえるとかそう言ったわけではなく、宙に幸奈がひとりでに浮いているように見えるだけだが。そうして綺邑はすっと姿を消してしまうのだった。

幸奈が大丈夫なのか尋ねると薪は小さく笑いながら何とかなると応えたので今度は薪の傷のほうを確かめることにした。

「大丈夫だって。そもそも綺邑をあんなふうに怒らせたのはオレ自身だしな」

薪はどこか可笑しそうに笑って立ち上がった。

「いやね。あいつにしては随分と珍しい事をしたからそれについて言い過ぎたら怒られた」

まるで子どもみたいに薪がいうので穂琥はどこか拍子抜けした。

「っていうか、薪がそんな風に突っ込むくらい綺邑さんが珍しいことしたの？」

穂琥の質問に薪は少し悩んだ表情を浮かべた。なんだ、それは。私には言いたくないことか、と穂琥は内心で腹が立っていた。

「ま、いいだろう！言ったら言ったで言ってしまったんだからいいだろう！」

薪は何か納得したように頷いてから穂琥の様子を窺った。

「え？私の怪我・・・？そういえば圭と戦ったときに随分と怪我したのに・・・今治っているや・・・」

「治してくれたんだよね、綺邑が」

薪はどこか楽しそうに言った。綺邑が自分の怪我を治してくれたことに驚きを感じていた。いや、それよりも死者を誘うことを生業としている死神が人を、眞匏祇を癒すことが出来るのだろうか？

「ま、アイツも『特殊』だからな」

薪自身もそう言った事までは流石にわからないようだった。

「まぁ、そんなわけだ。じゃ、少し休養を取ったらやりますか」

「何を？」

「桃眼の完全な扱い方、といっておこうかな。オレだってそれに関しては詳しいわけじゃないけど、やらないよりはましだろう」

「わかった」

薪は穂琥の全快しだい、直ぐにやるといってきたので穂琥は首をかしげた。傷なら綺邑が治してくれた。だったら平気ではないかと。しかし薪はそれを否定した。綺邑が治したのは表面的な傷だけ。まだ、内側、つまり眞稀のほうの回復は出来ていない。眞匏祇は体内、体外全て眞稀にて修復する。そしてその眞稀が枯渇したときは傷の直りが遅くなる。さらには疲労度も溜まる一方だ。そこで綺邑が傷を治してくれたおかげで傷のほうに眞稀を回さなくてすむので眞稀の回復だけを待てば通常の状態に戻ることが出来るということ。

では薪は?薪は綺邑に治してもらったのだろうか。

「いや、オレは治してもらってないよ。オレは嫌われているからな〜。穂琥は綺邑に気に入られてんだよ。だからそれについて突っ込んだらさっきみたいに蹴り殺されそうになったんだけど」

薪の言葉に意外性を感じながらも穂琥は納得せざるを得なかった。

薪は軽く手を上げて部屋で休むといって穂琥に背を向けた。あちこちが破損した家を治しながら薪は二階へと上がっていった。

第十二話　開眼を目覚めさせて

薪の笑う声が聞こえる。

「何言ってんだよ。穂琥は穂琥だろう？もう強いんだし、自分で何とかできるだろう？オレは忙しいし、もう自分の命は自分で護ればいいさ」

目の前の薪はそうやって笑う。にこやかにとっても晴れた笑顔で。それとは反対に穂琥は悲痛の表情を浮かべる。どんどん歩き去っていく薪に手を伸ばして。

―待って。お願いだから待って。見捨てないで、薪。お願い、薪・・・薪。

「薪！！」

「！？」

大声を出して飛び起きた穂琥はしばらく呆然としていた。目の前に酷く驚いた薪の顔があった。穂琥は思わず薪に抱きついた。

「は！？ちょっと！？穂琥？！」

驚いた薪は何とかして穂琥を引き剥がす。

「もう朝だし、魘されていたみたいだから起こしてみようとしたんだけど起きる気配なかったから諦めようとしたら飛び起きてきたら驚いたよ」

「あ、ゴメン・・・。夢だ・・・」
「オレの名前を絶叫に近い形で呼ぶ夢ってどんなだよ・・・」
いつものように呆れたような口調で言ったがどうやら今回はそんな呑気な話ではないらしく、穂琥が尋常ではないほど落ち込んだので薪は少し焦った。
「薪は・・・さ」
穂琥が低いトーンで言う。
「私のこと・・・・見捨てる?」
突拍子も無い穂琥の質問。いつもの薪だったら「は?」と応えたかもしれないけれど今の穂琥を相手にそんな反応、するわけも無かった。穂琥の傍まで歩み寄って穂琥の前に膝を落として穂琥と目線の高さを同じにした。
「あるわけないだろう、そんな事」
「お前を見捨てるなんてオレの命を捨てるより有り得ない。何があってもお前を見捨てるようなことはしない。大丈夫、安心しろ」
優しくそっと、頭を撫でながら薪が言ってくれた。それが嬉しくて穂琥はそっと頷いた。
薪はそんな穂琥を確認して立ち上がると俯いている穂琥には見えない、見せないようにして微笑む。穂琥を大切に思う家族として優しく暖かな笑みを浮かべるのだった。

「落ち着いたら降りて来い。朝飯食って落ち着いたら特訓だから」
「うん・・・。・・・・・・特訓んんん!?」

「当たり前だろ」
朝餉の支度をしながら薪が言う。穂琥は必死でそれに食いつく。完全ではない以上、しなくてはいけないということはわかるけれど、桃眼というものは療蔚の技だ。これからの戦いに必要性は存在しない、と穂琥は思うのだった。

「なんだ、お前。桃眼が『治すだけ』とでも言いたいのか?」
「え?違うの?」
「違うね。医療、療蔚の術であることに代わりはないけど。でも考えても見ろよ?」

薪の例え話に穂琥は絶句した。

とある一つの病院で起きたと仮定する酷い事件。あくまで過程であり事実ではない。

一人のドクターがいた。そのドクターが抱える患者は一日に30人を看るとする。その30人は健康診断で来ただけのいたって健康な人であったとする。そしてそのドクターがその患者全員に嘘の診断を渡す。

『癌になっています』

すると患者はどうする?

『それを治す手立てはありませんか?』

ドクターが応える。

『有りますよ。この薬を毎日飲んでください』

手渡した薬を嬉しそうにもらっていく患者たち。それはドクターが今までに勝ち取ってきた信頼の証。そうして薬を持ち帰った患者たちはその日のうちに全員死んでしまった。原因は癌の特効薬としてもらった薬。その薬は特効薬でもなんでもなくてただの毒薬。それを飲めば瞬時に死に至る。

「な？医者の力って結構怖いんだぜ？」

「いや！あんたのその思考のほうが怖い！！」

苦情を言う穂琥に涼しい顔をして受け流す薪。要するに、『医療』というのは『ミス』というだけで人を死に追いやり殺してしまう。それほど恐ろしいものがある。

血が詰まってしまった病にかかったらそれを治すために血が流れやすいように眞稀を送ってやるとする。しかしだ。血が詰まっていないで健常なその血管にその流れやすい処置を行えばその血流は急激なものとなってきっと死に至るかもしれない。

眞匏祇の領域になってくれれば神経経路を自在に操る事だって桃眼であれば容易くなってくるだろう。そんな神経経路を切断してしまえばどんなに強情なものでもたつことすらできなくなってしまう。そうして立てなくなってしまった相手は最早翼を&ａｍｐ;＃２５４５;がれて地を這う虫けら同然。後は眞稀を流し込んで血液の

流れ逆流させたり、そもそも臓器器官の経路を断ち切ってしまえば直に魂石だって割れて・・・

「だぁぁぁ!!!わかった!!わかった!!もういい!わかったから!頑張って習得しますから!!!」

薪の言葉を遮って穂琥は耳を塞いで叫ぶ。薪はわかればよろしいといってさっさと食器を片付ける。

「とはいっても今のは例えだぞ?」

「わかってるわい!それを本気でやれって言うなら私は薪と家族の縁を切るわ!!」

「まぁ、そうわめくな。さて、移動するぞ」

薪は穂琥を椅子から強制的に立ち上がらせるとそそくさと歩き始める。仕方なく穂琥はその後に続くのだった。

眞匏祇の世界と違って地球という世界は酷く狭い。そして柔らかく脆い。そんなところで本気の修行が出来るわけも無く。そこで薪はい空間を作り出したのでした。

「薪って本当に何でもできるのね・・・・」

「そんなわけ無いだろう。儒楠だって出来るさ。上級クラスになればこれくらい出来る」

薪は簡単そうに言って扉を開く。その先は驚愕するほどの広さ。地面は土。岩場のようにゴツゴツとした場所がたくさんある。もし人がいれば簡単に隠れる場所を作ることができそうだった。

「ここで修行を・・・。え、でもどうやってするの?薪にぶつける

わけには行かないでしょう?」
「当たり前だろう。いくらオレでも死ぬよ」
薪は呆れたように笑った。薪が幼少期に造ったオリジナルの修行法。それを今の自分なりに改良したものを穂琥にやってみるという。
「つまりお前は実験台だ。頑張れ」
「え・・・・」
薪のあっさりとした言葉に返すことも出来ずに穂琥は固まる。誰にも試したことの無い薪だけの習得方。故に、他のものでもそれが使えるかは疑問なところだった。
見えない敵を討つ為にはどうしたらいいか。一つは薪のような感知能力の高いものが周囲を警戒しながら相手を見つける。ただ、これでは常に気配を感知し続けなければならないために集中力を相当要する。それに相手が極度に眞稀を抑えてしまえば見つけることはまず出来ない。そこで、桃眼。桃眼は『目』の力。故に『視る』力。隠れ潜んだ相手を視覚的に捉えることが出来る。
「簡単に言えばサーモグラフィか?」
「ほう・・・」
薪の例えに納得する穂琥。
「ま、ひとまずは眞稀の感覚になれていこう。はい、開眼」
「は、はい・・・」
薪に言われるままに開眼する。ぼわっとした煙のような靄のような、そんな世界が目の前に広がる。

「少し曇っているなぁ・・・。さて、どうするか」

どうやら今の薪の発言からこの靄がかかっている状態は通常の状態ではないらしいことが把握できた。

「もう少し眞稀を上げて・・・そうそう、その辺でストップ。維持して・・・」

薪のアドバイスを受けながら桃眼の修行に入った穂琥だった。

何とか目が大分桃眼の眞稀に慣れ始めた頃、薪が次の段階へ移行することを伝えた。

「今からダミー人形を2体作るからそれを時間内に潰せ。制限時間は２０分」

「え？２０分?!そんなに?!たった2体なのに?」

「言ったな、『たった』と。よし、頑張れ」

薪が手を上げて穂琥を応援する。その態度に妙な焦りを覚えた穂琥はちなみに時間内にもし潰すことができなかったらと尋ねると薪はこれまたさわやかな笑顔で答えた。

「罰ゲーム♪」

薪の語尾に♪が付いただけではなく、ウィンクまでしている以上、時間内に潰せなかったらきっと穂琥が潰される。穂琥は普通じゃないほど力を入れてダミー捜索の用意をした。

条件は二つ。一つ。時間内に2体のダミーを見つけて潰すこと。

二つ、その場から一歩も動かないこと。これだけ守れば後は何をしても好きにしていいと言うこと。薪のスタートの合図でいつの間に隠したか知れないダミーを捜すこととなった。

「うわっ。見つけにくそう・・・」

ダミー自体に宿る眞稀は薪の組み込んだ眞稀で薪、そのもの。だから見つけることは結構簡単かと思っていたがそうもいかない。隠れるのがうまいわけだし、そもそも陰に隠れて見えないわけだから桃眼の力を引き出さなければきっと見つけることは出来ない。

そんな折に、視界の隅に妙な気配を感じた。

「アレは・・・？」
「お、見つけたか」
「いや、わからないけど・・・」

薪に言われて眞稀を放つ。するとダミーが小さく爆発した。あと一体ということで必死になって探す穂琥。しかし何処をどう見てもそれらしいかげない。本当に隠しているのだろうか。

目が急激に痛み始める。少しだが涙も出てきそうだった。それでも穂琥は目を凝らす。ぐっと力を入れて揺らぐ気配を察知する。きっとそれは薪の隠したもう一体のダミー。穂琥は目がつぶれそうなほど痛いのを我慢して眞稀を放ってダミーを破壊する。その途端、穂琥は膝の力が抜けて前に倒れた。

「おっと」

薪がそれを受け止めて静かに座らせる。

「限界だな。慣れない開眼を続ければ身体に支障をきたしてしまう。少し休憩だな」

穂琥は小さくはいとだけ答えて近くにある岩に背を預けてはっとする。

―薪ってこんなに優しいか?!

そんな疑問が浮かんでから薪を凝視しために薪から冷たい視線が帰ってきた。それを軽く避けながら穂琥は必死で考えた。薪は一体何を考えているのだろうか。こんなにやさしいのは何か裏でもあるのだろうか?そう考えたところで所詮は穂琥の頭。薪とは違う。わかるわけも無く。体は休んだが、結局のところ頭が休まない状態で休憩時間は終わってしまうのだった。

第十三話　修行に関しての千思万考

眞稀を練ることに集中できずに薪にどやされる。休憩をやっているんだからしっかりしろと薪に叱責を食らう。

薪の次の指令は先ほど同じダミー潰し。ただし今回は2体ではなく5体。穂琥は一瞬だけ文句を言ったが完全にスルーされたため諦める。

一体目は案外すんなり壊すことに成功した。ただ、あちこちに漂うのは薪の眞稀。何処にあのダミーがいるのかはよくわかりにくい。よって、これだと思っても一般の眞匏祇の可能性も秘めている。しかし、ここにいるのはダミーとそれ以外の眞稀。

「おりゃ！」

とりあえずだから勘で眞稀を放つ。見事に二体目のダミーを破壊する。しかし、それをカウントした薪からキツイ一言が。

「次勘で打ったらオレがお前を打つぞ」

「は、はい・・・申し訳御座いません・・・」

謝罪を全力でして意識を集中させる穂琥だった。

残り時間あと半分を宣告されて穂琥はかなり焦った。まだ、二体しか破壊できていない。あと三体もいるというのに。

―ダメだ！このままじゃ大変だ！殺される！薪に！確実にヤられる！！

穂琥は自分に妙な暗示をかけるように頭の中でそう呟く。これをもし薪が聞くことが出来たらきっと呆れるだろう。

―オレは鬼か

急激に穂琥の集中力と眞稀が上がったので薪は首をかしげた。ここまで穂琥が眞稀を上げることが出来るのだろうか。

何とか集中して三体目のダミーを破壊する。それからさらにダミーらしきものを発見して穂琥は眞稀を放った。すると見事にダミーが破壊されるのを確認した。よしっ、とガッツポーズを決めようとした瞬間、後頭部に激痛が走った。

「ぬふぁ！？」

「勘で打つなと言っただろうが」

薪の見事なとび蹴りを喰らった穂琥だった。

「す、すいません・・・」

言葉に出したり表情に出したりしていないのに薪は何故勘で打ったとわかるんでしょうかね、そんな疑問を抱きながらも穂琥は最後の一体を探すことに専念した。

「はーい、残り二分～」

やる気があまり感じられない薪の言葉にむっとしながらも穂琥は必死で集中力を高める。

ある程度のめぼしをつけてそのダミーがいそうな場所を凝視しているというのに全く見つけることができないのは一体何故だろうか。穂琥は必死に考える。相手は知らない眞稀じゃない。薪の眞稀だ。感知しやすいはずなのに。そんな事を考えているとちらりと視界の隅で空間の動きを視た。

穂琥は合点がいった。どうりで目星をつけて見つけることが出来ないわけだ。相手は移動をしていたのだ。それがわかれば簡単な話だ。その移動して出来た空間のゆがみを感知してそれを追えば絶対に捉えることが出来るのだから。今まで気づかなかったことが不思議なくらいに。

「はい、残り2秒。ギリギリだったな」

ダミーを破壊してから薪が言ったので穂琥はがっくりと腰を落とした。

「ま、よく出来たよ。ご苦労さん。次はもっとレベル高いから頑張れよ。ってなわけで休憩な」

「え・・・あ・・・・はい」

薪のその甘い言葉の裏には一体何が隠されているのだろうか。一瞬、儒楠が化けているのかと思ったが桃眼が療蔚の技である以上、儒楠が教えることなどできるわけが無い。裏の読めない薪の優しい行動がどこか怖いような・・・。

「で？何？」

「え？」

突然薪が尋ねてきたので穂琥は呆然とした表情を浮かべた。岩に腰

を下ろして頬杖を付いている薪の表情はどこか面倒くささを感じさせた。

「さっきから睨むような、食い入るような。よくわからんけど」

「あ・・・いや・・・ちょっと気になって」

穂琥は少し俯きながら応える。薪に今まで思っていたことを言うのもどこか申し訳ないような気もした。せっかく優しく接してくれているのにそんな事を言っては酷いではないか。

「馬鹿の癖に頭が休まない状況を作るな。集中力が大事なんだからさ」

その薪の一言にぷつーんと来た穂琥は何処が優しいだ、絶対に嘘だ！と頭の中で怒号を上げながら薪に抗議をスタートする。

「うるさいな！馬鹿って！どーせ私は薪みたいにちょぉっと違うことして相手を陥れるようなマネできませんものねぇ～」

「・・・？何を言ってんだ？」

「修行って言ったら薪、全然優しくないじゃん！それなのに今回優しいからさ！なんか調子狂っちゃって頑張んなきゃ～みたいに思ってさぁ？」

罵倒の如く言い切った穂琥の言葉に薪は案外ぽかんとした表情をしていた。あまりのその表情に穂琥は何、と尋ねると薪は突然何かが破裂したように笑い出した。

「っふ、アハハハハ！くく・・・ふふ・・・アハハハハ！」

途中で笑いをこらえようとしているのは見て取れたがどうにも耐え

ることが出来ないようで噴出してしまっていた。突然そんな風に薪が笑い出したので驚いて穂琥は目を丸くした。薪がこんなに笑っているのを見た事がない。

「何、お前・・・ずっとそれを考えていたの？」

薪の笑いを堪えたその質問に無言のまま頷くと薪はさらに噴出して笑い始める。

「ブフッ・・・！！くくく・・・ぐふっ・・・フフフ・・・アハハハ！！」

あまりに薪が笑うので穂琥はだんだん赤面してきた。薪がこんなにも取り乱して笑うところなんて見た事ない！何だよ、これ！レアだな、これ！ムービーにでも撮っておくか！そんな風に思いながらも穂琥は目の前の薪の状態にただ恥じらいを感じながら不貞腐れた表情をするので精一杯だった。

「いや、ゴメン・・・くくふ・・・ふふ・・・は～・・・。ククク・・・！！」

落ち着こうとしているのか笑おうとしているのかわからない。くどいようだけどもう一度。こんな薪見た事無い。

「さて、次行こうか」

「ちょぉお！？質問！！私の質問は？！」

あまりにさらっと薪が次に行くことを言い始めたので穂琥は薪に勢いよく突っ込む。

「どーーーでも、いいし。そんな事」

薪の表情にはまだ笑いが残っている状態でそんな事を言う。いつもの薪ではないと穂琥は猛抗議をする。薪は仕方無さそうになんとなくだ、そんな風にやっているだけだ、と応えた。

「いや、答えじゃないからね!?それ!」

穂琥の言葉に薪はまだまだ笑みの残った顔で馬鹿だから、と付け足す。ぷつんっと切れる穂琥の頭の中の何かの糸。

「なんじゃいそらぁぁぁ!?偽もんだ!偽もんだ!!薪はこんなんじゃないしぃ!偽―!本物どこだー!」

「いや、ここにいるし」

「嘘だ～!偽だ!そんな笑わないもん!!」

穂琥のその言葉に薪はまた噴出して笑い始める。本当に一体薪に何があったのか知りたい穂琥だった。

「くっくっく・・・。本当に馬鹿な」

薪はまだ笑い続ける。一体何のツボにはまってしまったのだろう。

「休憩だって簡単にくれるじゃん!」

「当たり前だろう?今までのとは全く違うんだから。くく・・・。桃眼だぜ?休憩もなしにやったらお前、死ぬぞ。それでもいいんならいつも通りやるけど」

「いや、すいません・・・」

「はい、次やるよ」

なんとなく薪には誤魔化された様な気もしたけれど仕方なく穂琥は集中することに決めた。

次のステップは今まで薪の眞稀だけだったのを一般の眞稀を含めた中から薪の眞稀のみを探して打つこと。制限時間は１０分。

「ま、もし間違えた場合は・・・」

「言われなくてもわかります・・・・」

「よろしい」

そんな会話をしてからスタートの合図。穂琥は一気に開眼する。するとその目に映ったのは信じられない数の眞稀たち。これほどの眞稀を薪は一体どうやって集めたのか疑問だが、それはさておき、所謂この状況は街中と同じことだ。この中から的確に相手を探し出さなければならないということ。今までと違ってあちこちで眞稀が動いているせいで空間のゆがみだけを探せばいいなんてものではない。歪み放題だから。

―苦戦しているな・・・。穂琥ならできると思ったんだけどなぁ

薪は穂琥をみてそんな事を思っていた。全然わからないと途方にくれ始めてしまったので薪は仕方なくヒントを与える。

「一つ！いくら桃眼といえど、観ようとするな。感じ取れ」

「え？あ、はい」

穂琥としては思わぬ薪からのヒントに戸惑う。しかし、それを何とか素直に受け止めたところで見ようとしなくて感じ取るにしても全くわからない。

「ふたっつ。桃眼に頼り切るな」
「え？あ、自分の感覚も・・・？」
「そういうこと」

腕を組んで立つ薪の姿を軽く見てから穂琥は首を傾げる。一体何故こんなに優しくしてくれるのだろうか。それほど桃眼という技が凄いのだろうか。

とにかく、今はそんな薪の不可解な親切を真に受けてしっかりと集中することにした。ふと思ったが、自分の間隔も頼りにしろと言うことは決して『観る』だけが桃眼の力ではないということかと思い当たる。感じ取れといった薪の言葉を理解して穂琥はその瞳を閉じる。そうしてふと視界の隅にうごめく光の束を垣間見る。そこでようやく気づく。観ようとするからダメなんだ。相手は隠れ潜んでしまっているのだから『観よう』としても観られるわけもなかったのだ。

「この感覚は薪の眞稀だ！」

穂琥は急いで眞稀を放って見事にダミーを破壊した。それと同時に大きなため息をついて膝を突いて息を切らせる。そして発っている薪に残りの時間を尋ねる。

「いや、気にしなくていいよ」

薪はそう言ってにこりと笑う。きっと時間内に収まったのだろう。穂琥はほっとして地面に大の字に倒れる。

安心したような穂琥の表情を横目で見ながら薪は時間を確認する。

―ま、初めてだし多少の時間オーバーは許してやるか

そんな事を思いながら小さく笑う。

「上出来、かな」

「え?私上出来!?」

思わず出た声に穂琥が鋭く反応したのでとりあえずそれを肯定した。

それを聞いた穂琥がひたすら嬉しそうに騒いでいるので薪はだんだんバカらしく思えてきた。

「図に乗るな」

「いでっ・・・」

軽く穂琥の頭を叩いて穂琥を鎮圧した薪だった。

第十四話　目の前の大きな壁

次の目標は身体のどこに魂石があるのかを探し出すこと。その魂石を、破壊するにしろ治すにしろ何処に在るかわからなくては施しようが無いからだ。

「え？魂石の位置？みんな同じじゃないの？」

穂琥の言葉に薪は頭を抱える。そしてさも可哀想な子を見る目で見つめた薪だった。魂石は個々の自由に場所を決めて個々で守っている。薪の場合は右の脇腹辺りらしい。穂琥は自分で何処にあるか知らないが、それを薪に言うとまた叱責を喰らいそうだったので黙っていることにした。

「とりあえずは魂石の破壊をしよう。とはいっても魂石を破壊するなんてとんでもないことはできないからオレが擬似的に魂石を眞稀で作るからそれを壊すように」

「はい」

持っていた眞稀を薪はほいっと上に放り投げた。そしてぱっと消えたその眞稀を見ながら軽く薪は言った。

「隠したから探して壊せ。制限時間１０分」

「え？！１０分！？それ短・・・」

「はい、スタート」

「ふえぇぇん！」

文句を言う時間も無く穂琥はそれを探すことに宣する。

多少の時間はかかったが、そこそこ簡単に見つけることが出来た。よって次は体内にある魂石を探すこと。この広い空間から見つけることが出来たのだからきっと簡単だろうと高をくくっていた穂琥は正直心が折れた。この小さな『身体』という媒体にはその魂石と同調した眞稀が流れている。よって見つけることが全く出来ない。あちこちに似たような塊が滞留している。全く困ったものだ。

薪は穂琥の様子を見ながらどうするべきか悩んでいた。ここまで長い時間桃眼を使っていていいものかわからない。薪は無論戦鎖であったからこんな長い間使っていたらへばるどころか下手したら失明、あるいは死ぬかもしれない。けれど相手はあの紫火の血を濃く継いだ穂琥で療蔚だ。悩む。

「痛い！」

急に穂琥が目を押さえて座り込んでしまった。薪は慌てて穂琥に駆け寄った。

「大丈夫か!?」

「う、うん・・・なんとか・・・ごめんなさい・・・」

「・・・。いい、謝るな。閉眼できるか?」

「う・・・」

穂琥は辛そうに目を瞑っている。薪はそんな穂琥の目にそっと手を当てる。そして強制的に穂琥の目を閉じさせる。そしてふらついている穂琥を抱えて平らな座れる場所へ移動する。

「ごめんなさい・・・」

「謝るなって。無理をさせたのはオレだ。謝るのはオレの方だ、悪かった」

「そんなの・・・・」

薪のその言葉に穂琥は続ける言葉が出なかった。休憩しようといった薪の言葉に頷くだけだった。

「オレは用があるから何かあったら声を掛けろな」

「え、あ、うん。用って？」

「オレだって修行くらいしないとな」

薪はそう言って穂琥から少し離れたところに腰を下ろした。それからピクリとも動かなくなってしまった。果たしてそれの何処が修行なのかわからないが穂琥はただその様子を見ていた。

穂琥はそっと開眼する。そして魂石の入っている『身体』へ目をやる。やはりどう見ても何もない。痕跡らしきものを発見することは全く出来ない。ため息をつく穂琥はそっと閉眼しようとして辺りが暗くなったことに気づいた。暗いとかそういう問題ではない。視界が無くなった。桃眼の無理のし過ぎで視界の線を切ってしまったのかと焦ったが、突如、目の前に巨大な見たこともない大きな白い扉が表れた。

「な、な・・・・何これ！？」

仰天する穂琥だが辺りを見回してもそれしかない。この暗闇の中でその扉は白く光って浮き上がって見えた。穂琥にとってそれは扉というより何処までも続く壁に見えた。

ふと、その扉の麓に人影を見つけた。

「あの・・・？」

蹲ってまるで眠っているようだった。全身を布で包み顔すらその布で見えない。しかしその姿は印象的だった。その布の上から鎖で巻かれ拘束されていた。とても小さな小柄な身体に。

「あの・・・よろしいでしょうか？」

穂琥の言葉にその身体がもぞっと動く。そして顔も上げずにそれは声を発した。

「随分と可愛らしいお嬢さんだねぇ」

声からして老婆のようだった。しゃがれた声で喋るのも辛いのではないかと思えるくらいの声だった。

「ふぅん。以前来た者より頭の出来が違いそうだなぁ」

「んな!?私の頭が悪いとでも言いたいのかー!」のかー!」

広いこの空間で穂琥の声は木霊した。その老婆は顔が見えないからなんとも言いがたいが明らかに驚いた様子を見せ、その後、さも面白そうに笑った。

「くくく・・・。我が言った『出来が違う』とはそういう意味ではないさ」

小さく微笑するその声は聞いた感じではそうでもないが何処と無く穂琥はこの老婆の心が本当に笑っているように感じた。

「我は門番。この門の番をしている」

老婆はそう言った。扉だと思っていたコレは何かを繋ぐための門だったらしい。

第十五話　大きな門の向こうにあるもの

こんなに大きな門、見たことない。

目の前のそれを見て穂琥にはそれしかいえなかった。しゃがれた声で老婆、門番は不気味に笑う。

「ふっふっ。以前来た者もそのようなことを言っておったなぁ」

「以前、さっきもそう仰っていましたけどここには他にも人がいらっしゃっているんですか？」

穂琥の問いに門番は肩を揺らしてくっくっと笑った。ここに来るものは皆『人』とは言わない。穂琥はそれを聞いてはっとして頭を抱えた。また薪に怒られる。

―こんなに大きな門は他に存在しないだろう

門番が急にそんな事を言った。穂琥が首を傾げると門番は前回ここに来たものがそう言ったと伝えた。

「ここは何なのですか？」

「門、さ」

それはわかるのだけれど。知りたいのは何の砦となっているのかということ。

「果て無き力を手に入れんとする者、この門を潜るが良い。さすればその果て無き力を授けよう」

門番の声が不気味に響く。過去にこの門の前に来たものの数は忘れた。しかし潜っていった者の数ならしかと記憶している。

「わずかに2祇だ」

その数に穂琥は身を引く。数多くの眞匏祇がここを訪れたことはわかった。しかし通ることができたのはその数。ならば・・・。

「私には無理ね」

穂琥は視線をとして静かに笑う。

「弱いからか?護って貰っておるだけだからか?そんなものは関係などありはしないさ」

門番の声が強く響いた。

「皆一様にして持っておらんかっただけのこと。とある、大切な『あるもの』が」

門番は低く声を唸らせる。

「ぬしにはあるか?」

「ある・・・もの?」

それが何か穂琥には知れない。以前来たものは少し悩んだ後に自信ありげにそれを自分は持っていると言って潜って行ったそうだ。

自分が持っているあるものに、自分で気づくことが出来たとき、この門を開けることが出来るという。穂琥は悩んだ。おそらく今の自分にそれは無い。いや、あるのかもしれないけれどそれが何であるかを知ることが出来ない。ならばここを無理に通ろうとする意味は無い。では、穂琥のするべき事は一つだ。

「門番様。お願いです。ここから出してください。今の状況ではいくら考えても私には無理です。ですから一度出してください。そしてその答えがわかったとき、再びここにお招きください」

「くっくっくっ。面白いなぁ。良いだろう、招いてやろう。ただし我を呼ぶぬしの声がこの耳に届けばな」

「きっと届かせてみせます」

門番は鼻を鳴らすように笑う。そして目を閉じることを促す。穂琥はそっと目を閉じた。その時脳裏にふっと何かが過ぎって行ったような気がしたが急に周囲の感覚が変わって体が急に揺さぶられたので驚いて目を開けた。

「穂琥！」

目の前には今までに見たこともないくらい真っ青な顔をした薪の顔があったのでそれに驚いた。

「薪・・・？」

「穂琥・・・？大丈夫か？　あまり心配かけさせんなよ・・・」

心底ほっとしたように薪は穂琥から離れた。

「薪、顔真っ青だよ？大丈夫？」

「はあ～・・・。誰のせいだと思ってんだよ・・・。急に眞稀すら感じなくなったから驚いてお前を見たらまるで死んでいるみたいだったから・・・焦ったよ・・・」

薪の心底心配している顔を見てなんとなく可笑しくなってしまったことを恥じながら穂琥は大丈夫だということと心配をかけた謝罪と礼を述べた。肩を落としてため息をつく薪の顔色が大分元に戻ったので安心した。

ともかく、身体の状態はとてもいいと言うことで修行に戻ることにした。薪は少し心配そうだったけれど大丈夫だということに負けて修行に移った。

事もあろうか、あれほど出来なかった魂石探しを意図も簡単にやってのけてしまった。その様子に薪は物凄く驚いていた。穂琥自身も驚く。先ほどあった『出来事』が原因だろうか。

次のステップも案外簡単にできてしまい、薪が不思議がっているけれど何より驚いているのは穂琥自身のため薪のほうもどうしたものか悩んでいるようだった。けれどもできたことに変わりは無いわけで次のステップへと移行する。

今度はついに攻撃に移る。身体に何らかの支障をきたす技。ただし致命傷を与えてしまっては死んでしまうのである程度動けなくなる程度のもの。

さっきまでとは打って変わってまるっきりできなくなってしまった穂琥。力を入れすぎると壊してしまうのでそれをしないために力を抑えるけれどそれでは何もできないので少し力を入れるとそのダミーは簡単に壊れてしまった。

「ん・・・。ゴメン、薪。少し休憩していい・・・？」
「いいよ」

予想外にすんなり休憩許可が出たので少し拍子抜け。しかしやっている技が技だし、先ほど穂琥が目を激痛で傷めているので薪もあまり酷使させられないのだろう。

第十五話　大きな門の向こうにあるもの

こんなに大きな門、見たことない。

目の前のそれを見て穂琥にはそれしかいえなかった。しゃがれた声で老婆、門番は不気味に笑う。

「ふっふっ。以前来た者もそのようなことを言っておったなぁ」

「以前、さっきもそう仰っていましたけどここには他にも人がいらっしゃっているんですか？」

穂琥の問いに門番は肩を揺らしてくっくっと笑った。ここに来るものは皆『人』とは言わない。穂琥はそれを聞いてはっとして頭を抱えた。また薪に怒られる。

―こんなに大きな門は他に存在しないだろう

門番が急にそんな事を言った。穂琥が首を傾げると門番は前回ここに来たものがそう言ったと伝えた。

「ここは何なのですか？」

「門、さ」

それはわかるのだけれど。知りたいのは何の砦となっているのかということ。

「果て無き力を手に入れんとする者、この門を潜るが良い。さすればその果て無き力を授けよう」

門番の声が不気味に響く。過去にこの門の前に来たものの数は忘れた。しかし潜っていった者の数ならしかと記憶している。

「わずかに2祇だ」

その数に穂琥は身を引く。数多くの眞匏祇がここを訪れたことはわかった。しかし通ることができたのはその数。ならば・・・。

「私には無理ね」

穂琥は視線をとして静かに笑う。

「弱いからか?護って貰っておるだけだからか?そんなものは関係などありはしないさ」

門番の声が強く響いた。

「皆一様にして持っておらんかっただけのこと。とある、大切な『あるもの』が」

門番は低く声を唸らせる。

「ぬしにはあるか?」
「ある・・・もの?」

それが何か穂琥には知れない。以前来たものは少し悩んだ後に自信ありげにそれを自分は持っていると言って潜って行ったそうだ。

自分が持っているあるものに、自分で気づくことが出来たとき、この門を開けることが出来るという。穂琥は悩んだ。おそらく今の

自分にそれは無い。いや、あるのかもしれないけれどそれが何であるかを知ることが出来ない。ならばここを無理に通ろうとする意味は無い。では、穂琥のするべき事は一つだ。

「門番様。お願いです。ここから出してください。今の状況ではいくら考えても私には無理です。ですから一度出してください。そしてその答えがわかったとき、再びここにお招きください」

「くっくっくっ。面白いなぁ。良いだろう、招いてやろう。ただし我を呼ぶぬしの声がこの耳に届けばな」

「きっと届かせてみせます」

門番は鼻を鳴らすように笑う。そして目を閉じることを促す。穂琥はそっと目を閉じた。その時脳裏にふっと何かが過ぎって行ったような気がしたが急に周囲の感覚が変わって体が急に揺さぶられたので驚いて目を開けた。

「穂琥！」

目の前には今までに見たこともないくらい真っ青な顔をした薪の顔があったのでそれに驚いた。

「薪・・・？」

「穂琥・・・？大丈夫か？　あまり心配かけさせんなよ・・・」

心底ほっとしたように薪は穂琥から離れた。

「薪、顔真っ青だよ？大丈夫？」

「はあ～・・・。誰のせいだと思ってんだよ・・・。急に眞稀すら感じなくなったから驚いてお前を見たらまるで死んでいるみたいだったから・・・焦ったよ・・・」

薪の心底心配している顔を見てなんとなく可笑しくなってしまったことを恥じながら穂琥は大丈夫だということと心配をかけた謝罪と礼を述べた。肩を落としてため息をつく薪の顔色が大分元に戻ったので安心した。

ともかく、身体の状態はとてもいいと言うことで修行に戻ることにした。薪は少し心配そうだったけれど大丈夫だということに負けて修行に移った。

事もあろうか、あれほど出来なかった魂石探しを意図も簡単にやってのけてしまった。その様子に薪は物凄く驚いていた。穂琥自身も驚く。先ほどあった『出来事』が原因だろうか。

次のステップも案外簡単にできてしまい、薪が不思議がっているけれど何より驚いているのは穂琥自身のため薪のほうもどうしたものか悩んでいるようだった。けれどもできたことに変わりは無いわけで次のステップへと移行する。

今度はついに攻撃に移る。身体に何らかの支障をきたす技。ただし致命傷を与えてしまっては死んでしまうのである程度動けなくなる程度のもの。

さっきまでとは打って変わってまるっきりできなくなってしまった穂琥。力を入れすぎると壊してしまうのでそれをしないために力を抑えるけれどそれでは何もできないので少し力を入れるとそのダミーは簡単に壊れてしまった。

「ん・・・。ゴメン、薪。少し休憩していい・・・？」

「いいよ」

予想外にすんなり休憩許可が出たので少し拍子抜け。しかしやっている技が技だし、先ほど穂琥が目を激痛で傷めているので薪もあまり酷使させられないのだろう。

第十六話　桃眼の持ち主

「桃眼って凄い技・・・？」

ずっと聞きたいことがあるのを堪えていてついに堪えきれずに休憩している薪に尋ねる。薪はそんな穂琥の唐突の質問に首をかしげた。しかし薪は軽くそれを流す。

「まぁね」

押し黙る薪と穂琥。どちらかというと黙っているのは穂琥のほう。薪はただ休息をしているだけだから。

「桃眼って何祇持っているの・・・？」

「は？」

突然の質問に薪は無愛想に答える。

「一祇は薪。もう一祇はお母様。他には・・・？」

「何を訳わからんこと言っているのやら。桃眼を持っているものが何祇いるかなんて分かるわけ無いだろう？」

「え？」

「そこまで慤夸は暇じゃねぇよ。桃眼を開眼した奴の数なんて一々数えてられねぇって。過去に亡くなっていった歴代の慤夸妃たちだって桃眼は使えていたんだから」

「え・・・？そうなの？」

「あ？当たり前だろう？慤夸の嫁だぞ？その位の力使えなくてどうする」

薪の呆れたような回答に穂琥は俯いた。てっきり穂琥は先ほどの門番の護っていた門がその桃眼への道かと思っていた。あの門を潜れば桃眼を使えるようになるのかと思っていたけれど。でも、そういうわけではないということが今わかった。ではあの門は何だろう。わからない。

「私なんかが桃眼を仕えるようになるかな・・・」

自信の欠片も無いその台詞に薪はふっと穂琥を見据える。穂琥はその薪の瞳に飲み込まれてしまいそうでさっと目を外した。

「できるさ」

沈黙の後に薪がそう言った。

「どうしてそんな風にいえるの？まともに技だって使えないのに・・・、鈍いし」

「鈍いのは性質だ、関係ない」

否定はしないのね。

「オレの妹だしな。それに・・・」

薪は言葉を切る。穂琥はその続きを待ったけれど薪はその続きを言わずになんでもないと区切ってしまった。

「とにかく出来る」

薪はやはりそうやって言い切った。そこまで言い切ることの出来る薪の力がどこか羨ましい。

「最初から出来る奴なんて居ないさ。できたらつまらないだろう」
「薪はつまらないの？」
「オレが最初から何でも出来るみたいな言い回しは止めろ」

薪とて苦労してここまで来ている。戦鎖でありながら療蔚の技が使えるのは確かに才能かもしれない。それでもその技を使うためにどれほどの苦労をしてきた事か、穂琥にはわからないのだから。

「出来ないから苦労して頑張ってそれを手に入れるんだろう？お前は何のために今、頑張ってんだ？」
「え？」
「オレはこう見えても結構お前の意見を尊重しているつもりだぜ？桃眼の力を使いこなせるようになりたいと切に願ったのは穂琥だろう？」

薪に言った記憶はあまり無い。それでも確かに桃眼の力がちゃんと使えるようになりたいとは願った。それを薪は汲み取ってくれたのだろうとしか思えない。

「何のために今、桃眼の修行をしているんだよ。そこまではオレもわからないけど、付き合ってやってんだ。しゃきっとしろ」
「・・・うん。ありがとう。なんかすっきりした」

そうだ。自分のやりたいことのために力を得たいんだ。『果て無き力』が本当に凄いものだというのなら得たい。あの門を潜りたい。『あるもの』が自分の中にあれば。いや、そもそも穂琥はもしかしたらその『あるもの』が主体となって力を得ようとしているのではないだろうか。

わからないなりに穂琥は考える。それでも今はそれを放って置いて修行に専念する。

疲れ果てて修行部屋から出てきたら外はもう闇に覆われていた。流石にこんな長い時間やっていたら大変だろうと薪は肩を落とす。ともかく、今日はもう終わりでまた明日にしようという事になった。

どっかりとベッドに飛び込んだのは随分後だった。疲れて何も考えることが出来ない。このまま眠ってしまいそうだ。

―あるもの・・・

ふっと頭を掠めた何か。穂琥ははっと目を見開いた。そうだ。持っているのではないか?自分が求めるものこそ、その『あるもの』かもしれない。弱い。自分はなんて弱い存在。それでも思うことくらい、してもいいと思ってここまで来ているのだから。穂琥は見開いた目をゆっくりと閉じて心の底から叫ぶ。

―再びあの門の前へお連れください

第十七話　内に秘めた心（前編）

身体がぐっと回転して強制的に立たされたような感覚になる。そうして目を開けると巨大なあの門がある。

「よく来られたね、お嬢さん」

門番の低い声が鳴り渡る。

「連れて来て下さったのは貴女でしょう」

「くっくっくっ。力なくては来る事は出来んよ。して？」

「はい。ここは大いなる力の持ち主が通ることの出来る門」

「大いなる・・・。なるほど、確かに。その力とは？」

門番が低く唸る。穂琥はその門番をしっかりと目に移してから巨大な門へと目を移す。そしてまるでその門に語りかけるように話し始めた。

「全力を掛けて護りたいものがある。それはいつも強くて私の前に居て。飄々としていてまるで霞のようにつかめなくて。それでもそれは霞。吹けば飛んでしまう事だってある。そんなときは私だってそれを護りたい。護る力が欲しい。敵を倒す力なんて要らない。仲間を、大切なヤツを、護りたい。私は誰かを護れるそんな力が欲しい！」

穂琥の声に門が呼応する。

「桃眼の力、ワタクシにお与えください」

声が木霊する。この暗闇の中で。その木霊に反応するようにぼうっと輝いていた白い門が急に強い光を放った。穂琥はそっと手を前にかざす。そして門に触れるでもなくそっとその手を前に押し出す。すると門がゆっくりと開いていった。

「そんな事・・・」

門番が震える。触れることなく門を開ける。そんな事があるのだろうか。いや、現に目の前でそれが起きているのだから。この娘の『想い』がそれほどまでに強かったということだろう。

穂琥はそっと門のほうへ歩いていく。そして門番の前まで来て足を止める。

「門番様。一つ、聞きたいことがあるのです」
「何を・・・？」
「貴女様のお名前を伺いたいのです」

門番は肩をぶるっと震わせた。

「お前らは不思議な生き物よの。いや、しかし。ぬしがそれを聞いたところで何になる」
「貴女様はただの門番では在りませんでしょう？なんとなくわかるのです。だからどうか、名をお教えください」

そんなに長い時間を過ごしたというわけでも無いにも関わらず一体何故そこまで深く心に触れることが出来る。いや、きっと時間ではないからだろう。心が触れ合えれば時間なんてきっと関係ないのかもしれない。

「いかんよ。いけないのだよ。我はここに在らねばならぬのだから」

門番は酷く低い声で唸っていた。そのしゃがれた声を出すのももしかしたら一苦労なのかもしれない。その身体に巻きついた鎖がその身を締め付けいためているのかもしれない。

「ぬしは結局何もわかっていない。我が何であってどうしてここに在るのか」

「・・・いいえ、少しならわかる気がします。貴女様は・・・」

「ゆけ。門が閉まるその前に」

門番は穂琥の言葉をがむしゃらに切ってそう言い放った。穂琥はその哀れな門番の姿を目に映してからふっと俯いた。

「また来ます」

「来られぬよ。門を潜ったものは二度とここには来られまい」

穂琥はそんな門番の言葉をまるで無視するようににこやかに笑って足を踏み出した。

「勝手にするがよい」

門番の声が耳の奥で聞こえた。そうして穂琥は光り輝く門の向こうへと消えていくのだった。

閉門されまた静かな闇が広がったとき、門番はやっと身体に入っていた力に気づきその力を抜いた。

「来られぬよ。戻ってなど来られぬというのに。あの兄妹はどうしていつもそう、期待させるのだろう」

嘲笑するように門番は声を立てた。そしてまた深い孤独と闇に沈んでいくのだった。

第十八話　内に秘めた心（後編）

暗闇の中を歩く音が聞こえる。珍しいこともあるものだ。こうも続けてここへたどり着くものがあろうとは。

そんな事を思っていると、聞きおぼえのある声が聞こえた。

「また来ますって言いましたでしょう?門番様」

にこやかに笑う少女の顔。酷く驚いた。

「以前ここに来た者も同じ事を言っておったよ。また来ると。しかし、来る事は無かった。来られなんだ。それが普通なのだよ」

「その話、私にしてみれば少し意外に思えます。それでもきっと何か事情があったのですよ。私に来られて彼に来られないわけ無い」

穂琥の言い切った言葉を聞いて門番は苦笑した。

「以前、誰がここに着たのか知っておるのか?」

「勘、ですが。私の兄です」

「そうか。まぁ、合っておるよ」

門番は苦しげに笑う。そんな姿を見て穂琥は門番の今おかれている状況を心苦しく思っていた。

「こんな所に貴女は在っていい存在ではないと思うのです。間違っていませんでしょう?」

「さてね。小娘に何がわかるというのだ?」

門番はまるで穂琥を脅すように呻く。しかし穂琥はそんな言葉すらもしっかりと受け止める。

「先ほどは失礼致しました。門番様に名乗らせようとしてしまって。それは『禁忌』でしたね」

穂琥のその言葉に門番は酷く反応した。最早、この少女に自分の存在を隠す必要が無いということを悟らせた。

「貴女様のお名前、簾堵乃槽耀（すとのしょうよう）、ですね？」

「知っておったのか・・・」

彼女の唸るような低い声が穂琥の耳に届く。それに応えようとしたが、それよりも早く穂琥の言葉に反応するように門番の身体に巻きついていた鎖が光を帯びて砕け散る。それと同時覆いかぶさっていた布も緑色の美しい炎に焼かれ消え去る。

そうして現れたのは目も疑う妖麗な美しい姿。紅蓮の様に燃ゆる紅き衣に、海の様な深い藍の髪が地面に付きそうなほど長く煌いていた。すっと開けたその瞳は衣と似たしかしそれはまた異なった強く輝く緋（あか）。それに反して真っ白いその肌は今にも透けてしまいそうなほどだった。そんな白い肌を隠すことのない素足がこの真っ暗な空間に降り立つ。

「正直言うと知りませんでした。それでも門を潜るとき、誰かが教えてくれたような気がしたのです。簾堵乃槽耀様、簾乃神（れんないしん）様。貴女様は禁忌を犯した古き神、ですね」

「あぁ・・・いかにも」

姿だけでなく声も美しい。透き通った曇りの無い美しい声を轟かせ

る。

「礼を、しなければならなくなったなぁ」

「いいえ。構いません。私などがこの様な出過ぎた真似をしてしまい、申し訳ありません」

彼女は美しく微笑む。緋い目が煌き穂琥に向う。穂琥はその目にうっかり飲み込まれてしまいそうだった。

「いや、良いわ。時期も丁度よい。さぁ、ぬしも帰るがよい」

「はい」

帰り間際に兄に渡して欲しいと簾乃神から封を渡されそれをしっかりと懐にしまって穂琥は目を閉じるのだった。

気がついたらベッドから落ちていた。それは身体が痛いわけだ。何とか身体を起こすと窓辺の椅子に腰を下ろした薪がいた。しかし、さっきとは打って変わって落ち着いた表情をして此方を見据えていた。

「お帰り」

静かにそう言った薪にただいまと返す穂琥。とても穏やかで落ちついた目をしているので穂琥は少し安心した。先程みたいに青ざめさせてしまっては穂琥としても申し訳ない気持ちになる。

薪は立ち上がって穂琥の前で座った。目線が丁度同じ位置になった。そして穂琥の頬をそっと包むようにして触れると穏やかなその目を穂琥にしっかりと合わせた。

「気を失っていたのはこれが原因だったんだな。正式な開眼、おめでとう」
「気づいたの・・・？」
「そらね。あの門を潜ればそのものからはそれなりに眞稀が放出されることになるからね」
穂琥からあふれ出す眞稀を外に漏れないように必死に抑えてくれていたことに感謝する穂琥だった。
ベッドに戻ろうと立ち上がったとき、懐に違和感を覚えてそこに触れる。
「あ」
穂琥の漏らした声に部屋を出ようとしていた薪が足を止めた。
「どうした？」
「封を、もらったの」
「封？」
穂琥は懐からその封を取り出して薪に渡した。そしてそれの内容を確認した瞬間、薪の顔から血の気が一気に引いた。明らかに動揺して目が泳いでいる薪のその姿があまりにも珍しいことなので穂琥まで動揺してきた。
「なんて事を・・・」
やっともらした一言がそれだったので穂琥は肩を竦めた。もしかしたら先ほどの門番の件、やってはいけない事だったのかもしれない。

「何をして・・・帰ってきたんだ？」

薪の震える言葉に驚きながら穂琥はとりあえず自分のした事を説明する。

「ええっと・・・。門番様を解放・・・？してきて・・・」

「そういうことを聞いているんじゃないよ。簾乃神を開放したのはわかる。だけどそれだけでこんな言葉をもらえるなんて思えない・・・！」

薪の口から当然のように簾乃神の名前が出たので少し疑問に思ったが自分にわかったくらいだから薪だって知っていてもおかしくはないのだろうと思うことにした穂琥だった。

動揺する薪の声がいつもより荒れているので怒っているのかと不安に駆られるがそういうわけではないらしいと解釈する穂琥。そして薪に門前で起きたことを事細かに説明するように求められ、出来うる限り正確にあった出来事を伝える。

話しを聞いた薪は顔を緊張でこわばらせていた。自分がそんなにもいけないことをしてしまったのかと不安に駆られた。

「いや、触れずに・・・か。オレも母上もさすがに門には触れたし踏ん張りもしたんだが・・・」

薪に言葉を聞いて穂琥は絶句した。そんな事は・・・！それではまるで・・・。

「やっぱり穂琥は・・・・凄いな」

「え・・・・・・？」

あまりに自然に出過ぎた薪のその言葉に嘘も偽りも嘲りも嫌味も無い。ただ純粋にそう思った薪の言葉に、穂琥は言葉を詰まらせた。薪が自分のことをそんな風に言ってくれたことなど、一度も無かったから。

第十九話　神の犯した路

初めてだ。薪がここまで「凄い」と言い切ったのは。それがあまりにありえ無すぎていつものようにはしゃいで喜ぶことすら出来なかった。

薪はふっと息を吐く。それからあの簾乃神が何故、『禁忌を犯した古き神』といわれるのかを話してくれた。

その昔。人や眞匏祇なんていう小さなものの寿命では考えられないくらい昔の話。友の裏切りで神界を追われた哀れな神がいた。その神が簾乃神、簾堵乃槽耀であった。そしてその裏切った友の名が京董夜繪鏡（けいとうよかいきょう）、京鏡神（けいきょうしん）だった。

神々の都合など、一眞匏祇の薪には全くわからない。それに神界でもそれは非常に露見したくない汚れた歴史。故にあまり知られていないことではあるので詳しいことまで知っているわけではない。

その京鏡神が何らかの理由にて神々を裏切る行為を働いた。しかし、京鏡神は簾乃神にその濡れ衣を着せた。

「そんな!?そんなこと!神のする事じゃない!」
「神といえど万能なわけではない。そういうことなんだよ」

薪はどこか寂しそうにそう応えた。その表情が何処と無く悲しくて穂琥はそれ以上の言葉を続けることが出来なかった。

しかし、簾乃神は京鏡神の濡れ衣を自ら着た。友と思っていた者の裏切りに酷く心を痛めたが、それでも大切に思ったがあまり、簾

乃神はその濡れ衣を着ることを選んでしまった。そのせいで簾乃神は有りもしない罪を科せられ担う羽目となった。

「通称、『認可の門』と呼ばれる桃眼の最終段階にて使用される門。それの番人をやらされたのさ」

元は神と崇められた崇高たる存在があんな暗く孤独に苛まれる屈辱の空間でこの長いこと押し込められていた。あんな惨めな悲惨な姿で。孤独と闇が支配するその空間で一体どれだけの時間を過ごしてきたことか。生まれたばかりの薪や穂琥には想像も付かない。

「でも・・・。そういう情報を薪が知っているという事は神々だってそれを知らない訳ないでしょう？何故簾乃神様を開放しなかったの？」

「いい質問だな。オレはこの情報を特別なルートから入手した。だからおそらく眞匏祇の世界でこの話を知っているのはオレと穂琥だけだ」

薪の言った特別ルートが気になった穂琥だった。

「今更、罪を犯した神は京鏡神でした。簾乃神と間違えました、ごめんなさい。なんてそんな軽いことがいえるほどこの世界は甘くない。神の世界も、オレら眞匏祇の世界も」

そして何より、本当に罪を犯した京鏡神はいまだに姿を消したまま。つまり、眞匏祇の世界に伝うにも証拠が無い。本当に京鏡神がやったのかどうか、定かでない以上、神々の勝手な判断と思われても仕方の無いこと。

「それじゃぁ、簾乃神様はどうなるの？罪を投げ出して逃げたとか

にはならないの?!」
「それなんだよ。オレと母上が認可の門を潜ったときに簾乃神様を解放しなかったのはそれに繋がっている」
確かに、穂琥に出来たのだから薪に、ましてや母、紫火が出来ないわけがない。

穂琥が認可の門を潜ったあの時は丁度、集神(しゅうしん)と呼ばれる期間だった。字の如く、神々が集う特殊な日。何百年に一度行われるその日。ありとあらゆる事情があるにせよ、全神がその場に集結する日。よって、京鏡神もこの集いに抗う事は出来ない。故に自白するべき存在もあるために簾乃神を開放するためには丁度いい日だったということ。

偶然が重なって出来たこの時。神々の心が最も穏やかに最も静寂なこの時期なら簾乃神も京鏡神もその身を洗い落とせるということ。

「そしてこの集神で京鏡神様と簾乃神様がご対面となるわけだ」
「ど、どうなるのかな・・・」
「さぁね。神々の心などオレなんかにはわからんよ」
薪はどこか冷たくそう言った。

「特別なルートって何?」
「気になるのか?」
「当たり前じゃない。そんな、神々のことをそんなに簡単に知ることなんて普通出来ないでしょう」
「・・・そうだなぁ」
薪は少しだけ考えたそぶりを見せてから小さく笑って簾乃神自ら教

えてくれたと白状した。当時の薪はそんな細かな神々の事情などわからない年頃だった。だから、名を言えば開放できるのならそうすると簾乃神に言い寄った。しかし、簾乃神はそうして、自分の身の上と状況を薪に話すことでそれを避けた。

集神でもない日に神々の前に京鏡神を出せばきっとただではすまなかったはず。

「たった一人、愛した神を傷つけたくなかったのだろうな」

「うん・・・。・・・・・・。・・・・・・・・」

穂琥は一度薪の言葉に同意してから薪の顔を凝視した。それに不機嫌そうになんだと応えた薪。

「えっと。ごめん。もう一回言って。薪とは思えない失言、じゃない・・・言葉を聞いた気がしたの・・・！」

真剣な穂琥の表情に負けて薪はこわごわもう一度同じ事を言う。

「え、いや、だから・・・。たった一人・・・・愛した神を傷つけたく・・・」

「え?!」

「なんだよ!」

穂琥の反応に流石に怒る薪。穂琥の耳に飛び込んできた薪とはとても思えない単語。薪が何を間違っても『愛した』なんて事を言うとはとても思えない！

「簾乃神様が言っていたことだけど・・・」

「え?!そうなの!?あぁ～、なるほど～！」

妙に納得した穂琥を薪は軽蔑のまなざしを送る。一人で勝手に納得している穂琥を放って置いて薪は持っている紙に視線を落とす。そこに羅列した文字とはいえない形のもの。これが神の世界での文字。伝えたい相手にのみその文字の解読を許す特殊な文字。それを読もうと目で追うと勝手に頭の中にそれが言葉となって浮かんでくる。

―其の力見事なり。以後悪しき様に使わぬ様に願う。ぬしらを今後、出来うる限りで補佐しよう

紙の最後に書かれていた文。崇高たる神にここまで言わせることなど普通ではありえない。神とは敬いときに畏れ称える存在。願うならば此方から護って欲しいと願い出るしかない。それでもそれを聞きとめてくれるかは神々のお心のみが知れること。にもかかわらず神自ら護ることを約束してきている。薪はそれがどこか畏ろしく思えた。

拍子抜けする穂琥の顔を見てため息をつく。そしてそんな穂琥に軽く制裁を加えて明日また修行をするから早く寝るようにと促した。

第二十話　密かな不安

絶えず頭の中で回る神の言葉。薪はそれを頭から無理やり振り払って軽くした打ちした。別に神に舌打ちしたわけではなく自分の弱さにだ。

「運命を導く神と崇められていた・・・っけな」

簾乃神のことを思いながら薪はそんな風に考えた。そんな風にぼうっとしていたから薪は見事に目の前の岩に気づかず激突する。

「いって・・・ぇ・・・。くそ・・・・」

神の予言とは大いに当たるものだ。それを直感と本能で感じ取って薪はため息をつく。

―災いが近づいている。あの娘に嫌な感覚を覚えた。ぬしらに幸運を

薪は再び舌打ちをする。

翌日、薪はいつまでも寝ている穂琥をたたき起こして（おそらく部屋からは穂琥の絶叫が聞こえたことだろう）薪はさっさと部屋を出て行く。

寝ぼけながら降りてきた穂琥に早く顔を洗って来いと命じる。それに呑気の呼応する穂琥の背を見て薪は小さく息をつく。決して呆れているわけではなく。不安で不安で押しつぶされそうで。決してあってはならないこと。

―まさか穂琥を失うことになったら・・・

薪はそんなよからぬ考えを頭から無理やり遠ざける。無い。ありえない。穂琥は絶対に護る。おのずと身体が震える。

洗面所から戻ってきて席について飯～と要求したが薪の返答が無いために薪を見ると薪が小さく震えているように見えて穂琥は目を疑った。薪が?不安を覚えた穂琥が薪に安否を尋ねようとしたがそんな不安、薪の一言で簡単に吹っ飛んだ。

「飯がまずくなるからもう少しまともな顔していろよ」

「んだとこらあぁぁ!!」

第二十一話　感じる疲労と目にする疲労

修行を再開させたわけだが、やはり認可の門を潜ってきただけあって今までの苦労はなんだったのかと疑問にすら思えるくらい楽々と進んでいった。そんな折に、薪と『眼』の話をすることになった。

「開眼って他にも色々な種類があるんでしょう？」
「そうだな」
「薪は何が使えるの？」
「ん～？まぁ、色々？」
「なにそれ」

まるで何かを誤魔化すようなその言い方に穂琥は口を尖らせる。薪が得意としてよく使うのは紅眼だったと記憶している。穂琥はそれを薪に言うとまぁ、そうだと返答をもらった。しかしどこか薪の応えに渋りを感じたので追求すると薪は諦めたようにため息をついた。

「いや、まぁ。もう一個、得意なものはあるんだけどあまり使いたくないんだよ」
「え？得意なのに使いたくないって？」
「かなり危険なものでね。冷静でないときに使うとまずいんだ」

薪が出来る開眼の数はいくつかあるのを知っている。その中で最も使いやすくて強いものがあると薪は話す。

「まぁ、教えてやってもいいけど。絶対に口外するなよ？いくらお前でも口外したら本気でお前を消しにかかるからな」

滅多にない薪のこの手の脅しに穂琥は驚いて小刻みに何度も首を縦

に振った。

「オレの最高峰の力だと、自分では思っている」

薪のその口調はまるでこれから先、それを使うみたいに聞こえて穂琥は何だか嫌な気がした。

薪がその『眼』の説明を終えると穂琥は驚いて最初声も出なかった。

「な、何それ?!反則でしょ、そんな力・・・!チートだ!」

「ま、そういうなって。この力も結構レアだけどそれ以上にレアなのがあってオレが知る限りこの開眼に匹敵できる開眼をできたのは過去には母上しかいないと記憶している」

紫火の開眼は二つ。桃眼とそのもう一つ。しかし薪はそんな事はありえないから話はしないといってさっさと修行に戻ってしまった。どこか消化不良な気のする穂琥だったがそうなった薪に何を言っても回答は帰ってこないことを重々承知しているので仕方なく穂琥は修行に移る。

次のステップで穂琥は衝撃を受けた。魂石を体内から強制的に奪取するもの。しかし、これは下手すると簡単に相手を傷つけてしまうために力加減と操作が非常に難しいものだった。いくら認可の門を通ったからといってそう容易に出来るものではなかった。

薪が用意したダミーは全部で２０体。傷つけないように相手を痛めないように魂石のみを奪取する方法。桃眼で見極めた道しるべを通ってその魂石を眞稀によって引き抜く。しかし・・・一。

穂琥は5体を完全な戦闘不能にした。これでは再起までにどれほどの時間がかかるかわからないくらい。

「そ、そんな・・・！5体以外、全滅だなんて！！」

残った5体以外を全て完全に破壊してしまった。ちゃんと加減をしたのに。落ち込む穂琥に薪が優しく声を掛ける。

「お前にはちゃんと優しさがある。だから5体『も』残せたんだ」

「え？」

薪は少しだけ影を落として過去を振り返る。薪が最初にこのダミーで修行したとき、このダミーの全てを薪は破壊してしまった。

「穂琥の持つ『優しさ』はオレの持つものとは格が違う。大丈夫だって。お前なら出来る。だって母上の子だろう？」

「薪・・・。うん・・・。わかった。頑張る」

「おう」

頭を薪に軽く撫でられて穂琥は少し照れくさそうに笑う。

そうして何とか修行を積み重ねていってとりあえず使用できる段階まで来たと薪は言ってくれた。

「じゃぁ、これで・・・」

「後は最終ステップだけだな」

終わりではないのですね。穂琥は少しだけがっかりしながらも最後に何をやるのか薪に尋ねる。

「なぁ、戦うって何が必要だと思う？」
「え？」
唐突な薪の質問に動揺する穂琥。
「えっと・・・力？気持ち・・・？ん？何だろう？」
「まぁ、今のお前には一番欠けているものだよ」
「え？何だろう・・・？」
どんなに修行を積んだものでも。どんなに才能があるものでも。身体を動かさぬものに勝利は無い。知識が勝ち抜くことが出来るのは子どもの遊びまでだ。実際に刀を交えることとなればそんな知識よりも何よりも大事なものが必要となるものがある。
「直感」
薪が言う。
「そんな！？私ってそれが一番縁遠いんですけど？！」
「だから一番欠けているって言ったじゃないか」
「う・・・」
直感こそが戦闘で最も大事なスキル。相手がどう動いて次にどうするのか。それを見極めることが勝利への架け橋となる。そしてその直感こそ、つけるには。
「ま、実戦しかないわけだ。と、言うことで！」
急激に薪の声が明るくなったので穂琥は背中の辺りがぞくっとした。よく言う、嫌な予感だ。こういう直感ならきっと実戦を積んで知っ

ているのかもしれない。

「来い」

穂琥に向って剣を向ける薪に穂琥は己の『嫌な予感』が当たってしまったことにショックを受けた。

「実戦でのみ、直感は得られるんだよ。そんなわけで今日からはオレが相手してやるから。かかって来い」

「そ・・・そ・・・そんな無茶なあああぁぁぁぁぁぁ！！」

修行場にしばらく穂琥の絶叫が木霊するのでした。

今までの修行って何だったのだろう。子どもの手遊び程度だったのかなぁ。だって薪ったら容赦ないんだもん。

そろそろ日が落ちるという時間。穂琥がへばって修行は終了。穂琥はすっかりぐったりとしてしまって部屋に戻るとソファにダイブしてそのまま寝息を立て始める。そんな穂琥を見て薪はため息をついてシャワーを浴びに行くのだった。

穂琥はわかっていないかもしれないけれど、この修行で誰が消耗するって薪に決まっている。穂琥が何度も破壊してしまうダミーを眞稀のみで生成しているのは薪であるし、コツを教えるために桃眼を開眼する訳だし、修行に付き合いつつも自分の修行もしなくてはならに薪が疲れないわけも無かった。

シャワーから上がってきた薪にたたき起こされて穂琥もシャワーを浴びる。まるで何日もこの水に触れていなかったのではないかと思えるくらい気持ちがよかった。よほど疲れていたんだと実感する

穂琥はのんびりとシャワーを終えた。

出てきて薪を探しても薪がいないので不思議に思って探す。そしてふと、ソファに眼が言った。

「あれ・・・？し、ん？」

薪がソファで枕に顔をうずめて肩を上下に揺らしていた。

―・・・。

少し考える穂琥。そしてこの状況が何であるか、把握したとき一瞬驚いた。

―わっ！？薪、寝てる！？

そんな薪にそっと声を掛けるが薪は起きなかった。声を掛けても、いや、近づいても起きないのは薪とは思えない。もしかしたら失神でもしたのかと不安に思った穂琥はそっと薪の肩を持って仰向けにする。

今までに見たことの無い薪の寝顔。始めてみる寝顔なのでいつもどんな顔をして寝ているかわからないけれど、今回のこの薪は本当に薪とは思えなかった。

―な、なんか・・・可愛いんですけど・・・・

そんな事を思いながら穂琥はソファの前に腰を下ろした。そしてやっとその事実に気づく。

―あ、そうか・・・。疲れているのは薪のほうだったんだ・・・

穂琥を気遣って薪はそんなそぶり一切見せなかった。確かに薪は体力だって気力だってある。それでもこの二日、眞稀を多量に使っていたにもかかわらず疲れたの類の言葉は聞いていない。むしろ、大丈夫か、といった穂琥を労わる言葉だけ。

そのことに今まで一切気づかなかった自分に恥じた。自分だけ辛いと思い込んでいた自分が悔しかった。そんな思いも相重なって。穂琥はそっと開眼する。そして薪をそっと包む。

「ん・・・?どわぁ!?」

眼を覚ました薪が急に飛び起きたので穂琥は勢いで閉眼した。

「な、何よ!?せっかく癒してあげようと思ったのに!!」

口を尖らせた穂琥だったが、どうにも薪の様子がおかしかった。

「え・・・あ・・・いや。ゴメン。ありがとう・・・・でも大丈夫だから・・・」

「・・・?大丈夫?」

「あぁ」

短く応えた薪のその言葉に疑問を覚えながらも穂琥は薪の膝に手を置く。

「?」

不思議そうな顔をする薪から目線を外して穂琥は薪の膝に置いた自

分の手を見る。

「ごめんね。気づかなかったの。いつも薪ってば飄々としているから」

「別に良いって」

「よくないもん！」

急に穂琥の荒れた声に薪は驚く。

護られるだけじゃダメなんだ。自分だって護りたい。薪を護ることが出来る力が欲しい。それでもまだまだ全然駄目で薪の足元にも及んでいない。

「だから・・・え？」

言おうとした穂琥が言葉を切ったのは薪が頭に手を置いてきたからだ。穂琥を見るその瞳はなんと温かいのだろう。

「気にするなって。穂琥。オレを護りたいって気持ちは素直に嬉しい。同情とかそういうのではなく、本当に。でもな。穂琥が護ることのできるものはそんなものじゃないんだよ」

「え？」

「よく自分で考えてみろ。何が護れるか、何を護るべきなのか」

「うん・・・」

今の穂琥にこの時言った薪の言葉を理解する事は出来なかった。自分の目の前で精一杯の穂琥には。薪の言ったその言葉の意味を知ったとき、きっと穂琥は自分の力を完全に使えるときだろう。そしてこの時から既に穂琥の中に眠るその力に気づいていた薪に素直な驚きを覚えることだろう。

第二十二話　心の悲痛と叫び

実戦訓練を始めて数日。薪から告げられた言葉に穂琥は震えていた。夢であって欲しいとどれだけ願ったことか。夢だと願うほどそれは果てしなく現実。薪、もう少し待ってよ。いくらなんでも早すぎるよ。

突然告げられたこと。昨晩、疲労していた薪を治した。完全に回復させる事は出来なかった。薪の持っている疲労は予想以上に酷い。そして今朝、そんな薪の顔を見て余計にそう思った。それなのに。

「明日、奴らの本拠地に行く」

あまりに突然言われたその報告に穂琥は愕然とした。つまりは争いが起こるということ。まだ完全に回復できていない薪と、覚悟も何も出来ていない穂琥が。一体何が出来るというのだろう。生半可な気持ちで望めばそれは死を意味することとなる。しかしそれでも薪はもう明日にはという。一体どうして。

震える穂琥の心は痛いほどよくわかる。それでももう動かなければならない理由が出来てしまった。まず、大本の理由として主と呼ばれていたやつの下に痲臨が存在すること。痲臨は使い方を誤れば悲惨な事態しか生まない危険な宝玉。地球はなんと脆いことか。痲臨の力がもし暴発でもすればきっと簡単に壊れてしまう。

だから穂琥の心がどれだけ揺れていようが、もう、手を出さないわけにはいかない。薪は心底思う。連れてくるべきではなかったと。そしてその思いを強くさせているのがあの簾乃神の言った言葉。

薪の家には眞匏祇の世界とつながるゲートが存在する。そのゲートで穂琥を返そうと思った。しかし、事もあろうか、ゲートが閉じて開かない。穂琥を返すことも出来ない状況になってしまっていた。そのことに薪は絶望した。

穂琥が震える心なら薪はおそらく不安の心。果てしない、今までにかんじたことの無い不安が薪を襲っている。万が一にも、穂琥が手元から離れるようなことがあったら。

―いいや、そんな事考えていたら駄目だ。話にならない

薪はその悪い考えを何度も無理やり頭から遠ざける。穂琥を失うことなど・・・。

第二十三話　命の意味するもの

支度をしている薪の背に声を掛ける。薪は振り向かずにそのままてきとうに返事をする。

「どうして命ってあるの？」

穂琥のした突然の質問に流石に薪は振り向いた。

「え？」

薪の返して来た言葉を穂琥はそっと胸に抱く。

命とは掛け替えの無いものだと、大切なものだと知っている。そのつもりだ。それなら何故我々の命とは簡単に費えてしまうのだろう。どうしてこうもあっさりと消え去ってしまうのだろう。生きていて命を持っている。持っているときはそれは思った以上に重くていつまでもそこにありそうな錯覚を得る。しかし、亡くしてしまう時は一瞬にも満たない。この世に生を受け燃ゆる炎を灯して。それでもその炎は消えるときはふっと一瞬にして姿を消してしまう。残るのはその煙だけ。そこに炎があったという形だけ。

「どうして生きている意味があるの？どうして命って大切なの？」

「そんな事、オレが知るわけないだろう」

薪は顔を前に戻して以外にもあっさりとそう応えた。穂琥はその回答にどこかがっかりしながら薪の背を見た。

「ただ・・・」

薪はそのまま言葉を続けた。

「だから命は大切なんじゃないのか？簡単に壊れるものほど大事にするじゃないか。消えてしまうから楽しいんじゃないか」

薪の言ったことの意味はなんとなくわかる。それでも命とは脆すぎる。どうしてこんなにも大切にしなければならないのだろう。それがわからない。

「オレが思うに、命そのものに意味は無い、ってことかな」

予想外の薪の発言に穂琥は目を見開いた。あれ程までに命を大切にしていた薪が言うような言葉には思えなかった。

「命に意味があるのではなくてその命が生む夢や愛に意味があるんじゃないかね」

穂琥はその言葉を聞いてはっとする。

「私はあなたを愛します、って台詞とかみたいにさ。別に恋愛どうこうだけじゃなくて家族や友、それらに向ける愛情とか。それが大切なんじゃないかな。だからその夢や愛を受け継いでこうして生物は繁栄していくんだろう？」

命は呆気ない。それは確かに変わらない事実。でもその命が強固で永遠であったなら一体生物がこの世にいる意味は何になる。その者が朽ちてしまうからそれが育んだ愛や夢、希望が朽ちることなくこの世界を包み込んでくれるのではないだろうか。

薪は昔、その手で夢も希望も愛も自分のその手で消してしまった。だから失いたくない。もう二度と。

「でも・・・それでも・・・死んでしまうのは辛いよ？」

薪はそっと振り返って穂琥の目を凝視する。今までに見たこと無いくらい深い瞳の色に穂琥の心は震える。

この世に生まれ出た以上、必ず皆平等に命が尽きる。しかし生まれたからには愛を育み、希望を与え、与えられ。夢を抱いてそれを語る。それには命が必要で器が必要。それらを壊しまうことがあってはならない禁忌であるのだろう。

「意味が無いといったら悪い言い方だけど、つまりは大切なのは『心』って言いたいだけ」

薪の目の奥が震えているように穂琥には感じた。薪もどこかで怖いのかもしれない。いや、そもそも薪がこの戦いを怖くないとは一言も言っていない。もしかしたら『失う怖さ』を知っている薪のほうがこれから行われる争いを恐れているのかもしれない。

「怖いから・・・。失われる命なんてあっていいのかな・・・って」

「・・・そうだな。悪いな。ごめん」

薪が小さく謝る。それに驚いて穂琥は聞き返す。すると薪は視線を落として申し訳無さそうな顔をする。そうした薪から聞いたのは穂琥を眞匏祇の世界へ返したいということ。それでもそれが出来ないという事実。

「悪い。本当に。そもそも連れてくるべきじゃ無かったよな・・・。

本当にごめ・・え?!」

謝りかけた薪が驚いて言葉を切ったのは後ろから穂琥が抱きついたからだ。そして耳元で震える穂琥の声が聞こえる。小さく何度も謝る、か弱い声が。

「ごめん。私のほうこそ。争いが嫌いなんて薪が一番わかっていることだったよね。ごめんね・・・。こんなに急にやるって言ったのにも理由があるんでしょう?」

「・・・痲臨を、奴らが所有しているらしい、って言う噂をね」

「・・・うん。そうだね。早く取り戻さないとね」

穂琥の言葉に少しだけ温かみが戻る。不安が少しだけ消えていく。そんな穂琥の声を聞いて薪はより一層の不安を高める。

「オレは・・・」

どうしたらいいのだろう?そんな事、穂琥に言うわけにもいかない。それでも誰かにこの慫慂という重圧な責任を擦り付けたいと思ったことが過去にどれほどあっただろうか。それでも今、こうして穂琥を前にして自分が慫慂でよかったと時折思う。慫慂ならこの世界を変える力を有している。いつかこんな苦しい思いをしないですむ世界を作りたい。生きることに苦しまぬ世界を。

「ねぇ。薪にとっての夢や希望って何?」

「オレの・・・?」

「そう」

少し明るく穂琥の声が薪の声に被さる。薪はいまだに背中にくっついている我が妹の顔を見る。そして小さくため息をついた。

「言うまでもあるか？」
「え？」
「オレの夢と希望？そんなの、お前に決まっているじゃないか」
薪のその声は自身に満ちている。迷いなんてものがあるわけもない。それが嬉しくてたまらない。穂琥はさらにぐっと薪に抱きつく。そして嬉しさを一心に篭めて薪へ言葉を送る。
「私と同じだ！私も薪が夢と希望、生きる糧だもん」
その言葉に薪がどんな顔をしたのか穂琥には見えなかった。それでも心から感じる眞稀の感じに柔らかいものを感じていた。
「なぁ、穂琥」
「何？」
薪が少し声を低くして名前を呼んできたので少し驚いた。
「お前、明日、ここに残れ」
「え？」
薪はただひたすら穂琥を失うことを恐れている。だから、この家に残って戦闘が終わるのをここで待っていろと。そんな薪の言葉を聞いて穂琥は胸の奥がひどく熱く感じた。
「今、決心付いた」
「え？」
穂琥が薪からさっと離れて嬉しそうに言った。薪は首をそちらに向

けて穂琥を見る。

「戦闘で私に薪を護ることなんて絶対に出来ない」
「だから・・・」
「出来ないけど私は薪の心を護る！だから明日は連れて行って」

穂琥はふふっと嬉しそうに笑った。それがどこか薪の心を痛めた。
それと同時に薪の心に何か暖かいものを落とした。

「馬鹿だよな・・・」
「何それ！せっかく私が・・」
「いや、お前じゃない」
「え？」

薪は自らを卑下して笑う。要らない心配をしたと笑っている。薪は小さくいつもより少し弱い声で一言ぽつりと言った。それが穂琥には聞き間違えではないかと思うくらい意外な言葉だった。

第二十四話　脆いからこその明かせぬ心

―怖かった

薪が漏らした一言に穂琥はただぼうっとたっていることしか出来なかった。

失う怖さは痛いほど味わった。だからもう二度と何も失いたくはない。だからがむしゃらになって必死になって何もかもを護ろうとする。それが例え敵であったとしても。

穂琥にとっての全て。穂琥にとっての勇者。穂琥にとっての主人公。絶対的な存在。誰にも負けることもなくていつでも平然としていられる、そんな存在だと思っていた。でも違うのだ。彼もまた、一つの生物。全てのものに喜びを覚え万物に恐怖する。それは誰もが平等に等しく存在する。

一度でも死という恐怖に駆られてしまった薪にその恐怖の闇から逃れることは出来ないのだと。それが痛感した。

ずっと何も語ってくれなかった薪がそうやって穂琥に語ってくれたことは素直に嬉しかった。しかし、『穂琥』という存在がここまで薪の心をつぶしてしまっていたことを知らなかった。穂琥は薪に依存している。自分でもそれは自覚しているつもりだった。でも、それはまた薪も同じだったのかもしれないと心のどこかで思った。互いにたった一つしか無い血の繋がり。大切にしたいと思うのは当然の心なのか。

薪を取り巻く死の恐怖。薪自身、己の命が費えることになんら恐怖は抱いていない。ただ、それを目の当たりにする羽目になる他者において薪は死の重みを実感する。

―命を懸けてお前を護る

よくある名台詞のシーン。この言葉を薪はひどく羨んでいた。命一つかけただけで護ることが出来るというのなら好きなだけかけてやろう。でも、そんな単純なものではない。今、ここで命をかけて敵と刺し違えたとしても、次の敵の襲撃に護ることが出来ないではないか。この世の中に完全な平和など存在しないことを薪は知っている。そして何より。薪の命はすなわち穂琥の命。薪が命を懸ければ穂琥も同様に掛ける羽目になる。それではだめなのだ。ならないのだ。

薪に寝るようにと告げられてベッドの上でさまざまなことを考えていた。薪に見捨てられてしまう日が来るのではないかと内心恐怖に駆られていた。でもそれはどこかで薪も同じだったようで安心と苦しみが同時の穂琥を襲った。

薪が語った衝撃的な言葉に今でも穂琥は信じられない気持ちが胸にあふれていた。

薪も同じ。穂琥と同じ。最近、桃眼を開眼して穂琥にはぐんと力がついた。そしてそれは同時に自立を意味する。力を必要としなくなった穂琥が薪の元から離れるのではないか、そんなことを時折思ったことが薪にもあったらしい。まさか、薪にそんな弱く思う心があったなんて驚きだった。いや、違う。弱いなんて言葉は間違えているのかもしれない。そういう気持ちをきっと弱いとは言わないのかもしれない。

穂琥は薪をずっと見ていく。今までずっとそうして薪の背中を見てきた。だから今までもこれからも、ずっと。

薪は部屋に戻って後悔に苛まれていた。こんな決戦前に穂琥にあんなことを言ってどうする。同情でも買いたかったのか。薪はただ頭を抱えていた。こんなくだらないことを言って穂琥を傷つけたかもしれない。不安にさせたかもしれない。どれだけ自分が脆く愚かで未熟であるのか、思い知らされた気分だった。あんなことを今の穂琥に言ってよかったのだろうか。

そんなこと、誰にも答えがわかるはずも無い。言ったほうも、言われたほうも。どちらも。そして天を崇める神々も、きっとわかるような答えではなかったのだろう。

第二十五話　決戦

ふっと目が覚める。それでもまだ頭はぼんやりとしていて完全に覚醒はしていない。そんな状態で、ふと隣に気配を感じた。誰の気配だろう・・・。そんなことを考えている間にだんだんと覚醒してきた意識の中でその隣の気配が先ほどから身動きしていないことに気がついた。

穂琥はゆっくりと体を起こすと、そこには薪がいた。ベッドに向いて床に座って諸手を組み、その諸手で出来た穴に顔をうずめている。

「薪・・・」

穂琥はそっと小さな声で呼びかける。薪はわずかに声に反応して身動きする。すっぽりと入っていた顔が少し腕の中から出てきて薪の表情が見えたとき、穂琥は一瞬ドキッとした。そして心がどこか痛いと泣いているような気がしながらそっと薪の顔に手を伸ばす。

「あぁ・・・薪も怖いんだよね」

そっと薪のほほに伝っていた水滴を指で拭う。

「ん・・・」

触れたことで覚醒した薪が頭を起こした。

「あ～・・・おはよう」

珍しく寝ぼけているような雰囲気で薪は穂琥に挨拶する。それに穂琥も答えた。

完全に準備を整えた薪と穂琥。外に出ると外はまだ朝靄がかかっており、本来なら人々がまだ夢の中でうつらうつらとしている時間だろう。朝の空気が漂い、どこか肌を刺激する寒気に穂琥はぶるっと身震いをした。

「ねぇ」

朝の空気を切りながらずっと抱いていた疑問を薪へぶつける。

「薪は・・・戦うの、怖い？」

「当たり前だろう。でもやらなきゃいけないから。そうでなくては滅んでしまう」

薪の声が静かな道に木霊して吸い込まれていくようだった。その木霊が完全に朝靄の向こうに飲み込まれてから薪は穂琥にたずねる。

「聞きたいことは何だ？」

薪に言われてドキッとする。薪はわかっている。穂琥が本当に聞きたかったことはそれではないということを。穂琥は少しだけためらってそっと薪にたずねる。

はて、薪は自分の力をどう思っているのだろう？自分の力に恐怖したことは無いだろうか？

穂琥の質問に薪は少しだけ視線を落としてから穂琥に視線を戻して言い放つ。

「怖い？そんな風に思ったことは無いな。オレは別にこの今有している力を才能で持っていたものではない。そらまぁ、多少の才はあったかも知れないけどな、慥夸だし」

薪は最後を少し早口で言った。

薪の持っているこの力は確かに巧伎や紫火の血を受け継いで強大なものかもしれないけれど結局のところほとんどの力を薪は努力のみで手に入れている。普通では考えられないくらい血のにじむ努力の元。その努力の中には巧伎による強制も入っているのだが。

そして今ある力に自惚れることは無い。そうやって努力で手に入れたのなら自惚れてもおかしくないかもしれないけれど薪にそれは無い。それはなぜか。簡単な話だ。

「限界を超える」

「え？」

「オレはまだまだ強くなる。まだ護りたいものだってろくに護れてなどいない。だからもっと強く」

薪の声に張りを感じた。己に打ち勝つこと。それが薪の目標であって力の上限。

「ただね」

薪が妙に言葉のトーンを落としたので気になってその薪の言葉に耳を傾ける。

「唯一つ。怖い力がある」

今までの話とは裏腹のその言葉に穂琥は妙に嫌な予感がした。

薪が怖いといった力は以前、話してくれた開眼のことだった。これだけはコントロールを失ったときの恐怖を覚えるという。

「さすがになぁ。あれはオレでもきついからな。己の力に恐怖するって言うのはつまり制限が出来なくなるからだろう？オレはその開眼だけ、コントロールを失う可能性があるから怖いんだよ」

薪は少し悔しそうに言った。

「何で急にこんなこと聞いたんだよ？」

薪がたずねてきた。話に区切りがついたからだろう。いつか聞かれるかと思っていた穂琥としては回答に少し困った。答えるつもりはあまり無かった。そんな穂琥の様子を悟ってか薪はそれ以上の追求はせずにその質問を打ち切った。

移動をするために薪につかまる。

これから起こる悲劇。穂琥の心が悲鳴を上げる。そして何より薪の心が限界を超える。押さえ込んでいた我慢の鎖が音を立てて砕け散る。鎖で縛られていたものが巨大な音を立てて外に湧き上がってくる。そんな薪を穂琥は目の当たりにする。経験したことの無い驚きと恐怖。そして悲しみが穂琥を襲うのだった。

第二十六話　争いを避ける理由

移動した先は荒野だった。人に見つかってしまってはひとたまりも無い。ゆえに眞稀でその全貌を隠しているのだ。開け方を疑問に思った穂琥だったが、薪は向こうが招いている以上、勝手に開いてくれると言う。

薪の言ったとおり、何も無い空間が勝手に歪んで誓茄が中から出てくるのが見えた。

「会いたかったわ！中々外に出してくれなくてね」

誓茄は薪を見て嬉しそうに笑った。薪は主とやらに会わせてほしいというと誓茄は少し悔しそうに笑った。

「あら、もう主の話？せっかちね」

「早く用を済ませろ」

中からさらに圭が出てきて誓茄を不機嫌にさせた。わかっていると誓茄は機嫌悪そうに答えると戦闘態勢に入る。

「用？」

「以前言っただろう？その娘を預けてほしいと」

圭が冷たく言い放つ。薪が額に力を入れて渡すわけが無いと答える。

「えぇ、大切なのはわかるわ。でも奪うの！」

誓茄が刀を取り出して薪に飛び掛る。薪は一気に刀を二本出して一

本で誓茄をはじき、気配なく近づいていた圭をもう一本で弾き飛ばす。

「鼓斗、斬れ！」

吹っ飛びながら圭がそう叫んだ。ふっと後ろに眞匏祇の気配。鼓斗が刀を振り上げているのだった。後ろを取られたのもかかわらず薪は軽々と鼓斗をはじき返した。空中に飛ばされた鼓斗はふっと回転して地面に着地した。

「へぇ。いい刀だな」

「あぁ、舞姫と散姫だ。どちらも美しい『姫』だろう？」

薪の言葉に鼓斗はのどを鳴らすように笑った。

「確かにいい『姫君』だなぁ」

「でもさすがに空。いきなり序盤で己の所有する刀を全て見せてしまうなんて」

薪の持つ刀を見て圭が言い放った。それに無言で返す薪だったが、誓茄が高く笑った。

「あら？そうかしら？彼は強いわよぉ？二本だけなんてあり得ないわ」

眞匏祇は己で有する刀の数には限りがある。別に一祇が有している刀に限りがあるわけではない。ただ、手荷物としてもてる刀に限りがあるというだけのこと。簡単に言えば人間が筆箱に入れて持ち歩ける文具の数に限りがあるように眞匏祇にも一度に持てる刀に限りがあると言うこと。

本来なら大体1本から2本。多ければ3本持つことも可能だが。
慤夸ともなれば話は別だ。慤夸くらいになればたやすく6本は所有できる。しかし、それがばれてしまっては慤夸とばらすことになる。それは出来ない。

ゆえに、露見できる刀は3本まで。その場に合わせて刀を選ぶ必要がある。そして今一気に二本出したのは相手の数が多いからだ。そして何より今出した『姫』の刀は薪の意思とは関係なく相手を迎撃できる特殊な刀。無論、薪の真意にそぐわない行為はしない。それがために突っ込んできた誓茄、圭、鼓斗に怪我の類が無いのだ。

穂琥を奪うまで主は顔を出さないらしい。全く腹の立つ相手だ。穂琥に恐れを感じているのだろうか。だとすれば大したものだ。穂琥の底知れぬ力を感知したことになる。だとしたらなおのこと、穂琥を奪わせるわけには行かない。

目の前に刀を構える薪。そしてそれ見ている穂琥の心に闇が陰る。争いを嫌った薪。それの理由。無論、傷つけて失いたくないということは知っている。しかし、そういうことではない、そういう問題でもないということを穂琥は思い知った。

以前、台所で指を切ったことがあった。眞匏祇のクセに包丁ごときで指をざっくりと切るなど何事だと怒られたが、そう言いつつも治療をしてくれた（本来なら自分で治せるがわがままを言って薪に治させたというのが妥当）薪を見て穂琥は首をかしげたことがあった。このとき初めて薪の療蔚の技を正面から見たのだが、薪の目が明らかに泳いでいるような気がしたのだ。

治してくれた後は傷口も何もなく、怪我をした痕跡が全くなくな

っていたので気分が上々だった。しかし、やはり気になるのは薪の反応。慣れるはずの無い療蔚の技はやはり堪えるのだろうか。

「ねぇ・・・まさかとは思うけど・・・」

穂琥が途切れながらに薪にたずねる。

「血、怖い？」

穂琥の放った言葉に薪は不機嫌そうに目をそらした。あ、図星だ、と思った穂琥だったが小さく不機嫌そうに怖いと薪が言ったので穂琥はぎょっとした。

「当たり前だろう。トラウマだ、馬鹿。餓鬼のときにどれだけ血を浴びたと思ってんだよ」

穂琥はそれを聞いてぞっとした。そうだった。わずか三歳という幼い薪の苦痛の出来事。殻夸を潰そうと企んだ眞匏祇の眼に捕まりやりたくも無い殺害を何千何万と犯してしまった薪にそういった類の恐怖心があってもおかしくは無かった。

それでも過去に幾度も薪は先決を浴びる羽目になっている。その全て、何事も無いかのように振舞っている。以前、穂琥の初めての実戦に出たときもそうだった。

「ばーか。怖いからに決まっているだろう」

「え？」

「はっきり言うけどね。この世の中で起きること全てを含んで何が怖いってそりゃぁ穂琥よ。お前を失うことだ。それに勝るものは無い。だから血を見る羽目になってもお前だけは護るんだよ。わかる

か？」

「は、はい・・・」

「つっても、血が怖いのは事実です。認めます」

そんな会話をしたのを思い出す。そう、薪は血液恐怖症だ。おそらく穂琥が目の前にいたからあの程度の震えで済んだのだろうが、もし、気を抜いてもいいようなら昏倒していてもおかしくないくらいの恐怖を『血』から感じるようだった。

血が怖い。それはすなわち命を削ること。だから怖いのだ。そしてあのときの惨劇を脳裏に思い浮かべる羽目になるのがさらに一層恐怖なのだろう。

だから怪我をしたら治す。そう決めていた。でもやっぱり薪はすごい。これだけ刀を振るっているのに未だに誰も傷ついていない。

「ねぇ。馬鹿にしているの？」

圭が薪に尋ねる。鼓斗のほうも斬らないとはどういうことだと尋ねてくる。如何に敵といえど殺したくは無いと薪が答えると誓茄が笑い声を立てた。

「その心がけ、立派だわぁ！尊敬する」

「偽善事だろう」

鼓斗が誓茄の言葉にかぶせるように言う。誓茄は少しだけ不機嫌そうに鼻を鳴らした。

圭が刀を振るってくる。薪はそれをはじきながら再び襲ってきた鼓斗と誓茄の刀も受け流す。その華麗さに見惚れるものがある。誓

茄が固執して薪と戦いといった意味がようやく理解でき始めた圭と鼓斗だった。

穂琥はただ見ていることしか出来なくてなんとももどかしい気分になった。結局、自分には何も出来ないのかもしれないと思った時、途方も無い悲しみが込み上げて来るようだった。そんな折、ふっと風が吹いてそれが急に突風と化した。その勢いに押されてよろめいた。よろめいた足の先に地面は無かった。大きく裂かれた地面に溝が出来ている。穂琥は流れるように底に落ちて行ってしまった。

「穂琥！！」

薪が叫んで穂琥を助けに行こうとすると目の前を鼓斗に邪魔される。

「あのまま我が主の下へ。邪魔はさせない」

「邪魔しているのはどっちだ！」

薪は勢いよく刀を振って鼓斗を飛ばす。しかしもう遅く、裂けた地面はどこにも無かった。

「手合わせ、願う」

鼓斗が低くうなるようにそう言った。薪は仕方なく刀を構える。

―穂琥・・・無事でいてくれ・・・。すぐ・・・すぐに行くから・・・！

薪の刀を握る手に自ずと力が入る。誓茄と圭はすでに主の下へ戻ったらしくこの場にはいなかった。薪は鼓斗を強く睨む。そして小さくため息を吐いた。

「わかった。ならオレも少しは本気を出そう」
「替装、するのか？」
「あぁ」

薪はふっと瞼を閉じて眞稀を込める。すっと小さな風が起こり薪の服装が変わる。

もとより戦うつもりは無い。今はただ、穂琥を探すことだけしか考えていない。ならばここはこいつと刀を交える必要は無い。散姫をしまうと舞姫に集中する。そしてその集中して溜めた眞稀を勢いよく爆発するように放出する。放たれた眞稀は地面をえぐり大きな爆発を引き起こした。

「くっ・・・！！」

鼓斗のうめき声。鼓斗は眞稀を高く上げ、辺りを覆っている土ぼこりを振り払った。そこに薪の姿は無かった。

「逃がしたか・・・・」

口惜しそうに鼓斗は表情をゆがめた。

穂琥。無事でいてくれ。ただひたすらに切にそう思って走る薪。

第二十七話　暗黒の世界の紛い物

どの位走ったか自覚が無い。穂琥の眞稀を探してこうして駆けているというのに穂琥の眞稀を見つけることが出来なかった。桃眼を使えば見つけることが出来るかも知れないけれど、今、それを使って力を消耗するわけには行かない。なんたって薪は戦鎖。普通の開眼よりも桃眼を開眼するほど疲れるものは無い。

「穂琥・・・」

ひたすら薪は走る。己の感覚を信じて。

薪が走っている時、穂琥は闇に埋もれていた。

「ここは・・・どこだろう？」

真っ暗で何も無い。光の一筋も無い闇が全てを包む場所。そこをひたすら歩きながらなぜ自分がこんなところにいるのかわからなくて記憶を思い起こす。地面が割れて落ちて。気がついたらここにいた。記憶をたどっても意味は無かった。

暗闇に溶けた身体が冷えて浸食されていく感覚を覚える。その恐怖が穂琥を震えさせる。

―薪・・・助けて・・

穂琥は蹲って眼を強く閉じるのだった。

ふっと暖かさを感じて眼を開ける。そこには見慣れた明るい風景。

「え・・・？城？」

そこは穂琥が生まれた場所。眞匏祇の世界。呆気にとられていると薪の呼ぶ声がして振り向く。

「なにぼけっとしているんだよ」

「あれ？私、地球に・・・」

「はは。もう終わって帰ってきたんだ。お前がやったんだぜ？オレも驚いたよ」

「え？」

薪は明るく話す。その笑顔がまぶしいくらいに。

「何だ、覚えていないのか？」

「・・・う、うん・・・」

薪は困ったように笑った。

暗闇にとらわれた穂琥を何とか助けようとした薪ではあったが力及ばず救出することが出来なかった。そんな時、膨大な力を発して穂琥は闇から生還した。そしてそのまま敵を叩き、鎮圧に成功した。無論、痲臨の奪還にも成功した。

「私が・・・？」

「そうだよ。すごかったよ」

全く記憶に無いけれど、無意識下でそれらを成し遂げたのならあるいは。

「そこでな、穂琥。お前はもう自分だけの力で生きていける」
「え？」
「だからもうオレの力なんて必要ないんだよ。自信持て？」
薪は相変わらずの笑顔でそういう。穂琥の心がざわついた。
「だからここから出て行け。お前だけで十分生きていけるから」
薪の言った言葉に穂琥は愕然とした。いつまでも一緒にいてくれると言ってくれたのに。離れることなんてあり得ないって・・・。薪はさっと踵を返して歩き去ってしまう。
ふっと気がつく。辺りは急に暗くなり闇に飲まれた。一体どういうことだ？考えて穂琥は辺りを見回す。そしてまた急に光が現れて城にいる。
「これ・・・誰かの術？！」
穂琥はこれでやっと気づいた。自分は誰かの術に落ちてしまっているのだと。
穂琥は地面に膝をついて耳を塞いで必死で頭を振っていた。何度も同じように薪に拒否される映像。見捨てられておいていかれる。いくらそれが紛い物であってもそれが穂琥に堪えないわけがない。震えてもうやめてほしくて。涙がこぼれる。そんな時。明るくなくて暗闇の中。薪がこちらに走ってくる。
「穂琥！」
「薪！！助けて！！」

必死で手を伸ばす穂琥の手前で薪は足を止める。それから鋭く突き刺すような冷たい眼を穂琥に向ける。

「弱いなぁ。こんな簡単な術にも引っかかるなんて。やっぱりお前、才能ないよ」

穂琥は目の前が暗くのを感じた。

―あぁ、この薪も偽者だ。敵の作り出した幻術だ。穂琥はひたすら耳を塞いで否定をし続けた。

「邪魔なんだよ」
「消えてしまえばいいんだ」
「所詮はその程度だろう？」

次々と木霊する薪の声に穂琥は涙が止まらなくボロボロとこぼれた。悲しみと恐怖。心が崩壊に向かう。くっと力を込めて刀を取り出す。そして目の前の幻術に刀で切りかかる。それは影となってすっと消えた。あちこちにいる薪の偽者を切る。

「何するんだよ！」
「待てよ！オレは本物だ！」
「邪魔なんだよ！」
「気づけよ！幻覚じゃないんだ！」
「弱いくせに！」

偽者だってわかっているんだ。だからもうやめて。それ以上薪の言葉を汚さないで。

穂琥はただむやみに刀を振るった。

第二十八話　心の重さ

穂琥・・・お前はどこにいるんだ・・・！？

ひたすら走り続ける薪。途中途中で眞匏祇に出会ったがその全てを突き飛ばして今走っている。ただひたすらに。ただ下に階段を駆け下りていく。さすがの薪でも息が上がってきた頃、薪はあまりの衝撃に足を止めた。

「ほ、穂琥・・・？！」

今感じた馬鹿に大きい眞稀。確実に今のは穂琥のもの。やっと感じることの出来た穂琥の存在だが今の眞稀からして薪に安心感と安堵感を与えてはくれなかった。

階段を下りると広いロビーのようなところに出る。そこに穂琥の眞稀を感じたから。暗がりで周囲は見づらいが確実にこちらに歩いてくる影がある。

「ほ・・・く・・・？」

確実に穂琥の姿をその眼に捉えたとき、薪は絶句した。

哀れな我が妹の姿。目に生気はなく、刀を地面に引きずってこちらに歩いてくる。そのまとう空気は紛れもなく殺気。薪はピリッとしたその感覚に冷や汗をかく。穂琥がこんなに大きな殺気を放つなど今までにないし、これからもないと思っていた。一体何が。

「くそ・・・術中、ってことか」

穂琥に向けて刀が振るえる訳のない薪は握っていた舞姫を少し下げる。

「ようこそ、我が城へ」

聞きなれない声がしたのでそちらを睨む。おそらくこの声の主こそ『主』と呼ばれていた男だろう。うっすらと浮かび上がる影。それに薪は殺気を込めて睨む。

「我の名をお伝えしなかった事を深くお詫びいたします。我は李湖南と申します」

「お前・・・以前に会ったよな?」

「さすが、スウェラ様!いえ、シン＝フォア＝エンド様、とお呼びしますか」

影の口元がにやりと釣りあがったのが見えた。のどを鳴らすように笑う。

「穂琥に何をした」

「何、少しいじっただけですよ。簡単ですね?心に迷いや不安があるとそれを少しつつくだけ簡単に壊れてしまう。いや、実に脆い」

「穂琥を返せ・・・!」

薪の言葉に李湖南はただ笑うだけ。

「ただの手ごまに過ぎませんよ。でも貴方は違う。配下、いえ、仲間になってはいただけませんでしょうか?そうして頂ければ穂琥様も無事にお返ししましょう」

「承諾すると思っているのか?」

「でしょうね。穂琥様を無事に返すという保証もないですしね。良いでしょう。ではまぁ、死合いしてもらいましょうかね」

李湖南はただ笑う。薪はふっと殺気の感覚を得る。そして下げていた舞姫が勝手に振りあがる。

高い金属音。どこまでも洗練とされた美しいその木霊する響き。しかしその響きは死の誘い。刀と刀が激突する命の駆け引きの音。

穂琥がすさまじい勢いで刀を振るってくる。こんなに殺意を抱かせているものは一体何なのか。

「穂琥・・・！目を覚ませ！穂琥！」

「いやだ・・・全部嘘だ、何もかも・・・！これは薪ではないんだ・・・！！」

ただひたすらに否定を繰り返す穂琥の目にもはや正確にものを推し量る力など残っていそうには見えなかった。

ひたすら防御に徹する薪と攻撃を繰り返す穂琥では分が悪すぎる。圧倒的に不利なその状況に薪はついに右腕を切り裂かれる。飛び散る鮮血がいやに美しく見えたのはなぜだろうか。

全てが幻。だからその全てを壊すんだ。何もかもなくなってそうしてやっと会えた薪がきっと本物だ。だから今は目の前に現れるモノは全て斬る。何を言われても。

一体どうしたら正気に戻すことが出来るのかがわからない。李湖南を叩けば何とかなるだろうか。いや、穂琥の目からそういう気配は感じない。最早これは暗示の類。穂琥自信に何とか正気に戻って

もらわない限りきっと無意味。故に薪は今ひたすら穂琥の刀をよけることしか出来ない。穂琥の刀に迷いはない。いつもこのくらいなら自信だって持てるだろうにと皮肉な笑いを浮かべる薪。

どれだけ斬られた事か。ひとまず慤夸紋だけは斬られないようにと必死によける。あそこにかすればそれだけで致命傷になる。それが巧伎の残した薪への呪い。そうやって庇っているものが多すぎる薪に迷いのない穂琥の刀は簡単に切り裂いてくる。

薪の身体はすでに傷だらけだった。もう早く動くことはきっと出来ない。今、無理に治療してもきっと意味はない。とにかく穂琥を正気に戻すことが最優先。

穂琥にかかっている暗示のようなものが何であるのか、それはわからないけれどおそらく目の前の薪を薪ではないものだと認識させられていることが原因だろう。ならば自分が本物の『薪』であるということさえ穂琥にわからせることが出来ればきっとどうにかなるかもしれない。そう思って薪は思考を始める。いかにして穂琥の意識を覚醒させるか。

「何・・・!?」

突然李湖南が薪と穂琥の間に割って入り薪に刀を振るった。そのあまりの速さに薪は驚いたが別に李湖南が早いわけではない。穂琥によるダメージで薪が遅くなっているだけだった。

「甘いですね。前慤夸とは大違い、ですね。これも大切な妹君を護るため、ですか?」

李湖南の腹の立つ笑いに薪は苛立ちを覚える。李湖南は急に屈むと

すごい勢いで突っ込んできた。

気味の悪い感触が右の脇腹に走る。命を掠めるような気持ちの悪い感覚。李湖南の刀が薪の脇腹を突き刺す。そして勢いよく引き抜く。少しだけふらついた薪は何とか体制を整える。あと少し。あと少し上であったなら魂石に当たっていた。薪は貫かれた場所に手を当てて肩で息をする。

李湖南が穂琥に笑いかける。しかし穂琥の目にきっと李湖南は移っていない。ただ恐怖した穂琥の目に映るのは『紛い物の薪』だけ。

「くそ・・・。お前、穂琥に何をしたんだ・・・！」

薪の声を聞いて李湖南は面倒くさそうに笑ってため息を吐いた。

「先ほども言いましたでしょう。心の隙間を少しつついただけ・・」

「それ以上ごまかすな！何をした！」

薪の怒号に李湖南から笑みが消えた。

「ふぅ。如何に慤夸といえどやはり子供は子供、かな？良いでしょう。お教えしましょう。この娘にとっての恐怖。それは貴方を失うこと。見捨てられること。だからその苦痛に浸っていただいたまで。何度も貴方に見捨てられる幻覚をお見せしたまでですよ」

李湖南の言葉に薪は手が震えてくるのを感じた。穂琥に、なんてまねをしてくれたのだと、怒りで震える。

今まで挑発していた慤夸の子供から感じられるオーラが今までと異質になったのを李湖南は感じた。俯いている薪。静かにとても静

かに。それでも苛烈な凄まじい怒りの気配を纏っている。眞稀が膨張して薪を取り巻く風となる。

「何でしょうね・・・？」

李湖南は首をかしげる。そして刀を構えている穂琥にそっと耳打ちする。

―さぁ、目の前の『薪』を倒しなさい。そうしたらその悪夢から開放されるのですよ

ふっと聞こえてきたその声を信じていいのか悪いのか。わからなくって穂琥は泣く。それでも幻覚が消えてくれる可能性があるのなら、刀を振るおうではないか。

穂琥の振り上げた刀が視界に入る。そしてこちらに走ってくる穂琥の姿も目に映る。そして薪は俯いていた顔を上げて一瞬だけその後ろにいる李湖南を睨む。それからすぐに穂琥へ視線を移す。こちらに突っ込んでくる哀れな妹の姿。薪は持っていた舞姫を地面に落とす。そしてその諸手を広げる。

気色の悪い感覚。身体を貫く刀の感覚。それでもそんなことはどうでもいい。薪は広げた腕の中に穂琥が飛び込んでくるのを待ってそっと後から包み込む。

「そんなに臆するな。オレはどこにも行かない。大丈夫。お前が何をしようとも、どんなことになろうとも。オレはずっとお前のそばにいるから」

薪の声が部屋に響いた。まるでその時だけ時間が止まったようなま

ったりと流れが遅い時間だった。

「し・・・ん・・？」

「あぁ、そうだよ。もう大丈夫。助けに来たから」

生気のなかった穂琥の目に生気が宿る。そして強張っている手から力が抜ける。それと同時に薪に刺さっていた刀が光の束になって消える。薪が強く抱いている感覚がする穂琥。やっと本物の薪に会えたのだろうか。

「はっ！？し、薪！？」

やっと感覚が覚醒してわかった。自分が薪に一体何をしたのか。それに気づいて穂琥は抱きつく薪から離れて傷を見ようとしたが薪が離してくれなかった。

「し、薪・・・？私・・あの・・・傷を・・・・・・・」

「悪かった」

「え？」

「オレがお前を不安にさせた。もっとちゃんと。こんなことなんとも思わないくらいちゃんとしていればよかったよな。もう二度とそんな不安はさせないから。二度と」

薪の声がひどく弱い。耳元でしゃべっているから聞こえるものの普通にしていたらその声はきっと聞こえなかったものだろう。そして薪はそっと穂琥から離れるとそのまま李湖南の方へ歩いていく。そんな薪の目を見たとき、穂琥はぞっとした。表現の出来ない恐怖。薪の目はいつもと違う『漆黒』の瞳をしていた。

「こ、黒眼・・・！」

第二十九話　黒き目の強大たる力

薪が以前、紅眼よりも使いやすいといった力。薪の有している最高峰の力。ただ、その使い方を誤ってはならない危険な力でもある。

黒眼、と穂琥がもらしたことで李湖南も少しあせりを見せた。その焦る意味もよくわかる。恐ろしいまでのその纏う気配に完全に呑まれてしまっている。呼吸さえも忘れさせる圧倒的な力。その力を前に穂琥は心底恐怖した。今まで出会ってきたものの中でもここまで凄まじい殺気と眞稀を感じたことがない。それを放っているのが薪であるということが恐ろしくてたまらない。

伏せがちの薪の目が完全に上を向いて李湖南を捕らえたとき、恐らく李湖南は終わる。生死は関係なく。とにかくこの李湖南という核は完全に壊れる。それだけにとどまればいいのだが。穂琥は薪にそんなことをさせたくなかった。恐らく自分が原因。あんな小もない術に掛かって薪を怒らせたことが原因だろう。だから今の薪を止められるのは穂琥だけかもしれない。穂琥は必死に考える。どうすれば薪を止められるだろうか。

考えるまでもなかった。もうすでに遅かったのだ。何とかしなくてはと思った直後に、李湖南の耳に耐えない絶叫が迸った。その声に穂琥は身体の奥から震えが来た。そして耳を塞ぎたくなった。

黒眼の能力。穂琥がチートだ、反則だと意味がここにてわかると思う。この『眼』は他の眼とは異なりただ『合わせるだけ』で相手を押しつぶせる最強の、そして最厄の力。視線がぶつかった瞬間に相手へ苦痛を与える。己の眞稀を相手へ強制的に流し込み、相手の眞稀の流れをめちゃくちゃにする。それは生きたまま身を切られる

こととよりも苦痛のこと。人間で言う全身の血液が一気に逆流を始めるということ。あるいは血管のかに多量の水が浸入することに等しいかも知れない。

一層死んでしまったほうが楽かと思えるくらい苦痛が全身を駆け巡る。とめどなく荒れ狂う薪の眞稀が全身を確実に崩壊していく。

「薪！やめてぇ！！」

穂琥の悲痛の声が薪の耳に届く。はっとして薪は閉眼する。しかし薪の眼からは無茶な開眼による涙がとめどなく溢れていた。意識が狂う。薪は閉眼したは良いがどこを見て良いのかわからずぼけた視界が広がるだけだった。そうして意識が少しだけ遠くなる。これが黒眼のデメリットかもしれない。己の眞稀を相手へ強制的に流し込むということは己の眞稀がどんどん減っていくということ。力を失うということ。無論、時間が経てば眞稀など回復するが冷静さを失って完全に怒りに任せて押し込めばそれの量を回復するのにはずいぶんな時間が掛かってしまうことだろう。

穂琥は倒れた薪を抱えて崩れ落ちる。

「馬鹿！薪の馬鹿！馬鹿馬鹿馬鹿！！」

薪の頭の上で涙をボロボロこぼしながら穂琥が叫んだ。桃眼を開いて薪を治さなければ。開いている眼からは疲労による涙が溢れ出ている。しかしその眼は焦点が合っておらず穂琥の不安をあおった。

物音がしたのはいざ、薪を治そうとしたときだった。あわてて振り向くとふらふらとしながら立ち上がってくる李湖南の姿だった。

「そんな・・・！？」

「ふふ・・・さすが、としかいえませんね・・・・ぐふっ・・・」

李湖南は吐血をしながら笑っていた。恐らく壊しきる前に穂琥が薪を止めたので李湖南のほうも重症になるまでもなかったのだろう。それがよかったようなよくないような。穂琥は複雑な心境に駆られていた。

「薪様の治療はさせませんよ・・・」

弱い声で李湖南はそういった。穂琥はその言葉にもう攻撃をする。確か、李湖南は薪を仲間に入れたいと思っていたはず。それならば今は治すことを最優先にするべきだと。

「いや・・・今の、状態のほうが・・・洗脳しやすい。治すのはそれからだ・・・。もし、それで・・・。失せてしまうよう、なら。いりません」

李湖南は途切れ途切れにそういう。穂琥の眼にぐっと力がこもる。

一体自分は何のために薪に付き合ってもらって修行をしたのだろう。これじゃ意味がないじゃないか。結局薪を護ることなんて出来ていないじゃないか。護られるばかりで。傷つけるばかりで。

こんなことをするためにここについてきたわけじゃない。何も出来ない自分が惨めでしょうがない。悔しくて仕方がない。

眼にくっとちからを入れる。さぁ、開眼だ。こんな情も徳もない馬鹿には付き合ってなどいられない。早く、薪を助けなければならないのだから。

李湖南が飛ばしてきた眞稀。穂琥はそれを触れずに微動だにせずに飛散させた。

「何！？」

突然の穂琥の眞稀の向上に李湖南も言葉を詰まらせた。

「私はもう、嫌なの」

薪を傷つけて苦しい思いをさせて。辛い事は全て薪に押し付けることが。ゆっくりと立ち上がった穂琥の瞳は柔らかく閉じられたままだった。

「黒眼を受けた貴方を助けようと思った。幾ら敵でもそんなことは薪の意思に反する。でも。それももうやめる」

「ほう？ではどうするかね？」

李湖南は笑う。少しだけ汗ばんでいることからまだ身体の中に薪の眞稀が残っているのかもしれない。それでも今はどうでもいい。

薪は傷つけることを極度に恐れた。敵でも味方でもどちらでも。でもそんなこと弱い穂琥には言えない。過去の過ちのない穂琥には理解できない。薪がどんなにそれを嫌だといっても薪をこんな風に傷つけて苦しめているような奴を野放しになんて絶対にしたくないし、簡単な刑罰で終わりになんてしたくない。だから、薪の代わりに自分が鬼になる。どんなことも咎める鬼になる。

「私は貴方を許さない」

穂琥の強い言葉。李湖南は一瞬だけすくんだが、指をぱちんと鳴らすとその周りに眞匏祇が集結した。

「許さないからなんですか？我の周りには信頼しゆる壁がありますよ？」

「信頼？果たして誰のことを言っているのかしら。笑わせないでよ。己を護るためだけの『手駒の盾』でしょう。そんな安い壁で私の怒りを防げると思わないでよ。言ったでしょう。私は貴方を絶対に許さない」

穂琥の苛烈な力が当たりに迸る。

薪がいなければ何も出来ない。それくらいわかっている。でも逆に。薪がそこにいてくれれば。薪が後ろで見守ってくれていれば。何だって出来る気がする。

「何を世迷言を。そもそも傷つけたのはあなたでしょう？穂琥様」

「えぇ。そうよ。だから私は私を一番許さない。だから本当ならここで死んで詫びたいくらい。でもそれをしてはならない理由がある。それにそんなことをしたら薪が嘆くわ。私は生きてこの罪を償う。薪と同じように」

穂琥のその覚悟の眼を見て李湖南は怯んだ。

こんな下らない争いをさせたこと。穂琥に刀を向けさせたこと。そして何より、黒眼を開眼させたこと。この三つ。これを咎として今から本気で李湖南を叩く。李湖南が今、ひどくにくい。それでも今このやられた三つ分以上は決して叩けない。

―遣られた分はやり返せ。その代わり遣られてない分は決してやる

な。

それが薪の意思。薪の想いなら。それを否定するような行為はしたくない。だからこの散発に全てを載せて全てを込めて終わりにする。

―絶対に許さない

穂琥の眼がゆっくりと開く。この長い時で溜めた眞稀が『眼』へと力を変える。その開いた眼を見て李湖南は言葉を失っていた。見たこともないその『眼』に恐怖心を煽られていた。

このとき。ぐったりとしていた手がわずかに動いたのを誰も知らない。

「さぁ、お仕置きの時間だよ」

穂琥の手がゆっくりと上がる。眼からその穂琥の手へと眞稀が流れこむ。その力の大きさは計り知れないものだろう。

「大歳(たいさい)！」

穂琥が声を上げた瞬間、穂琥の突き出した手から眞稀が放出される。李湖南は中を舞った。周りを固めていた眞匏祇たちはひどく驚いた顔を青ざめさせて今出来た出来事を理解しようとしていた。

「太白(たいはく)！」

有無を言わさず二言目が穂琥から発せられる。それに伴って李湖南は落ちかけていた身体がさらに上へと吹っ飛ぶ。そしてむなしくも地面に叩きつけられる。

「ぐ・・・!!こ、こんなこと・・・たったの二発でこれほどまで・・・。いや、だが二発でこれ。後一発でできるかな?」

ふざけた笑いが李湖南の顔に浮かぶ。しかし今の穂琥にその笑みは見えない。笑っていればいい。好きなだけ余裕をかましていればいい。知らないのだ。次に撃つ穂琥の込める眞稀の量を。

「黒眼を開眼させた罪は重いわよ」

穂琥の重たい言葉に李湖南は笑みを消す。鮮烈だが鋭い碇を含めた穂琥の眞稀は周りにいる眞匏祇たちの膝を折らせた。李湖南だけはかろうじてその場に立っていた。しかし、それだけ。立っていることで精一杯だった。

「本当はあなたを殺してやりた。でも薪は生きているもの。命はみな平等。だからあなたを殺すわけにはいかないの」

穂琥は感情のあまりこもっていない表情で李湖南に向かって最後の眞稀を放つ。

「太陰!!」

放たれた眞稀に李湖南は宙を舞った。どさりと地面に叩きつけられた李湖南は起き上がってこなかった。穂琥はそっと手を下ろして目を細める。本当だったらもう一発打ち込んでやりたい。でも、だめだ。これ以上遣ってしまったら本当に殺してしまうかもしれない。

「ひゃはっ・・・ひゃはははは!!」

穂琥は驚きで固まった。そして勢いよく振り向く。すると寝そべっている状態で李湖南が狂ったように笑っていた。穂琥はその笑い方にだんだん怒りがわいてきた。

「何よ！」

「ひゃはは！我は生きている！何度でもお前らを追い込んでやる！何度でも苦しめてやる！ひゃはははは！！」

まだなのか？こいつはまだ懲りていないのか？

穂琥の中にけたり狂う怒りの炎が穂琥の頭をおかしくさせた。もう、こんな奴、この世から消えてしまえばいい。そんな風に思った。そしてぐっと手に力を込めて眼から眞稀を送る。四発目の攻撃。

「歳け・・」

言い切る前に言葉が切れる。驚いたからだ。後ろからそっと包むようにして穂琥の手に血が通っていないのではないかと思えるくらい冷たいでも、どこか温もりを感じる手がかぶさる。そしてあげていた手をそのまま下ろされる。

「もう止せ」

「し・・・ん・・・？」

後ろから抱きかかえるように穂琥の攻撃を止めた薪。

「これ以上はだめだ。そんな勢いのを当ててはだめだ。オレなんかのために穂琥がそこまでする必要はない」

聞き取れないくらい小さな声で薪は言う。途切れ途切れ息が荒いこ

とを見ると恐らく経っているのもやっとなのではないかと思えるほどだった。

穂琥の手を下ろすと変わりに薪が手を上げて未だに気味悪く笑っている李湖南に向けて、一瞬眞稀を放つ。その瞬間、李湖南は静かになった。

「この程度の眞稀で気を失うんだ。もういい・・・」

眞稀を放った手をそのまま穂琥を抱く。穂琥は冷たい薪の体温が怖かった。このまま消えてしまうのではないかと思えるくらい冷たかった。いつも暖かい薪のぬくもりが。

「うん。わかった。もう帰ろう」
「あぁ」

薪と穂琥は周りのものに背を向けて帰路の道を行く。それと同時に李湖南の力を失ったこの建物が今にも崩れ去ることを理解した李湖南の哀れな部下たちも急いでここから脱出することを選んだようだった。

「どうしよう・・・」

穂琥は小さな声で言う。隣で担いでいる薪はすでに意識を手放してしまっている。先ほど意識を取り戻したことが奇跡なほどだった。建物はすでに崩落を始め出口を見つけることが出来ない。穂琥に移動術は使えない。使えるようになっておけばと後悔したところで今は何も出来ない。穂琥は急いで走った。上を目指して。

第三十話　護り護られ交差する想い

何度も繰り返す地鳴りと崩落音。階段は崩れ落ち、薪を抱えて上に行くだけの力が穂琥には残っていなかった。先ほどの開眼が桃眼であるはずがない。そして穂琥の提唱した言葉は三つ。残り五つ。つまり全部で八つ。この八つの提唱を一つ一つ言っていくごとに眞稀が倍増していく。しかしそれは同時に使用者にも負担をかけることとなる。

出口を探して走っている穂琥の耳にものすごい爆発音が聞こえた。地震が起きたような足元のぐらつき。そして嫌な予感がする前に穂琥の足元は壊れて崩れ落ちた。極度の疲労のせいで落ちている間に意識が薄らいだ。

地面との接触感を得る。あまりの疲労のせいか、痛みを感じなかった。

―あぁ、もうさすがにだめだな。このまま瓦礫に埋もれてしまうんだ・・・

うっすらとあいていた眼を完全に閉じて。身体の力を抜いた。瓦礫が落ちてきて全身にその痛みが走るのを待つ。

いつまで経ってもその痛みがこない。それどころかどこか暖かい眞稀を感じる。慣れ親しんだ落ち着きのある眞稀を。穂琥はそっと眼を開ける。

「薪・・・？」

「よう」

胡坐をかいて座り地面に手をついている薪の姿が眼に入った。辺りを見回せば薪の作った結界でドームが出来ており瓦礫が落ちてくることはなかった。

「薪！良いよ！もう・・・！私が遣るから・・・！」

「何言ってんの。お前じゃ無理だって。繊細な技だし。特に今の穂琥の眞稀じゃ出来ないよ」

薪の優しげな声が穂琥に耳に届く。先ほどとは違ってはっきりと聞こえる声。

「ありがとう」

薪の声。はっとして薪を見ると薪は地面から手を離して眞稀を解除する。すると瓦礫は再び開いた空間に捻じ込もうと振ってくる。そしてそれらを粉砕して何とか形成を保ったところで薪は一息ついた。

「さて。何があったかわからないんだ・・・。お前、わかるか？」

「えと・・・」

穂琥は出来うる限り正確に物事を伝えようと思った。それがひどく難しいことだと知って。李湖南が憎い。だからどうしても平等な言葉を言うことが出来ない。でも薪はそれすらも汲み取って話を聞いてくれていた。

とにかく言えることは言った。ただ、無意識だったので李湖南に放った時に言った言葉までは思い出せなかった。薪はそれを眼を伏せて聞いていた。

「当てようか」
「え？」
「大歳（たいさい）、太白（たいはく）、太陰（たいおん）。そうだろう？」
「え・・・あ・・・うん！そうだ！」
「まぁ、オレも少しだけ覚醒していたからなんとなく聞こえた気がしたし、お前の『眼』から感じる気配がそれだからきっと間違いない」
「え？」

薪はこんな状況だというのにどこか嬉しそうに微笑んだ。それに穂琥は首をかしげると薪は過去に黒眼に匹敵する力を紫火が有していたと話したことを語った。それが今回穂琥の使った力。

「名前を白眼（はくがん）という」

薪はそっと微笑んで自分の目を押さえてどこか切なくどこか嬉しそうに言う。

「母上の血だ。穂琥はそれを強く受け継いだ・・・。よかった、母上の力を継いでくれて。父上ではなく」

薪の最後の言葉は皮肉に満ちている。それは逆に薪自身をあらわす。穂琥の正反対、つまり父の血を濃く引いているのが薪であるから。穂琥はそんな薪の心を感じ取って小さく頷いた。

白眼の力。八つの提唱を経て相手へダメージを与える強き力。最初の三つは先ほどの三つとして残りの五つ。歳刑（さいけい）、歳破（さいは）、歳殺（さいさつ）、黄幡（おうばん）、豹尾（ひょうび）。もっとも、これらを紫火が使ったことなどほとんどなく、歳破までを提唱されたものなど存在しない。それほどまでに絶大なる力なのだ。

「オレが思うにこの数ある眼の中で最強の力だと思うよ」

薪が本当に嬉しそうに語るその姿を見て穂琥はどこか胸を撫で下ろすことが出来たような気がした。

「さて。ここを出ないとな」

「どうやって出よう？こんな瓦礫まみれじゃ・・・」

「あと少しでオレも回復できるからそれまで待ってて。そうしたら上に移動術で上るから」

眼を閉じて回復にいそしむ薪の姿を見てやっと考える時間を得る。いや、本来ならこんな考える時間などほしくはないのだが。

果たして自分は役に立てたのだろうか？邪魔しかしていないのではないだろうか？薪をここまで追い込んだのは他でもない自分だ。眞稀が互いに切れてしまっている今、治療するわけにも行かずましてや寝るわけでもなく薪はただ目の前に座って眼を伏せてじっとしているだけ。そんな薪の身体には生々しい傷で覆われている。血は固まっているようだが薪の気持ち的には・・・。

「何変な顔してんだよ」

突然声を掛けられて顔を上げる。薪が眼を開けて一直線に穂琥を見ていた。そんな真っ直ぐな眼を薪に向けられて穂琥は眼を反らして逃げる。

「気にすることはねぇよ」

まるで穂琥の心を見透かしたように薪が言う。今度は穂琥が薪を見

て薪が眼をずらした。

「穂琥は十分遣ってくれたよ。そんなくらい顔する必要はないよ」
「でも・・・薪の身体・・・」
「まだ頭はくらくらするけどもう少ししたら替装してなんとかするよ」

穂琥は薪の腹に眼をやる。血で染みて真っ赤になっている。

「そら、痛かったけどな。李湖南の奴、思いっきり刺してくるからさ」
「そうじゃなくて・・・」
「は?オレは李湖南にしか刺されてねぇもん」
「え?!」
「オレの体内には李湖南の眞稀しか残ってねぇし。ということは李湖南にしか刺されていないって事だろう」

眞匏祇が眞稀を込めて相手を刺した場合その刀に乗せられて相手の体内に勝手に眞稀が流れ込む。それは本当に微弱なもので少しの時間が経てば消えてしまうもの。

「だからオレは李湖南にしか刺されていない。お前がそこまで気にする必要はないということ。わかるか?」
「う、うん・・・」

未だに落ち込み気味の穂琥を見て薪はため息を吐く。仕方ない。こうなったら昔の傷口を開くしかない。

「おい」

落ち込む穂琥にこちらに意識を集中させる。そして慤夸紋があるところを穂琥に見せる。慤夸紋ということは無論、毅邏の呪印もそこにある。

「はて?オレは三歳のときに誰を殺した?」
「違う!あれは薪じゃなくて・・・」
「それ、今のお前に否定できる権利ねぇぞ」
「う・・・」

確かにそうだ。きっと状況は少し違うけどきっと意味合いは同じなのだろう。

「な?気にするな」
「・・・うん。わかった。ありがとう」

穂琥の顔に少しだけ浮いた笑み。少しは落ち着けたようでよかったと肩を落とす薪。

「私ね・・・思ったの」
「ん?」

薪を護りたい。それは今でも変わることはないし、これからも変わることはないと持っている。でもさっきまでの穂琥の心はひどく醜く歪んでいた。護ってほしい。護られたい。ずっと薪の後ろにいたい。散々護ると言っていたくせにいざとなったらそんな臆病で。心のどこか奥できっと薪が助けてくれるとか思っている自分がいる。いざとなったら護って言うずるい言葉が。護ってもらえるっていう甘えた考えだけが浮かんでくる。

「サイテーだよね」

自嘲する笑いを浮かべる穂琥。薪は動きにくいであろう身体を無理に動かして穂琥の前に来ると穂琥の頭にて置いた。

「ずるくない。甘えてなどいないよ」

優しい薪の言葉。こういう言葉を期待してしまう自分がすでに醜い。

「オレだってそう思うことはあるさ。そういう感情は当たり前なんだよ」

「薪も・・・？」

予想外の言葉に穂琥は震えた。

「おうよ。穂琥が白眼開眼したのはすごい嬉しい。オレだってさっき、黒眼で暴走して穂琥に護ってもらったんだぜ？」

感情なんて生きていればさまざま存在する。憎んだっていい。殺してやりたいって思ったっていい。ただ、それを自分の中で認めて肯定して遣ればいい。そうして自分の中にもそういう感情はちゃんと存在するんだということを認識した上でちゃんと前を向いて歩いていけばいい。そうすることで傷ついた誰かを庇い護ることが出来る。護ってもらう安堵感を知っているから護ることが出来る。それを知らないものに本当に護ることなどは出来ないのだ。

「ただ、一つだけ。今回の件で気に入らないことがある」

薪にしては妙な言い回しだと思って涙眼を薪に向ける。そこにあるのはどこまでも深くどこまでも優しい空色の瞳。

「オレの変わりに鬼になる。そんなこと、思っちゃぁ、いかんよ」
「あ・・・」
「気持ちはわかるんだ。でもやっぱりだめだよ。お前はお前。穂琥という存在なんだ。だからそれを壊すようなことはしないでくれよ」
「・・・・うん」
「穂琥はオレを支えてくれているんだ。しっかりね。だからオレは真っ直ぐ立っていられる。だから悩むな。そういうことで悩まれるとオレも辛い。な？」
「うん」

もう涙でちゃんとした答えすら出来なかった。穂琥の泣いている背をそっと包むように薪が包む。どこまでも暖かいそのぬくもりで。

さっと替装する。血まみれだった服装が一気に新品になる。

「さて。そろそろ上に出よう」
「平気？」
「あぁ」

薪に掴まって移動術で外に出る。外は何にも変化がなくて驚いた。もともと先までいた場所は眞稀で作られた特殊な空間。薪と穂琥が修行をしていた場所と同じようなもの。だからあそこの空間で如何に眞稀を放ったところで外に影響は出ないということだ。

「ふう・・・」

薪はその場に座り込んでしまった。如何に薪とはいえ、こんな短時間で回復できるわけもない。穂琥は焦って駆け寄ったが薪は困ったような表情で大丈夫と答える。

薪はさらにもう一度替装する。今度は眞匏祇の格好ではなく人間の格好。故に特徴的な髪も目も。普通の茶色身がかった黒に変わった。穂琥も同じように替装して人の格好になると薪に肩を貸しながら自宅へ目指して歩き始めるのだった。

薪の家に着くまではよかった。しかしその後が大変だった。

「薪?!ちょっと?!」

玄関に入ってすぐ、薪は何かが切れたように倒れこんで意識を失ったしまった。穂琥はそんな薪を必死で駆けて布団まで運んだ。

「もう!気を失うにしてももう少し余裕を持って・・・余裕を・・・」

穂琥は苦情の言葉を途中で切る。薪が昏倒することなどあり得ないのだ。それが今こうして昏倒したということは本当に限界だったのだ。玄関に入るまでは意地でも意識を手放さないように。それこそ余裕なんてなくて。

「眼、覚ましてよ・・・」

不安げな声だけを残して穂琥は部屋を後にした。負担を掛けないように。

穂琥は薪を刺した。どんな理由であれそれは変わる事のない事実。それを物語っているのが己の身体。替装して誤魔化していたが実際穂琥は血まみれだ。薪みたいに替装するだけで身体の汚れを払えるほど器用ではない。それを落とすべく風呂に湯をはりに行く。

鏡を見て絶句する穂琥。薪をどれだけ切り裂いてしまったのかよ

くわかった。今の髪は茶色がかったさらっとした髪をしているがそれが血で黒っぽく固まり髪を何束にもまとめていた。

シャワーでとりあえず媚び付いた黒い塊を落とす。案外血液とは固まると落ちにくいものだった。何とかしてそのへばり付いたものを落として綺麗にすると湯船につかる。以前と異なり今回はあまり怪我がなかったけれどそれでもあちこち怪我をしていてお湯が沁みる。

しばらく悶絶して何とか沁みるのを我慢できる程度まで来るとやっとゆったりとお湯につかる。そうしてふっと考える薪のこと。きっと眼を覚ます。今は疲労で倒れてしまっているだけだ。きっとそうだ。

「私って役に立っているのかなぁ・・・」

【奴がそう言ったのならそうなのだろう】

ふっと聞こえた声に穂琥は驚いた。穂琥の身体の動きとは別に水面が微かに揺れを見せる。そして僅かな波紋を作って降り立った一つの影。水面に触れることなくその水面の上に立つ黒い影。穂琥はそれの登場に驚いて顔を不自然に上げる。

そこには威圧感を眼に灯した綺邑の姿があった。

「き、綺邑・・・さん・・・?!どうしてここに・・・・?」
「少し用が有ったからだ」
「え?!薪を治しに・・・」
「戯け。何故私があんな奴を治さねばならぬ」

威嚇に近いその言葉に穂琥は萎縮した。綺邑は本当に言葉の一つ一つが痛いくらいに強い。綺邑は確かに薪に対する扱いが随分とひどい。どれだけ嫌いなのかと突っ込みたくなる。

「聞きたい事が有る」

綺邑が突然尋ねてきたので穂琥は少し身構えた。

「邑頴（ゆうえい）のことだ。瞑、と名乗っていたか。奴は貴様等の戦いに居たか？」

綺邑の鋭い声が風呂場で木霊する。その強さに負けそうになりながらはたと穂琥は思考がとまった。そういえば。

「居なかった・・・」

綺邑はそれを聞いてふっと目を伏せた。

「邑頴が李湖南程度の餓鬼の元に居るのに飽きたのだろうな。いや、意味を達成したのかもしれんが。奴の事など詳しくも知らんし知りたくも無いがな」

綺邑はそっぽを向いて冷たくそう言った。

「まぁ、それの確認をしに来ただけだ。帰る」

そう言って綺邑はふっと水面を揺らした。

「あ、待って！！」

穂琥の声に綺邑は答えるように姿を消さなかった。その代わりに何か用かという鋭い目つきを向けられてそれに耐える穂琥の心は折れそうだった。薪の眼光より強いその眼に穂琥は必死になって耐えた。

「あ・・・・り・・・。ありがとう・・・」

「・・・・は？」

綺邑にしては珍しい疑問系の返しだったが穂琥はとにかくその綺邑の目つきが怖かった。鋭くて。

飲まれるな・・・呑まれ・・・呑まれてはだめだ！！いけない！しっかり意思を持つのだ！

そんなことを自分に言い聞かせる穂琥だった。あまりに綺邑が凝視してくるのでだんだん萎縮していく自分が少し惨めに思えた。

「開眼、一つ。増えたのか」

綺邑にそう言われて驚く。しかし薪も認める力の持ち主なのだからその位わかってもおかしいことではないか。穂琥はそっと頷く。そして綺邑は白眼であることまで言い当てた。穂琥はそれを肯定する。

「開眼しろ」

突然綺邑にそれを言われて穂琥は身を引いた。

「そんな・・・」

「嫌だと言うならそれは構わん。強制するつもりは無いが。ただ今の儘使うのであればお前、命落とすぞ」

綺邑のその脅しに穂琥は肩をびくっと震わせた。力が増大する白眼。使い方を誤れば眞稀の消費のしすぎで死に至る。そういうことだ。

「眼を閉じろ」

綺邑にそう言われて穂琥は仕方なく眼を閉じた。すると眼に熱いものが乗った。

「其の儘開眼しろ」

綺邑に言われた通り白眼を開眼する。そうして開眼してる途中に穂琥は関係の無いことが頭をよぎった。

―あぁ、今眼に乗っているの、綺邑さんの手だ

ふっとそれが取れる。そして閉眼するように言われて穂琥は言われるままに閉眼する。そして綺邑は今から２４時間、決して開眼するなと忠告した。無論、桃眼も。そうすれば普通よりかは自由に扱うことが出来ると言う。それに穂琥は礼を述べる。この死神、綺邑に対しては以前、尋常ではない嫉妬を抱いていた。しかしそれが今では随分となくなってきていることに薄々気づき始めていた。

しかし今はそんなことどうでもいい。ただなんとなく穂琥は無意識に綺邑へ言ってしまった。

「綺邑さん、手、あったんだ？」

これにはさすがの綺邑も返す言葉が無かった。

「貴様、馬鹿か？」

薪よりも強烈な一言に穂琥はしり込みする。なんたって今まで全身をすっぽりと覆った服装で戦うときや薪への攻撃時も手は一切使っていない。全て足だけで攻撃をしている。だからてっきり手がないのかと穂琥としては思ったのだった。

綺邑は完全に貶すような目つきで穂琥を見下ろし、姿を消した。さすがに今の質問はまずかったと思い直す穂琥だった。

ふっと、消える寸前。綺邑は肩越しに穂琥を見た。どうやら若干自分の言動に落ち込んでいる様子だった。そんな穂琥を眼にして。そんな穂琥にへんな質問をされて。

―私の見当は違えたか、見込みを違えたか？

そんな疑問を浮かべたのだった。

第三十二話　その眼が開くまで

風呂を出たのはそれから随分経ってからだった。完全に寝入ってしまった穂琥。そんな風呂場で起きた不可解な出来事。

すっかり寝てしまったのでかなり長い風呂となってしまったにもかかわらず身体が冷えることなくお湯は温かだった。そんなことに疑問を持ちつつもう一つ。こっち疑問はすぐに解消されたのだが、全身の怪我が傷跡なしに治っている。

「治してくれたんだ・・・。どうせなら薪を治してくれればよかったのに」

口を尖らせながら穂琥はそう思う。それでも感謝の気持ちは忘れていないつもりだ。

翌日。やっと出来たゆとりの日。散々疲労した身体を休ませてやろうと穂琥はその日を堕落に使った。

ただ何もしない日が今までにあっただろうか。薪と出会う前にもこんな『何もしない日』などなかった。そして思うのだ。

「ありえない！最悪だ！こんな堕落した日常を薪は認めない！」

そんな風に下らない考えをしていたとき、声が聞こえる。

【お前、毎度この様な生活を送っているのか？】

聞こえてきた綺邑の声に穂琥は肩を震わす。一つ聞き忘れたことが

有ったと綺邑の声がする。それに答えようとして声を出して、自分の発している声が綺邑に届いていないことがわかる。いつも薪が出していたあの独特の響きのあるしゃべり方。恐らく眞稀を使っているのだろうが、穂琥にその方法はわからない。そうやって試行錯誤していると呆れた表情で綺邑が顕現してくれた。

「あ、すみません・・・」

「ふん。お前、認可の門を触れずに開けたとは本当か?」

穂琥は意外なその質問に軽い動揺を混ぜて肯定した。何故それを知っているのかたずねると綺邑は簾堵乃槽耀から聞いたと答えた。

「神を呼び捨て?!」

穂琥の突拍子もない声に綺邑は眼を軽く細めた。

「違えぬわ」

穂琥はその言葉を聞いて少し考える。そして彼女もまた、死神。神の末端に座するものであることを思い起こす。

「あの・・・」

「ん?」

穂琥は自分の身体の傷を治してくれたことをたずねる。薪の傷は治さないと豪語しているのに何故穂琥の傷は癒してくれるのだろうか。

「知ってどうする」

穂琥自身に綺邑からそんな買われるような事はしていないと思える。

薪のほうが余程だ。嫌われていてもおかしくないのは穂琥のほうだ。

「別に」

綺邑は短く答える。用件を聞き終わった綺邑はその場を後にしようとする。それを穂琥は再び止める。それに鋭く睨まれて押し負けそうになるが穂琥は必死でそれに耐える。

「お仕事の、ほうは・・・・？」

少し身を引きながら綺邑にたずねる。少し不可解な表情をしながら今は空いていると答えた綺邑。

「何故？」

「いや・・・あれほど前に出ることを嫌がっていたのに私の前には随分出てきてくれるんだなぁって思って。あっ！いや！別に、嫌とか悪いとかそういうんじゃないよ！？」

突然弁解を始めた穂琥に綺邑はただ冷たく視線を送る。

「何も言っていないが。用はそれだけか？」

「あ・・・・」

まだ何かあるのかと言いたげな眼で見られて穂琥は胸が痛む。そして死に物狂いで言葉に出す。

「あ、明日も・・・来てください・・・」

穂琥のその言葉に綺邑はしばらく沈黙した。

「ふん」

綺邑はそのまま姿を消してしまった。その態度に穂琥は申し訳ない気持ちになった。やはり悪いことを言っただろうか。迷惑だっただろうか。小さく深いため息をついて穂琥は布団にもぐった。

第三十三話　敬意を払う存在

翌朝。眼が覚めたのは6時少し前だった。それに感動した穂琥は自分を自分で褒めていた。歓喜に満ちた穂琥はすぐに硬直するのだった。

昨晩。綺邑にけしかけた事を思い出して沈む穂琥だった。返事もしないで帰ってしまったし。

「あれ・・・？」

ふと思い出す穂琥。過去に薪がなんかそれに関することを言っていたような・・・。

あまりにがさつな綺邑の態度を薪はなんとも普通に反応している。それがあまりにもありえなくて尋ねた。綺邑は全く以って返事をしていないのにどうして勝手な判断が出来るのか。しかし薪はそれを否定した。返事をしていないということはそれが肯定。綺邑の是であるということ。もし綺邑の中で否定すべき事柄であるのなら問答無用で却下の言葉を振り下ろす。

ということはだ。昨晩綺邑は否定もせずにその場からいなくなった。ならば来てくれるということなのだろうか。

ふっと気配を感じる。どこか刺激的で攻撃的。それでもどこか柔らかく神聖な。そんな気配。そちらに眼をやるとふわっと降り立つ綺邑の姿が眼に入る。毎度思うのだがこの彼女の登場、顕現するときの姿はどこか美しい。

「き、来てくれたんですか?!」
「来いと言ったのはお前の方だろう」
冷たくあしらわれるので萎縮する。
「あ、あの・・・も、もしよろしければ・・・その・・・ぉ・・・」
綺邑の視線に負けて言いたいことをロクにいえない穂琥。そんな穂琥に綺邑は呼びかける。それに過敏に反応する穂琥は背筋を伸ばして綺邑の言葉に耳を傾ける。
「何故、私に敬意を払う?」
「え・・・?」
綺邑の突如のその質問に穂琥は少し固まる。
幾らなんでも穂琥程度の眞匏祇が死神である綺邑を呼び捨てにしていいものか疑問でもある。薪は別だが。慤夸だし・・・。なんとなく、というのが正直の本音だった。
「ふぅん」
綺邑はそういうと目線をはずした。以外にも綺邑が『ふぅん』などと間延びした声を出すとは思ってもいなかったことなので少し聞き入ってしまった穂琥だった。
「私なんかに呼び捨てとかタメ語とかヤじゃないですか?」
「別に」

綺邑は否定に関しては即断即決のような気がした穂琥だった。

「敬意など己が本気で払いたいと思った者にのみ払えば良い」

綺邑の回答。それもそうだけれど、その場の雰囲気や相手の感じでもそれらは変動するのではないだろうか。それよりも綺邑のような存在にもそんな敬意を払うようなものがあったのだろうか。神である簾乃神を簾堵乃槽耀とのみ言っていたことだし。それにしては敬意を払うべき相手のことをよく理解しているような気がした。

「過去に一度、居たな」

綺邑はさもどうでもよさそうに答えた。しかし綺邑の言葉の言い回しが気になった。居た、ということは少なくとも過去形。今は居ないということだろう。

「どうでもいいな、そんな事。何故私を呼んだ」

綺邑に鋭く言われて穂琥は言葉に詰まって眉を寄せる。

第三十四話　願いを受け止める

痛い。これを痛いといわないでなんと呼ぶ。

自分のして欲しい事を言った穂琥に凄まじい眼光を放った綺邑。ただ穂琥はその眼に慣れていないだけだということをそろそろ理解したほうが良い頃合だ。

「い、いや！本当に！別にいいんです！駄目なら！」

「お前さ。私は未だ何も言っていない」

綺邑のその言葉に穂琥は呆然とする。そして穂琥の願い出に対して構わないと答えた。それが意外すぎて嘘ではないかと疑った。しかし綺邑は嘘は言わないと答える。

「え？じゃぁ・・・いいの？」

「二度も言わぬ」

綺邑のその返答に穂琥は嬉しくて堪らなくなった。その姿を見て綺邑が未だ子供かとため息をついたことを穂琥が知る由もない。

二つ目の願いでは即断即決、却下。このお方は本当に否定は早い。なるほど、と思う穂琥。確かに否定さえされなければ別に問題はないのだとやっと理解し始める穂琥だった。

「顕現してください～～！！」

「断る。何度も同じ事を言わせるな」

「してください～～！」

「・・・」

さすがにこの沈黙が肯定だとは幾らなんでも思わない。ただひたすら綺邑に頼み込むがさすがに綺邑も否定することも面倒になったらしくただ睨むだけになってきた。

沈んだ気持ちを少しでも晴らしたい。不安を少しでも忘れたい。綺邑に願い出たのは一緒に外を散歩してほしいということ。無論、それに関しては肯定をもらった。しかし、その後の顕現した状態では断られた。当然といえば当然のことだ。眞匏祇ですら知らない死神の存在を人間如きにさらすなど。ありえる話ではないことくらいわかっているのだが。

薪の影響か、粘り強い穂琥は起きてから3時間という時間をただひたすら綺邑への願い出の言葉で埋めた。その意気込みと折れぬ心にさすがの綺邑も呆れた。

「はぁ、仕方ない」
「本当!?」
「その代わり条件だ。お前の眞稀を遣せ」

綺邑から言われた条件。それ自体は別に穂琥としては構わない。ただ、それの意味は?

「私はこの世界で身を置く事には無理を生じさせる。人型を取ると言うことは随分と浪費する事なんだよ」

力をわざわざ行使しなければ人型を取ることは出来ない。しかし、たかが『散歩』のためだけにその力を行使しようとは思わない、思うわけがない。そこでそれを願い出てきた穂琥自身が、その眞稀を以って綺邑に力を渡し人型を形成する、ということ。

「全然構いません！幾らでももらってください！！」

死神相手に『幾らでも』とはよく言えたものだ。無知ゆえか、それとも個性か。どちらにしろ中々面白く興味をそそられる。綺邑は穂琥から眞稀を受け取る。

穂琥の渡した眞稀は綺邑の胸元で小さく玉になっていった。そして圧縮されていきそれは美しい宝玉のような形に収まった。見るものが見れば尋常ではない力の塊。のどから手が出るほどほしくなるような巨大なエネルギーの塊。しかし、それがどれだけすごいものかは穂琥にはわからないし、恐らく綺邑がそれを持っている間はただのガラス玉にしか見えないだろう。

それを完全に珠にすると綺邑の容姿が少し変化する。普段、地面よりも少し上を浮いている綺邑がすっと地面に足を付く。そして着地するとローブを脱ぎ去った。服装はすでに人のもの。普段長く覆っている右の前髪も短くなって両目とも見える。美しい色をしていたその橙の髪も僅かに橙色を帯びている程度の茶色になり、赤く光る瞳も黒く変化する。それを目の当たりにして穂琥は思うのだ。

―綺麗過ぎる・・・てか、格好いい・・・

普段、目元しか見えない綺邑の顔がここまで露になったのを見たのは初めてで以外にも整った美しい顔立ちだった。並の男なら惚れてしまってもおかしくはないかもしれない。女である穂琥ですら魅了されたくらいだから。

「準備はしたぞ」

その容姿にまた似合う低めの落ち着いた声。穂琥はなんだか妙な気分に陥った。そしてその言葉をやっと脳へ伝達するとはっとしたように意識を取り戻す。

「あ、ありがとう・・・ございます。えと、まずご飯食べていいですか?起きてから何も食べていないので・・・」

綺邑はそれを聞いてベッドに腰を下ろして足を組んだ。

「なら私は此処で待っている。元来、私達は食物は摂取しない」

「了解です」

第三十五話　街を歩く

食事を済ませてから綺邑を強制連行して外へ飛び出す。あまりにも嬉しくてはしゃいでいた。そして外に出てからやっと自分のしている行為に気づいて綺邑の手を離す。

「わ、ごめんなさい！私ったら！！」

そう言いつつもはしゃいでいる穂琥。果たして綺邑を相手にこの様に出来るものが他に居るのだろうか。

「行きたいところがあるんです！」

穂琥は嬉しそうにたったかと前を歩いていく。そんな穂琥を身ながらあまりなれない『歩く』という行為に面倒を感じながらも穂琥が何故敬意を払い続けるのか疑問に思っていた。

大きいデパートが最近出来て、そこには巨大な本屋があるらしい。穂琥はそこで本を見たいと綺邑を引っ張る。そこの本屋には確かにこれはすごいと思える量の本がずらりと並んでいる。穂琥が楽しげにその本に眼を通していると名前を呼ばれて顔を上げた。

「穂琥ちゃん！」

「獅場君！」

クラスメイトの獅場。軽い挨拶を済ませて綺邑の存在に気づいて首をかしげる。

「おろ？その人は・・・？」

獅場に尋ねられ、答えないわけにも行かないかと悩む穂琥。とりあえず名前を伝える。その代わり警戒しながら。もし綺邑がそれを却下しにきたらすぐに止められるように。しかし綺邑は止めに入ることもなくただ黙って穂琥と獅場のやり取りを見ていた。

「で？何？どういう関係なん？」

「え・・・っと・・・・・」

「・・・。え～、薪とかと関係あんの？」

強いていうなれば薪から繋がった関係ですが。それを言おうとして綺邑が口を開く。

「知るか、あんな腐れ外道」

「わっほ・・・」

随分な言動に獅場が驚いた顔をしていた。ただやはりその佇まいは美しく格好がいい。故に獅場も少し見とれているような風ではあった。

「そういえば、獅場君はどうして此処に？」

「参考書を買いに、籐下と。穂琥ちゃん見かけたから買っている籐下放置してこっちに来た」

「え～、ひどいねぇ～」

笑いながらレジのほうを見ると籐下がビニール袋を提げてこちらに歩いてきた。そして穂琥に気づき挨拶をした後、薪が居ないことに気づき少し意外そうな顔をした。

「え・・・薪は？」

「あ～、今居ないの」
「そう・・・」

穂琥は薪が保護する。それを知っているからだろう。そして籐下も綺邑に気づき目を丸くする。みんなそうなのかもしれない。

「これから何するの？暇なら食事しない？奢るよ～、籐下が」
「オレかよ！」

獅場の冗談に籐下が突っ込む。穂琥はそれを笑ってみている。

「あ、でも、綺邑さん・・・」
「別に。お前が構わぬと言うのなら私は良いが」

綺邑の発した言葉。獅場も籐下も聞き惚れる。普通ではありえないだろう、その言葉回しに格好良さを覚える。

昼食の場をどうするか考えて歩いている最中、穂琥は気が気ではなった。綺邑は食事をしないといった。一体どうしたものか。

そんな穂琥の心配をよそに綺邑は周囲に合わせて食物を口に運んでくれた。ただ、最初の一言に穂琥はドキッとする。

「人界の食は不味いな」

いやいや、そんな事言わないでね。籐下と獅場には聞こえていないようだったので安心する穂琥だった。

食事も終わってさて、これからどうしようかと話していると綺邑が急に鋭い目つきになったので三人は驚いた。ひどく警戒した表情

に穂琥ははっとした。これは薪が眞匏祇の襲撃を受ける前の表情と似ている。ということは綺邑も感知したということだろうか。

「来る」

綺邑は短くそういう。やはりそうなのだ。穂琥は慌てて二人に用事が出来たと誤魔化して綺邑とともに全速力でこの場を離れる。きっと籐下ならこのことを理解してくれるはず。それを願って。

走っている最中にもっと早く走れないのかと叱責を受けて謝る穂琥。人間ベースの綺邑に遅いといわれるとは思ってもいなかたった。

急停止したので穂琥は転びそうになった。人気のない場所で綺邑は平然とした顔をして立っている。

目の前に降り立った眞匏祇。当然だが綺邑からは眞稀を感じないために僅かに躊躇したようだった。さすがに命を狙ってくる眞匏祇といえど、人間にまで手を出すつもりはないみたいだった。

「お前・・・人間か？」
「そう見えるか？」

眞匏祇からの質問に余裕で答える綺邑。その回答でどうやら人間ではないと判断したらしい相手は怪訝な表情を見せた。人間にそう尋ねてこの様な解答はまずありえない。すれば、眞匏祇のはずだが、人間並みに何も感じない。それを疑問に思ったようだった。

「眞匏祇・・・か？最近噂になっている眞匏祇が居るが」

その言葉で綺邑の表情が変わる。これは不機嫌、という部類だ。

「あんな餓鬼と同じにするな。胸糞悪い」

怒気を孕んだその言葉に乗せられているのはただの怒りだけではなく言葉の力も加算する。言葉の力、といっても別に暴言とかそういった部類ではなく綺邑の持つ眞匏祇とは異なった特殊な力にてその言葉で相手を威嚇し怯ませる力。

「私は奴ほど甘くないぞ。覚悟しろ」

綺邑は右手を軽く振った。それだけで相手は簡単に吹っ飛んだ。そして地面に叩きつけられる前にその姿を消した。跡形もなく。

「え?!何・・・?!殺してないよね・・・?!」

「有る訳無いだろう。自ら仕事を増やす様な真似、するか」

面倒くさそうに綺邑がそういったので安心て肩を落とす。そして先ほど置いてきてしまった二人の様子を見に行かねばと穂琥が言うと、綺邑はそれを止めた。どうやら籐下のほうが何らかの理解をしてくれたらしく、もう他の場所に移動しているらしい。さすが、これだけ離れてもそうやって人の存在を感知して位置まで特定できるとは、『神』に属する存在は違うなと穂琥は思った。

後もその『神』に属している綺邑をまるで友人ごとき振り回す穂琥にそっとため息をつく。穂琥としては薪と違って文句の一つも無く付いてきてくれる綺邑に気をよくしていた。

第三十六話　思い出の場所

夕方。太陽が沈みそうなとき。とある公園に足を踏み入れた。思い出の場所。見せたいものがあって綺邑を引っ張ってきた。果たして穂琥の思ったとおりのことを感じてくれるかは知らない。死神である綺邑が人間や眞匏祇と同じような感性を持っているかは理解など出来ないから。それでも自分たちはこういうもの心を動かされるんだということを知ってもらいたかった。

「こっちですよ！早く、早く！」

まるで子供のようにはしゃぐ穂琥にほとんど表情など無く付いていく綺邑。はたから見たら一体どんな風に移るのやら。

公園の隅に人の背よりも高く植物が生えそろっているところがある。大抵はそこを素通りするのだが、穂琥はその草を掻き分けて中に入っていく。その行動に肩を落とす綺邑。諦めて付いていくしかない。

「早く！間に合ったよ！！」
「間に合った？」
「うん、夕日！」

草の中から穂琥の嬉しそうな声が聞こえるので仕方なく草を掻き分けて中に入る。本来、死神の姿であるのならばこんな草を掻き分けるまでも無く通ることが出来るのだが、あいにく今は人の型のため、通るのに苦労を強いられる。

草を抜けると空間が開けた。人が2、3人居座れそうな空間で崖

になっており、ふちには手すりがある。その手すりに手を付いて穂琥が嬉しそうに夕日を指す。

「ほら！沈みかけの夕日が、下の街を照らしているの！紅くて綺麗でしょう？」

綺邑がそれにどう感じるかは知らない。それでもあえて同意を求めるように綺邑へ言葉を投げかけてみた。するとそれを見た綺邑は少しだけ眼を細めた。

「ほう」

綺邑はそれだけ言うとそれきり言葉を発しなかった。でも表情は満更でもなさそうだったので穂琥はほっとする。

「ここ、思い出の場所なんですよ」

穂琥は夕日に照らされながら嬉しくなって綺邑に話す。

穂琥は過去の記憶を馳せる。まだ地球に居たとき。眞匏祇の地へ行く前。いや、その眞匏祇の地へ行こうとしていたとき。薪がここへ連れて来た。街が一望できるこの場所へ。次、いつ地球にこられるかわからないからよく見ておけば、ということらしくつれてきてもらった場所だった。ここは人の立ち入りが全く無く気兼ねすることが無かった。

「そこでね、刀をもらったんです。薪が愛用していた舞姫とかは流石に無理ですけど、風雲っていう刀です」

穂琥はさっと前に手を前に出してそれを出す。煌く刀身に夕日が反

射してなんとも美しく光を放った。

「大した刀だな」

「わかります？へへ・・・。そうなんです。薪としては己を身を護るためにって渡してくれたんですけど、私にとって薪からの初めてのもらい物で嬉しくて・・・」

ただそれだけ。薪の中で身を護るため以外の深い意味は無い。それでもなんとなく嬉しくて堪らなかった。自分で調達しろとかではなく、薪からもらえたことが。それは自分でも馬鹿らしいと思う。でも。

「別に良いんじゃないか。信じる者から譲り受けた物とは大抵そういう物だろう」

予想外の綺邑の同意にさらに穂琥は嬉しくなる。へへっと笑う穂琥。そろそろ太陽が街の向こうに消えてしまいそうだった。

「そろそろ帰るぞ、穂琥」

「うん！」

元気に返事をする穂琥。それからはたと硬直する。綺邑に何かと聞かれてなんでもないと言って歩を進める。

どうやらここは穂琥にとって本当に特別な場所のようだった。綺邑が初めて穂琥の名を呼んだ。小もないことだろうか。いいや、きっとそれはとても素敵なこと。

「何故こうしたかった？この程度、お前だけでも良いだろうに」

「それは・・・」

穂琥は少しだけ口ごもる。そしてちらりと横目で綺邑を見る。美しくも格好良いその姿に見惚れる。そしてそっと自分の思いを口にする。

穂琥には姉が居ない。当然のことだが。でも同性の姉妹とはほしいと思う穂琥だった。それを実感したのは綺邑との接触ではあるのだが。薪ですら頭の上がらない綺邑がどこか姉のような気分になって、それが嬉しくて。世話をしてくれるし頼み語とも聞いてくれるし。素敵な姉のような存在。

「あ！そうだ！お願い！」

穂琥が綺邑に尋ねたこと。綺邑はそれをしばらく考えた後、若干渋々といった風に承諾した。それが嬉しくて元気よくありがとうと叫ぶ。

第三十七話　その眼が開く

家に帰って薪の眠る部屋にそっと入る。すでに家に着いているために綺邑は人型を止めて本来の姿に戻っていた。

「眼・・・覚ますよね？」

そっと尋ねた穂琥の目は薪を見るでもなくぼんやりとしていた。

「だろうな」
「死なないよね？」
「だろうな」

綺邑からの無機質なその返答に少しだけむっとした。

「どうしてそんな風に言い切れるの？だってわからないじゃない？」
「お前、私を誰だと思っている？」
「あ・・・」
「私は死神だ。死者の行方を左右する者だ。私が死なないと言った。なら死なない」

綺邑の言葉の説得力に負けて穂琥は押し黙った。そうだ。彼女は死神なのだ。ならば大丈夫なのかもしれない。それでも不安が完全に消えるわけも無かった。

その夜、穂琥は綺邑に一つのお願いをした。その願いに綺邑は唸る様な声を発して何も答えずに消えてしまった。あれは決して肯定の沈黙ではない。悩んだ末の沈黙だ。否定するわけでも肯定するわけでもない。だから聞き入れてくれたかそうではないのか穂琥には

わからなかった。

穂琥が就寝した後、綺邑は薪の眠っている部屋にすっと顕現した。薄暗い部屋。

そんな薪を軽く睨んで綺邑はため息をつく。いつまでも寝ている薪に苛立つ綺邑。向かいの部屋で眠っている少女の不安を考えているのかと。

―致し方ない。これ以上世話をするのも面倒だ

綺邑はふっと薪に近づき思いがけない行動に出た。

今まで動かなかった薪の身体が僅かに動いたのはそのときだった。

「ん・・・」

少し苦しそうに声を漏らして薪が眼を開ける。そしてぼやける視界に移ったその姿を見てそれの名を呼ぶ。

「き、ゆ・・？」

「ふん」

ぼけている頭が次第にはっきりする。そして目の前に居るのが本当に綺邑であることに気づいて驚いて飛び起きた、と同時に全身に痛みが走りぬけ薪は倒れるように枕に頭を戻した。

「貴様、死にたいのか」

「いや、そんなわけないでしょ。　何で・・・。魂石に感じるこれは・・・眞稀じゃねぇな。お前か」

綺邑はそれに返事をしない。薪は少し意外そうな表情を浮かべながらも綺邑に礼の言葉を述べる。不機嫌そうに鼻を鳴らして綺邑は穂琥の居るであろう方向を見てくいと顔を動かす。

「穂琥・・・」
「行ってやれば」

冷たいその言葉に苦笑いをしながら薪はゆっくりと立ち上がってふらふらした足取りで穂琥いる部屋をノックする。

「はーい」

間の抜けた声、否。安心できる暖かい声。扉を開けて視線がぶつかる。そして穂琥の眼は見る見るうちに大きく見開かれ叫びながら飛び込んできた。

「薪―!馬鹿!!」

飛びつかれ、力が入らず後ろに倒れる。

「いって」
「いてて・・・ご、ごめん!でもよかった!!」

心底安心したような顔でそういう。そんな穂琥の顔を見て薪もどこか落ち着き安心する。薪の部屋から呆れた顔で綺邑が出てくる。

「あ」
「あ~、なんかよくわからんけど助けてもらった」
「そっか!じゃぁ私のお願い聞いてくれたんだ!」

妙に嬉しそうな声を上げて綺邑に笑いかける穂琥。それを見て薪は首をかしげる。お願いが何だと聞いても穂琥は内緒だと言ってにかにか笑う。

はぁとため息をつく綺邑。それを聞き取った薪が驚いた表情を見せた。どうやら綺邑がため息など珍しいなんてものではないらしい。

「それと居るとしたくなる」
「だろう」
「わっ！それどういう意味よ！」

綺邑と薪の会話に穂琥が割り込む。そのままの意味だと返す薪に穂琥はまたもや馬鹿の連呼で薪を叩く。

「で？綺邑よ。こいつの世話をしてくれたって？」

落ち着いてから薪がそういった。綺邑は黙した。それは恐らく是の沈黙。その意外な行動もさることながら綺邑を前にしても穂琥がむくれなくなったことの進化にも驚く。果たして綺邑に丸め込まれたのか穂琥が認めたのか。知ったことではないが女とは難しい生き物だと思うのだった。

―オレ、男でよかったなぁ～

「何考えているの？」

穂琥に突っ込まれる。

「下らない事だろう」

綺邑に図星を突かれる。薪は苦笑いして綺邑の言葉を肯定する。

「でも、本当に面倒見てくれてすごく優しかったよ？」

「綺邑が？」

「うん」

嬉しそうに笑う穂琥に薪はひとまずよかったと肩を落とす。それにしても綺邑が穂琥に甘いのは一体なぜか少し気になるところではあるが。そもそも果たして穂琥に甘いのか、薪に厳しいのか。知らないことだが。

「それにしても薪とは違ってお姉ちゃんは文句も言わずに散歩に付き合ってくれるんだから！」

「あ、そうですか。・・・・え？」

聞きなれない単語が穂琥の言葉の中に有ったような気がして薪は穂琥を二度見する。

「おね・・・？！」

「うん！」

「はぁ・・・」

薪の驚きの言葉に穂琥が答え、綺邑が再び野ため息を漏らす。一瞬の静寂した空気に穂琥は疑問を覚え首を傾げたがどこか何かを理解したらしい薪がにやりと笑う。

「はっはぁ～ん。なぁるほどねぇ～」

妙に間延びしたその言葉に綺邑の眼光が鋭く光る。それを見た穂琥

は今まで穂琥に向けていたものは睨むや威嚇するといった類のものではないことを悟る。その強さと来たら穂琥なら心が折れてしまいそうなくらいだった。しかしそれをもろともしていない薪の根性も中々大したものかもしれない。

「お前にそんな感情があるとはなぁ～」

楽しそうに笑っていた薪の顔が急に焦った表情になったので穂琥は綺邑を見ると確実に戦闘態勢だった。

「っと、逃げます」

薪はそそくさとその場から離れる。離れた瞬間、綺邑の踵落しがそこに入る。薪が逃げていなければ直撃だっただろう。

「貴様っ」

「わっ!?ごめん!マジ悪かった!!」

薪は綺邑の攻撃を必死になってよける。ここで穂琥が思うのは薪とこんなキャラだったかということ。比較的この光景は見慣れ始めている。つまり薪が綺邑を挑発、というのか。とにかくそういった類の発言をすることから勃発するのだが、つまりは薪の言動に問題があるわけだ。薪は学習というものはしないのだろうか。不思議だ。

「止めろって!本当に!こんな激しい運動量じゃまた夢の中だって!!」

「知るか、落ちろ」

綺邑の言葉に若干本気を感じて焦る薪。必死で逃げいる最中、ふっと綺邑の動きが止まった。

「ん？どうした？汗が出てるぜ？」
「ふん」

綺邑は暑さからかフードを取った。ふわっと肩までの橙の髪が揺れる。茶色も綺麗だったがやはりこの色のほうが綺邑には美しく似合う。

「相変わらず澄ましてんな」
「黙れ」

綺邑は薪を一瞥してから帰ると告げて消えた。

第三十八話　見分けた開眼の差

薪もすっかりよくなって通常通り、とまでは行かないまでも元気を取り戻した。朝になって起きてくると部屋で軽いストレッチをしている薪が居たので穂琥はなんとも安堵した気持ちになった。

「おう、おはよう」
「おはよう」

軽い挨拶を済ませる。身体を伸ばしながら薪がこれからの予定を打ち明ける。

「よし。だいぶ身体もよくなったし。痲臨探しに行くぞ」
「・・・・？」
「ほくちゃぁぁん？」
「ももも、申し訳ございません！」

穂琥を「ちゃん」付けで呼ぶときは少なからず穂琥が失態をしたときだ。なので無意識に謝る穂琥。

理解していない穂琥をそのままにして強制的に薪は移動術で移動を開始。その間、誘拐だの拉致だの叫んでいたので落とすぞと怒りの叱責を入れて黙らせる。そうして着いた先は薪が気を失うほどの争いをしたあの場所。

「やっぱり痲臨はここにはなさそうだな」

そもそも、こんな争いを始めるきっかけは痲臨だ。気を失いそうなほど危険な状態ではあったがその痲臨の気配があれば気が吹っ飛ば

うが回収に向かっていた。それでもそれをしなかったということは痲臨の気配はここには無かったということ。眞稀的にかなり限界に近かったために、もしかしたら見落としたかと思って確認のためにここに来たがやはり気配は無かった。

ならどうするかといえば考えるまでも無く李湖南を探し出すほか無い。寸前まで追い詰めてしまったがそろそろ意識くらいはあってもいい頃合だろう。

ふっと薪が穂琥を見て動かなくなった。穂琥はそれに少し驚いてそれからなんとなく焦る。急に薪が鼻の先が当たりそうなくらいに近寄ってきたからだ。幾ら兄妹でもこの距離に顔があるのは気が引ける。

「ちょっと・・・・？何・・・・？」

「なに？」

いや、それはこっちのせりふだ。穂琥はそんな事を口走る。瞬きもしない薪の眼が見ているのは穂琥の『眼』。

「開眼、しやすいだろう・・・？」

「え？あ、うん。帰ってきたその日にお姉ちゃんが使いやすいようにしてくれたんだ」

綺邑は一体どこまでこの穂琥を気に入ったのだろうか。薪はその意外なことに正直驚きを隠せないでいた。

「それで？どうやって李湖南を探すの？幾ら薪でも難しいでしょう？」

「お前がやるんだ」

「え?!」

驚く穂琥を無視して薪は穂琥に開眼するように命ずる。無論、桃眼ではなく白眼のほうを。言われるままに開眼すると薪はまたまじまじと穂琥の眼を見る。

「ん。母上のとはまた違うな、雰囲気が。雑な感じがするな」

「え・・・」

「雑で大胆でコントロールがいまいち出来ていない感があって」

「何それ!それって・・・」

「でもすごく強大で繊細なところがあってどこか美しい」

薪の言葉に偽りは無い。むしろ今の薪は穂琥の白眼に見入っていて自分が声を出していることすらほとんど無意識の状態にも思える。なんだかそれが薪の褒め言葉ととっていいのか悩むところだった。ただ、今それを素直に薪からの褒め言葉だと受け止めると赤面して頭がおかしくなりそうだったので頭を空にする。そこでふっと気づく。

「李湖南の眞稀だ・・・!」

「お、見つけたか」

穂琥から離れて腰に手を当てる薪。まるでそれを穂琥が言うのを待っていたかのような雰囲気だった。

白眼は『相手を離さない』もの。故に一度でも攻撃を加えれば遠距離にいようがその位置を把握し、その把握できた時点で攻撃可能の技。故に黒眼よりも反則に近い技だ。そして何より。この白眼と黒眼を両方持ったとしたらそれは最早反則の領域を超える。

「薪は持っていないの？」
「おう。持ってねぇ。でも過去にいたらしいけどな」
「え！？」
「歴代の慥夸の中で。詳しくはオレも知らん」

薪でもわからない事が眞匏祇の歴史の中であるのが少し意外だった
穂琥は面を食らった気分になった。

「おし。行くぞ」

薪は穂琥の腕をつかんで即座に走り出した。その速さは目玉が飛び出るくらいだった。

「ちょぉ！？病み上がりがそんなかっ飛ばしてどうするのぉ！！」
「うるせぇ。今逃がすよりはましだって」

薪はさらにスピードを上げる。薪は実際、自分自身のみで走ったら一体どの位早くなるのだろう。穂琥はこの速さにむしろ呆れを感じていた。

第三十九話　敵に対する想い

引っ張られること数分。尻が地面に叩きつけられるのを感じた。

「いった」

穂琥の文句の声とともに聞き覚えのある警戒心むき出しの声が聞こえた。

「貴様ら！？」

見れば圭の姿だった。傍らには李湖南がいる。ただ目も当てられない無残な姿。眼に生気はあまり無く、発言もどこか幼稚化している。圭は真に威嚇体制を見せる。

「この状態の主にさらに制裁を加えるというのか！」

「その口が言うかよ。こっちだって大事な妹、やられてんだ。そのくらいの報復、普通ならするぞ？とはいっても別にオレはそれが目的でここへ来たわけじゃないさ」

薪は一度辺りを見回してから警戒の色を見せた。

「・・・鼓斗はどこにいる？」

「は？何故あいつが」

「いいから。どこ？」

「・・・・時期に来るさ」

「そうか」

警戒が少しだけ薄らいだ薪の表情に穂琥はそっと近寄る。するとふ

っと降り立った二つの影。

「あ！あなた達！またあえて嬉しいわぁ！」

誓茄が声を張る。その後ろに不機嫌そうな鼓斗がいた。

「鼓斗」

薪が鼓斗の名を呼ぶ。鼓斗は警戒した風で呼応する。右手は刀の柄に置かれている。薪が下手な動きをしたら恐らく抜くつもりだろう。

「舞姫を振るった後、会っていなかったから心配していたんだ」

この場に合わないその台詞に煙に巻かれたような顔をする薪以外の皆様。

「怪我とかしていないか？壊れたところかあったらと、心配だったんだよ」

「・・・してなどいないが・・・」

「そうか！それはよかった」

敵を前にしているとは思えない明るい笑みに相手方はひどく動揺していた。ただ穂琥のほうはそれを聞けば説明されなくてもわかる。如何に敵といえど、怪我をして瀕死に追い込むような真似はしたくないのだ。

「よく言うわ！」

圭が怒鳴り声を上げた。李湖南がどんな存在であれ、彼女ら、彼らにしてみれば大切な『主』であることに変わりは無かった。そんな

大切な主をこの様な無様な有様にした薪たちになにを言われようと心が動くはずも無い。

「詫びはするよ」

薪の率直な言葉に圭は歯噛みした。一体なにを考えているのかわからないというのが本音だろう。穂琥だってわからないのだから。

「さて。単刀直入に言おう。まどろっこしいのは面倒なだけだからな。痲臨は何方がお持ちで？」

「直入！？」

あまりの遠慮の無い言葉に穂琥がうっかり突っ込む。それに薪は軽くひと睨みしてから目の前の三祇に眼を向ける。

「・・・主しか知らないよ」

誓茄が不貞腐れたように言う。その後にかぶさるように鼓斗が言う。

「瞑、も知っていたがな」

「ほう・・・」

瞑が絡んでくるとは面倒だった。一体あの男はなにをしたいのか。顔も髪も目も。何もかも確認することの出来ない格好をしていたために捜索のしようも無い。無論、眞稀も感じることが出来ないわけだし。いや、もとより眞稀というものを持ち合わせてはいないのだが。

「よし。修復にかかる。穂琥」

「え？」

薪は圭の抱える李湖南を奪い取る。それに怒号を上げる圭と鼓斗。誓茄はどこかおとなしかったのが妙だった。

「はい、これよろしく」

李湖南の身体を穂琥に明け渡す。穂琥はそれを受け取って困惑していた。要するに李湖南を正常に戻すようにとの事だった。

「嫌だ！！」

まるで子供みたいに。拳を握って踏ん張るようにして薪を睨む。こんな風に反発してきたのは初めてだったので正直薪は驚いた。それでも穂琥がここまで拒否をする理由はなんとなくわかる。

「こいつは薪を傷つけた！それをどうして私が治さなければいけないの！」

穂琥の言い分は確かにもっともなことだ。相手側もそれを重々承知の上か、あまり話しに割って入ってこない。薪はそんな穂琥を見つめる。

「気持ちはわかる。でも・・・」

「嫌だ！聞かない！　だって薪がそうやって言ったら私、絶対に納得しちゃうもん！そんなのヤダ！」

首を振って拒絶をする穂琥。困ったと頭を抱える薪だった。

穂琥が拒絶をしたい気持ちはわかる。それでもこの李湖南を元に戻さない限り痲臨の在り処がわからない。それだけじゃない。敵で

あれ、ここまで戦意をなくしていればそれは最早敵ではない。傷ついた同じ眞匏祇なのだ。

それを穂琥に諭したいが、穂琥はそれすらも拒絶する。薪はどうしたものか考える。そしてふっと思ったこと。あまり効果があるとは思えないが、勘でやるかと決めて決行する。

「穂琥」
「ちょっ！？」

薪は穂琥を強く抱きしめる。苦しいと軽く文句がもれるくらいに。

「頼む」

短くそういう。穂琥はしばらく沈黙した。

「わ、わかったから・・・！もう離して！」
「ありがとうな」
「ふんっ！」

そっと離れて穂琥の頭をなでる。相変わらず不機嫌だったが穂琥はさっさと李湖南の元により修復を行う。桃眼で見れば李湖南の体内をめぐる眞稀の荒れ具合に流石に驚く。桃眼の力でそっとその流れを変える。すると李湖南の眞稀は正常に循環を始める。

「へぇ・・・」

誓茄が感心したような声を上げた。穂琥はさっさかと立ち上がって真の後ろに下がる。薪は再び礼を述べて李湖南に触れる。

「ほら、おきろ」

薪に言われてはっと眼を開ける李湖南。その眼はしばらく宙を漂い、薪に焦点を合わせて硬直した。

未だに体の怪我が癒えていない為ぐったりとしている李湖南にあらかたの説明をして落ち着いたところで痲臨の所在を尋ねる。

「・・・秩江（ちつえ）に・・・」

李湖南はすっかりと萎れてそういった。薪はそれを聞きとめると李湖南の額に手を当てて李湖南の傷を癒す。その行為を見て誓茄、圭、鼓斗は激しく驚いた表情になった。

「なにをそんなに驚いているの？」

穂琥がぶっきらぼうに尋ねると圭がなにを馬鹿なことを言っているんだ、といわんばかりの眼で見てきた。

「なにって！？こいつは戦鎖だぞ！？何で療蔚の技を使えるんだって話だろう！？」

あぁ、そうか。穂琥は納得する。確かにすっかり忘れていた、そんな設定。戦鎖は療蔚を、療蔚は戦鎖を、互いに相反する力同士、故にそれら両方を身に着けることは不可能とされている。それは才能と努力の賜物。

穂琥は李湖南を睨む。憎いのだ、どうしても。こんなふざけた奴をどうして薪は。

「李湖南は今の治療で眠ってしまっているけど直に眼を覚ますよ」
薪はそういって圭に李湖南を預ける。不本意ながらも圭は謝礼の言葉を述べる。
「どうして？どうしてそいつを助けなきゃいけないの？そんなの、ほうっておけばいいじゃん！」
言い切った穂琥につかつか歩み寄って穂琥の両頬をぱしんと挟むように叩く。
「だめだ、穂琥。そんな事を言っちゃだめだ。どんなに憎くても、どんなに恨んでいても。その対象を失ったときの悲しみは底知れない。オレはそれが怖いんだ。わかってくれるだろう？」
「・・・っ！」
穂琥は一瞬だけ記憶を過去へ馳せる。そして悲痛に叫ぶ幼き薪を思い浮かべて俯いた。
どんなに嫌っていたとしても、どんなにこの世から消えてほしいと願ったとしても。実際に己で斬ってしまった父は薪の心に結局重たい枷を負わせている。穂琥は深いため息をついて小さく頷いた。
「わかった」
「わかってくれて何より」
優しく微笑んだ薪の笑顔を見て穂琥はその薪に免じ、李湖南の事はもうスルーすることにしようと決めた。
「それじゃ、オレたちはこれから秩江に行くよ」

薪と穂琥はその場から移動術で消えた。残った三祇は唖然としていた。一体彼になにが有ったのかは知れない。それでも敵にすらそんな思いを強く抱いているというのは生半可な出来事では出来ない安い『綺麗ごと』だ。しかし彼の放った言葉には重みがある。綺麗ごととぬかせるレベルのものではなかった。

第四十話　人間に与えられた珠

秩江という場所にたどり着く。そこは随分な田舎の風景でどこか長閑だった。しかしそれに反して薪は少し呆れたような顔だったが文句を言った。

「手に入れるには骨が折れそうだ」

「え？」

薪の呆れた視線が向かう先には村人と思える者たちがわらわら集まってきていた。どこからどう見ても歓迎とは思えない。何故って、歓迎する側を桑やら釜やら包丁やらを持って出迎える村がどこにある。

「勝手な進入を謝ります。李湖南殿から伺いここに参りました」

薪の言葉を聞いて村人たちはざわつきだす。村の者たちは李湖南様、と呼び崇拝している風を見せた。それに穂琥が不機嫌になったのを宥めながら薪は言葉を発しようとしたが抑え切れなかった穂琥の言葉が爆発する。

「あんたらねぇ！李湖南って奴がどんなんか知らないでしょ！！」

「知らなくていいから！お前は黙ってて！ややこしくなる！」

「やぁだぁ！離して！私の怒りは治まらない！」

「治まらなくていいから！とにかく黙ってて！」

薪の肘鉄が穂琥のわき腹に命中し、穂琥はしばらく再起不能となった。

咳払いをして薪は村人に向かう。村人は未だに警戒をしている。

「静かに」

空気を割って鳴った声に皆がざわつきを止める。現れたのは美しい女性だった。しかし、穂琥の眼は完全におかしな方向に走っているためにその女性を美しいとは思うが絶品とは思えなかった。

―ん～、簾乃神様や、お姉ちゃんのほうが断然綺麗だしなぁ～

比べる対象がおかしい穂琥だった。

女性は薪に深々と頭を下げた。

「申し訳ない。李湖南殿とは関係があるわけではないのだが、少しこの村に置かれている『宝』を拝見いたしたく」

薪が丁寧な声でそういうと女性は少し悩んだ風に見せて断ったらどうするかを尋ねてきた。

「・・・ほう、オレを試すか？」

「・・・いえ、別に」

急に口調が変わったために村人は面を食らったようだったが女性は以前と毅然としていた。

「本当なら帰りたいが今回のそれはそうも行かないのでね。無理にでも奪おうかな、悪役になってでも」

女性は鋭い目つきで薪を睨みつけた。しかし薪がその程度で怯むは

ずもない。（綺邑のほうが断然鋭くいたいのだから）肩を落として薪はため息をつく。

「まあ、そこまでいうなら見るだけにしますよ」
「え?！ここにおいて置いたら危な・・」
「はい、黙る～」

復活しかけた穂琥がさらにまた再起不能となる。

「危ない・・・?」

女性が穂琥の言葉を聞き取って怪訝そうな顔で尋ねる。

「いや、なに。大したことじゃないよ。今までだってそうだっただろう?」
「・・・」

薪の発言を怪しく思ったのか女性は少しだけ警戒したそぶりを見せた。

「その『宝』はもともとオレの所有物だ。それを回収しに来たんだがそこまで大切に思っているならあまり手出しはしたくないから、この先安全でいられるように工夫をしておくよ」

薪が軽い口調でそういう。

「その話、信ずる証拠は?」

女性は尋ねる。

「ない」

薪は言い切る。無論だ。初めて会ったものにその警戒をおろして信じろなどということは並大抵のことでは出来ない。

「わかりました。ひとまず見せましょう。私はここで導師として役割を果たしています」

「そうか」

導師は薪たちに『宝』のある場所を教えてくれた。そちらの方向を見て薪の眼が大きく見開かれたことに驚いた。どうやらとある洞窟の奥に祭られるようにしてそれはあるらしいが、最早手遅れに近かったようで『宝』つまり痲臨は今、暴発しようとしていた。これが悪しき痲臨の使い方。李湖南が一体なにを求めてこの様なことをしたのか知らないが。痲臨は溜め込んだ眞稀の分だけ静かにすごしそれがなくなった途端大きな爆発を起こす。それは一種の練成。周囲の命をかき消しそれらの魂を痲臨は溜め込む。そしてその溜め込んだ魂は恐ろしいほどの力を有している。

それが今、爆発しようとしている。それを感知した薪はしばらく考えてから眼を洞窟から放さずに導師に尋ねる。

「ねぇ。今からオレのすることを見て、誰にも他言しないと約束してもらえないだろうか？」

「・・・？」

「ちょっと薪！？まさか替装するつもりじゃ？！」

「仕方ないだろう。痲臨を止めるには今のままじゃ無理だ」

導師は怪訝な顔をしている。聞きなれない言葉を聞いて戸惑っているようだった。ひとまず、今は時間がない。たとえこの女性が今か

ら目にすることを他言してしまうようなことがあったとしても今はとにかくそれどころではない。薪は踏ん張って替装する。

薪は替装して両手を前に出して洞窟のほうに向ける。そして一瞬だけ眼を閉じてその手に眞稀を込める。その時、洞窟の奥で小さな爆発音が聞こえた。

第四十一話　言葉は時に力を有する

茶色身がかった黒い髪がふわっと揺れたかと思うと見たこともない美しい空色の髪になる。服装も不思議なロングコートに変わる。そしてその瞳も髪と同じような煌く空色に変わった。一体なにが起こったのかが理解出来ない。動揺している自分を放って二人の少年少女は話を進めていく。ただ、爆発音が聞こえてから少年のほうはどうも苦しそうだった。

苦しそうに息をしている薪を見て不安になったが表情がそんなに大変そうでもなかったのでそうでもないのかと少し落ち着く。しかし、薪の表情がどこか引っ掛かっているようで気になった。

「痲臨が相手だからなぁ・・・」

薪がぼやく。やはり相手が痲臨となるとどうやらその力を抑えるのも一苦労なのかもしれない。しかしそのぼやき方もどこか腑に落ちないようで薪の言葉に張りがなかった。しかしここはこうして回収したので導師に向く。

「さて、導師よ。申し訳ないが『宝』は回収させてもらう。その代わりといってはなんだが、これを祭るといい。あそこに祭られている『宝』よりは御利益あるから」

薪が渡したのはガラス球のような物が連なっていて首飾りのような物だった。

少年が差し出したモノ。これに果たして力があるのだろうか。受け取ってみるとそこからはなんとも温かな気配を感じた。なんとも

いえぬ安堵感。これは本当に効き目があるのかもしれない。彼女は少年に眼をやる。彼は洞窟の奥に祭ってあった『宝』を中に入らずその手中に収めた。一体どうやってかは知らぬが、手で軽く手招くようにしただけで勝手に『宝』のほうから飛んできた。

「それじゃ、これはもらって行くよ。いいね？」
「はい」
「それでは、このことは他言しないように。お願いできますか？」
「・・・はい、と口だけで言って信用してもらえるのでしょうか？」
「えぇ、します。ありがとうございました」

少年は嬉しそうに笑みを浮かべた。それから少年の腕を少女が慌ててつかんでさよならとかわいらしく挨拶をすると『まほう』のように消えた。

少年が置いていった首飾りを祭るために住民全員がそれに取り掛かった。数名はまだ文句を言っていたものいたが導師の言葉で何とか納得させた。そしてこのときのこの判断が良かったことなのだと、あの二人の少年少女に感謝するべきなんだと思うようになるのはまだもう少し先の話。

第四十二話　罪を犯した者

先ほどから口うるさい少女を無視しながらうんざりした顔で移動する少年がいる。

「ちょっと聞いてる?!ただの人に簡単にばらして!忘れさせる事だってしていないじゃない!」

「はいー、きいてますー」

「なにそれ!」

文句を言いながら猛スピードで移動しているので、ここで薪が急停止した日にはもう、薪に激突して穂琥は内臓が口から出そうになった。そして先ほどは替装して地球の服装に合わせた格好、つまり人間の格好をしていたのに止まった瞬間に替装しなおしていたので首をかしげる。そしてふっとさらに首をかしげる。

「そういえばさ～、いまさらなんだけど」

「ん?」

「どうして眞匏祇の世界にいるときと、地球にいるときの替装後の服装って、違うの?」

「メリハリをつけるに決まっているだろう?幾ら力の解放だからって仞狛(じんはく)と同じ格好でいたら地球が壊れてしまう。だから服装を変えてその違いをはっきりさせているだけさ。服装の意味はその程度の違いだよ」

薪が珍しく普通に説明をしてくれたのが意外だがそれよりも穂琥は突っ込まなければならない単語を見つけてしまって薪に尋ねる。

「じん・・・はく?って、言った?」

「・・・・・・・。っ！」

薪の表情は明らかに「遣ってしまった！」顔だった。そして頭を抱えて叫ぶ。

「あー！今まで言わないように気をつけていたのに！！」

「え！？ちょ、それどういう意味よ！？」

「穂琥ちゃんに説明するの、面倒だもん」

「・・・はい。すいません・・・。優しく教えてください」

萎縮した穂琥に薪は仕方なく説明する。まぁ、これを説明しておけば後に楽だから良いのだが。

仭狛、とは眞匏祇の世界のこと。人間の世界が地球なら眞匏祇は仭狛。つまりは星の、生息地の名前ということ。

そして。薪が替装した理由は、こちらのほうが眞稀が出るために家に帰るのが早くなるということ。

帰宅中、やけにずっと穂琥が大人しいので薪は横目で様子を窺っていたがどうにも落ち込んでいるように見えた。

「痲臨・・・」

家について替装したときに穂琥がボソッといった。

「ん？」

「戻ったね・・・」

「・・・あぁ、そうだな」

さらに落ち込む穂琥。落ち込んだ理由がはっきりした薪は穂琥の頭をそっと撫でる。

「本当に地球が好きだな」

その言葉で穂琥が赤面する。わがままを言っていることを自覚しているのだろう。恥じるように小さく頷く穂琥を見て薪は少し表情を暗くした。

「残念だけど、いやいいのかな？いや、よくないな・・・」

薪にしては随分まとまりの悪い言葉に穂琥は薪の顔を覗く。

「この痲臨。本物じゃない」

「・・・・・・・え？」

薪の握る美しく輝く球。それが本物ではないと？

「おかしいとは思ったんだ。痲臨の爆発を抑えるのにあの程度の苦しみで済んだのが」

今、こうして痲臨を手にしてわかるが、これは間違いなく、本物ではない。

「ひとまず李湖南のいる場所へ行くぞ」

大きく頷いた穂琥は白眼を開いて李湖南を見つける。そしてその方向へと移動する。

たどり着いた場所は人気の少ない集落のような場所。薪はその中

へ入っていく。その奥にはげっそりとした李湖南がいた。無論、誓茄、圭、鼓斗も。

「この先は入れないよ」

圭がすばやく立ち上がり薪の行く手を阻んだ。薪はそんな圭を見て小さく笑った。その笑みに圭は機嫌を悪くしたようだが薪は気にせず奥にいる李湖南へ声を掛ける。

「なぁ、李湖南よ。あんたの言っていた『シナリオ』って言うのは終演したのか？」

薪の質問に李湖南は悔しそうに顔を歪めた。

「オレは慤夸だ！好からぬ事を考えているやつを野放しにしておく訳には行かないんだよ」

強く言ったその口調には強い割りにまるで李湖南たちを責めるような勢いは無かった。

「あなた方の滅亡、ですよ。慤夸。それを求め、いや、それだけを求めてここまで着ております。酷い有様なんてものではありませんよ、慤夸のしてきた所業は。そして根強く残った憎悪と悪夢。それに伴う復讐心。その病める心が消えることはおそらくこの先永劫、無いと思っております」

李湖南の語る慤夸への憎しみの言葉。しかし先ほどの薪と同様にその言葉に憎しみを感じることが出来なかった。李湖南はふっと眼を伏せた。

「しかし、まぁ、もういいのではと」

李湖南の言葉。薪はまるでそれを言うのをわかっていたように微笑んだ。

　慤夸が変わり少しずつでもこの世界は変わりつつある。この先の未来にもし、平穏と言うものがあるのだとすれば、この激しく燃える憎しみの炎も、けたり狂う事はなくなるのだ。

「それに偽りはないな？」

「無論」

薪の最後の問いかけに答える李湖南。それを聞いて薪はにこやかな顔をして李湖南に言う。誠心誠意を篭めて。

「オレに城に来い。こんな狭苦しい地球の中ではさぞかし眞稀も窮屈だろう？」

「な！？そのような・・・」

「ふざけるな！」

ずっと黙っていた圭が大声を上げた。おそらく今の慤夸ですら憎しみのこもった眼で見てしまう哀れな女性。

「何が慤夸だ！知ったことを！」

「言いたい事はわかる。なら言い方を変える。オレの城に来てはもらえないか？少しは変わったんだ。少なくとも・・・・」

薪が言葉を切ったので圭は不信な表情を浮かべた。

「その・・・。父上、のやっていた・・・・その時とは随分変わっ

た。それをその眼で見て欲しい！今は違う！そしてこれからはもっと・・・！」

父のことを口にすることを躊躇った薪。そしてアレほどまで冷静に話していたのに急に声を荒げたので流石の圭も驚いて言葉を発せなかった。

「悪い。取り乱した・・・。とにかく。見て欲しいんだ。オレはこれ以上、言わない。それでもオレの権力が見え見えする場所に行きたくないというのならもう止めない。さぁ、答えをお願いします」

薪はそういうなり押し黙った。圭もすっかり黙ってしまっていた。

しばらくの沈黙の後、李湖南がしばらくはここに留まり、気持ちの整理をしてそれから決めると応えた。薪はその答えだけで十分嬉しかったようで満足そうな顔をした。それから急に真面目な表情になって李湖南に向う。その空気を悟った李湖南も怪訝そうに顔をしかめた。

「こっちのほうがオレにとっては大事なんだ。二つ、痲臨は偽物だったから本物は何処だ？っていうことと瞑は何処に消えた？」

薪がそれを聞くと、周囲の空気が変わった。李湖南は苦そうな顔をしながら痲臨はそれが本物であるはずだという。その言葉に偽りがない以上、瞑が何かしでかしたのかもしれない。その瞑については消息不明だと応える。その回答に肩を落とす薪。そしてその場の者に別れを告げて外に出る。

【奴の消息なら掴めたぞ】

綺邑の声に鋭く薪は反応した。

【え!?本当に?!】

何のためらいもなく、綺邑との回線を繋げた薪に穂琥は少し落ち込む。穂琥はその回線のつなぎ方が全くわからなくて顕現させてばかりだったというのに。

【もう、失せた。この世界には存在していない】

瞑、邑頴とて、一度滅んだ身。そう長いことこの世界に留まる事は不可能だったのだろう。神々の噂も多少耳にしたが、この世界から消え失せたのはどうやら事実のようだった。

【そうか・・・。痲臨のほうは?】

【さ?】

流石にそこまで情報が伝わっている訳ではないらしく綺邑の答えは質素だった。

【そうか。わざわざ連絡ありが・・・・】

礼を述べようとして違和感に薪は言葉を切った。そして酷く驚いた声を上げた。

【ありがとう!?】

【黙れ、餓鬼が】

【あ・・・はい・・・・・。いや・・・・その、ありがとう・・・・】

【ふん】

綺邑との回線はそれきり切れてしまった。薪は驚いた顔のまま笑っている。

あの、綺邑が。わざわざそれの連絡のために話しかけてきたのだ。しかも薪に。それは驚くべきことだろう。穂琥としては邑頴は綺邑の父であり、死神だった。だから多少なりとも気にしていたのではという。

薪はいまだに驚きを隠せないながらも、さっさと移動を開始した。

第四十三話　死者の誘い

ふうっとひとまず息をつく。痲臨が偽物であったにしろ、とりあえずひと段落だ。これからどうするべきか知らされていない穂琥はどうしたものか考えていたけれど薪は何かほうけた顔をしているのでどうしたら良いのか悩んだ。

「ね、これからどうするの？」
「さぁ」
「え・・・」

薪の曖昧な返事に言葉を失う穂琥。あまりこういった先の見えない回答はしない薪がこんな風にあやふやに返事をする事は酷く珍しい。

「曖昧な返事で悪いな。オレだけの判断では答えられないことでね」
「薪の判断で出来ない！？もうそれ無理だよ！誰でも出来ないよ！」
「いや、阿呆だろ、お前。オレはそんな全能じゃねぇって。オレより上なんて腐るほどいるって」
「はぁ！？」

薪はにやりと笑って『死者を誘う』と答えた。それをきいてはっとした。そうだ、まだ上がいるんだ。薪でも頭の上がらない『上』が。

「ってなわけだ」

薪のこの切り返しは何らかの形で穂琥に影響を及ぼす場合だ。穂琥はそれを重々知っているので身構える。

「お前が呼んで」

薪の予想外の言葉に穂琥は表意抜けしそれから納得した。薪があちら、つまり綺邑へのコンタクトを取ったところで反応してくれる可能性は低いという。そこで何故か急激に親しくなった穂琥に呼んでもらおうというのが魂胆だったらしい。

「まぁ、オレが用事あるって言う目論見を知っていて来てくれるかは怪しいけどなぁ？」

薪はあまり責任を持った言い方をしていないので半ば丸投げしているように思えた。穂琥はそんな薪を横目で見ながら呆れ顔で綺邑へ呼びかけようとしてはたと止まる。

「声の掛け方わからない」
「いいよ、穂琥はそのままで。聞こえないわけじゃないから」
「え？！そうなの！？」
「そうだよ。そうでなければ神社や寺でどうやって人間が神々に乞うんだよ」
「あ・・・え、じゃぁ、どうして？」
「その方が向こうもこっちもコンタクトしやすいだけのこと。だからそれでいい」
「了解！」

穂琥はびしっと敬礼をしてから綺邑を呼びかけに移る。

非常に不機嫌であるのは変わりないがひとまず顕現してくれたことに全力で感謝する薪だった。それから意味ありげな眼で綺邑を凝視すると綺邑は諦めたように息をついた。

「もう支障ない。直ぐにでも帰そうとしていた所だ」

「お、そうか。それはよかった」

薪は随分と満足そうな表情を浮かべてにこりと笑う。それから綺邑の指示を得て薪は右手を左から一気に右へ振った。するとまるでそこに空間の切れ目が出来たように緑の光を帯びて亀裂が入っている状態になった。その亀裂はみるみる大きく開いていき人が二人と折れそうな大きさへと割れていった。その亀裂の中にふっと綺邑が入ったと思ったら直ぐに出てきた。二つの影を引き連れて。

「ゆ・・・！？」

穂琥はその影を見て目を見開いた。

第四十四話　舞い降りた二つの存在

眼を丸くした穂琥の瞳に移る優しそうな男性。その隣で幸せそうに微笑む女性の姿を眼にして穂琥は驚きと嬉しさがこみ上げた。

「幸奈さん!!」

穂琥の言葉に幸奈は呼応してより一層美しく笑みを浮かべた。それから隣似る男性と目配せをしてから綺邑に向かい深く頭を下げた。それから薪にも。

「本来なら有り得ない事だが、特例として認めただけだ」

綺邑が少しだけ不機嫌そうにそう言った。薪はそれを笑って聞いている。

「そういう優しい所がいいと思うぞ」

「貴様、堕として欲しいのなら素直にそう言えば良いだろう」

「すいません」

綺邑の殺気に満ちた言葉に薪は萎縮して頭を下げる。

「わぁ・・・!幸奈さん!怪我治ったんですね?!」

「えぇ。そのお二方のおかげで」

「あぁ、よかった!」

幸奈の体は確かに普通。怪我などまるでしていなかったように美しかった。

「綺邑の力のおかげで一緒に旦那も来ることができたんだよ」
「だんな・・・？え？！じゃぁこの人が翔蒔さん！？」
「初めまして」

礼儀正しく頭を下げた男性は確かに幸奈に似合いそうな立派な男性に見えた。

「所で翔蒔さん？」

薪の言葉に翔蒔がそちらに意識を向ける。幸奈も穂琥も。薪の表情はどこか真剣さを帯びている。何かよからぬ雰囲気といっても過言ではないので穂琥は少し薪の話を阻害したい気持ちになったが出来るわけもなく薪の切り出す話を待つしかなかった。

「アンタ、何でこんなことになった？」

薪のその質問に翔蒔と幸奈は険しい表情になった。穂琥はそんな失礼なことを聞くものじゃないと叫んだが、結局のところ翔蒔はそれに答えることにした。こんなことまでしてもらった相手に対するせめてもの礼儀だとして。

「わたしは・・・一つのグループに入っていました」

そのグループはとてつもなく危険なもので、今更になって知ったことだが、それのリーダーは眞匏祇だったらしい。

「何処の情報だ？あんたが何故それを知っている？」
「そこのお方にお教えいただきました」
「え？綺邑が？」
「はい」

薪は一瞬、きょとんとしてそれから内心で深くへぇ～となんとも言えない声を上げるのだった。

グループ内で機密にされているあること。翔蒔はうっかりそれを目撃してしまう。それまでは少し待遇のいいただの仕事だったはずなのに。まさかこんな悲惨なことを行っているなんてとショックを受けた。それと同時に怒りを覚え、警察に告発しようとしたがそのグループのものに捕まってしまう。

今思えば当然のことだが、何処へ逃げてもつかまってしまったのは相手が眞匏祇だったからなのだろう。

人を誘拐し、その身体を解剖。その仕組みを調べているようだった。詳しいことまでは翔蒔にわかるわけもなく、捕まった挙句、殺されたくなければ言うことを聞くのだと脅される。無論、それだけで翔蒔が頷くはずもなかった。殺すのならすればいいと思っているくらいだった。しかし、幸奈の命まで駆け引きに持ってこられては頷くしかなかった。幸奈の命は自分のものではない。勝手な駆け引きで使えるはずもないというのだ。

翔蒔は酷く苦しそうな顔をしていた。

「始めはこの人も、言うことを聞いていたのです」

幸奈が重い口でそう言った。

自分が連行してきた人間は皆そのグループのものに殺された。それが耐えられず苦しかった。殺されるとわかっていて連れてくるのだからやっている事は殺人と同じこと。だから隙を見て何人も逃が

した。

それが露見して翔蒔は今の状態、つまり死に至る羽目になった。そうして翔蒔は絶命し、悲しみにくれている中に薪と穂琥が来たということ。

「時間だ」

短く綺邑はそう言った。なにの時間が来てしまったのか穂琥には理解できず首をかしげているがよくよく考えてみればわかること。翔蒔は幸奈と異なりすでにこの世に有るべき存在ではない。故にここに長いこと在り続けることは出来ないのだ。

「夫と少しでも話が出来て本当に良かったです。感謝いたします」

幸奈はにこやかに笑いながら頭を下げた。二度の夫との別れではあるけれど、心は晴れやかだった。本当にもう二度と会うことなど出来ないけれど。それでも互いの心は繋がっている。

「もう二度と、会うことは出来ないんだね・・・」

穂琥が悲しい声を上げる。

「まぁあ?」

薪が妙に抜けた声を上げたのでこの場の雰囲気を見事に壊した。

「翔蒔さんは実際、綺邑がこの世界に戻しても良いと判断したからぁ?綺邑に頼めばぁ?ねぇ?」

「貴様、もう少し素直に堕として欲しいと言えば良いのではないか

？」

「いや、ごめん・・・」

薪は綺邑に対してのみ学習能力を持たないことが不思議でしょうがない。

翔蒔も幸奈も楽しく笑う。目の前の不不思議な少年少女。摩訶不思議な存在。それらがもたらした自分たちの心。

「あぁ、本当に生きているといいことがあるな」

「えぇ。本当に」

微笑む二人、いや一祇と一人は和やかな目を潤ませて胸の温かさを感じていた。

幸奈は家に、翔蒔はあるべき世界へ。帰す事として幸奈と翔蒔の姿は光の向こうへ消えていった。

彼女らと別れて薪は満足そうな笑みを浮かべて疲れたから寝るとだけ言って自分の部屋に引っ込んでいった。

第四十五話　己を制するもの

薪が睡眠に入って五時間くらい経った。まだだるい感じが残っていそうな雰囲気を醸し出しながら薪が寝室から降りてきた。そんな薪を見てふっと思う。そういえば薪は修行といってその場に座り込んで微動だにしなかった。それが本当に修行になるのだろうか。

降りてきた薪に早速それを尋ねる。

「ねぇ、薪。聞きたいことがあるん・・」

「ヤダ」

穂琥が完全に聞き終わる前に薪の却下の言葉が下る。

「いや、雰囲気で。面倒くさそうだったから却下した」

「酷い！良いじゃない！教えてよ！薪の修行って何やるの！？」

穂琥の質問にやっぱり面倒な質問だったなぁと顔をしかめる薪。

「はぁぁ・・」

「うっわ！深いため息！？そんなに面倒！？」

「煩いわぁ～・・・」

「ひど！？」

なんだか、修行のときとのギャップが激しすぎてそろそろ心が折れそう。どうして修行の時はあんなに優しかったのに。

薪は再びの深いため息のあと、仕方ないから教えてやるといって椅子に腰を下ろした。

「オレくらいになるとどうしても対戦相手が必要になるんだよ。もう得るものはないからね。いや、ないわけじゃないけど・・・」

薪は少し曖昧な言葉で自分の言葉を否定したがどうやら今それを詳しく言うつもりはないらしくそれ以上は言わなかった。

つまり、薪は穂琥と違って新たに得るものは特にない。つまり穂琥のようにダミーを生成してそれに向って修行するような事は必要ない。必要なのは穂琥にも言ったとおり、実戦。とはいってもこの地球に薪と拮抗できる修行相手がいるわけもない。ならどうするか。相手を作るしかない。

とはいっても簡単に自分と拮抗できるモノを作ることができるわけもなく、薪は地べたに座り精神を集中させる。そうすることで薪の精神が囚狛と繋がることができる。簡単に言っているが相当困難を要するもので修行のためにとわざわざするような行為ではない。

「え?じゃぁ、向こうにいる眞匏祇と精神的な世界?で戦闘訓練していたって言うこと?」

「まぁ、そういうことだな。正確には儒楠と」

「あ・・・なるほど・・・」

薪の言葉に何だか不服感を覚えた穂琥だった。薪だけ向こうと繋がっていたということが何だか不服。

「とはいってもやっぱり実際に身体を動かしているわけでもないしイメージトレーニングみたいなものだからそろそろこの方法では成長できなくなるな」

「え〝・・・これ以上強くなる必要があるの・・・?!」

少し引いた感じで薪にそういうと珍しく薪は穂琥を馬鹿にするでもなく真剣な表情で穂琥を見据えた。それに胸の奥がどこかちくりと痛んだ気がした穂琥だった。

「オレはまだ弱いよ。弱くなければ綺邑みたいな死神の力を借りることもないし、何より穂琥を傷つける羽目にはならなかった」

薪のその言葉の重みは痛いほど穂琥もわかった。何より穂琥自身がそれを願っているのだから。誰も傷つかないその世界を。しかしそれが薪の口から言われるとどこか不思議な気もした。

「まぁ、そういうこと。だからオレはまだまだ強くなりたいし、ならなくちゃいけないんだよ」

薪はそっと穂琥に微笑みかけた。

「自分でも、他の誰でもない、ただ純粋に穂琥のために」

薪はなんとも暖かな笑みを浮かべてそう言った。そして薪は再び疲労回復のために睡眠を取るといって寝室へ上がっていった。

第四十六話　怒りは静まる

突然の出来事。息が詰まるほどの苛烈な『気配』が降り立った。鈍感と薪に罵倒されている穂琥ですら息が出来なくなるかと思うほどの強大なモノ。苛烈で強大。しかしそれは決して負のオーラをまとってはいない。ただ純粋に大きすぎる『気配』なのだ。

「何故・・・！？」

今から数分前、薪がやっと起きてきた。その時間にはとっくに暗くなっていた。

「昼寝じゃなくて一層のこと朝まで寝てなさいよ！」

寝ぼけている薪に一喝している穂琥。起きてくるのが遅かったことにどうやら憤慨している様子の穂琥。薪は今かなり不安定な状態にある。もし、今眠って再び眼を覚まさなくなってしまったらどうしようというのが穂琥の本音。だからこんなに長いこと眠っていられるとどうしても不安になってしまう。

そうしてボケッとしている薪にぎゃぁぎゃぁ喚いているとそこに降り立った苛烈な『気配』があった。胸の奥が詰まるような呼吸が苦しく息を数個とも吐くことも一瞬忘れさえ、下手したら心臓を動かすことさえも忘れてしまいそうだった。この苛烈な気配を『神気』と呼ぶのだろう。その神気の根源はいうまでもなかった。

「れ、簾乃神様・・・！？」

ふわっと軽やかに降り立った簾堵乃槽耀の神。薪が酷く緊張した様

子で何様で参ったのか尋ねていた。

「何。心配事と礼を兼ねて」

簾乃神はその美声を部屋に木霊させた。神気というものをこんな小さな地球で感じることになるとは正直薪も予想だにしていなかったことなので緊張なんてものではないくらい固まっていた。無論、穂琥も。

「その小娘。無事で何より」

「・・・え？」

「戦闘前に随分とそこの小僧がぬしのことを気に留めていたからなぁ」

「簾乃神様。如何に神といえど言っていい事と悪いことがあるのでは・・・？」

薪の警戒しながらも多少の怒りの滲むその声に簾乃神は高らかに笑って見せた。

「はっはっは。何をそんなに怒る。正直に言ったまでさ」

簾乃神のその言葉に薪はぐっと押し黙る。それ以上の追求はやってはならない。相手が神である以上、余計な事を言って機嫌を損ねてはいけない。とはいえ、この簾乃神がその程度のことで怒るかといったらきっとそうではないだろうが、そこは『神』という存在に対する礼儀というものだ。

「さて、小娘よ。ぬしにはまだ正式に礼を述べていなかったな」

簾乃神が穂琥にむく。その美しい瞳が穂琥を捉える。それに捕まっ

て穂琥はより一層呼吸を忘れた。その苛烈な神気と美しさに何もかもを呑み込まれて。

「感謝している」

神の言葉。それは一つ一つに力を有している。神の発した言葉で簡単に人や眞匏祇は翻弄される。そんな力を有している神の言葉でこれを言わせるということがどれほど凄く、どれほど畏れることか、きっと穂琥にはわからない。それでもそのすごさだけはなんとなく伝わる。

「それで、神よ。用件はそれだけでしょうか？」

薪の言葉に神妙な表情をして向き直った。

「報告だ。京鏡の奴が他の神々の許しを得たとね」

「ほう。神々とはそんなに安易に許しを得られるものでしたか？」

「ふふ。随分とでかい口を叩けるようになったものだな。まぁ良いが」

簾乃神は愉しそうに笑った。

「時期、とだけ言っておこう」

意味ありげに笑うその姿もどこか妖麗で美しい。その雰囲気に呑まれてしまう人間も眞匏祇もきっと数多くいることだろう。呑まれたものたちがその後どうなったかなど御伽噺でも読めばわかることかもしれない。

それはさておき、簾乃神の報告はこれまで。そろそろこの場から

消えようというとき、ふっと簾乃神が思い出したように薪に呼びかけた。

「少し、引っ掛かるなぁ。ぬしよ、運命を導く者として忠告しておいてやる。以前見たであろう?夢、を」

簾乃神がそう言った直後、薪の眼が大きく見開かれた。

「引っ掛かるのだよ、それが。気をつけろ」

「え、ちょっと待っ・・・って、話を!」

薪の言葉など聞かぬように簾乃神はそこから神気一つ残さず消え去ってしまった。後に残ったのは苛烈な気配に押しつぶされていた自身に残る怠さだけだった。

以前、修行の疲労でソファにて眠ってしまったことがあった。穂琥が治療をしてくれようとして眼が覚めたあの時だが。あの時薪が妙に飛び起きたは妙な『夢』を見たせいだ。その夢のことを今、簾乃神は引っ掛かる、気をつけろと言い残した。

またか、と薪は肩を落とす。決戦前に言われた穂琥の身を按ずる不安な言葉。そして今回も、似たようなものだ。まだこの不安から離れてはもらえないのだろうか。

第四十七話　訪問ついでの遊び

学校の帰り道。獅場と籐下が笑いながら帰宅していた。

「てかなんでだぁ？何で薪と穂琥ちゃん、あんなに仲良い訳？最初全然会話すらしていなかったのに」

獅場が口を尖らせながら文句を言っていた。おまけに穂琥だけではなくほかにもう一人いたわけで。

「あのキレーな人も結局は薪の知り合いなわけだろう？アレ、誰だし」

「知るかよ。欲がないから寄ってくるんじゃないのぉ？」

「え～」

籐下の言葉に獅場は文句たっぷりで言葉を返す。そうして歩いていると目の前を薪が通過していくのを発見。

「お、噂をすればなんとやら。おーい！薪！」

獅場が目の前を歩く薪に激突する。

「うわっ」

その勢いで薪が前のめりになる。

「お？今日は一人か？珍しいなぁ～」

「は？」

獅場の言葉に薪はあやふやな言葉を返す。それが気になった籐下は獅場と同じ様に尋ねる。

「穂琥ちゃんは？いつも一緒にいるじゃん？」

それに他の眞匏祇との接触を避ける意味も含めて穂琥は絶えず傍に置いておきたい様なことを言っていたような気がしたのは気のせいか。

「あ～・・・色々あってねぇ」

遠い眼をする薪に何か不信感を覚える籐下。穂琥に何かあったのだろうか。そうこう考えているあだに獅場が何とか薪の家へ突入する方法を模索しているようで薪もそれに面倒くさそうに対応していた。しかしどこか歯切れが悪い。何か面倒に巻き込まれているのだろうか。

「あ！？」

突然聞こえたその声に皆が振り向く。そこにはあからさま、やってしまった感のある穂琥が突っ立っていた。

「勝手に出歩くなって」

薪が穂琥に言う。その言葉に完全に萎れた穂琥は俯いてとぼとぼと薪の脇に収まる。それを見て籐下はどこか納得する。穂琥はどうやら勝手に家を抜け出してしまってそれを薪が探している状態だったのだろう。

「さて、じゃぁ・・・まぁ。帰ります・・っとわっ？！」

薪が突然前に転び、地面に手を突く。その予想外の行為にみんなが眼を丸くした。

「いって・・・まじかよ・・・。とび蹴りってなくね・・・？」

腰を抑えながら薪が立ち上がったが、むしろそれよりもその場にいるものは今現れて目の前の薪を蹴飛ばしたほうに気が取られている。

「お前な。勝手にくるのは構わないがここら辺はオレのテリトリーだ。その状態で歩き回るな、面倒だ」

「す、すいません・・・。少し遊びが・・・」

「ほう？遊びとな？ふざけたことを言うのも大概にしろよ？」

「すす、すいません！！」

二人のやり取りを見て呆然とする籐下と獅場。だって目の前に薪が二人いるのだから。ただ、最初に会った薪はへらへらとしていて後から登場した薪は酷く憤慨の様子。むしろこっちが本物の薪だと言い切れるくらい表情が怖い。怒っている。

「え・・・あの・・何で薪が・・・二人？」

獅場の混乱した声が後から来たほう、つまり怒りを見せているほうにため息をつかせた。

「面倒なんだけど・・・・」

「わるい・・・。本当にごめんなさい・・・ほんと、ちょっとした出来心なんだ・・・」

完全に沈んだ薪と呆れている薪。一体この二人は・・・。

「え？もしかして儒楠君！？」

穂琥の声に呼応するように沈んでいた薪が手を上げる。

「はい、そうです。なんか久しぶりな気分・・・」

苦笑いして儒楠がそう答えた。穂琥は納得できたがきっと籐下と獅場は理解できていないはず。さて、どうするか。

「あ、そうだ」

「え？」

薪がさっと穂琥の前に移動すると穂琥の頭に手を振り下ろす。それの痛いこと、穂琥が思わずしゃがみこんだ。

「いったぁ！！！」

「勝手に外に出るなっていってあったはずだけど？」

「ごめんんさぃぃ！」

明らか不貞腐れた子どもみたいなその謝罪の仕方にさすがに獅場も籐下も固まる。それを見て儒楠はへへっと笑う。

「帰るぞ。家に帰ったら覚悟してろ」

「う・・・は、はい・・・」

薪の脅しに屈して穂琥はとぼとぼと帰路に着く。

「じゃぁ、オレら帰るわ。おら、儒楠。お前もだよ」

「はい・・・。オレもお叱りきっと一緒に受けるよね・・・」

「当たり前だな」
「はい・・・・」
落ち込んだ穂琥と儒楠を引き連れて薪はさっさと歩いていく。
そんな三人の背を見ながら一体どういったらあんなふうになるのか疑問の籐下と獅場だった。
「何、あれ・・・。そしてあの・・・じゅなん?って誰・・・」
「さぁ・・・。知らない・・・」
答えられるわけもなく。仕方なく獅場と籐下は帰る事にして別れる。
籐下はふっと足を止めて薪たちが消えていったほうに眼をやった。そしてやはり色々気になることがあるのでそちらに足を運んだ。
何度インターフォンを押しても反応がなく、相手が薪なので構わないかと思って勝手に玄関のドアに手を伸ばす。鍵はかかっておらず中にすんなり入ることが出来た。そして中の状況を知って絶句する。
二人、正座。その前にソファに腰を下ろすのが一人。酷く沈んだ空気が漂っていて今まさに叱責終わりました感が漂っている。
「ん?あぁ、籐下。どうした?」
「いや・・・まずこっちが聞きたい・・・」
「勝手な行動を取ったことに対する叱責、とだけ言っておく」
「うん・・・。そうだね。それだけしか聞かないようにする・・・」
どう考えてもこの空気は重い。

やっとのことでいつもの空気に戻ったところでわざわざ籐下が戻ってきた理由を薪が尋ねる。

「あぁ、この間さ。穂琥ちゃんが凄く綺麗な人と一緒にいたんだよ」
「・・・外、に？」
「え・・・あ・・・うん・・・」

またもや勝手に外に出たということが露見されて危うい空気が流れたが穂琥が一生懸命護ってくれたから大丈夫だと豪語している中に儒楠の言葉で今度は薪が押し黙ることとなった。

「え？薪が見張らなかった時があったのか？」
「ん・・・」

薪の反応を見て明らかに普通ではなかったことが起こったということを悟った儒楠は眼を細めた。

「で？誰だっけ・・・その綺麗な人・・・えっと、きゆう？だっけ？」
「「はぁ！？」」

これは薪と儒楠の声が重なった、が。二人とも同じ様な声なので少し不思議に聞こえた。そして二人のその反応に籐下は驚いて身を引いた。

「お願いしたらきいてくれたの！！」

穂琥の言葉に薪も儒楠も意外そうな表情で苦笑いを浮かべている。

「でさ。ほら、穂琥ちゃんって薪が護るんだろう?それなのにその人がやっていたから一体何者なのかなぁ?って」
「というか、アンタさ。何で普通にそういう会話しているんだ?」
儒楠の質問に籐下は首をかしげた。薪がそれを理解して儒楠に説明をする。
「それ、籐下隼人」
「え?あぁ、これが?」
それ、これ、の扱いを受けて少しショックを受ける籐下だったが仕方ないと抑える。
「へぇ。何、眞匏祇って事まで教えてあるわけ・・・」
「おう。色々便利だから」
「便利って・・・」
薪の言葉に儒楠が笑うように言う。
「あぁ、別に悪い意味じゃねぇよ?籐下」
「うん、いや、あの・・・うん。わかっている。薪が相手だから」
「それは何より」
にやりと笑う薪に籐下も笑う。そして話は綺邑の話へ戻る。
「流石にそればっかりはオレの判断じゃ何も出来ない。オレが勝手に言ったら大変なことになるわ」
「え?大変って・・・お前、結構凄いやつなんだろう?だったら平気そうだけど・・・?もし言ったらどうなるんだよ?」
「命とられちゃう」

薪にしては随分と可愛らしい語尾だったがそれがその危険性を物語っているような気がした籐下はそれ以上を突っ込める勇気を失った。

「いいじゃん、きいてみれば」
「おいおい、穂琥ちゃん？」
「はい！？」
「オレが嫌われているの、知っていてそれをいっているのかなぁ？」
「申し訳ありません！！」

籐下はこの会話で正直驚いた。薪のような人格が他者から嫌われるようなことがあるのが正直意外だった。誰にでも好かれるような、誰にでも平等に接しているような、そんな薪をキライだと言うものがいるのか。いや、確かに綺邑は穂琥と共にい歩いているときに薪を腐れ外道呼ばわりしていたことを思い出した籐下だった。

「そうだなぁ～・・・。オレらに近いようで遠い存在だよ。あくまで人間ではないことは事実だ」
「・・・そっか。それでオレが聞きたかったのはそういうことじゃなくてさ」

穂琥があの時、薪のことを語ろうとしなかった。いつもならちゃんと言うはずなのに。それに何より、綺邑という籐下にとってはよくわからないその存在が薪の代行として穂琥を護っていた。そんな事、普通では考えにくい。薪が穂琥の護衛を他者に任せることなど草々なことでない限りは有り得ない。

「そうだねぇ～。それはオレも気になる」

儒楠も参戦してきたので薪は最早逃げる事は出来ないと悟って小さ

くため息をついた。

「いや・・・その・・・・。黒眼を開眼しまして・・・。その後昏倒しました・・・・」

「はぁあ!?なにしてんのお前!?」

「え・・?こく・・・ん?」

儒楠は薪に対して怒号を上げているように見えた。

「私の・・・せいなの・・・」

「え?」

穂琥の小さな声に儒楠が反応する。しかしそれよりも早く薪は行動を取る。さっと穂琥の前に移動して穂琥の両頬を包むようにして穂琥の顔を固定して自分と眼を合わせる。

「だから言っただろう。それは違うって。そのことで悩むな」

「・・・・」

薪のその優しさに穂琥は黙る。肩を落とした薪を儒楠が追求する。

「何をしたんだ?」

「李湖南、って知っているか?お前なら詳しいだろう」

儒楠は少し思考に意識を集中させ始めた。

第四十八話　慤夸の責務

腕を組んで考えている儒楠とその様子を上目で見ている薪。何処から見てもそっくりで。こういうのを瓜二つというのだろうが、どこかまだ薪に騙されているのではないかと不安になる籘下だった。薪に兄弟はいなかったはずだから肉親ではないのだろうかと思考していた。

思い出したのか、儒楠は腕組みを解いて腰に手を当てた。

「李湖南、確か正地の末裔、だった気がする」
「なるほど・・・。そういうことか・・・」
「自信はねぇよ?記憶が定かでは・・」
「いや、たぶん合っているだろうな」

正地とは昔、強大な力を有していた眞匏祇たちが集っていた場所。それを懼れた当時慤夸、巧伎がその一族を全て壊した。李湖南を除いて。おそらく李湖南は運よくその場から逃げられたかはたまたいなかったか、のどちらかだ。『スウェラ』と言っていたのは当時、巧伎がその正地で使っていた名であった。無論、他の場所でも使用しているために李湖南がそこの生まれだということに気づくのが遅れた原因でもある。

「まぁ、その李湖南と少し遣り合ってね。そうしたら意識不明状態に陥って最終的には何故か知らないけれど綺邑に助けられた」
「え・・・?綺邑が・・・?!アイツ、お前のこと助けるの!?」
「私がお願いしたらきいてくれたの!」
「あ・・・そうなんだ?」

穂琥に対する綺邑の感情は一体何なのだろうか。そんな事知らないけれど。ともかくそう言ったわけで穂琥から守護するのを一時外れたということを伝えて儒楠が呆れたように肩を落とした。

「大丈夫、なのか？」
「まぁね、とりあえず今は元気」

心配する籘下に薪は笑って答える。それに満足したのか用件はそれだけだからといって籘下は薪の家を後にした。

籘下がいなくなって薪はやっと儒楠と話をする。

「何をしに来たんだ？」
「ん・・・・」

言葉に詰まった儒楠に疑問の表情を送ったが儒楠はどこか渋りながらも仕方なく口を開く。しかし、これは別に儒楠が言いづらいのではなく、薪が回答しづらいのだと儒楠の言葉を聞いて思った薪だった。

「次代、慤夸の・・・話になったんだよねぇ～？オレなんかじゃ決められないでしょ～？」
「ったく・・・・・。っはぁ～・・・・・」

薪が妙に困ったように頭を抱えたので穂琥がどうしたのか尋ねたところ、今度は儒楠だけではなく薪まで回答を渋ってしまった。

「というかそのくらいの伝令なら称報（しょうほう）でもいいじゃねぇかよ」
「いや・・・」

言葉を渋りながら儒楠は右手を前に出した。するとその手に僅かに光が集まり紙が現れた。そしてそれを薪に渡す。薪はそれを見てげっ、と声を漏らした。

「どーする?このままじゃ惹夸の血が途絶えちゃうよ~?って長夸が」

「んなろう!そんな事知るかぁ!!」

持っていた紙を引き裂いて木っ端微塵にして最終的には燃やして消滅させる。それを困ったような笑みを浮かべて見詰める儒楠。

「え?・・・あの、何?」

唯一、この場についてこられていない穂琥が薪と儒楠を交互に見ながら尋ねる。先ほどきいた新しい単語、称報についても。

「あぁ、称報って言うのはここ、地球と伜狛を眞稀で繋いで会話する、電話?見たいなものさ。あぁ、先に言っておくが、穂琥みたなコントロールもまともに出来ないような『バカ』がやっても無意味だからわざわざ教えるような事はしなかった」

無駄に説得力があるがかなり腹の立つ言葉に穂琥はどう反撃しようか悩んだ挙句、反撃など出来ないと諦めた。

「さて。どうやって長夸を言いくるめるか・・・」

気を取り直したように薪が言う。儒楠は苦笑いしながら右手を出してふっと眞稀を集中させる。するとその手には紙が現れた。先ほど薪が燃焼させたもののように見えた。

「何だ、役夸の方は良いのか？」
「あっちはいまだにオレにビビッているから支障はない。いいことじゃないけどね」
「確かに」
薪の言葉に今度は本当に可笑しそうに儒楠が相槌を打つ。
「ねぇ？その紙何？」
儒楠がヒラヒラとさせている紙をさして穂琥が尋ねると、一気に空気が重たくなった気がしてその空気を感じ取って穂琥は固まった。
あれ？まずいこと聞いた？
「まぁ、その・・・。あれだ。見合いの写真だよ」
儒楠が呆れたような笑みを浮かべてそう言ったので穂琥はさらに固まった。
「・・・え？結・・・？え・・・？」
「はは。地球育ちの穂琥には少し有り得ない話かな？でも当然だよ。この年になって許婚の一祇もいないなんて慤夸としてあっちゃ駄目だろう」
儒楠が簡単にそういうので穂琥は固まった首をぎこちなく動かして頷いた。
「薪は慤夸だからなぁ～？その血を絶やしちゃ駄目でしょ。前慤夸は結構早めに決まっていたらしいけどね？薪が決めないから役夸とか、特に長夸とかが困り気味らしいよ」
「知るか」

儒楠の説明に薪が不貞腐れて答える。

「オレはそんな事考えている余裕はねぇよ。今はとにかく伢狛をよく改良していかなければならないわけだし・・」

「だからそれを支える相手だろう?」

「いらん!オレは穂琥と儒楠がいればそれでいい」

「お前、面倒だからそう答えたな・・・」

「よくお分かりで」

はぁ、とため息をつく儒楠。それを見ている穂琥はいまだに硬直が解けない。

今回はどうやって言いくるめるかを必死に悩んでいる様子を見るとどうやら今回が初めてではないようだった。そうして悩んでいる薪を見て穂琥はふっと頭に『妄想』が駆け巡る。それを考えていくうちに自然と口元がにやけていくことに気づかなかった。

「なんか腹が立つ顔しているんだけど、やっていいか?」

「いや、抑えろって・・・」

「・・え?!あ・・・!!ゴメン!私ったら・・・!」

穂琥はぶんぶんと頭を振ってにやにやを吹き飛ばす。が、直ぐにニヤニヤが浮かんでくるらしくついには薪の怒りを買った。

「てめ、本当にヤるぞ。コラ。あ?」

「すす、すいません・・・!!」

「はいはい、お二方!落ち着く~」

儒楠が仲裁に入る。ふんと鼻を鳴らして薪はそっぽを向いて長夸へ

の対策を練ることにしたようだった。そんな薪の背中を見てまたもやニヤリと笑う穂琥。

「あのね・・・穂琥。そういう考え・・・妄想?はやめなよ・・・」
「え・・・・?」
「まぁ、あくまで想像だけどなんとなくわかるわ・・・。穂琥の考えていること・・・」
「嘘!?薪にもばれる!?」
「いや、薪はそういうの疎いから大丈夫だと思うけど・・・」
「ほっ・・・」

胸をなでおろした穂琥を見て深いため息をつく儒楠。穂琥の妄想は決してありえることではないことを儒楠も、無論それをしていた穂琥自身もわかりきっていることなのだった。

第四十九話　封鎖された道

薪が急にソファから立ち上がってひらめいたような表情をしている。

「いや、全然閃いていないから・・・。それじゃ駄目だろう・・・」

それに呆れたように儒楠が苦笑いをする。しかし薪はそれでいいと言い切る。

「よし。じゃぁお前を送るから」

「？　なんだ、痲臨はまだ回収できていないのか？」

ずーーーーーーん。

「え・・・・？」

なにやら重たい空気が薪と穂琥の頭の上に流れる。それに一瞬身を引く儒楠。

「まだ・・・・手に入れていない・・・・・」

「え・・・・？お前が？まだ見つけられていないのか？」

「しくじった・・・」

「はぁ！？しくじ・・・？！何してんの！？」

儒楠の大声に少し驚いた穂琥だったが、まぁ、当然かと思う穂琥だった。

基本、薪は与えられた仕事は完璧にこなす。高校に通っていたと

きだって記憶が穂琥にはなくて薪を特別に意識することはなかったけど試験は満点であったし、その他の事だって完璧に終える。無論、眞匏祇での仕事も完璧にこなしている。それなのにこの期間があったにもかかわらずいまだに手に入れていないことを知り、儒楠は驚いたのだ。それに痲臨を回収するということでしくじるなど、本来ならやってはならないミスだ。それを犯した。

「おいおい・・・勘弁しろよ・・・？痲臨が相手だぞ？地球にどれだけ有害かわからないわけじゃないだろう・・・。何ミスしているのさ・・・」

「悪い・・・。偽物をつかまされた」

「全く・・・」

薪の少し萎れたその様子に流石の儒楠もそれ以上を言うつもりはなかったようだ。

「回復したら、ちゃんと探すつもりだったから・・・」

「・・・その『回復』って言うのも気になるけどな。お前ほどの奴が一体何があってそんなに酷い扱いを受けることになったんだよ。慤夸だろ？しっかりしろよ」

儒楠の言葉は最もだ。慤夸は眞匏祇の中で頂点に達する存在。決して引け劣ってはならない。

「あ・・・それは私が・・・」

「お前は黙っていろ。オレのミスだ」

穂琥が言おうとした事はもうわかりきっている。だから薪はそれを言う前に否定した。でも穂琥としてはそれも辛かった。いくら、何度もそういわれても。

「・・・なんとなく事情はわかったけど・・・・。さて、どうするかな」
「ま、いい。ひとまず帰れ」
薪の言葉に儒楠はどこか納得がいかないなりに頷いた。
薪の家の地下。階段を１４段下りたところに小さな部屋がある。というかこの家の構造は穂琥には全く想像ができない。普通の家ではないことは確かだと思う。
そこにある囚狛へつながるゲート。
「さて。じゃぁ、帰るわ。無理すんなよ」
「おう」
儒楠が白く光の集まった中心に立つ。そして帰る為に眞稀を練る・・・その瞬間、光が暴発したかのようにぱっと閃光を逸して儒楠が後ろに飛ぶ。それを素早く薪が受け止める。
「悪い・・・」
「いや」
体制を立て直した儒楠がゲートへと目を向ける。先ほどの白い光は消えている。
「あれ・・・?ちゃんとあけたか?」
「・・・・開けた・・・はずだが・・・」
儒楠の言葉に薪が自信なさげに答えた。

「何故だ・・・？李湖南が原因じゃなかったのか・・・？」

てっきり、あの李湖南が原因だと思っていたこのゲートの封鎖。しかし今もなお、ゲートは閉じたまま。

「な、なんで・・・・？オレは普通にこっちに来られたぞ？」

「・・・おそらく地球から仭狛へ行くゲートが閉じられているんだろうな」

「そんな事出来る奴がいるのか！？」

薪は酷く苦い顔をしていた。それから仕方ないようにため息をついて何とか長夸と連絡を取るといった。

「先に部屋に戻っていろ。状況を解析させる」

「わかった」

薪の言葉を得て、儒楠は穂琥を連れて部屋を出て行く。薪は地面に手を突くと、ふっと眞稀を篭める。そして指先に集まった眞稀を額に当てる。

―ツツツツ・・・・・

眞稀が仭狛へ繋がる音がする。

《・・・薪様ですか？》

通常通りの声が聞こえる。薪はそれに是と答える。通信は、つまり称報は出来る。

《すまないな、問題が起きた》
《何でしょう?》
《ゲートが閉じられた》

薪の言葉に役夸は酷く驚いた声を上げていた。そちらのほうでそれの解析が出来るか尋ねたところ、伜狛から地球への解析をしても何も異常が見つけられないと答える。

《・・・そうか。わかった。まだしばらくそちらには戻る事が出来ない状況になってしまっているが、何とする。だからそっちでも少し調査を進めて欲しい。何かわかったら直ぐに連絡を頼む》
《了承いたしました。くれぐれもお気をつけて》

薪は称報を切る。伜狛からは此方の地球は普通。通常通り。ならおかしいのは一体何か。わからないものだ。薪は頭を抱えてしばらくその場で悩んでいた。

第五十話　それぞれの想い

薪が帰ってくるまでの間、穂琥はずっとつまらない考えをめぐらせていた。先ほど儒楠が『妄想』といった類のものだ。薪が見合いをする姿を想像して吹き出しそうになる。そしてさらには薪と誰かが付き合うこととなるとなればそれはさらに吹き出そうになる。それを考えている穂琥とは裏腹に儒楠は静かに考えを巡らせている。しかし、儒楠としてはそんな想い、さっさと消し去ってしまいたかった。そんな考えをしている間に薪が戻ってきた。

「おう。どうだった？」
「向こうからだと通常通り、何の変化もないってさ」
「なんだ、それ・・・。本当にどうなってしまったんだか」

原因がさっぱりわからない。

「ねぇ、そういうことって神様に聞いたらわかるもの？」

穂琥の安易な発言に薪と儒楠は眼を丸くした。その表情のそっくりなこと。どちらかに鏡がおいてあるのではないかと思うくらい同じ表情をしていた。きっと、心を持った生き物は心底驚くとみんな性格とか取っ払って同じ表情をするのだろう。

「あのね・・・穂琥ちゃんね・・・。その・・・。オレが言えた義理ではないことぐらい百も承知だがね・・・・。『神』という存在はそんな軽く扱えるような存在じゃないのよ・・・？」

困ったように頭を抱えてそういう薪に首を傾げる穂琥。

本来、神というものは我々が崇め奉るべき存在。そしてその神々の手の上でいきとしいけるものは転がり続けるのが定め。無論、その神とて万能であるわけではないのだけれども。

「そ、そうか・・・。ごめん・・・。でもどうして薪が言えた義理じゃないの？」

「オレだって軽々と神の力を使っているからなぁ～・・・」

「え？」

薪が曖昧な答えをよこす。それが理解できなくて首を傾げたが薪は頭を抱えるだけで答えてくれない。その代わりに儒楠が回答をくれた。

「神の末端に座するもの、つまり死神だよ。あれだって神の一部さ」

「あ～、なるほど・・・」

そしてその死神の力をただ単に寂しいからという理由で軽々使った自分を恥じる穂琥だった。

そうして沈んだ空気の中、ふっとその空気を割る美声が鳴り渡る。その声を耳にした瞬間、薪と儒楠はぐっと背筋を伸ばして目を見張った。穂琥はぐっと背中を丸めて身構える。苛烈な神気が目の前に降り立つ。

「くくく・・・。面白い。実に面白い」

現れた美しき神。紅蓮の衣を翻し強く煌く緋（あか）の瞳を携えて簾堵乃槽耀の神が顕現する。

「え・・・?!す、すとの・・・しょうよう・・・の、か・・み・・

・！？」

驚いたのは儒楠。まさか、この一生で神を眼にすることがあるとは想像もしていなかったことだった。薪のほうは背筋こそピンと伸びているがかなり萎縮している。果たしてこの神の降臨を二度も許したのは一体誰の力か。

「ほう？見慣れぬ顔だな。誰だ？」

簾乃神の言葉に儒楠は一瞬面を食らった顔をした。理由は簡単だ。この生きてきた中で儒楠の顔を見て『愍夸だ』といわれなかったことはない。薪と全く同じその顔に嫌味はなくとも苦労はしてきたのだから。

「オレの、朋です」
「ほう？なるほど」

簾乃神は不思議な眼で儒楠を見据えた。それから艶やかなその唇をそっと動かして笑う。

「テイア、の餓鬼かな？」
「・・・そのとおりです・・・」

儒楠の回答に簾乃神はほう、と言葉を付いた。

「何が・・・仰りたいのでしょう？」

薪が簾乃神へ意を決したように尋ねる。すると簾乃神の口からとんでもない言葉が飛び出した。

「ぬし、己だけ生き残ったことを悔いているのか？己だけを残したそこの慥夸を恨んでいるのか？」

「何を・・・！？」

儒楠は酷く驚いた顔で簾乃神を見詰めた。簾乃神の眼は何もかもを見透かしてしまいそうなそれに儒楠は軽く尻込みをした。

「か、感謝している・・・。それを心から外した事は一度もない。それに恨みなど一切持ち合わせてはいません」

「そうか。ならその抱く禍々しい感情は何だ？」

簾乃神が言葉を発する。それが儒楠の心を揺さぶる。穂琥が簾乃神の横暴な質問に喰らい付こうとしたのを薪が止める。

目の前に腰を下ろしている神が発したその言葉の真意。それを儒楠は無論わかっている。先ほど自分の胸からかき消したかった想い。それを見透かされたのだから。

「まぁよいわ」

簾乃神は切り上げるように言葉を発する。

「して、ぬしよ。力を貸してほしいと？」

薪はその言葉に息を詰まらせる。耳の奥、腹のそこにまで響き渡るその美しい声は何もかもを掻っ攫ってしまいそうな強さを持っている。儒楠のことも気になるが、それを今追及する事は出来ない。故に神の意のままに流されるしかない。

「道が・・・閉ざされてしまい・・・成す術もなく。さらには目

的である痲臨すら見つけることが出来ませぬ」

薪の言葉に簾乃神はほうと、頷いた。それから薪、儒楠、穂琥と一瞥してふっと瞳を伏せた。

「我の専門外だな。その類はわからん。故に適切な者をここへ呼ぼう」

簾乃神が呼ぶといったのは当然『神』。そしてその神の名は。

―摂痲涼貴、摂貴神・・・。

第五十一話　神というもの

鮮烈で刺々しい神気が降り立つ。深い緑のターバンを頭につけているために毛色はわからない。そのターバンのあまりが二つ、長くたなびいている。首から掛かる漆黒の輪が二つ。それがしゃらんと音を立てる。金色に光るその瞳は緋の簾乃神とは違った強さを放っている。そして耳に木霊するのは酷く低く重たい声。

「何だ。つまらねぇ所に呼ぶんじゃねぇよ。眞匏祇如きが」

不機嫌そうに降り立った二体目の神。摂痲涼貴（せつまりょうき）、摂貴神（せっきしん）だった。薪はその摂貴神を眼にして酷くまずい物を眼にしているように固まっている。そんな薪を摂貴神が眼に移して妙ににやりと笑った。その笑いを無視して簾乃神が声を掛ける。

「得意分野だろう？」

「いいや、違うねぇ。『未来』であって『過去』じゃない」

薪から目を離して簾乃神へと目を向ける。簾乃神は余裕の如く笑みを浮かべている。未来が見える神、摂貴神。故に過去も見えるだろうと、簾乃神は笑う。

そんな余裕の神、二体を前に、眞匏祇組みは顔を真っ白にして苦笑いを浮かべるしかなかった。ただでさえ強烈な神気をこんな小さな地球、まして何の加工もしてないこの部屋に二つも神気を降臨させては息が出来ずに死んでしまいそうだった。

「話を聞いてやれぬか？」

「ふん～？その餓鬼の？ふ～ん・・・」

薪を見て再び笑う摂貴神。その笑みに穂琥は何故か腹が立った。それが何故なのか全くわからなかったのでもやもやした。

「へぇ。少しはマシな面構えになったかぁ？」

押し黙る薪を前に摂貴神は重たい声を浴びせる。穂琥が憤慨しそうなのを感じ取ったのか摂貴神の目が穂琥へ向く。

「その小娘が穂琥さ」

簾乃神の言葉に摂貴神は興味を持ったように声を漏らした。

「ふーん」

そんなにたいそうな娘には見えないと言いたげなその表情に穂琥はどんどん怒りが沸いてくる。それが一体何故なのかわからないというのに。

「で？そっちの餓鬼は？」
「テイアの小僧だ。慥夸と朋だと」
「ほほー？」

この場にいるもの全ての存在を確認した摂貴神は薪へと眼を移した。

「己の一族が消し損ねた一族と寄りを戻そうってかぁ？末裔とそうしていれば己に付いた泥が落ちるとでも思っているのか？」

口元がにやりと笑っているというのに眼が一切笑っていない。それに僅かな恐怖を覚えつつもそのあまりの態度に穂琥は憤慨寸前まで

来ていた。

「泣き喚け。お前に似合いの格好だ」

摂貴神の発した言葉に薪は酷く動揺した。瞳を震わせただ黙っている。しかしそれを見て。そんな震えを眼にして。頭の中で何かが爆発した。

「ふざけないでよ!!あなたが薪の何を知っているというの!?薪がどんな思いでここまで来ているか全くわからないくせに、変なこと言わないで!!」

神気すらも震わす怒号が部屋中に響いた。それに硬直して固まる薪と儒楠。それを僅かに愉しそうに眺める簾乃神。そして。

「ほう・・・?」

にやついた表情を消して無表情で見下ろす摂貴神。

「神と・・・神と崇められている存在で在りながら!そんな態度はどうなのよ!いくら何でも言っていい事と悪いことがあるわよ!!」

暴走する穂琥。それを見てやっと我に返った薪が必死で止めに入る。

「よ、止せって!穂琥!神の御前だ!落ち着け・・・!」

「いやぁ!!薪のこと、なんにもわかっていない!そんなひどいことを言うようなのの何処が神なのよ!」

頭を振って冷静さを完全に欠いてしまっている穂琥をどう宥めるか必死で考える薪。摂貴神が言葉を発する前に摂貴神へ謝罪の言葉を

述べなければならない。

「も、申し訳御座いません・・・！あ、後でしっかりといって聞かせます・・・。故に・・・」

「どうしてよ！そんなひどいことを言うような神なんて！！」

「頼むから落ち着いてくれ！穂琥！」

薪の言葉を一切耳に入れない穂琥の姿を見て儒楠はひどく驚く。そんな穂琥の姿を見たことがない。よほど、摂貴神の言葉が頭に来たのだろう。

「落ち着け」

荒れた声と焦った声の響き渡る部屋の中に怖いくらい落ち着いた美しい声が鳴り渡り、一瞬で静かになる。

「さぁ、落ち着いて。ようく場を考えろ」

簾乃神がそっと穂琥を包むように抱き込む。あまりの突然のその出来ごとに穂琥は頭の中が真っ白になった。それを見ていた薪も白くなった。

「さてさて。面白いものよのぉ。なぁ、摂貴」

「・・・だなぁ。眞匏祇とはこういうものなのか？」

「いいや、恐らくは『ニンゲン』だろうな」

「ほう？」

摂貴神が面白そうに声を上げた。

「この娘、長いことニンゲンの世界で過ごしてきた。故に思考はニ

ンゲンそのものだ」

簾乃神のにやりと笑った表情を摂貴神が眼に収める。神が互いに眼を見合わせ笑い合う。こんな光景を一体どうやってみていれば良いものか。穂琥にいたっては簾乃神に抱かれままだ。しゃらんと摂貴神の首に掛かっている漆黒の輪が鳴る。

「落ち着けたか？」

簾乃神はふっと穂琥を胸から離す。落ち着きを戻した穂琥は必死で何度も頷く。簾乃神に抱かれたその感覚が穂琥はなんともいえないくらいほっとした。そして暖かかった。

「そうだなぁ・・・・。力の弱いお前に何が出来る？そこまで吠えるのなら何かしらあるのだろう？」

摂貴神の言葉に再び怒りが湧き起こる。しかし、今度はそれが暴発することはない。なんたって彼が言った言葉は事実なのだから。弱くて何も出来ないことを知っているから。そしてそれと同時に何もない自分がそこにいたから。何も反論できなかった。

「摂貴神。お願い申し上げます。オレの事は好きなだけ言っていただいて結構です。しかし、妹を責めるのだけは御止しください」

薪の切実な言葉に摂貴神はにやりと笑う。そしてそれに伴い、簾乃神までもがにやりと笑みを浮かべた。

「良いだろう。その根性、気に入った。面白いじゃないか」

「ほう？確か『眞匏祇如き』とか言っていなかったか？」

摂貴神の言葉を聞いて簾乃神が面白そうに声をかぶせた。高いとも低いともいえない美しい美声が地を振るわせるように思える強く低い声を覆っていく。

「ま。そうだが。いいさ。面白いものが見られた。十分だ」

摂貴神は薪に向かい孜々緒（ししお）という場所にいる駕南火（がなひ）に会う様に伝えてその場から消えた。神気が一つ減って少しだけ呼吸の余裕を得た薪たちだった。

第五十二話　新たな目的

神とは本当によくわからない存在だ。アレほどまでに貶し、嘲っていたというのに簡単に望んでいることを伝えて消えてしまった。本当に神は気分屋だ。

「見込みがありそうよのう？ぬし」

簾乃神は面白そうに穂琥を眺めている。

「え？」

「如何に相手が神でも畏れぬその度量、流石」

「え・・・・！？あ・・・いや・・・・・！」

確実に動揺する穂琥をのどを鳴らして笑う簾乃神は本当に美しい笑みを浮かべていた。普通なら簡単に虜にされてしまいそうなほどに。

「まさかあの摂貴の奴に口答えする者がいようとはなぁ」

「いや・・・ただ単に世間知らずなだけです・・・」

「確かに・・・」

薪の言葉に儒楠がかぶせる。確実に二人とも狼狽している。

「ん・・・？」

簾乃神が急に声を発したので皆びくっと驚く。しばらく何かを聞いているような様子だったのでそれを見守った。そして聞き終わったらしい簾乃神が目を煌かせる。

「伝言だ」

簾乃神が伝ったのは摂貴神からの伝言。

―この先にある死の恐怖に勝てるかな？

それだけを伝えると簾乃神も姿を消した。それにより完全に身体が開放された薪と儒楠は地面に手を突き荒れた呼吸をする。圧迫されたような場所に長いことといたせいで身体の節々がみしみし言っていそうだった。

「ったく・・・。今回はよかったけど・・・。次は気をつけろよ・・・。摂貴神は未来を見通す神と言われているが『怒り』の神でもあるんだから・・・」

「え・・・!?そうなの!?全然怒っているように見えなかったけど!?」

「これだから単純バカは・・・」

「なにを?!」

憤慨したように穂琥が薪へ掴みかかろうとしたが儒楠が薪の意見に同意してきたので流石に穂琥も急停止する。

「本当だよ、穂琥。あの時、簾乃神が止めてくださったからよかったのかもしれないけれど・・・」

儒楠の困ったような顔を見て穂琥は俯いてしまった。

「まぁ、いいよ」

薪がそう言って立ち上がった。少しだけ休憩をしてから先ほど摂貴神が教えてくれた孜々緒という場所へ行くことにした。

「それさ・・・オレが地球に行ったときに世話?になった場所だと思うんだけど?」

「あ?本当か?そら楽・・」

「いや、むしろきついぞ・・・」

「え?」

儒楠の苦い顔が少し不安を煽った。

「あそこで眞稀、ほとんど使えないぞ?」

「・・・・・・は?」

「・・・・・・え?」

薪と穂琥の声が被さる。儒楠の表情は重い。

孜々緒という場所は随分とここから離れた乾燥地帯に存在する小さな町。そこには理解も出来ない摩訶不思議な『結界』が存在している。その中に入ると眞稀を練ることがひどく困難になる。出来ないわけではないが。以前、儒楠が地球へ迷い込んだときも、その結果いのせいで随分と苦労したらしい。

とにかく。その場へ行くことが今出来た目的。わかれば善は急げ。さっさと行動を開始なくては。手遅れになる前に。

第五十三話　見抜いた眼と感覚

ひとまず。疲れたの一言を残して薪は自室へ行ってしまった。おそらく休息を取るのだろう。なら、儒楠はともかく穂琥のほうも英気を養わなければとどっかりとソファに腰を下ろしたとき、インターフォンがなった。

「げ・・・。ここ、薪の家だから私でないほうがいいんだよなぁ～・・・」

「じゃぁ、オレが出るよ。どうせ顔は一緒だから」

「え・・・なんだかごめん・・・」

「いいって」

儒楠はにこやかに笑って玄関へ向った。

「はい？」

玄関を開けると、見知らぬ少女がいる。いや、知らなくて当然なのだが。

「あ！薪君！？久しぶりだね！私、真央！覚えている？」

「え～っと・・・まぁ～」

曖昧な返答したが真央と名乗った少女は別段気にしている様子はなかった。真央は嬉しそうに微笑んでいる。こういった面倒な人間を薪はいつも相手にしていると考えると同情というか、薪の力量が凄いというか。

「なんだか、薪君が帰ってきたって噂を聞いてね！会いに来たの！」

「いや、それは・・・どうも」

知らねぇよ。儒楠は内心思いながらもとにかくこの少女を追いやりたいと考えていたところに違う声が耳に入る。

「あれ?真央?何でこんな所にいるんだよ。　あ、薪!おっす」

「おう」

籐下隼人。それの登場に真央は随分と不機嫌そうな顔をした。

「何やってんの、お前」

「うっさい!アンタには関係ないでしょ!?」

「何だよ。ここは薪の家だぞ?オレ、友達だもん。遊びに来ただけだし」

「うざい!」

「はぁ?」

目の前で繰り広げられる言い争いに玄関を閉めても良いだろうかという感覚に陥る儒楠。そうこう考えている間にも籐下が何とか真央を言いくるめて帰宅させることに成功していた。

「苦労するなぁ〜?」

「まぁね・・・」

真央が帰った後、腰に手を当てて籐下が言ってきたので儒楠も適当に答える。しかしその様子を籐下は凝視するように見る。

「何?」

「・・・真央のこと、知らないだろう?」

「は?クラスメイトだろ」

「・・・・・いや、知らないだろう」

籐下の言ってきた言葉の意味を理解できずに儒楠は眉間に力を入れる。籐下はふっと小さく笑って真央が帰って言ったほうを見詰めた。

「お前さん、薪じゃないよな？儒楠、だよな？」

「・・・・・へぇ？わかるんだ？」

「勘だけどね」

儒楠の回答ににこりと笑って返す籐下。

「・・・そうか。薪がアンタを認めた理由がわかった気がする」

「そう？」

そうこう話をしていると奥から穂琥が出てきた。

「あれ？籐下君！遅いから何をしているのかと思った」

「バレた」

「え？！嘘・・・！？」

「ホント」

にこやかに笑う儒楠と籐下を見比べて驚いた表情のまま頷いた。穂琥ですら、フリをされたら区別が付かないというのにその凄さに感嘆する。

「でも凄いな。眞匏祇でも気づかないのに」

「そうか？」

「儒楠君。さらりと私のこと言った・・・？」

「被害妄想だな。役夸やら長夸やらだって騙したことあるぞ。そう言うって事は自覚しているんだな」

「ひどい！儒楠君、なんだか薪に似てきたぞ！」

穂琥の不貞腐れた声に儒楠は乾いた笑い声を立てた。

「逆に薪も儒楠に似ているんじゃないかな？」

「え？」

「はい？」

籘下の言葉に穂琥と儒楠が声を重ねる。余り会って話をしたわけではないからなんとも言いがたいところもあるけれど。薪も最初に会ったときに比べると随分と丸みを帯びてきている。それはきっと儒楠の影響があるのではないかと籘下は語った。それを感覚だと笑う。

「すごいなぁ～。私眞匏祇なのに駄目だし・・・」

「ん、否定できない事実だな」

「そういうところが似てるって言うの！！」

儒楠の言葉に穂琥が怒鳴る。それを笑ってみる籘下。笑わないの、と怒鳴っていると儒楠まで笑い出してぶーぶー文句を言っていると、頭上で窓が開く音がしたので見上げると薪が窓を開けていた。

「うるせぇ！！」

薪の怒気に穂琥、儒楠、籘下は静かに声をそろえて言うのだった。

「ご、ごめんなさいぃ・・・・・・」

第五十四話　旅立ちの準備

それから二日。薪は部屋から出てこない。穂琥は李湖南との出来事を詳しく出来るだけ正確に儒楠へ伝えた。儒楠は低く唸るように納得していた。

やっと部屋から出てきた薪はまだ完全に覚醒している様子はなく、ぼうっとしていて何を話しても「おー」の一言しかないため、しばらくそうっとしておくことにした。ぼうっとしている時間、およそ三時間。やっと薪が覚醒した。

「いや～。ゆっくり休んだわぁ～。リセットした感じだわ。何もかも忘れた気分」

「「いや、忘れちゃ駄目だからね！」」

穂琥と儒楠が同じ事を同じタイミングで叫んだ。

「わかってるって」

薪が軽く答える。まぁ、相手が薪であるから不安になることはないけれど。どこかこの抜けている感じは一体何なのだろう。

「それで？もう良いのか？」

「おう。後は準備だ」

「わかった」

薪はふっと替装する。その姿を見て穂琥は目を丸くした。髪型とか目つきとか。色々変わってまるで別人のように変化した。

「これからいくところは儒楠が一度行った場所だからな。顔が似ているような面倒な事はなくす」

薪はそう言ってふらふらと手を振っている。

それから色々旅の準備。眞稀が使えない以上、色々と準備するものが必要だった。そうして準備が整うと、薪はふっと雰囲気を変えた。

「さて。行くぞ」
「あいさ！」
「了解」

薪の掛け声に呼応する。そうして移動術で目的の場所へと移動するのだった。

降り立った場所は果てしなく続く荒原。砂漠化した地面。地獄のように暑い乾燥地帯。そして何が最悪かといえば。

「結界？それのせいで移動術が使えるのはここまで。てなわけでここからは・・・徒歩で～す」

間の抜けた薪の言葉にがっくりと肩を落とす穂琥。このクソ暑い中をひたすら徒歩で進んでいくしかないというのか。この先が思いやられる・・・。

第五十五話　荒れた地が奪うもの

腹が立つ。むかつく。穂琥はこの長い距離を歩いてきてそう思う。何が腹立つって。別にこの暑さにじゃない。目の前を歩く影二つにだ。こんなにも苦しい思いをして歩いている穂琥を差し置いて薪も儒楠も平然と歩を進めていることが何よりムカつく。

口を開けばそれだけで水分が奪われる。ふらふらとする足取り。あまりこういった暑さには慣れていない。ふっと力が抜けて前に倒れる。このまま倒れて暑い地面に顔を押し付けて卵焼きみたいに焼けていくのだろうか。

「大丈夫か？」

地面に当たる前に薪が受け止める。曖昧な返事をした穂琥に対して小さくため息をついてから薪は問答無用で穂琥を抱え上げた。

「ぎゃぁ！？」

「ったく。おい儒楠。このあたりで木陰なり何なり探せ」

「無茶言うなぁ～。眞稀使えないって言うのに」

文句を言いつつも既に儒楠は辺りを見回している。薪は持ってきているかばんの中から水筒を取り出して穂琥に飲ませる。

「あまり飲みすぎるなよ。もたなくなるぞ」

「はーい・・・」

完全にだれた穂琥は薪の背中で水を少しだけ口に含む。回復の様子はあまり見られないけれど。

儒楠がやっとのことで洞窟を発見した。その奥は意外にひんやりとしていた気持ちがよかった。そこで穂琥を寝かせる。ぐったりとしてピクリとも動かない穂琥をため息交じりで見詰める薪と儒楠。仕方無しに互いに眼を見合わせて小さく笑う。

「少し周囲を見てくる」
「え、オレ行くよ?」
「いや、オレでいい。穂琥のこと頼む」
「お、おう・・・」

薪が洞窟を出て行く。いくらたくさん寝たからといって黒眼の開眼した反動が完全に抜けたとはとても思えない。だから極力薪には休んでゆっくりとしていて欲しいのだけれども。それでも薪は行くといったからにはきっと曲げない。そういう強情なところが意外にも存在するのだ。

この暑い太陽の下、外を歩くことは危険。しかしあえてそれを行った薪の気持ちはわからないというわけではないが納得が出来ない。おそらくこの地にも眞匏祇は存在する。眞稀が使えないからといって眞匏祇が弱体化するといったらそうではない（若干、死にそうな眞匏祇もいるがこれは眞稀以前の問題なので除外とする）。故にこの地にも他者からの追随を受ける可能性もある。それを薪は危惧しての行為だ。

第五十六話　僅か抱く憎悪

薪が帰ってきたのは予想よりも早かった。まだ穂琥は眠って起きる様子を見せない。寝返りを打った穂琥が唸ったのでそっと儒楠が様子を見る。

「しん・・・？まだ、少し・・・ねていたいの・・・」

穂琥はそう言ってもう一度寝返りを打った。薪はその様子を見て頭を抱えた。親友だからこそ、言ってはならないことくらい分かる。

―穂琥よ・・・今のは禁句だよ・・・

薪はふっとため息をついた。儒楠がすくっと無言で立ち上がる。どうしたと声を掛けても返事が無い。そのまま洞窟の外へと歩いていく。

「あまり無理はするなよ？」

一応声を掛けたがその声が耳に届いたかは定かではない。

どさっと。物が倒れるような音がしたのはそれからしばらくしてからだった。振り向くと儒楠が洞窟の入り口のところで倒れたのを発見した。薪は慌てて儒楠の元に駆け寄った。

「おい・・・？大丈夫か？」

「ゴメン・・・」

儒楠は小さく謝った。ただひたすら謝っていた。薪はどこかそれが

胸の奥で痛んだ。本当に些細なことなのに。どうしてこんなに苦しむ羽目になるのだろうか。

「謝るな・・・」

薪は儒楠を抱えて洞窟の奥へと連れて行く。穂琥からは少し離したところで儒楠を横たわらせる。薪はふっとため息をついて儒楠の額の汗を拭った。

しばらくすると穂琥のほうが覚醒した。体調を確認してひとまず無事だと判断する。儒楠が倒れたことを知らせると穂琥は顔色を変えて儒楠に駆け寄った。

「くれぐれも治そうとするなよ。眞稀は使えないんだから」
「お見事です」

今まさに、治そうとしたところ。

「薪は？」
「え？」

穂琥の唐突な質問に思わず声が漏れた。

「だって薪も汗かいて結構辛そうだから・・・。私大分よくなったから寝ていていいよ？」
「お前に気を遣われるとはオレも終わったな」
「何それ！」
「いやいや。まぁ、それは冗談として。ありがとう。素直に嬉しいが今は平気だ」

薪のその言葉に尻込みした穂琥。薪がこんなに素直に嬉しいなんて言った事・・・あったか。とにかく。何だか不思議な気分だった。

儒楠が眼を覚ましたのはそれからしばらくのこと。儒楠が眼を覚ましたのでさっさと出発することにする。薪は儒楠がどうしてこんなことになってしまったのかは聞かない。それをわかっていて儒楠もほっとしているのだから。

外に出るとあたりは大分薄暗くなっていた。

「もう直ぐ夜だね？火とかおこさないと死ぬ！？」
「いや、ここは夜が一番活動しやすい場所なんだよ」
「え？」

普通の砂漠であるのなら夜は急激な冷え込みで氷点下まで達してしまうかもしれないけれど何があってかここはそう言ったことはなく、昼間の暑さなど忘れこの夜にこそ適温と化す。故に、夜にとにかく歩を進める必要がある。

第五十七話　異なる角度の視線

薪と儒楠が眼の前を走っていく。それの速さに穂琥は嫌気がさしてきた。

「ちょっと！早すぎ！待ってよ！」

苦情の言葉を漏らすと振り向いた薪からの怒号がとんだ。

「ふざけるな！夜が明けたらまたあの猛暑だぞ！お前、次倒れたらそのまま干物になれ！」

「ひどい！」

ある程度まで走っていって急に薪が速度を落としたので穂琥は軽く薪にぶつかりそうになった。

「なぁ、儒楠。今どのくらいの速度だ？」

「え？オレの？まぁまぁかな？」

「なら、もっと上がるな？」

「ん？まぁ、上がるけど」

「よし」

薪は儒楠の何かを詮索し終えると穂琥の横に並んだ。そのまま穂琥の足元を掬い上げるようにして抱きかかえる。

「ふほっわ！？」

「黙れ。お前遅いからオレがこのまま連れて行く」

「えぇぇぇぇ！！？？」

「文句言うならもっとスピードを上げろ」

そういいながら薪と儒楠は一気にその速度を上げた。穂琥はそれを見て苦情を言うのを止めた。先ほどの速度の倍以上の速さになったことを知ったから。どれだけこの二人が自分に合わせて走ってくれていたのかを知ったから。

随分と猛スピードで走り抜けている。この速さは一体なんだっていうんだ。さすが眞匏祇、としかいえない速さ。眞稀を使えないにしろ、基礎体力は人間とは比較できぬもの。一体これは時速何キロだ。

突然の急ブレーキの後、穂琥の尻は痛い音を立てて地面と激突した。

「いったぁい！下ろすなら普通に下ろしてよ！！」
「うるせぇ、ぼさっといているのが悪いんだろう」

薪の背中から叩き落された穂琥は不貞腐れながら立ち上がる。到着した目的の地。そこには小さな村があった。しかしおかしい。人が全くいない。もぬけの殻だ。

「何だ？何かあったのか・・・？」
「わからない・・・。オレが以前来たときは随分と賑わっていたはずだけど・・・」

薪と儒楠の不安そうな声が空っぽになったむらに木霊した。しかもこの村はただ空になっているだけではなくあちこちが荒らされている。まるで崩落した村。

そんな村で詮索を始めた折、地面を踏みしめる音に気がついてそ

ちらに目を向ける。

「誰かいるのか？」

村がこんな状態になったのは今から数日前。突如現れた訳のわからない輩に襲われこの村は崩壊した。村人のほとんどはその輩に連れて行かれた。逃げることの出来たものだけ隠れ場に非難している。でも。それでも村に用事があった。村に行かなければならない用事があったから。探し物をしたくて怖いのを抑えてここまで来た。そうしたらまた訳のわからない輩が三人やってきた。またみんな連れて行かれてしまう。恐怖がぐっとこみ上げる。

逃げなくては。逃げなくては。怖い。怖い。ゆっくりと下がる。建物の中に居たけど既に荒廃している建物の中では砂利もたくさんあって下がった際にその砂利が音を立てた。その音を耳にして二人が鋭く此方を向いた。そして一番手前にいる奴が声を発した。しかし恐怖のあまりなんと言ったかまで聞き取ることが出来なかった。そしてその声を発した奴はこちらに歩み寄ってくる。

―もう駄目だ・・・。このまま連れて行かれてしまうんだ・・・

小さくなって隠れている棚の後ろ。震えて涙が零れそうになる。直ぐ後ろで足音が聞こえた。そして隠れていた棚ががたっと動かされて見つかってしまった。

「ひっ！」

「そんな声を上げなくてもいいのに」

至って怖いという印象は受けないその声に恐る恐る顔を上げた。

「何故隠れたんだ?」

その問いに腹が立った。何もかもお前たちのせいだというのに。この村が、みんなが壊れてしまったのはお前たちのせいだというのに。

「ふざけるな!全部お前たちのせいだ!どうせおれも連れて行くんだろ!?勝手にしろよ!どうせ殺すんだろ!この人殺し!恨んでやる!憎んでやる!死んでも絶対に!!」

勝手に口が動く。恐怖で震えているけれど。それでも最後まで罵声を浴びせる。そしてそっと懐に手を当てる。ここに入っている『お守り』を使う必要があるかもしれない。

「ん~・・・。何か勘違いをしているなぁ・・・。オレは別にどうこうするつもりはないんだけどな。一体ここで何があったのかを知りたいだけなんだけど?」

「お前らがこんなことにしたんだろ!?お前らが一番よくわかっているだろ!」

近づいてきた男に対して懐に忍ばせていた『お守り』を突き立てる。鋭く光る短刀。それが見事に男に腹部に刺さった。初めて感じた人の肉を刺した感覚。気味が悪いけれどそれでも必死だったから何振りかまって入られない。

「何しているの!?」

女の声が耳に響いた。その向こうにも誰かがいる。目の前の男は無言。懐に入り込んでいる自分を男はぐっと抱きしめた。その感覚に恐怖と呼べるものが吹っ飛んだ気がした。そしてそのまましゃがみ

こんで男に包み込まれるような形になってしまった。

「怖かったんだな。何があったかはわからないけれど、でも大丈夫。オレらは何も悪いことはしないから。安心して・・・」

自分の腹部が刺されているにもかかわらずなんともいえぬ穏やかな声。そういえば刺された瞬間にうめき声のひとつも上げていなかった。

「大丈夫。オレが護ってあげるから」

その声がどうしてだろうか、心底安心できた。いや、しかしそれは駄目だ。安心してはいけない。顔を上げて男を睨みつけてやろうと思った。しかしあげたその先にあったのはなんともいえない優しい笑み。月明かりに照らされたその表情から悪意の欠片も感じない。

思わず後ずさる。男は一度短刀に手を添えてぐっと引き抜いた。そしてその短刀を脇においてこちらに向き直る。後ろでは口に手を当てて顔を青くしている女性が見える。その奥にもう一つ影があるけれどそれは暗がりで顔がわからない。

「大丈夫か？キミに怪我とかはないかな？」

自分の腹から血が出ている奴の言葉じゃない。後ろで女性が悲痛な声を上げているが目の前の男がそれを制している。

「オレなんてなんとでもなるけど、この子はそうもいかないだろう」

「それは・・・」

抵抗しようとした女性に対して奥の男がそれを止めた、と思う。何

せ目の前の男と声に差異を感じなかったからよくわからなかった。

「で、でも！もういいでしょう！？その人、もう言うつもりもないじゃない！ほうっておこうよ・・・！それよりもアンタのその傷を・・・」

「おいおい。この子、小さい子どもだぞ？暗いから見えていないだろう、お前」

「え・・・？子ども・・？」

抜けたような女性の声に一瞬面食らった。

「オレは普通に見えるけどなぁ」

「え？！」

「まぁ・・・オレもうっすらと・・」

おそらく三人の会話。どうにも男二人は同じ人間が喋っているようにしか思えない。しかし、それにしてもこの三人の緊張感のなさは一体なんだ。

「あんたたち・・・何？」

「あぁ、自己紹介がまだだったね。オレの名前は薪。キミは？」

素直に自己紹介されてさらに混乱する。しかし何故かこの薪と名乗った男に素直に名前を教える気になる。

「偲葵（さいき）・・・」

「偲葵ね。わかった。キミは一人かい？他にもいるよね？」

そう尋ねられてどきりとする。果たして仲間の居場所を言っていいものか。悩んでいる偲葵の思考を知ってか知らずか。薪はすっと立

ち上がり胸に手を当てて礼儀正しく頭を下げた。完全なる敬意の姿勢。

「御困りの様なので我らで出来うることがあるのならば何なりとお申し付けください」

わざとらしくも聞こえたその言葉だが表情が穏やかに微笑んでいる。

「孜々緒という場所はここだよね？オレらは実は駕南火という者に会いに来たのだけど知り合いかな？」

その名前を聞いて偲葵は眼を丸くした。

第五十八話　人間の潜む場所

腹部を刺されてから和みと安堵感を抱いた雰囲気を醸し出していたので刺されたことも悪くはなかったと思っていた矢先に、駕南火の名前を出した直後また雰囲気をがらりと変えたのでまずかったと思った。

「な、な・・・や、やっぱりアイツラの仲間なのか!?こっちに来るな!」

急に変貌して偲葵は頭を振って拒否の姿勢をとる。

「仲間?知るか、そんなもの。むしろおそらくオレ達の敵は『それ』だ」

「え・・・?敵・・・?」

薪は深く頷く。詳しいことまでは話すことができないけれど、とにかく伽狛へ繋がるゲートが閉じ、行き来できない。そのことを簡潔に伝える。そして駕南火であるなら、その入り口を開けることが出来ると偲葵に伝える。

「じゃぁ・・・おれたちの味方?」

「さぁ?でも傷つけるような真似はしないよ。最も?そちらが敵意を向けてくれれば別だけどね」

薪がにこやかに笑う。

偲葵としては先ほど確実に敵意を向けて腹部への攻撃をした。しかし、傷つけるような真似はしてこなかった。

「どうして・・・？」

偲葵は震える声で薪に尋ねる。すると薪はにこやかに笑って見せた。

「違うだろう。キミは・・・偲葵は別にオレに敵意を向けたわけじゃない。恐怖のあまり、やったことだ。気にすることじゃないよ」

薪は偲葵の頭を撫でる。偲葵は大人しく撫でられているところを見ると先ほどの警戒は少し下がってきたと見える。

「でも・・・。やっぱり・・・無理だよ。おれが言えた義理じゃないけどあんた達だって断然子どもじゃん・・・。駕南火は大人だもん。戦えるような相手じゃないし・・・」

「残念だけど、オレたちは年齢なんて関係ない。要は強いか弱いかだけだ。それにオレが今まで相手にしてきたのはみんな大人だったしね」

大人？子ども？そんな事は関係ない。くだらないと吐き捨てるようなものであるなら大人であろうと制裁を下す。逆にどんなに子どもであろうが、認めた、敬意を払うべきだと思った相手にならいくらでも敬意を払い、それに順ずる。それが、自分の子であっても、親であったとしても。それが薪のココロ。

偲葵は少し悩んだ後に、信じていいのかを尋ねる。もし、信じてもいいと言うのなら隠れ家まで案内すると。

「はん。言ってくれるね。そんな事、偲葵が自分で決めろ。相手に決めさせて後から文句を言われたんじゃいい迷惑だよ」

「あ・・・ごめん・・・」

「別に、謝ることじゃないけどさ」

薪は再び偲葵の頭に手を当てる。偲葵は少しくすぐったそうに笑った。初めて見たその笑みは無垢な子どもそのものだった。

意を決したように偲葵はついてくるようにという。薪の腕を引っ張って隠れていた家からそっと出て隠れ家に向かおうとする。外に出ると美しく月明かりが煌いていた。そのとき、残りの二人の顔も目視できた。その直後。偲葵ははっとしたように声を発した。

「儒楠兄様!?」

予想外の名前が飛び出て驚く。しかしまぁ、驚いたのは儒楠も含まれていたために薪はため息をついて儒楠を睨むと、何が何だかわからないといった風の笑顔で固まっていた。

「いや・・・お写真でしか見たことありませんが・・・・。村では有名です」

急に敬語を使い始めた偲葵の様子から察するに一体儒楠は以前ここに来たときに何をしたのやら。薪がそんな眼で見ると儒楠は困ったように笑っていた。

「では、このお二人は儒楠兄様のお連れですか?」

「え〜っと・・・いや、違うなぁ〜」

「「え?」」

何故か二人分の声。それに反応して頭をはたいたのは薪。それによる反動で声が漏れたのは穂琥。

「いった・・・！ひどい！」
「お前はバカか！いや、バカだ！」
「ひどい！！！」

唐突に始まった兄妹喧嘩に儒楠はほとほと呆れる。

「え・・・と。違う、のですか？」

偲葵が不安そうな声で尋ねる。儒楠はにこやかに笑って穂琥を指した。

「あのコ、穂琥って言うんだけど。穂琥とオレが薪の連れ」

儒楠の説明に偲葵は眼を丸くした。それから薪を一度見てから儒楠に顔を戻してはっきりとした声で言い切る。

「では、あの人が一番偉いんですね！？」
「おいおい。連れているからって一番えらいって言うわけじゃないぞ。現に実際今からだってオレ達は偲葵に連れられるんだぞ？偲葵が一番偉いのか？」
「いや・・・」

薪の横槍に困ったように偲葵が俯いた。しかし、今回のこのチーム編成では実際にそうだよなとチャカすように儒楠が言う。

「なんだよ。オレが一番偉いってどういう・・・」
「ほぉ？貴方様は御自分の御身分を最早お忘れになられた訳では御座いませんでしょうか？」
「う・・・」

儒楠のわざとらしい言葉に薪はぐっと詰まる。実際そうだ。薪は慤夸。ここにいるのは眞匏祇。ならば一番偉いのは慤夸である薪で間違いはない。

「じゃぁ・・・薪、という方が・・・」
「かったくるしい！」
「え？！」

突然薪が大きな声でそう言ったので偲葵は驚いて肩を震わせた。

「お前、子どもだろう。いや、確かに子ども扱いは良くないな・・・。でも、いや、それ関係なくても、その重い、堅苦しい言い方は止めろ。オレたちは別に偲葵たちにとってはそんなに偉い存在ではないのだから」

薪の言ったことに偲葵は呆然と耳を傾けていた。それからはっとして辺りを見回して怯えたような眼をした。

「しまった！早く行かないと！『奴ら』に見つかったら大変なことになってしまう！早くこっちへ！」
「うわ！？」

偲葵は薪の腕を掴むと勢いよく走り出した。予想外の偲葵の行動に薪は驚きはしたがどこかほっとした気もあった。ずっと警戒をしていたこの子がどうやら自分たちを信用してくれたようだったから。

一方の偲葵のほうは勢いで薪の腕を引っ張ってしまっているのでもし、彼が怒気を見せてしまったらどうしようかと不安になったがそんな様子、微塵もなかったので安心していた。

偲葵に連れられている間に先ほど出来た傷を修復に掛かる。無論、偲葵にはばれないように治す必要があるのだが、なにぶんここは孜々緒。眞稀の扱いがひどく不安定でやりにくい。よって穂琥に任せるのは不安がありすぎるため仕方なく薪は自分でその傷を癒す。人間如きが造った刃物では眞匏祇の身体を完全に痛めつけることは出来ない。故に薪の力でも案外簡単に治すことは出来る。

しばらく走っていくと岩場の続く坂道に出る。そしてその途中で偲葵が止まった。数多くある岩場の中からひとつの岩を選択して偲葵はぐいと押しやる。するとそこがゴゴっと音を立てて地下へと繋がる階段をあらわした。その細工に薪はほう、と小さく感嘆の声を上げていた。

中に入ると意外に広い場所があり、いくつもの扉が存在していた。中の様子を観察している間も薪は少し気になることが。

―無意識かな・・・？掴んでいる腕を離してくれないのだが・・・

ちらりと偲葵を見ても偲葵はそれに気づかず奥へと案内していく。まぁ、支障があるわけではないからそのままにしておくかと薪は決める。

偲葵に連れられて奥の扉を潜る。その扉の奥にいた者はひどく驚いた顔をしてから薪達の隣にいる偲葵を眼にしてその表情を元に戻した。

「偲葵!?このかたがたは・・・？」

中に居た男が声を上げた。偲葵が自分を救ってくれた人だと説明をした。

「えっと、儒楠兄様と・・・穂琥、様？」
「やだぁ！様なんていらないよぉ！」
穂琥はぶんぶん手を振って偲葵に笑いかける。それに少し照れたように笑いながら偲葵は再び紹介をする。
「えと、穂琥・・・と。あ、あと・・・薪・・・！」
先ほどのかたっくるしいと言った脅しが効いてか、偲葵は薪については迷いながらも呼び捨てで名を挙げた。それから嬉しそうな声で部屋にいた男に言う。
「ねぇ、父さん！儒楠兄様だよ！」
「あ、オレも呼び捨・・」
「やはりか！？儒楠様だったか！」
儒楠の修正の言葉を遮って偲葵が父と呼んだ男は声を上げた。しかし、当の儒楠としては何故、こんな扱いを受けているのか不明の様で薪もその様子を見て本当にこの村に来たのか少しの疑問を感じざるを得なかった。
静かに、と美声（穂琥としては綺邑や簾乃神といった至って人間離れした美声を聞いているためにそこまでとは思わなかったが）がなった。
「お久しぶりです、儒楠様」
その声の主が扉を開けて中に入ってくる。
「御覚えでしょうか？わたくし、梨杏（りあん）です」

「梨杏！？」

自己紹介をした女性に儒楠が驚いた声を上げた。以前、この村に来たときに世話になった人らしい。

「ふ～ん・・・」

薪にしては随分と珍しい間延びした答え。その反応に違和感を覚えた儒楠と穂琥は互いに顔を見合わせて一瞬だけにやりと笑ってからそれを全力で否定し合う。

―どう？一目ぼれでもした？

―いや、薪に限ってそれは有り得ないだろう・・・

そんなあほな考えを他所に梨杏が話を進める。

「儒楠様。この時期に来て頂けたこと、本当に感謝いたします。神の思し召しでしょうか・・・」

梨杏がさぞ嬉しそうにそう言った。いや、確かに神の思し召し、について否定するつもりはあまりないけれども。

「梨杏様・・・」

偲葵が静かな声で梨杏へ呼びかける。梨杏はそれに答えて首を傾げる。偲葵は勝手にここの場所を離れ、あの危険な村へと足を踏み入れたことを謝罪した。梨杏は深い愛情を持った母のようなそんな表情で笑いかけてそのことに首を振った。

「あなたが無事に帰ってこられただけで結構です。しかし、次はこ

のようなこと、しないでくださいね？」
「はい・・・」

もじもじとしている偲葵に薪はどうしたものか考えた後、仕方なく言うことにする。

「偲葵、申し訳ないが手を離してもらえると動きやすくていいのだけれど・・・」
「え？！あ、ごめんなさい！」

ずっと掴みっぱなしだった薪の腕をぱっと離して俯いた偲葵に穂琥はにやりと笑いながら腰を落として話しかける。

「あら？頼りになるお兄ちゃんが出来たと思ったのぉ？でも、駄目だよぉ～、薪は私の・・」
「黙れ、ドあほ」
「いで！」

薪の鉄拳が落ち、穂琥は鎮圧される。その様子を眼を丸くしてみる三人。それを苦笑いで頬を引きつらせて儒楠は見るのだった。

第五十九話　個々の話し合い

薪は駕南火について尋ねたところ、梨杏は首をかしげた。ただ、悪であるということだけでそれ以上の情報を得ることが出来なかった。仕方なく、この場は終息させて、梨杏より部屋をもらって今日はひとまず休むことにした。

が。問題は部屋の数の問題上、二部屋しか空いていないということ。

「ま、常識的に考えてオレと儒楠、穂琥。それで異議ないな？」
「おう」
「いやぁぁ！！こんな知らない土地で一人で寝るなんて絶対いやぁ！そっちが二人で寝ているのに私だけ一人なんて絶対にいやぁ！！」

一祇、と内心で突っ込みながら薪はため息をついた。では、儒楠と穂琥で各々、部屋を使えばいいと薪が提案する。

「え？薪は？」
「オレは別件で用事がある。駕南火の情報が少なすぎるからな。それを少し調べる」
「よせ」

薪の言葉に儒楠が鋭く反応した。言った儒楠自身も一体それの根拠が何処にあるのかはわかっていないようだったがとにかく今夜は下手に動かないほうがいいと言う。しかし薪はそれに返事をしなかった。

「・・・ほう。オレの忠告はガン無視で抜ける気だな。よぉし、わ

かった。穂琥、部屋割りを決めた」

儒楠は薪を細い眼で睨んで穂琥へ言葉を投げかけた。しかし顔は相変わらず薪に向いたまま。

「オレと穂琥」

儒楠の言葉。それだけなら先ほど、薪の提案したのとほとんど変わりはない。ならば意味はない、と抗議しようとした薪の言葉を遮って儒楠はズバッと言葉を切る。

「薪の監視。いいかな？」

「はーい、異議なーし！」

手を挙げて完全肯定宣言の穂琥に対して薪はひどく呆れたような顔をした。

「おい、マジかよ・・・」

そんな薪の漏らした言葉も無視して儒楠は梨杏の所へ部屋割りの報告、つまり部屋は一部屋で大丈夫だということを伝えにその場を離れていった。その儒楠の背を見て穂琥は薪をちらりと盗み見てからボソッと言う。

「あの梨杏って人・・・私気に食わない・・・」

それに対して薪の反応はなかった。ただどこか一瞬だけ、ピリッとしたような気配を感じたような気がした。

「あ、悪口言うのまずかった？」

「何で？」
「いや、別に・・・」

穂琥は少し言葉に詰まる。薪の心は一体どうなっているのだろうか。もしかしたら本当にあの梨杏という女性に惚れてしまったのだろうか。果たしてこの薪が一目ぼれなどといった類の感情を抱くのだろうか。

「薪は・・・惚れたの？」

そっと聞いた疑問に回答はない。疑問に思って再び呼びかけるとはっとしたような表情で穂琥を見た。

「ん？なんか言った？ゴメン、聞いていなかった。もう一回言って」
「・・・だぁかぁらぁ。もう・・・。梨杏って人、惚れたの？」
「誰が？」

本当に、こういったことに関すると鈍感な薪。話をするのが少し面倒にすら感じる。

「あんたが」
「オレが？そんなわけないだろう。バカジャン？」

ひどくそれもかなり深く、馬鹿にしたような表情で言われたので穂琥はかなりむっとした。どうせ、一目ぼれでもしてそれを必死になって誤魔化そうとでもしているのかと豪語する穂琥。そして今度面倒になったのは薪のほう。余計な発言と余計な態度で穂琥を相手取るのがひどく億劫になった。

「何さ！どうせ梨杏のこと考えているんでしょう？！」

「そうだな」
「あれ、そこは否定しないのか！」
薪がひどく面倒くさそうな顔で穂琥を見る。穂琥は薪に噛み付く。
一方の儒楠のほうは梨杏に部屋が一つ余ったということの報告を済ませて部屋を出ようとした。そのとき、梨杏が儒楠を呼び止めた。
「あの、わたくし。実は・・・駕南火について知っていることがあるのです」
「え？じゃぁ何故あの時言わなかった？」
「この情報、とても機密性の高いもので。そう簡単にはお教えできないのです・・・」
なるほど、本当に信用の出来るものにしか教えることが出来ないということだ。だから見ず知らずのものに問われたところで答えることなど出来るわけもない。それは理解した。梨杏は続ける。
「お教えしても構わないのです・・・。ただ、儒楠様。お願いがございます」
「願い？」
梨杏はそっと儒楠のほうに近づいた。
鬱陶しい。薪は先ほどから儒楠の帰りを切に願っていた。ひたすら目の前の妹がウザイ。
「吐け！吐けば楽になるぞ！」
「だから、そんなのじゃないって言っているだろう！」
「いいじゃないか！吐け！今の私は『面倒』で折れないぞ！」

「よし！穂琥！トイレにでも行ってそのくだらない思考を吐いて来い！」
「私じゃないって！吐くのアンタだって！」

薪はひどく面倒だが、この鬱陶しい穂琥を相手にするよりも今、抱いているものを説明するほうがはるかに面倒なことを知っている。故にこの状況を耐えているわけだが。さすがに耐えるに耐え難い状況になってきたために仕方なく。薪は穂琥に言う。

「よし。聞きなおしをしないということ前提であるのなら教えてやっても構わない」
「え！？本当？聞く聞く」

儒楠は梨杏から申しだされた『願い』を全力で否定していた。

「そんな事、絶対に出来ない」
「駕南火の情報は・・・よろしいのですか？」
「いらない。そんな事をしてまで得ようとは思わない。こっちには優秀な奴がそろっているからね。梨杏程度で得られた情報ならこっちも得られる」

儒楠のその言い切った言葉に梨杏はひどく落ち込んだ表情を見せた。立ち去る儒楠を梨杏は呼び止めたが儒楠は無言のままその部屋を出て行ってしまった。

もう一回、と叫ぶ穂琥。

「同じ言葉でいいからもう一回だけ言って！」
「一度だけ、聞きなおしなしって約束だろう」
「むぐぐ・・・・」

先ほど、薪に言ってもらった言葉があまりにも難しすぎて全く理解できなかったので苦情を述べたところ薪はつんとした表情でスルーする。要するに、説明するのが果てしなく面倒だと感じた薪はわざと穂琥には理解しづらい言葉で言った。

「何を騒いでいるのさ」

やっと帰ってきた儒楠が呆れたように笑いながら部屋に入ってきた。

「遅いんだよ！一体連絡に何時間かける気だ？」

「・・・・悪い」

「？」

儒楠の返答に違和感を覚えた薪だが、それを問う前に穂琥が儒楠へ言葉を投げかけたのでそれがうやむやになってしまった。

穂琥は先ほどの薪の暴君ぶりを儒楠へ訴える。不貞腐れている穂琥を見て儒楠が小さく笑った。

「何・・・？」

「いや、落ち着くなぁって思っただけ」

心底幸せそうな笑みを浮かべた儒楠に今度こそ違和感を尋ねる薪。しかし儒楠はそれに答えようとしない。言いたくないなら仕方ないと薪はその質問をなかったことにする。

第六十話　少年、少女

部屋には二つのベッド。話し合った結果、儒楠と穂琥がそのベッドを使うことになった。それもあって儒楠はすぐにベッドにもぐりこんでしまった。

「あれ、穂琥が寝るときになったら起こして。薪の見張りするから」
「全力だな！？」
「了解です！」

儒楠がそのまま眠りの世界へと落ちる。

それから直ぐに、部屋にノック音。穂琥が出ると偲葵がそこにいた。

「あ、あの・・・。こんな時間にすみません」

少し萎縮した様子で偲葵が俯いていた。穂琥は屈んで偲葵と同じ目線にして大丈夫だよと伝える。偲葵は少しおどおどした様子で穂琥をちらりと見た。

「あの・・・。父さんに頼んで、もし・・・。許可をもらえたら行っても良いって・・・その・・・」

言葉を濁す偲葵の気持ちを汲んで穂琥はすっと立ち上がって奥にいる薪へ偲葵が一緒に寝たいんだってと伝えると奥から是の答えが返って来たので偲葵にそれを伝える。すると偲葵はきらりと眼を輝かせた。穂琥は首を傾げる。あんな意地悪な暴君の何処がいいのだろう。そんな変な考えをしている穂琥を縫って偲葵は薪の元に一目散

に走っていった。

「うわ」

後ろからいきなり飛びつかれて前につんのめった薪が漏らした声。
それを聞いて偲葵が慌てて謝罪した。

「いや、構わないよ。ただ、親のところにはいないのか？」
「うん・・」
「薪といたいんだって」
「へ～？」

入り口から戻ってきた穂琥は薪にそう伝える。薪は首をかしげて曖昧な答えをする。

「ねぇ、偲葵は薪の何処がいいの？」

穂琥の質問に偲葵は少しだけ驚いたような表情をした。それから少し悩んで俯く。

「なんとなく・・・。なんだかとても落ち着けるから。お姉ちゃんは？」
「おね！？」

今までに聞いたことのない単語に驚いた声を上げたので偲葵のほうも驚いて穂琥、といいなおした。

「いいのよぉ～！お姉ちゃんって呼んでねぇ！！」

くねくねと嬉しそうに動く穂琥に流石に偲葵も驚いたようだった。

「お姉ちゃんはどうして薪と一緒にいるの？」
「ん～、そうだなぁ～・・・。ないわ。殴られるわ蹴られるわ叩かれるわ、いじめられるわ。いいことないなぁ～」
「え？じゃぁ、どうして一緒にいるの？」

偲葵のその質問に穂琥は少し悩んで薪を見た。それにふっとため息をつくと、薪は偲葵に言う。

「偲葵。オレらは少し特殊でね。なんとなくわかるだろう？だからあまり人に関係を公言してはいけないんだよ。ただ、偲葵がもし、誰にも言わないというのであれば教えても構わない」

薪のそう言った言葉に偲葵はひどく嬉しそうな顔をして頷いた。その言葉を得て薪は承諾の姿勢を見せる。

「わかった。オレと穂琥は兄妹だ。双子のね」

それを聞いて偲葵は驚いたような顔をした。確かに似ていない。見た目は無論、薪が容姿を今、変えてしまっているから似ていなくて当然だが、性格だって全く違う。最も、育ってきた環境が違いすぎるのと、血が繋がっているからといって性格が似るかといったら別段、そういうわけではないのだから。むしろ、血など繋がっていない薪と儒楠のほうが断然似ているわけだ。

「それにしても随分と信用してくれているね？いいの？」
「うん！」

偲葵は自信に満ちた声で答えた。薪はふっと息をつく。この子にもし、そう言ったことに対する判別力が格段に高くついているのなら

問題はないが、少し優しくされただけでここまでなついてしまうようでは危険性もあるため薪はそれを危惧していた。

「でも少しは警戒しないと?子ども扱いはよくないだろうけどそれでもまだまだ小さいお嬢さんなんだから」

「「え!?」」

偲葵と穂琥の声が重なる。薪はそれになんだよ、と答える。穂琥が薪の口から発せられた妙な言葉に食いついた。

「え?お嬢さん・・・!?」

「え・・・?お前、女だよな?」

あまりの穂琥の対応に薪は自信でもなくしたのか偲葵に尋ねた。偲葵はひどく驚いた表情をした後、俯いて小さく頷いた。

「お、女・・・です」

「え?!嘘!?だって見た目だって男の子だし、『おれ』って言っているし・・・?!」

「つ、強くなりたくて・・・・!」

偲葵は少し困ったようにそう言った。今のこの村では確かに力が物を言いそうではある。見ず知らずの奴らに村のものを連れて行かれて弱いがためにそれを見ていることしか出来なくて。

しかし。強さとは別に性別など関係ない。心で決まるものだ。薪はそう、偲葵に諭す。薪、儒楠、穂琥と並ぶと確かに女である穂琥が一番弱いかもしれない。しかしそれは確実に人選ミス、もとい眞匏祇選ミスであって穂琥は並大抵の男なんかに比べればはるかに強い。

「本当？じゃぁ、おれも別に男の真似とかしなくてもいいの？」
「もちろん。むしろその時点で心が負けているよ。強く持て、心をさ」

薪にそう言われて偲葵は少し恥ずかしそうに俯いた。

女らしく、可愛らしく。そんなものとは全く無縁。それでも周りで色気づいている仲間を見るとどこか羨ましい気もした。美しい梨杏を見て羨ましい気もした。

「憧れに向かって頑張ればいいんだよ」
「本当？頑張ったらご褒美くれる？」
「そうだな、頑張れば」
「本当！？じゃぁ、薪のお嫁さんにしてくれる！？」
「え・・・？」

少しそれはずれているような。

第六十一話　恋愛って？

困ったように笑う薪に対して偲葵はキレイな瞳を向ける。純粋とはきっとこのことだ。

しかしだ。薪は眞匏祇であるし、さらには慤夸だ。よって、人間との結婚は基本、認められていない。強い力を有した者の生誕を望むのが眞匏祇、慤夸の行く末。よって力を下げるだけの人間とはよほど力を落下させない自信がない限りは無理な話。いくら薪といえどそこまでの自信を持っているわけでもないし、何より。

―年下すぎるだろう・・・

薪はひとまずやんわりと断る。そうしていると寝ていた儒楠が起きてきた。

「どーしたぁ？騒がしいなぁ？」

「あ、儒楠兄様」

「お、偲葵ジャン。そしてそれ、止めよう。薪は薪、穂琥は穂琥・・」

「違うよ～。お姉ちゃんって呼ばれてます～！」

儒楠の言葉に穂琥が嬉し、楽しそうに答えた。儒楠は少しだけ驚いた顔をしたけど納得したように続けた。

「まぁ、その。穂琥はお姉ちゃんなんだ。じゃ、何でオレだけってね。むしろこの中じゃ薪が一番上なんだぞ？」

「う～む・・・」

儒楠の言葉に偲葵は唸り声を上げたが結局のところ、納得してくれたようだった。

「起こしたか？」

一応、儒楠に薪が尋ねる。それを儒楠は否定して先ほどまでの不可思議な空気について尋ねた。

「ん～、偲葵に婚約を頼まれた」

「・・・・・は？」

素っ頓狂な声を上げたので薪は当然断ったよと伝えるとそれ以前に、と儒楠が尋ねる。

「女の子、だったの？」

まさか儒楠までこんな反応とは。薪は頭を抱える。

「いやいや、そんなのわかるの、たぶんお前くらいだ」

薪を見て儒楠が手を振る。

「本当に薪ってば、何考えているかわからないし、やんなっちゃう！」

「そういうなよ。仲のいい兄妹でしょう」

「仲良くないもん！一方的にいじめられているだけだもん！」

はは、っと乾いた笑いを立てる薪に腹が立って飛び掛るが簡単に回避される。それを見て偲葵は不思議そうな顔をしている。

「ひどぉい！儒楠君！薪ってばひどくない！？」
「あー、はいはい」
儒楠は至極楽しそうに穂琥のなきつきに答える。それを見て偲葵はさらに首をかしげた。
「どうした？」
それを悟った薪が偲葵に尋ねると穂琥に薪と同じ様に人との結婚は出来ないのかと尋ねる。それに対して半端な是と答える。穂琥はあくまで慤夸の妹であって将来的に関係はあまりない。故にどんなものと一緒になろうが関係はないのだが、今の眞匏祇の世界で人間というものは異物以外の何者でもない。それだというのに慤夸の妹君が人間と、などと話が広まれば何かと面倒なことになりかねない。
「ふぅん。お姉ちゃんは儒楠がすきなの？」
穂琥が何かのダメージを受けて後ろに吹っ飛ぶ。それからしばらく何かに悶絶するかのごとく暴れていた。
「えと、偲葵？何でそういうことに至ったわけだい？」
「だって楽しそうだから」
いかにも子どもらしい可愛らしい発想。それを聞いて復活した穂琥が薪と同じくらい、儒楠も好きだよと伝えると偲葵はどこか嬉しそうに微笑んでいた。
「さて、偲葵。時間も遅い。そろそろ寝な」
「うん！」

偲葵を奥の寝室へと追いやると、穂琥に付き添うように指示する。穂琥はしばらく未練たらたらで文句を言っていたが一人にするのも可哀想だろうと薪が言うと納得したように奥へ入ってった。

「さてと」

薪は何かその場の空気を切り替えるように声を張った。そして儒楠を見る。儒楠はその眼に何か嫌なものを覚えた。

「邪魔払いは出来た。単刀直入に聞く。梨杏と何があった?」

「おう、随分と聞いてきたな」

儒楠は頭をかきながら答えた。何か引っ掛かることがあると薪が伝えると儒楠は少し曇った表情をして何かを言おうとした。その刹並。

穂琥の叫び声が聞こえた。素早く薪が立ち上がり、その後について儒楠が立ち上がる。薪は素早く奥の部屋を開けると震える穂琥がそこにいる。偲葵が直ぐ近くにいたので偲葵に何があったのかを尋ねると既に布団に入ってしまっていて何が何だかわからないと答えた。

眞匏祇が襲いに来たかと思ったがそれにしては眞稀が残っていない。穂琥がコワイを連呼しているので薪がそっと近寄って大丈夫だと言い聞かせる。それでもその言葉はまるで穂琥に届いていないようだった。

「穂琥?!」

儒楠が薪の肩越しに穂琥へ呼びかけるが反応がおかしい。

「無駄だな。これは術に落ちている」
「え！？どういうことだ！？」
薪の警戒した表情が儒楠を刺した。

第六十二話　善悪の見極め

薪が鋭く光る眼光を儒楠に放つ。それに一瞬尻込みした。

「お前も落ちたな」

「え？」

薪の予想外の言葉に驚く儒楠。薪はそっと穂琥を寝かせると立ち上がって儒楠を鋭く睨む。

「オレのせいか？それとも単に訛ったか？」

穂琥の状態は確実に術の中へ落ちている。こんな状態になるまで気づかなかったので薪も言えた義理ではないが、見ればわかる。しかしそれがわからないという儒楠のほうは力が落ちたか。

「ひっ？！」

急に偲葵が引きつったような声を上げたので薪は慌てて偲葵を抱えた。偲葵が窓をさして震えているので窓の先を見る。しかし何もない。

「い、今・・・人が・・・」

偲葵のその言葉を得て、薪は儒楠に追うように命じた。儒楠が躊躇をしたので薪は怒号を上げて追うように命じる。その怒気をはらんだ薪の声に儒楠は衝撃を受けて慌てて窓の外にいたであろう人影を追った。

追う際に儒楠は先ほどの薪の圧力を考えて頭を振った。そして長いこと共にいすぎて曖昧になっていた事実を本気で再認識させられる。

―あぁ、あいつはやっぱり慥夸なんだな・・・

そのあまりの大きな力の前に儒楠は自らの弱さを恥じた。

薪は穂琥をそっと抱え上げて様子を確認した。この程度のものであるのならば今の眞稀を最大限に使えない状況であっても解くことができるだろう。後は偲葵を追い出すのだが。偲葵はこの部屋を出ることを嫌がった。仕方なく、偲葵にならと薪は他言しないという固い約束を結ばせ、眞稀を行使することを決めた。

眼を瞑って。穂琥の額に手を当てる。そしてその掌からまばゆい光が放たれる。その色は今までに観たことのない不可思議な形容し難い色。それに偲葵は見とれていると急に場チンと音がして薪が痛そうに手を振っていた。

「いってぇ～・・・。くそ、なんだよ、コレ！綺邑！綺邑！！ちょっと来て！おいってば！」

薪の声に応答するものはない。それに軽い舌打ちをした。応答がないのは当たり前のことだ。今、目の前に偲葵がいる。いくら眞匏祇であることを見せたにしても死神である綺邑の姿まで晒すわけには行かない。そんな事すらわからなくなりかけている自分の不甲斐なさに苛立ち舌打ちをしたのだった。

少し沈んだ風で儒楠が帰ってきた。どうやら逃がしてしまったらしい。儒楠は穂琥の様子を尋ねた。薪が挑戦したところ、無理だっ

たとこたえると儒楠は頭を抱えて座り込んだ。

「なんだ、それぇ～！もう、無理だろ！治せるやついねぇよ！！」

薪が苦笑いを浮かべながら綺邑を呼ぼうとした事を儒楠に言うと納得したように頷いた。

それを聞けば儒楠のすることは一つだ。

「偲葵。オレと一緒にこのあたりを散策しないか？さっきの奴を見つけることが出来るかもしれないから」

「うん。薪は？」

「ここに残る。穂琥がいるからね」

「わかった」

儒楠は偲葵を連れて部屋を出る。これで人払いは出来た。それを確認してか、綺邑がふっと姿を現した。

「らしくないな」

「調子が狂うな、ここは」

「・・・・。結界のせいだと思うがな」

「結界？」

「貴様、知らずして入ったか」

「面目ない・・・」

綺邑の睨むような眼に薪は少しだけひるんで見せた。結界について綺邑は詳しく語ろうとしなかった。いや、むしろいつものことだが。綺邑はふっと穂琥の上に立つ。上、といっても常に浮いているために乗っかっているわけではない。そして一瞬だけ綺邑の力が迸った。綺邑はそれだけで十分だといって穂琥の上から退いた。消えそうに

なった綺邑を呼び止める。

「そんな厳しい眼をするなよ・・・。なぁ、梨杏って知っているか？」

「さ」

短く返答する綺邑。薪はそうかと答えると穂琥が眼をあけた。綺邑がいることを確認して驚いて飛び起きた。そして薪に手助けを求められたことを話し、穂琥は薪を見て小さく謝った。

「穂琥は悪くないよ。この術、案外込んだものだったからさ。オレも・・・ね。情けない話だ」

薪は悔しそうに笑って頭をかく。

「貴様、これ以上余計な事をし過ぎて私の手を煩わせるなよ。潰すぞ」

「は、はい・・・すみません・・・」

謝罪して薪は頬を引きつらせる。綺邑は薪を睨みつけてその姿を消した。

綺邑の気配が消えたことに気づいたらしい儒楠が偲葵を連れて戻ってきた。偲葵が眠そうに眼を擦っていた。そんな偲葵を儒楠は寝かしつける。

薪が扉のほうを凝視したので一体どうしたのかと尋ねるとさっさと歩いて扉を開けた。

「あ・・・」

その扉の向こうにいたのは梨杏。

「どうした？」

妙に優しげなその声に儒楠も穂琥も目玉が飛び出るかと思った。

「いえ・・・。少し騒がしかったので。ここの隠れ家が誰かに見つかってしまってはと・・・」

「そうか。大丈夫だ。問題はないよ、安心して良い」

「えぇ・・・。そう、みたいで何より」

梨杏は部屋の中を窺って頭を下げて去っていった。それを一呼吸置いて見詰めてから薪は部屋の中に戻ってきた。

「ねぇ～？梨杏さんのこと、本当にどう思っているの？実際さぁ、惚れているんじゃないの？」

「は？」

穂琥の質問に呆れたように薪は返す。

「何、薪。お前梨杏好きなのか？」

「お前まで言うか・・・。マジで切れるぞコラ」

呆れたような声を出す薪に、穂琥と儒楠は良言い寄る。

「違うの？」

「ち、が、い、ま、す」

強調するかのように薪は言う。それでも引かない目の前のバカに薪

は仕方なくため息をつく。頭をかきながら言葉を渋る。

「ったく。まだ自信がねぇから言いたくないんだけどなぁ・・・」

「告白の？」

「冗談抜きで切れるぞ」

「すいません・・・・」

穂琥の返しに結構マジになって薪が答えたので流石に萎縮した穂琥だった。

第六十三話　信ずる心、疑う心

結局のところ、薪は何も語ってくれなかった。あえて言うなら『自信がない』ということだけ。儒楠がごまかして終わりにするのかといったがそれすらもひらりとかわして薪はさっさと寝る支度に移ってしまった。仕方なく、穂琥も儒楠も睡眠をとることにした。

翌日。大声を上げている者がいる。儒楠と穂琥と偲葵だ。

「ったく、あのヤロー、どこ行きやがった!?」
「ん・・・儒楠君があれほど言ったから外には行っていないとは思うけど・・・」

梨杏であれば出入り口を見張っているものとのつながりがあるため、外に出たかどうかを確認できると偲葵からの情報で梨杏の部屋に行くこととなった。そういうことで梨杏の部屋をノックして穂琥が中に入る。その後を儒楠が続こうとしたが、穂琥が立ち止まってしまったため、中に入ることが出来ない。早く中に入るように促そうとして、部屋の中が見えて儒楠も固まった。

会話から察せられると思いますが、朝眼が覚めた時点でかの偉大なる慇夸様がいらっしゃいません。それなりに早い時間に眼を覚ましたはずだというのに慇夸様が寝ておられた場所から温もりはなく既に冷え切っていた。儒楠の嫌な予感もあって外には出るなといってあったのにまさか出てしまったのだろうか。そう思って必死で探していたというのに。

それが何だよ。梨杏の部屋に入るとそこにいるし。必死で探していたこっちの身にもなってくれ。

「け、結構探したんですけど・・・・」
「悪い。もう終わったからいいよ」
立ち上がった薪は梨杏に向き直って笑みを送る。
「じゃぁ、さっきの話、宜しくな。いい返事を待ってる」
薪はそれだけ言うと部屋をさっさと出て行く。それに従って儒楠たちも部屋を出る。
薪はそっと思考する。アホと子ども、ましてや人間であるならごまかしは簡単に出来る。が、ここには儒楠がいる。これを誤魔化しきるには相当骨が折れる。そういう思いもあって儒楠を見ているとそれに気づいた儒楠が少し不機嫌そうになんだよと返す。なんでもないとそっぽを向いた薪だが足元から声が飛ぶ。
「薪、梨杏様と何を話していたの？」
純粋、無垢なその質問に果たしてどうしたものかと悩む薪。ひとまず簡単に言うことができないんだと偲葵に伝える。偲葵はふ～んと納得しないなりに引き下がってくれた。このくらい聞き分けの良い奴らが揃っていればいいのだけれど。そんな事を考えていた薪の耳に儒楠のくすっと噴出すような笑いが聞こえて疑問の表情を向ける。
「いや、薪が女性と内緒話とは・・・ってね」
「あのな・・・・」
「ごめん、わかっているって。ただなんか、可笑しくて・・・」
含み笑いをする儒楠を不思議そうに見詰める偲葵。

「さて」

何かを区切るように言う薪の言葉。この後には必ず『実行』が待っている。薪の眼も確実にその方向だ。儒楠はすっと身構える。

「そろそろ叩きに行きたいな」

やはりか、と儒楠は思う。ここに来る原因となった駕南火に会うために。そしてここの人々を苦しめる羽目となった根源を叩き割るために。ついに行動を開始するという。しかし、それにしては情報が少なすぎる。しかし薪は不敵の笑みを浮かべた。少しは情報を入手したという。

「行ってもいいかな？それともまだここにいろと？」

薪の挑発するような言葉に儒楠はため息をつく。こうなったらもう既に準備は整っている。これ以上はここにいるだけ無駄だということを指す。儒楠は肩の力をふっと抜いて胸の前に手を当てて薪へそっと頭を下げる。

「貴方様の仰せのままに」

「はん。わざとらしいことしやがって。腹立つな」

「お互い様さ」

互いに不敵な笑みを浮かべて笑い合う。それに全くついていけない穂琥と偲葵だった。

出発することを伝えるべく、梨杏のところに行って来て欲しいと薪が儒楠に言うと儒楠はその答えをひどく渋った。

「なんだよ、駄目か？」
「んーー・・・・」
「・・・・・。わかった。オレが行ってくる」
儒楠の中を察して薪は呆れたように手を振って梨杏の部屋に向かっていった。

「儒楠君？」
「ん・・・。オレ、あいつニガテだわ・・・・」
本当に苦そうな表情で儒楠がそう言ったので本当に苦手なんだなと悟る穂琥だった。一度はなしが区切れたところで申し訳無さそうに偲葵が尋ねてきた。

「一緒に行っちゃ・・・・駄目だよね・・・」
偲葵自身もわかっている。駄目なことくらい。それがひしひしと伝わってくる。伝わってくるからこそ、穂琥はどこか胸が苦しくなった。

「これから危ないことがあるかもしれない。そんな時、偲葵を絶対に護ることができるかわからないんだよ。そんな危ないところへは連れて行けないよ」
「・・・でも、薪なら・・・強いんでしょう？」
「いいや。アイツも、結局はオレ達と何も変わらない。万能じゃないんだよ。この世で生きとし生けるもの、万能なものなんて有りはしないんだよ」
儒楠の諭すようなその言葉が穂琥の胸を寄り深く痛めた。

「あいつは誰よりも大切なモノを失ってきた。それで偲葵まで失う羽目になったら薪は壊れてしまうよ？」

子どもにそんな酷な事を悟らせるのはよくないかもしれない。それでもどこか薪も受け入れているこの偲葵であるのならば、理解をしてくれるはず。そう信じている。

「うん。待っている」

その『信じ』を裏切らずに偲葵は小さくそう答えた。

第六十四話　間諜の手

出発しますか、との薪の号令で隠れ家を出た。そして目の前を歩く薪についていけば何の問題もなく敵の本拠地へいける・・・と思っていたのに。

「どうして・・・」
「こうなるのよ・・・」

儒楠と穂琥が眼を半開きにして今ある状況に小さな声で突っ込みを入れる。

「ん？この方が探す手間が省けるだろう？」
「いや、抜ける手間はどうするんだよ・・・・」
「何とかなるさ。　　オレは」
「「最後の言葉要らない！」」

最後は儒楠と穂琥がそう突っ込み。

「まぁ、まぁ、抜け出さないといけない状況ならオレが介錯してやるって」
「あそ・・・」
「だったら・・・・」

「「今抜けたいー！！」」

さらに儒楠と穂琥が言葉を合わせる。

つまり今ある状況。隠れ家から離れて崩落した村まで行った。そ

こで敵のアジトの場所へ繋がるのかと思いきやそうでもないらしく仕方なくアジトが何処にあるのかを尋ねると「知らん」の一言が返ってきた。しかも即答。どうするんだと憤慨する儒楠と穂琥だったが、突然の薪の行動に耳を塞ぐ羽目となった。

勢いよく息を吸った薪が何をするのかと思っていると、突如、大声を上げた。

「標的の居場所もわからねぇのかぁぁ！！」のかぁぁ！！」のかぁぁ！！」

見事な木霊。耳がびりっとするほどの大声。普段柄大声を発するタイプではないのでまさかこんなでかい声が出せるとは正直思っていなかった穂琥と儒楠だった。その声を聞きつけて集まってきたのはどうやら駕南火の手下らしきものたち。

「え・・・・、ちょ・・・・？」
「ま、まさか・・・あの、惹夸様・・・？」
「おう。抵抗するなよ。したらオレがしばくぞ」

お咎めのほうが怖かった穂琥と儒楠は抵抗の一切を封じられて結局集まってきた者たちに簡単に捕まってしまった。

と、言うわけで今に至る。只今、連行中～、連行中～。

着いたのは寂れた門を潜った何もない場所。奥で人影見えた。いや、人かどうかは、定かではないけれど。その影が声を発するが、薪の顔がみるみる不機嫌になっていった。

「オレはお前に用はない。駕南火を引っ張ってきて欲しいんだけど」

影はふっと揺らぐ。

「我がそうだと、言っても？」

「お前、その程度の変装で誤魔化せると思っているのか？」

薪の挑発するような言葉に影は返してこない。その代わり別の声が聞こえた。

「くくく。わかるのか、無名のアンタに。少し当てが外れてしまったかな」

「そうそう、アンタに用があったんだ」

現れた男。この暑い乾燥地帯の割りにマフラーを首に巻き、余った部分はまるで地面につきそうなほど長かった。その青いマフラーを際立たせているのは黒に限りなく近い紺の衣服。右は長く着流しようにに袖が広い。それに反して左は肩まで露出するノースリーブ状態。寒いのか暑いのかよくわからない。相手が眞匏祇であるのであればそれは珍しい毛色の黒。それも真っ黒の。眼はほのかに水色。眼の色からして人間ではないかもしれない。いや、外国の人ということもあるけれど。

これが駕南火。思ったより若く、線の細い男だった。名前からしてもう少しごついのを想像していた穂琥はどこか拍子抜けしたような逆に気持ちが入ったような、複雑な心境だった。

「当てが外れた・・・？」

穂琥が疑問の声を上げる。すると駕南火はその重たそうな瞼でほとんど開いていない眼をより細めてにやりと笑った。

「慤夸が・・・・いると思ったからね」

駕南火のその発言で一瞬だけ空気が凍った。そして薪はその発言を聞いて利用してやろうと判断した。儒楠には本当に申し訳ないけれど。

確実に駕南火は儒楠を見て慤夸だといった。つまり、顔を知っていて慤夸だと判断した。ただ、薪としてはこの男と会った記憶はない。ということははるか昔にまだ、前慤夸が生きていたくらい前。そのときに眼にしていたか、あるいはまったく別で調べていた結果か。どちらにせよ、その情報を利用してやらない手はない。

―悪いな、儒楠・・・

薪は静かに心の中でそう思う。

「それで?キミはなんて名前なの?」

駕南火が尋ねる。薪は答えを渋る。渋るといっても別に言うことが出来ないといった風には決してしない。あくまで名乗る必要がないということを醸し出す。

「言う必要があるのかい?」

「おやおや。此方のことは随分勝手に調べていたくせに」

「ならそちらだって調べれば良い話だろう?」

「ふ~ん。それもそうだね。随分口が達者だね」

「どうも」

薪の余裕の答えに駕南火は無表情で迎える。

「さて。見当違いをしたようだけど結局、強い奴はいるようだ。さ、てと。何用でここへ来た？『下』の人間たちと手を組んだのかな」
「は？何を言っているんだ？ねぇ、していませんでしょう？」

突然薪に振られて儒楠は少し驚いた顔をする。しかし何かを諦めたように頷く。しかしその反応をみた駕南火が不自然に眼を細めた。

「慤夸、ともあろうものが随分と拍子抜けさせてくれるね」
「悪かったな」

駕南火の言葉に儒楠が応戦する。今のやり取りで薪が何をしたいかまでは理解できなくとも、慤夸『役』を押し付けてきたことだけは事実。なら慤夸様のご命令とあらばそれに従うのみ。いや、そもそもそんな概念は最早ないけれど。皮肉を込めてそう思うだけ。本来なら朋が求めたから、それが理由で十分。

人間と手を組んだわけではないと駕南火の言葉を否定する。ただ単に力を少しばかり貸しただけだという。

「それを組んだというのではないのか？」
「はぁ？地球に住んでいるなら少しは言葉を覚えたらどうなんだ？組むと貸すとじゃ随分と違うだろうにさぁ～」

薪のどこか抜けたような答えに駕南火は表情をしかめた。それと同時穂琥と儒楠もしかめる。これはおかしい。おかしいのだ。敵を前にした薪の態度ではない。緊張感が若干足りていないようにすら思える。

「よく言うな。キミはどのくらいこの地球にいるのさ」

「言う義理はないな？人間とつるんでいるような奴にはね～？」
「つるんでなど。ただ利用していただけだよ」
駕南火の言葉に薪がふっと笑った。それを悪く思ったらしい駕南火が何が言いたいと睨むと薪は笑った表情のまま駕南火へ己の失言を指摘する。
「ほうほう。人間とのかかわりがあるんだねぇ？しかも話の流れからすれば『下』にいるもの達と・・・ということはアレだよね？あの『女』が」
薪の勝ち誇ったような表情を見て駕南火は表情を無にして言葉を選んでいるようだった。
薪の様子が若干おかしかったのは今のように駕南火の墓穴を掘らせることだったのかと納得する儒楠だった。
薪の放った言葉に駕南火が返さなかったが諦めたようにそれを肯定した。そしてそれを受けて薪はその女をどうやって丸め込んだかを訪ねた。駕南火は冷たく笑った。
「何でも願いをかなえてやる、とだけ伝えたよ。人間にとって眞匏祇とはまさに神に見紛うものでしょう？そう思うだろう？眞匏祇としての力を見せてあげるだけで簡単に騙せる。人間とは間抜けな生き物だよ」
駕南火が人間を否定する。穂琥はそれにカチンと来て反撃しようとしたが薪にそれを阻止された。
「駕南火。一つ、訂正をしよう」

薪がそう言ったので穂琥も仕方なく引き下がった。薪の訂正が入れば穂琥がどうこう言うよりも容易い。

「何か間違いでもあったかな？力を見せ付けただけで騙される人間は間抜けではないといいたいのかい？」

「いいや。それに関しては否定しない。だが、眞匏祇の中にもそういう間抜けは居るんだな。だから別に人間だけじゃないってこと」

「は・・・・？」

「そうそう、眞匏祇にもちょっと力を見せただけで驚いて・・・・ってそれ私のことか！」

「おう。それ以外にいないだろう～？」

「はぁ！？」

まさかの敵前で兄妹喧嘩勃発。

「あ、訂正終わりだから。今ので」

「い、今の・・・・？」

駕南火は目の前で起きていることにひどく動揺した。感覚がどうにも鈍ってしまう。これも戦略なのだろうか。それにしては『嘘』の気配がしなさすぎた。ひどく呆れてしまうほど。

駕南火の表情からして確実に呆れをもたらいている。敵にそう言った感情を抱かせるヒーローがいてもいいのだろうか。そんな事を思う儒楠だった。

第六十五話　敵対する者の心境

なにやら今日の薪は『ハイ』らしい。『ｈｉｇｈ』のよう。先ほどまでの間の抜けた口調は敵を欺くための戦略かと思っていた。それならまだ格好良かったのに。

「でさぁ。まぁ、訂正も終了したし。次の話しに行こう。伜狛へ繋がるゲートが閉じてしまったわけだ。お前、知らん？」

敵が口を滑らせた後からもその雰囲気は変わることがない。そして駕南火自身もひどくそれには戸惑っている。そして何より戸惑うのはともにいる仲間すらもその態度に驚いていること。普段からこういった感じではないことが窺える。

「ボクが閉じたよ。特殊方法で地球から出られないようにね」
「ほう～？ならシャトルは外に出られるわけだな？」
「そうなるね」
「へぇ！心底の悪ってわけじゃぁ無さそうだねぇ？」
「「「何・・・！？」」」

穂琥、儒楠、駕南火の言葉が異口同音で重なる。それを聞いた薪が呆れたように穂琥と儒楠にむく。

「おいおい。仮にも敵と意気投合するなよ」
「無理無理無理！！今のはどう考えても『何！？』しか言えないから！」
「本当だよ・・・、お前どうした？」
「なんでもないけど？」

首を振る薪。その様子を駕南火は確認する。おかしい。おかしすぎる。これが慤夸たちの一団な訳がない。あの無情にして非情の慤夸。命の重みも顧みない極悪非道の慤夸なのだろうか。この一団が・・・。

「あ?!」

突然薪が怒りの声を上げたので儒楠はびくっと肩を震わせた。

「おい、駕南火!今どう考えてもオレと父上を比べたよな!?雰囲気で結構わかるんだからな!あまり比べるな!オレはあの方とは違・・」

「あの~。暴露していいんですか~?」

「あ・・・・・」

まさかの珍プレー。薪にしてはありえないミス。薪は雰囲気に負けたと頭をかく。

「いや・・・あの・・・」

「キミが・・・慤夸?」

「え~っと・・・・。はい。実はそうです。訳あってこんな格好していますがそうです・・・。思わず口を滑らせたわ。あ、丁度いいや。さっきアンタの口を滑らせたのはこれでチャラな?」

薪は笑顔で駕南火に手を挙げてそう言った。一体どう反応していいのか困っているのは何も駕南火だけではない。

「シン=フォア=エンド。それがオレの名前。聞き覚えあるだろう?ちなみにこっちは儒楠。ジュナン=ロウ=テイア」

「・・・そう」

現慥夸だということを駕南火へ伝える。しかし薪の緊張の紐は緩みっぱなしだ。それがあまりに気になった穂琥は思わず突っ込みを入れる。

「あ、あの・・・イイデスカ、社長！」
「はい、何ですか部長」
「え・・・！？　あ、あのですね！」

自分から言っておいてなんだが、まさか薪が穂琥のふざけた言葉に乗ってくるとは思っていなかったので修正利かずそのまま尋ねる羽目になる。

「ええっと。どうしてこんな大事な会議中に社長はそうも緊張感がないのでありましょうか！？」
「はい、たまにはいい質問をしますね、部長。それはですね。オレの神経がどうにも警戒心を発してくれないので段々気分がおかしくなってきているからであります。おわかり？」
「は、はい。わかりました社長・・・！」

ボケがうやむやになりかけていまいち場の空気を保てていない状況に儒楠は身震いをする。薪が怖い。いや別に何がってわけではなく。ただなんとなく・・・怖い・・・。儒楠は頬を引きつらせて笑いながらそう思っていた。しかし、それを聞いて驚くのは駕南火のほうだ。

「慥夸よ、今なんと・・・」
「薪！オレは薪だ！慥夸じゃねぇ！あ、いや、慥夸だけど・・・・。名前は薪だ！」
「あ・・・。し、失礼・・・」

「おう、わかればいい」

どう考えてもこの薪はおかしい。完全に壊れているとしか思えない。

「で～、あれか。オレのやる気のなさか?簡単なことだよ。駕南火。アンタから悪い感じがしねぇんだ。だからどうしてこんなことになってしまっているのかが分からない」

「「「は?!」」」

「だから敵と意気投合するなって」

同じ様に声をあげた穂琥と儒楠に指摘を入れる。驚いている二人を無視して薪は深い深呼吸をした。

「さて。オレも落ち着くか」

接続詞に「も」が入っていた理由がいまいちわからないがひとまず薪は落ち着いたようだった。

「さてと。お前に対して全くと言っていいほど警戒心を感じないのはお前から心底敵意を感じないからだ。何故ゲートを閉じた?それの理由が知りたい」

放っている気配もいつも通りの薪。それを確認して儒楠はほっとため息をついた。しかし逆に駕南火のほうは怒り浸透したらしい。

「ふざけるな・・・。キミらに何が出来るのさ。殺戮しかしてこなかった惨夸どもが!」

直感。これはあくまで穂琥が感じたことで確かなものではないけれど確実に言えるもの。薪の言葉に駕南火は怒りを覚えたかもしれな

い。それで今の一言を発したのかもしれない。しかし、それはまた、薪を怒りへ導くこととなる。だから、今、薪が大声で怒鳴ることが穂琥には直感的にわかっていた。だから先に萎縮して薪の怒りに触れないようにした。儒楠のほうも同じ様な体制をとったことからそれがさらに事実へと感じさせ、結局のところ、薪のほうからその回答の罵声が飛ぶ。

「ふざけるな、このクソヤロウ！」

薪の怒号。それは声だけではない確かな威嚇。マキを載せたその怒号に駕南火は身を引いた。

確かに前慤夸、巧伎の時代はひどかった。無意味にたくさんの命を奪い、いくつもの種族を滅ぼしてきた。けれど、今は。今は違うと薪は誇張したい。

「地球のことを詳しく知っているわけでもない、干渉できる立場でもないからここにいる眞匏祇たちのことを把握できていないっていう事は痛いほど理解している！それと同じ様にお前とて！今までずっと人間の世界に浸っていたお前に！伜狛の何がわかる！今の世界の・・・オレらの苦しみの何が・・・・何がわかるというんだ！？」

薪のその怒号に駕南火はひどく揺れていた。薪の言っていることがあながち嘘ではないということを駕南火自身が悟り始めてしまっていることが原因だろう。

揺れた理由は簡単だ。慤夸などと大それた名を有している者が、まだまだ自分よりも年下でそれでもしっかりと前を見て生き過去を背負って立っている。そしてそれに付き添うものたち。その者たちの目が決して恐怖による支配でその場にいるのではない、心底目の

前のリーダーに敬意を払った上でそこにあることがよくわかる。故に揺れ動く。慤夸が。あの極悪非道と畏れられた慤夸が。ここまで感情的に己の意思を主張する。そんな慤夸が頂点に立った伜狛の様子を想像することさえできない自分の浅はかさに駕南火はひどく心をかき乱されていた。

第六十六話　内なる心の惑い

怒りを抑えて薪は再び駕南火に問う。何を目的としてこんなことをしているのかと。それを問われた駕南火はそれでも口を開こうとはしなかった。

「そうか。なら最後の質問だ。捕まえた人間たちはどうした？」

「・・・あれらはボクの目標を達成するために使っている道具だ」

この手の発言に一倍反応するのが後ろにいる。薪はため息をついてそっと振り返る。そうすれば単純な阿呆はふつふつと煮える怒りを沸きあがらせているのが見て取れた。その隣でもその様子を見ている幼馴染がいる。それと眼があって互いに肩を竦めた。

「冗談じゃないよ！同じ生き物だよ？そりゃ、人は眞匏祇なんかと比べたら力もないし弱いかもしれないけれど・・・それでも同じ生き物だよ・・・・？それを道具だなんて・・・」

穂琥の言葉に駕南火は冷たく言い放つ。人間など、使い捨ての道具だと。それを聞いた穂琥の答え。それがさらにひどく駕南火を揺らすこととなる。

「あなた・・・お父・・・。殻夸を・・・恨んでいるんでしょう？あなたは、その嫌いな・・・恨んだものと同じことをしてもいいの？」

自分以外を道具と吐き捨て不要になったらこの世から消し去る。無意味に無闇に。たくさんのものの命が捨てられた。それと全く同じことを駕南火はしてしまっている。人間であるという違いだけ。

「私は人間として過ごした期間がひどく長いから人間の心がたぶん近い。でも、そんな人間として育った私と、眞匏祇として一生懸命尽くしてきた薪と、それに沿い友達のためにと誠意を尽くしてきた儒楠君と・・・・。さして変わりなんてなかった！では、何がここまで人と眞匏祇をたがえてしまっているの？それは『力』による支配」

恐れと憎しみの入り混じる混沌の世界。それが作り出したのは二つの心。争う心と護る心。穂琥も、薪も、儒楠も。護る心を以って眞匏祇としてあった。前代慤夸、巧伎の有していたものは争う心。

「そして駕南火。あなたも、その争う心になっている。争いでは良いものなんて何も生まれない。でもそれを行っているあなたは結局、前慤夸と何も違ってはいない」

穂琥の言葉に圧倒された駕南火が返す言葉がないのは当然のことだろう。

「目的は何だ？何故ゲートを閉じる。しかも、地球へ来ることが出来ても戻る事が出来ないという不可思議な閉じ方。何故そんな事をした？」

穂琥の言葉で動揺する駕南火に薪が追い討ちをかけるように尋ねる。駕南火は悔しそうにその口を開く。

「伜狛を・・・破壊するため」

「何・・・？」

伜狛に存在する眞匏祇の数を少しでも減らし抵抗をなくす。そうし

て弱った星を打ち落とす。それが駕南火の求めていること。

しかし。そんな事をして何になる。それこそ、罪も何もないものを滅ぼすこととなってしまう。それでは巧伎のしていたことよりも悲惨な末路を歩むこととなってしまう。

「全てが滅び無に帰すれば最早争いもない！」

「・・・言っても、無駄だというのか・・・！」

「何を今更・・・・。ボクが心変わりするとでも思っているの？」

駕南火の言葉に薪は否定を入れた。むしろ変わることを拒否した。それに一番驚いたのは駕南火かもしれない。

「お前、本当はやりたくないんだろう？本当はしたくない。しかしせざるを得ない何かがある。そんな状況に・・・」

「黙れ！これはボクの意思だ！」

「何をそんなにムキになる？迷いがあるから、いや、そもそも迷い以前にそうだから・・・」

―もうよいわ

滞った空気を一気にかち割るようにずっしりと響いた女性の声。駕南火のことを不要だといい、消えるように命じた。駕南火はそれを聞いてひどくショックを受けた表情をしていた。現れた紅蓮の髪の女性。藤色の衣を羽織りしなやかな肢体を包んでいる。その腰には紅色の帯を巻き、前で白く光る輪が煌いている。

一瞬だけ少女に見えるがそれの放つ雰囲気がそうではないと悟らせる。駕南火はひどく怯えている。そんな駕南火を見る紫色の瞳が何処までも深く心を揺さぶっているようだった。そしてその眼がき

らりと光ったのを薪は見逃さなかった。素早く地面を蹴り、その女性と駕南火の間に割って入った。

甲高い金属音が空に木霊した。

第六十七話　裏の真実

「ん？」

女性が声を上げる。彼女が何の躊躇いもなしに駕南火へ刀を振り下ろしたのを薪が無理に受け止めた。その尋常ではない力に流石の薪も刀を持つ手が震えた。この細い肢体の何処からこんな力が生み出されたのか疑問に思うほどだった。

「お前、それは無いじゃないか？」

「ほう・・・？お前、見所があるな。どうだ？わしと手を組まんか？」

思った以上の重低音。女性にしては低いその声に薪は嫌な予感を覚える。薪は女性の持ちかけた言葉を即座に却下する。女性は低く笑う。

「そぅか。わしの元にくればお前の望み、叶えてやろうたのに」

「・・・オレの望みはアンタなんかには叶えられるものではない。いや、全てのものが叶えられるものではない」

悠長な会話をしているように聞こえている間にも拮抗する薪と女性の力はすぐ手元の刀がぎちぎちと音を立てて表現している。しかし尚も彼女は薪を欲する。薪は軽い舌打ちをしてその刀を振り上げる。軽々と宙を舞って彼女は悠々と地面に着地する。薪は刀を構えなおして目の前の敵へと言葉を投げる。

「オレの望みは二つ。一つは護ること。二つは蘇ること」

簡潔に、省略して言ったその言葉に彼女は不思議そうな表情をした。無論、薪が背中を向けている駕南火も同じ。しかしそれに対し、穂琥と儒楠のほうはひどく揺れた表情をする。

護る。それは慫夸として民を護る義務がある。しかし、きっとこの『望み』としていった護るは民の事ではない。この場にいる最愛の妹、穂琥を一生をかけて護り抜くこと。

そしてもう一つ。蘇ること。これが穂琥や儒楠にとっては重過ぎる。それを言葉に出して説明することすらおこがましいほどに。

「護る、は聞かずともわかる。では蘇るとは?誰かでも失ったか」

低い声が薪へ疑問を投げかける。薪は一瞬だけ迷った様子を見せたがはっきりとした目で女性を睨んだ。

「オレは過去にたくさんの仲間を殺してしまった。だから、その『全て』を蘇らせたい。過去を消したい。だが、起きてしまったことを今更どうにも出来ないだろう?」

「ふむ・・・・。そうさなぁ。さすがにわしもそれは無理だ。他にはないのか?」

「・・・・。そうだな。今すぐにお前を潰してゲートを開いて仭狛に帰ることかな」

「ふっ。嫌な性格」

「それほどでも」

口とは別に彼女は嬉しそうに微笑んでいた。

「そういうのは嫌いじゃない。そうか。組む気がないならその魂石だけ置いて消え去れ」

「オレの魂石、特注でね。一般は使えないよ。最も。慇夸の血筋ではないと、という意味だけど」

薪の発言に彼女は不思議そうな表情をした。しかしそれすらも気にしないように魂石を奪うことを主張する。無論、そんな事出来るわけもないと拒否をする。すると彼女はにやりと笑う。

「まぁ、よいわ。ゲート、だっけか？ならばわしとの勝負に勝うてみよ」

「勝負・・・・？」

怪訝な表情をして薪が臨む。彼女は悠々とした表情で笑みを浮かべ続ける。

彼女がふっと手を前に出す。薪は一瞬身構えたが何も起こる事はなかった。その変動のなさに薪は額に力を入れる。彼女が何もしないのにこんな不可解なそして無意味な動きをするような者には見えない。

どさ。何かが倒れる音が聞こえた。それを聞いて薪は彼女の動作の全てを悟った。ぞわっとした背筋を無視して一度目の前の女性を睨みつけてから急いで音のしたほうを振り返り駆け出す。

「穂琥！」

第六十八話　異質の世界

ただの暗闇。目の前が何も見えない。今自分が本当に眼を開けているのかわからなくなるくらい。確認のため手で触ってみると大丈夫、目は開いている。

「あれ？ここは何処だろう・・・？薪～？儒楠君～？」

穂琥は声を出して叫ぶ。しかし音が全く反響する気配もなく闇の向こうに声が吸い込まれているようだった。

がこん。

何かが外れるような音が聞こえた。穂琥は音のしたほうへ首を向ける。しかしやはりそこはただの暗闇。真っ暗くらの黒。穂琥はそっとそちらのほうへ足を進めようとした直後、脱兎の如く穂琥はその向かおうとした方向とは逆の方向へ駆け出した。

何かが外れた音だったのだ。きっとそうだ。ストッパーがあって。それが外れた音。だから今穂琥は走る羽目になっているのかもしれない。

後ろから追いかけてくる軍勢。それは人の形にあらず。眞匏祇の形にもあらず。そこあるのは腐敗した恐怖の存在。肉が腐り黄ばんだ骨さえも見える。中には肩が外れてだらりと下がったものもあるし目玉が支えきれずに零れ出ているものもいる。要は穂琥の後ろには。

「ゾンビーー！」

ただ穂琥は走り続ける。

追いかけるはゾンビ。この世のものではない唯一の生命体。ま、生命体と呼んでいいのか疑問だが。でも確か過去に綺邑がそんな事を言っていた気がした穂琥だった。魂があの世へ逝くことが出来ずに肉体に宿ったままになってしまった哀れな存在。一度死に、肉体より魂が離脱する。しかしその魂が何らかの理由を経て肉体に舞い戻ってしまったもの。しかし魂が戻ったからといってよいわけではなく、体は既に死んでいるので再生するわけも治癒するわけもない。ただひたすら体は腐敗していくだけ。そして身体に無理やりねじ込み入った魂が正常なわけもなく、理性の欠片もない、ただひたすら魂を欲する化け物へと成り下がる。

大方近年ではゾンビの存在は減っているらしい。なにぶん、火葬が多い。故に戻るにせよ、肉体がない。

以上、綺邑からの知識。穂琥はひたすら思い出す。ではそんな存在になってしまったゾンビたちは一体どうしたらよいのか。基本、感覚という全てが遮断されている彼らに身体への攻撃は無。むしろ砕かれた体はそれだけも動くために下手に手を出すと余計にいたい思いをするのはこちらだ。粉砕できればそれでいいのかもしれないけれど今、眞稀を練ろうとしても言うことを聞かずうまく練ることが出来ないでいる。

「あっ、そういえばこの土地?って眞稀がうまく使えないんだった・・・・!」

息を切らし始める穂琥はただひたすら逃げる。捕まれば殺されるのだから。

第六十九話　揺らぎを薙ぎ払って

珍しいまでに薪が怒号を上げて叫んでいる。それがあまりに意外で儒楠はただそんな薪を見ていることしか出来なかった。

「穂琥を開放しろ！」

「駄目だな。わしとの勝負、勝ってみよ」

悠然と構えるその姿に流石の薪でも違和感を覚える。その肢体から放たれる気配は確実に眞匏祇ならざるもの。では眞匏祇でもないその存在は一体なんだと。そんな警戒した薪の姿を見てか、彼女は薄く笑った。

「あぁ、名乗っていなかったか。わしの名は諒冥（りょうみょう）」

彼女が名を言った瞬間、薪がひどく揺れた。信じられないものを耳にしたかのようにただ眼を見開いて諒冥と名乗った女性を凝視している。

「薪・・・？」

不安になった儒楠はそっと薪へ声を掛ける。薪は小さく穂琥の名を呼んだ。それは確実に不安からなるもの。焦りだろう。あまりにらしくないその状態に儒楠は一括するように薪の名を呼ぶ。するとはっとしたような表情をしてから儒楠と眼を合わせる。

「あぁ・・・。諒冥、正式名称諒李冥醒（りょういみょうせい）・・・・」

「ほう、子供の癖によく知っておるのう？さすが慤夸は伊達ではないといったところか？」

諒冥と名乗る彼女は嬉しそうに笑ったが、その反面、その名を聞いた儒楠も薪と同じ様に固まった。

「え・・・それって・・・『神』じゃないのか・・・・？」

薪はただ黙って諒冥を見詰めていた。否定をしないという事は事実。儒楠はぐっと手に力を込めた。まさか、神が敵対してくるなど。あっていいことではないはずだ。もし、仮にここへ簾乃神が来てくれたなら話は少し変わりそうな気もするが。そうそう神々の降臨を許していいほど、地球は強くないことを重々知っている。

つまり、この諒冥神（りょうみょうしん）の言った『賭け』に確実に薪は乗らなければならない。薪はひどく複雑な表情で諒冥神を見る。そしてその賭けを致し方なく承諾する。

「先ほど小娘を拝借した。そして『死の者』たちと遊んでもらっているよ。小娘が無事にここへ戻ってこられるか、来られないか。それを勝負の内容としよう。さぁ、どちらを選ぶ？」

「は！？」

薪が攻撃的な声を上げる。儒楠は死の者が一体何なのかは理解しかねている。しかし薪のほうはそれを瞬時に理解した。故にそんな声を上げたのだろう。

死の者。死者を誘う死神ですら手を付けようとしない厄介な異物。決して付けられないわけではないのだが至極面倒なのでやらないだけだが。だがそれの相手をあの穂琥がやっているとなると話は別だ。穂琥が『死の者』に対する知識を持っているとは到底思えない。ならば勝つことなどおそらく出来ない。しかし、出来ないという事は

すなわち死を意味する。『生きる』ことに渇望した者たちが生者から奪うのは生きる気力とエネルギー。それがなくなればどんなものでも生きていく事は出来ない。

薪はぐっと手を握り締め深く深呼吸をした。

―今更何に怯えているんだ・・・・

一度ふっと眼を閉じてから。ゆっくりと開ける。目の前に居座る強大な存在。それに眼をやって薪は決意を固めて言葉を発する。

「無論、帰ってくる」

「いいだろう。では」

諒冥神は何処からともなく円盤を取り出す。その円盤には蛇の道がある。そしてその道をゆっくりと蛇の形をした石が這っている。諒冥神はこの蛇が一周する前に帰ってこられなければ穂琥の命はないという。

「帰ってこられなければわしの勝ちだ」

不気味に笑う諒冥神。しかし、薪は今の諒冥神の言葉を聞いてふっと疑問に思った。

「オレが勝ったのなら穂琥の開放、ゲートを開く。当たり前のことかもしれない。しかし、貴女が勝ったらどうなさるおつもりだ？」

「くくく。まぁ、わしが勝ってもゲートは開かんが小娘は解放してやろう」

あまりに意外なその言葉に薪も儒楠も驚いてはたから見れば間抜け

な顔をしただろう。

「わしは別にこの小娘に興味などないわ。もっとも？小娘がちゃんと生きているかは知らんがな？それよりもお前の魂石が欲しい。眞匏祇後時の魂石など興味はないが・・・・。お前のは興味がある」

薪は考える。本来、慤夸の魂石は慤夸の血筋を持ったものにしか扱う事は出来ない。無理に使おうとすればその身を滅ぼすことになる。しかし、強大且つ膨大な力を有している神であるのなら話は別だ。いくら慤夸といえ、眞匏祇後時の力など説き伏せることくらい出来るだろう。しかしだ。なら尚更疑問だ。たかが眞匏祇の魂石をもって神に何の得がある。

「くく。別に。面白いものは集めたいだけさ。神とは存外暇なものでね」

有体（この世界に列記とした『肉体』を持っていること。それに反して神や死神といった形こそ存在はするが『肉体』という概念のないものたちは無体という）の者たちを何だと思っているのか。神といえど万能でないことくらいはわかっている。しかし、ここまで道外れた存在でいいのか。薪は苦しく俯いた。

「さて。始めようか」

円盤の蛇が動きだす。それを見て薪は穂琥を頭に思い描く。最愛の妹が死への恐怖に打ち勝つその姿を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5247y/

眞匏祇’

2012年1月11日06時52分発行